
Word of “ X ”

岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Word of “X”

【Nコード】

N5202X

【作者名】

岳

【あらすじ】

注：本作はArcadiaにも投稿しています。

これは、とある少年の軌跡である。

精霊に見捨てられたと噂される少年、ジュード・マティス。

彼は、大きく欠けていた。歪まされていた。

だけど、無様にも走り続ける。ただ、忘れた夢の残滓を追うために。
自らの支えを探すために。

これは、人の心が交差することで浮かび上がる。

ひとつの『If』から始まる、どこにでもあるストーリー。

叶わない、物語である。

プロローグ

多くを望んだことはない。僕はただ、普通の夢を持っていた、それを叶えたかった。

そして、他の人と同じように生きていたかった。

特別なんて望んじやいない。ただ、同じ空の下で、同じ者として其処に在りたかった。

このリーゼ・マクシアに広がる空の下で、両親と同じように、ただの医者として。

でもそれは叶わなかった。原因も分からず、機会だけが奪われた。

その原因を特定しようにも叶わず、ただ日々だけが過ぎていった。

ただ、心を探していただけなのに。

焦がれる程の想いを。

譲れない、信念を。

知った上で、それを持てるだけの術が欲しかったただけなのに。

ただあの日僕は、諦めてしまった。

でも諦めてしまった先にも、道があったて。

あの人 師匠に出会わなければ、僕はそこで死んでいたに違いない。

ここ、イル・ファンに来る前。

ハウス教授の助手になる前に聞いたあの言葉は、今もこの胸の中の奥に残っている。

僕を導いてくれた師匠。僕を初めて認めてくれた人。

実の母と同じ、いやそれ以上に尊敬している人。

「イル・ファンに行くんだってね？ そんな顔をしなさんな、アタシは止めないさ。その資格もない。」

また夢に向かって走りだすんだろ？ 止めないさ。

ただど一つだけ……アンタの師匠として言わせてもらおうかね』

拳法の師匠は。いや僕という存在、全てにおいての師匠ともいえるあの人は、僕にこう告げた。

『誰が相手であれ、何が立ちふさがっても、ぜったいに自分からイモ引くんじゃないよ。』

あんたは頑張れた。アタシのあの修行を耐え切った。乗り越えた。それは誇つていいことだ。

そうして頑張れるあんたは、何にだってなれる素質がある。

努力を積み重ねれば形になる才能もあるんだ。それに溺れない心も。

だからアンタ自身がそれを疑うんじゃない。決して疑うな。アンタは本当に優しい、いい子だ。

だから、信じなさい。信じていれば、道は開ける。

………医者がどうしたってんだい。アンタが胸を張って突っ走れば出来無いことはないさ！』

嬉しかった。あの言葉は、胸のなかに燦々と輝いている。

『だから笑いな。そして自分が
るように、笑って生きな』

自分が成りたい自分になれ

（絶対に忘れることはない。そう、決して
んのかジュード！」）

「おい、聞いて

思考が声に中断される。その声を発したのは、目の前の人物
ハスキーがかった、少女の声だ。

美しい銀の髪。白が大半をしめる眼の中心は、紅蓮に染まっている。
でも、眼つきが悪い。そばかすも広がっている。一方で、髪の毛の
方は無駄に整えられている。

そばかすに関しては栄養不足と無精がたたってこうなったんだ、と
彼女ぶっきらぼうに説明していたが、それは嘘だろう。

どう考えても心因性のものである。お人好しの店長でさえ同意していた。

初めて会った時の事を思い出す。この少女、なぜか街道の真ん中で炎を纏わせた剣をぶん回していたのだ。

薄暗いイル・ファン近くの街道で突如襲ってきた火の玉群をジュードは決して忘れない。

だが、彼は我慢強い男である。それに少女にも悪いところばかりではない、良いところがあることを知っている。

だから黒髪の少年、ジュード・マティスは笑顔で返した。

「ぴーちくぱーちく騒ぐな色白ソバカス。たった数秒も待つことができねーのか、この銀の犬ッコロが」

童顔で割りとハンサムな店員が発するチンピラ言葉に、店の中が凍りついた。

でもすぐに溶けた。皆が皿を持って顔を見合わせる。懷から何やら用紙を取り出す者も居た。

「ぶ、ぶち殺すよこの野郎！？　　っーかそれが客に言つ言葉か！」

「あーあーすみませんおきやくさまごちゅうもんをどうぞ」

「聞けよエセ童顔！」

怒る銀髪の少女。その怒気は、並の者なら腰を抜かしそうなほどに

鋭い。

だが目の前に居る少年店員は、心底めんどくさそうな顔をするだけだ。

「んで、何を食らうって？」

「くっ…………とりあえず串10本だよ。とっとと持ってきてな」

「はい、分かりました！ それよりもサラダを食べたらどうでしょうか、野菜が足りてない風味の、いかにもな顔してるしね！ うん、栄養たっぷりなんで色々元気になること間違い無し！ 僕アイデアの店長アレンジした逸品から美味しいし！

…………その貧相な胸も、もしかしたら育つかもな」

「てめ…………最後、なに言いやがった？」

「あーあー何も言ってやおりませんよ、ナデ……………ナイ……………ナイ
チチ？ 元お嬢様」

「よし斬らせろ」

一息に腰の仕込み杖を抜き放つ少女。

対するジュードも、手に持ったお盆を構える。

「はっ、そんなもんでこのアタシの一撃を防げるとでも思ってたのかあ？ くされ医者のおもドキ類狂人科生物が。ついに脳の中までやられちゃったようだねえ」

「元からイカレてるわ、このエセ貴族が。それに、このジュード・マティスを侮ってもらっては困るね。」

”あの”ソニア師匠に教えを受けた僕に、できないことがあるとでも？」

「くっ、このマスコンが……………」

ちなみにマスコンとは師匠^{マスター}コンプレックス。つまり師匠馬鹿である。

一方、同じ店内に居た周囲の客は慣れた様子で、「やれやれ始まったか」と言いながら自分の皿を持って店の外に避難していた。

一部では今日はどっちが勝つかで賭けが始まっている。

「ふん、どうしてもやるってーのか？」

「今更命乞いか？ つつーか僕が師匠の事を思い出していたのに横から話しかけたお前が悪い」

「原因それかよ！ ていうか、客のアタシが店員に話しかけて何が悪い！？」

「眼つき」

「ぶっ殺おおおす!!」

「いいぜ来いよ、ナディア!!」

「てめ、覚えてんじゃねーか!？」

ナディアと呼ばれた少女の言葉を開始の合図に。

二人のマナが、年齢にはそぐわないほどに大きく膨れ上がった。

そのまま、真正面から激突

「てめえら外でやれええー！ツ！」

しよつかという直前、店長がぶん回した光り輝く棍が二人に直撃。

小柄な身体を2つ、盛大にふっ飛ばした。

「ぶろツ?!」

「てめっ!？」

あまりにも鋭い一撃を受けた二人が石のように軽く、弧を描いて飛

んでいく。

そのまま、道の向こうにある池へと落ちた。

ぽちゃんという虚しい音が響く。

「あーあーお客さんいつもすみませんねえ。え、俺に賭けた客が居るって？」

そりゃアンタ嬉しいことだねえ。で、儲かったよねえ……今日入った特製肉の串盛でも注文してみるかい？」

喧騒が続く。

中央の灯火がかすかに届く薄暗い裏町の、地元では有名な店では今日も客たちが騒いでいた。

かつて、誰かが言った。

人の願いは精霊によって、現実のものとなり、

精霊の命は人の願いによって守られる。

故に、精霊の主マクスウェルは、全ての存在を守る者となりえる。

世に、それを脅かす悪など存在しない。

あるとすれば……それは、人の心か。

「ぷはっ、おいこら店長、前に不意打ちすんのは無しつつつたろーが！」

「あーあー、不意打ち受ける方が間抜けなんですー。実戦にルールなんて無いんですー。」

そんな事わからないなんてナディアちゃんはお馬鹿なんですー」

「キモイんだよクソジュード！ あと、ちゃん言っな！ ったくさ

つさと上がるぞ！」

ならば、精霊に見捨てられた者はどうなるのというのか。

現実をただ生きるだけで。何かを願うことすらも許されないのか。

故に、精霊の主マクスウェルは、全ての存在を守る者とはなりえない。

見捨てられたものを悪と断定するなかれ。善の定義などどこにも在ることはなく。

この世界に善と悪を分けられる明確な境界などは存在しない。

もって、守られるべきものなど、どこにも存在し得ないのだから。

あるとすれば……それは、人の心か。

「あー、冷えるぜ……………弱炎舞陣」

「おお、あつたかい」

「…………フレアボム！」

「熱ッッ!？」

「ははっ、ばーか」

「くそ、性格悪いな！」

「お前が言つな！」

これは、人の心が交差することで浮かび上がる、どこにでもあるストーリー。

叶わない、物語である。

プロローグ（後書き）

勢いで行きます。ジュード性格改変。

ストーリーは原作沿い。

1話 「目と目が会った」 (前書き)

瞬間、敵だと気づいた。

殺し合い夜空。そういう日もある。

1話 「目と目が会った」

リーゼ・マクシア。精霊と人が共存する素晴らしい世界。

そうほざいた奴の頭を、無性に殴りたくなる時がある。それが今で、此处だ。

この世界にある二大国のひとつ、ラ・シュガルの首都。

夜の霊域が発達している、常夜の街の中心で一人、僕は階段の上に座っていた。

一応は敵国となっているア・ジュールの影もない。20年前は大きな戦争があったらしいが、最近はその噂も聞かない。

平和な街の中、一人でその夜空を見上げていた。

前を見ればやるせないからだ。そこかしこに存在する、精霊術を使う人達。

風を足場にして、街灯を調整する職人。橋のへりを修復する職人。水の精霊術を見せ合っているちやつくカップル。

自慢気に小さい火の玉を友達に見せつける少年。何気なく、当たり前のように使われる精霊術。

そのすべてが目障りだ。いつそまとめて潰したいぐらいに。

こいつもそうだ。後ろに居るバカ女。気配を殺して忍び寄る火使い。

イフリートに愛されているかのように、炎を自在に操りやがる天才。それを自覚している所が余計にむかつく。

「……………ちつ、街中で物騒な殺気出すんじゃないよ。つか、気づいてたのか」

「お前みたいなクソ騒がしい、面倒くさい気配の持ち主なんか他にいねーよナディア。気配も消せてねー。つか、ふつーに来いふつーに」

「はん、飽きずに辛気臭い顔しててムカツイたからさ。後ろからその間抜けな後頭部を殴ってやろうと思ったんだよ」

「なんで親切を売るみたいに？ それに、お前に言われたくはないな」

「アタシもアンタにだけは言われたくないよ……………で、できてるんだろ？」

「へいへいまいど」

言いながら薬を後ろに放り投げる。

薬の名前は「グッド・ナイト」。命名したのは店長。

この薬は、そこいらの店には売っていない、曰くつきのシロモノである。

まあ、ただの安眠薬なんだが。

「まったく、お家でお抱えしてあらせられるお薬師にお頼み申せばい

「いだろうになあ？」

「敬語のつもりかそれは。ま、あのヤブにはいの一に聞いてみたよ。アンタに借り作るのは嫌だったんでなあ」

「だろうなあ」

「ああ。でも、こんなもん作れねーって。無駄に手え光らせるのは得意みたいだけどねえ」

「……………治療術と言ってやれよ」

「ああ羨ましい。まったくもって羨ましい話だ、それは。」

「分かって言ってやがるなこいつも。」

「まったく、外傷消すだけとか、ただのグミと変わりねーじゃねーか……………いや小煩くない分、あっちの方がマシってもんか？」

「ついにはグミ以下かよ……………でもこんなもん、医者としてはふつーだろ？ 薬学も学んで一人前って教授は言ってたぜ？ つか、一昔前にはふつーに作れたはずだけどな」

「外傷を癒すのだけが医者役目じゃなかったはずだ。ここいらの医

療室もった医者は縁もないんで知らないが、ハウス教授や、故郷のル・ロンドで治療院を開いているとうさ………親父は違った。

母さんも。患者を見て、何が悪いか“診て”。それから治療をしていた。治療術で治せるのは外傷だけだから。

「はっ、おべつかと手え光らせて傷を癒すだけは一級品だけだなあ。生憎と知識の幅はお前にすら劣ってやがるよ。ああ、そついや口も上手かったかねえ」

「世も末だなー」

「貴族のとこ行く医者なんてそんなもんさ。元がいいとこの坊ちゃんだ。貴族様にもわかりやすく、見えてる傷だけ癒すのが仕事だ

せいぜいが風邪薬程度。その点、アンタは本当に変態だね？」

「お前はあばずれだけどな。で、いい加減金払えよ」

「あいよ」

投げ渡されたガルド入りの袋。

それは今までよりも少し多かった。

「おい？」

「色つけとくよ。で、余分があればそれも貰いたいんだけど？」

「…………おらよ」

懷に持っていた分　自分用も投げ渡す。

どうせ、家に戻れば残っている。惜しい程でもない。

「限量だけは間違えんなよ。お前のことだから自殺だけにや使わねーと思うけど」

「はっ、自殺なんかするかよ。それならお前に殺された方がマシだ」

「…………ああ、絶対にしねーなあ、それは」

「だろ？　そうだな、アタシが自殺するなんて」

「

一息おいて、ナディアが言った。いつものように。通常の会話をするように。

何でもないことのように。

「それこそ、アンタが精霊術を
ぐらいに、有り得ないことさ」

治癒術を使えるようになる

沸騰した。脳の中が一瞬にして沸き立った。

まあ、このクソ女が。よりにもよって、よくもそのことを面と向か
って、言ってくれやがったもんだ。

ああ、わかってるさ。言われたいんだろ？

なら、僕も奥の奥の傷まで引っ掻き回してやるよ。

「ああ、そうだなあ？ 貴族のくせに ヒス起こして手前の家に放火した、お前ぐらいにありえねーことだわなあ？」

「
テメエ」

「
なんだよ？」

一触即発。触れれば即爆発。

そんな良い感じに、空気が緊張する。

僕は拳に。ナディアは仕込み杖に。

互いの武器に手をやって、殺意をぶつけ合う。

でも、それが開放されることはなかった。

「…………ちつ。アンタも言いたいこといいやがるね」

「お前もだろうが。こついつのって、なんつーの？ 気の置けない友人っつーの？」

「思ってもないこというんじゃないよ」

そう。そんなことは思っちやいない。

僕にとってのこいつも、こいつにとっての僕も、そんな生なもんじ

やない。

ただの無機物。冷たい外見をもつ、たたの“鏡”だ。

今でも思い出す。要塞に続く街道、その平原で僕はこいつと出逢った。

最初は、共感した。次の瞬間に憎みあった。それは必然だった。互いに似たものを持っていて。酷く似通っていて。

本当に見たくもないものを、自分の肉眼で見せつけられたから。それはこいつも同じよう。

次の瞬間には、殺し合いになった。

途中、偶然そこに立ち寄った店長に止められて、最後までは行かなかったけれども。

でも、今でも関係は変わらない。

……こいつは鏡で、僕は鏡なのだ。

真実そのままに互いの姿見と心を映し合う、“真実の鏡”。

互いに似たような傷をもっていて。それで互いが、“奥に持っている傷を忘れることを許さない”。

（店長は同じような傷を持っている者が出逢った場合。それが男女なら、傷の舐め合いをするような関係になるって言っていたけどない）

有り得ない。そうはならない。絶対にならない。出来るはずもない。

舐めあつぐらいなら　　傷つけあい、殺しあう方が万倍ましって
もんだ。

でも、ああ、本当に非生産的も極まる関係だよなあ。

でも、一緒にいて退屈しない間柄。腹は立つが、自分が死んでいないことを思い出させる程度には役に立つ。

それに、味覚に関しては似通っているのだ。

まあ、付け加えて言えば、互いの奮発剤にもなっていると思うが。
このままでいられるかと、初心をまざまざと思い返させてくれるの
だ。見るだけで思い出させてくれる。

あの心を忘れるな、と。

でも行き過ぎるのもしょっちゅう在る。計算できないのが世の常。
さつきみたいに、殺気のやり取りをするのも日常茶飯事だ。慣れた
もので、日常の一風景と化している。

でも、それなりに上手くやっていた。以前は傭兵として互いに雇い
あつたりしていたし。

俺は目的の資料を探す度の護衛に。こいつは、よく分からない任務
だかなんだか知らないが、変な仕事の護衛に。

きな臭いが、実力は信用できる。

一度頼まれたら、絶対に裏切らない所も。その点でいえば、どの傭
兵よりも信頼できる。

今はもつとちらもそれなりのレベルになったので、最近雇う間柄
でもなくなっただけ。

「で、入り用ってなんでだ？」

「ちょっと大きな仕事になりそうなんでね。しばらくはあの店にも行けなくなる」

「そうかよ。でも、店長が寂しがるなあ」

「……………あの人も物好きだね」

魔物の肉で串焼きを初めて、10年。今では裏町限定だが、人気店の一角となった　　串焼き屋『モーリア坑道』。

何故に飲食店なのに坑道とか、そういうことを言っちゃいけない。

あの店長にまともに突っ込んで答えが帰ってくるとも思えないから。

まあ、たまにちょっと酷い味付けの肉を出してしまうことがあるが、大概は貴族様をもうならせるぐらい美味しい串を出す、迷宮のような迷店　　違った、名店だ。

グスタフ店長は本当に頭のイカレタお方で。具体的にはモンスター
の“ジェントルマン”の肉を調理しようとか言い出しやがりました。
きつと、あんな事言い出したのはこの人が世界で初めてなんじゃない

かろうか。

無駄に、多方面への新商品開発意欲に旺盛で、先週あたりに道具屋へ緑と黄という素晴らしい色合いのグミ ドリアングミを提供していた。ドリアンて、あんた。

効果はおして知るべし。でもギャンブル性とスリルがたまらないと、一部のイカレタ傭兵には人気なんだとか。

ちなみに、店長も以前は傭兵 本人曰く、冒険者をやっていた。腕も立ち、ア・ジュールの武道大会でも決勝までいったとか。

で、武術の師匠はソニア先生だ。つまりは、僕の兄弟子にあたる人。少し前にソニア師匠に手紙で聞いたけど、“あいつは筋だけは本当に良かった”と言っていた。

それもそうだろう。あのど外れて制御が難しい活身棍を使えるのは、師匠を除けば二人しかない。

グスタフ店長か、ソニア師匠の娘で僕の幼なじみでもあるレイアぐらい。

店長の腕は今でも衰えておらず、真正面からやればいかな僕とて負けてしまうだろう。

でも割りと寂しがり屋だ。

あと、本人が変人だからか、変人から好かれる。例えば目の前のこ

いつとか。

「変なこと考えてるね?」

「ああ、いつもな。でもって、お前もな」

「胸を張っていうことかよ……………ああ面倒くさいなアンタは、ほんとに。」

……………いいさ、黙って帰るよ。それじゃあ　生きてりやまた変なところで会つかもね」

「なんだそりや? ……………まあいいや、良き夢を」

「……………そりや、死ねってことかい?」

「言わせんなよ恥ずかしい」

互いに毒を吐きあって別れる。

そのままぼーっとすること数分。近くに、銀髪で炎染みた気配を放つ小娘はいなくなった。

しかし、入り用でしばらく顔出せないか……………初めてのことだな。

「えっと……………ジュード、くん？」

「はい？」

突然かけられた声へ、反射的に返事をする。

この声は……………ハウス教授の、診察の時の助手の人か。足がきれいな人。

「こんな所で座り込んで、何をしているの？」

「この風景を見ているんですよ。普段は忙しいですから。座ってみるイル・ファンの風景も、またおつなものですよ？」

「ふふ、そうね。私も暇ができれば一度試してみようかしら」

他愛もないことを話しあう。

ああ、心が癒されていく…………他意もなく敬語を使える相手なんて、この街じゃ4人ぐらいだからなあ。

「それで、何か用事があつて来たのではないのでしょうか？」

「ああ、そうだ！ えっと、ハウス教授が呼んでいるんです。なんでも、実験の手伝いをして欲しいって」

「分かりました……………っと、そこ段差になってます、気を付けないと危ないですよ？」

会話をしながら、僕は助手の女性と一緒に、医学校へと歩をすすめる。

空には、いつもと変わらない。遠い夜空が広がっていた。

「叶わない夢のために、か……本当にバカだよ、バカジュードが」

「あの、アグリア様？」

「分かった。研究所には顔も聞く。しばらくは入り込んで情報を集める。そう、陛下に伝えな」

「了解しました」

下がっていく部下。その服装はこの国のものだが、身のこなしは違う。

銀髪の少女は、去っていく部下が姿を消すのを確認すると、空を見上げた。

相変わらず遠い、とつぶやく。

「ふん………次に会う時は本当に殺し合いになるかもね」

面白くもなさそうに搾り出されたその言葉は、ただイル・ファンの夜空へと消えていった。

1話 「目と目が会った」 (後書き)

アグリア「アタシに何か用かア？」

ジュード「アグリア……お前が改心して仲間になるって思うプレイヤーが居るのなら！ 僕は、その幻想をぶち殺す！」

アグリア「へっ、やってみる三下ア！（涙目）」

なんてことが浮かんた。鈴科百合子様もといザギロード様パネえっす。

つかこれ、なんか……アグリアがヒロインっぽく見えね？

ちなみにナディアはアグリアの前の名前。アグリアは源氏名、らしい。

2話 「過去から今」

僕には夢がある。成りたいものがあつた。

小さな頃、両親が営む治療院で見たもの。治療され、苦しみから解放された患者さん達の笑顔が、僕の原風景だ。

自慢の両親だった。昼夜問わず患者のために働いていて、多くの人に感謝されていた。あの頃、僕は両親を誇りに思っていた。

自然と懂れた。将来の夢と聞かれた時の答えはひとつだ。『とうさんやかあさんのようなおいしやさま』。

だけど あれは、6才の頃だったか。将来のためにと、近くの精霊術師から精霊術を習った。

他の同年代の子供と一緒に。そして手順と危険さが説かれた後、いざ実践しようとした時だ。

課題は小さい風を吹かせる、風の精霊術だった。

あの時の絶望は、今でも覚えている。

言われた通り、頭の中で念じて、手をかざす。

手をかざす。念じる。マナを身体の中から発する。

かざす。念じる。念じる。念じる。

今でも忘れない、今も残っている違和感。どんなに呼びかけようとも、精霊は答えてくれなかった。

いかにがんばろうとも。マナを絞ったとしても。

精霊術は、発動してくれなかったのだ。

一緒に学んでいた同年代のあいっらは、その効果の差はあるけど、発動させることじたいは失敗していなかった。

その日から、僕の試行錯誤が始まった。

本当に色々試した。先生から事情を聞かされた父さんと母さんの協力の元、その原因を調べてみた。

いったいなぜなのだろうと、原理を徹底的に学んだ。

精霊術の原理など、何回復唱したかわからない。

精霊術の原理は、本当に簡単なものなのに。

人が、脳の霊力野と呼ばれる器官から世界の根源エネルギーであるマナを発し、マナを糧にしている精霊たちに分け与え。

その見返りとして、精霊が発動させてくれるもの。それが、精霊術。

なのに僕にはそれができない。マナはある。ない人間などいない。だけど、精霊に分け与えることができない。

そうして、何度か試して、分かったことがある。

僕には、“霊力野という器官そのものが存在しない”のだ。

小さいのではなく、全くの無。それを理解した時、僕は絶望した。

医療術は水の精霊術の応用。それが使えない僕は、医者にはなれない。

10才の時。山ほどの本を読んで、知識を得て。

必死になって理論を組み立てて、その終わりに導きだしてしまった結論。

僕は、描いた夢の崩壊を、理解した。

それから本当に色々であった。

師匠と出会えたのは、本当に僥倖だったと思う。

もしあの人がいなかったらなんて、考えたくもない。

その後。僕がソニア師匠の元で教えを受けて、それなりに立ち直ってきたある日。ル・ロンドにハウスと名乗る医者が治療院にやってきた。

目的は親父と母さんの治療を見るためだ。風変わりな治療をする珍しい医者として、二人共それなりには名を知られている。

二人は快諾した。代わりに、と僕の体質というか根本的欠陥について診てくれと言った。

ハウス医師はこの国ラ・シュガルの首都、イル・ファンにあるあのタリム医学校で名が売れている、高名な教授らしい。

そこで僕はふと考えた。そんな人ならば、あるいは僕の組み立てた理論の中に破綻を見つけてくれるかもしれない。

末に出した結論を否定してくれるかもしれない。

だが、現実残酷だった。しかし、得られたものもあった。

ハウス教授は、そのような欠陥をもつ人間を知っているという。ただ、あまり他人には言えない人物で。

その人達が精霊術を使えるように、と。ある意味での治療を施すために、と裏で研究を続けているらしい。

僕は歓喜した。そんな研究をしているなんて。そして、僕の頭にも興味を持たれたらしい。

その後、タリム医学校に誘われた。教授の助手として、また医学の知識を深めるためにこっちに来ないか、と。

親父は、何故か　賛成しなかった。しかし、反対もしなかった。特別それに思うところもない。すでに親父に対する思いは諦めが勝っている。

母さんは背中を押してくれた。料理は作れなくなるけどごめん、と謝った。忙しい二人の代わりに食事の用意をしていたのは僕だったから。

ソニア師匠も、力いっぱい背中を押してくれた。良かったねと満面の笑顔を浮かべて。ちょーっと威力が強すぎて10mほどは吹っ飛んだけど。油断をするんじゃないよ、らしい。

いや師匠様、何もイル・ファンに乗り込んで戦争しにいくんじゃないんですから。ちなみに背中 of 紅葉は2週間消えなかった。相変わらずあの人はパネエ。

その時にくれた言葉。いや、それまでの言葉も、全て宝物のようだ。あれが無ければ、僕はもつとんでもない場所にまで行っていたかもしれない。下衆に落ちていたかもしれない。

でも、「自分に怠けて弱くなったら……わかってるだろうね？」と言った時の眼光は超怖かったです。

ソニア師匠の娘と一緒に修行をしていた同門。かつ、幼なじみであるレイアは別れを告げると泣いていた。

泣きながら活身棍をぶちかましてきた。低い軌道での一撃が金的に当たった。俺も泣いた。今なら言える。あの貧乳が。

そうしてやってきた首都・イル・ファンは都会の中の都会だった。夜域の霊勢に支配される、常闇の都市。ラシュガル王のお膝元。

多数の貴族が住まう、リーゼ・マクシア最大の都市。

その作りは、たしかに美事だった。夜に浮かび上がる樹の街灯は美しく、街をほのかに優しく照らしている。

建物も違う、故郷のル・ロンドとは明らかに異なる近代的なつくり。医学校や、海停に繋がる道がある中央の通りでは、まるでお伽話の国のような、幻想的な光景が見られる。

でも、何故だか僕はそれが好きになれなかった。中央から外れた、暗い裏道に惹かれた。

暗い趣味をしているな、とは店長の言葉。まあ、その御蔭でいいバイト先を見つけられたんですけど。ナディアっつー名状しがたい関係の悪友とも会えたし。

いや、あつちは会っちゃったって感じか。出会いは選べないって看護婦の方が言ってたけど、それって本当ね。

イル・ファンの生活は目まぐるしい。助手としてハウス教授を手伝い、自分も知識を蓄える日々。

休みの日には遠出をしたりもした。

ラ・シュガルや、時にはア・ジュールにも足を運んだ。

本を片手にあちこちを周り、色々な薬草や古代の本を探した。もしかすれば、精霊術を使えるようになる何かがあるかもしれない思っ

って。

残念ながらそっちの方では結果が出なかったけど。

そうして、今に至る。

医学校で学んで。「えゝ精霊術も使えないなんてゝ」「精霊術が使えないのが許されるのはう才までよねゝ」とかほざくビツ……………もとい医学校の医学生達の白い目に耐えながら、ようやくここまでこれた。

夢を叶える第一歩。いよいよスタートラインに立てるのだ。

ナディアが姿を消して2ヶ月。教授の研究もいよいよ大詰めらしい。論文もできているとか。

詳しい内容は聞かされていないけど、推敲も理論の見直しも九割九分は完了していて、明後日ぐらいには発表できると言っていた。

らしくなく、興奮している。

「へえ、なのに坊主はこんなところでなにしてんだ？」

とおっしゃるのは、ここガンダラ要塞の門番さん。本名はモーブリア・ハックマン、年は34のおっさんである。

「きまってます、日課の修行ですよ。今日はちょっとはりきりすぎちゃいましたが」

「あー、魔物がポンポン飛んでたけどお前の仕業かこのクソ坊主」

「つい、出来心で」

「お前は出来心で魔物を空に飛ばすのか……ああ、坊主だから仕方ないな、坊主だから」

失礼な。僕の名前はジュード・マティス、15才ですよ。

イル・ファン医学校に通う医者のおやをしている、どこにでも居る医学生なのである。

そう、そこいらの青臭い少年少女共と変わらない。無意味に明日にワクワクしている青い春も真っ盛りなお年ごろ。

「ここッッコミどころだよな？ ええ、青い春だと？ むしろ笑いどころ？」

「ええー、本当に失礼ですよこの門番ふぜいが。僕はただの純朴な少年。はい、リピート」

「クソガキが。っつーか何度も教えただろうが、いい加減名前で呼べよ！ あと口が悪い！ 俺は一応軍人だぞ！？」

「えつと確か……ミスター、モン・バン？」

「ガアッ！！」

言つと、門番さん、別名モン・バンさんは顔を真っ赤にして威嚇してきた。

ちなみに相方の兵士は今日も苦笑気味である。いや、街の衛兵さん

とは違つて懐の広いこと。

しかし目の前の門番さんは狭量だ。いや、たまたま機嫌が悪いよう。どうせまた仕事が忙しいやらなんやらのやりとりで嫁と喧嘩したんだろうけど。

原因は家に帰れないからか。まあ奥さんも大変だよね。事情もあるけど。

「もっと人員増やせたらなあ」

「それはそれで嫌なくせに」

このガンダラ要塞の門番つて鍛えられた軍人と言えどそうそう成れるもんじゃない。

けど、一種のステータスでもある。だから仕方ないと思うね。

最近は特にひどいらしいけど。
街に飲みに来る衛兵さんも愚痴つていた。妙な研究棟の警備やその他もろもろに人手を割かれてるせいで、ローテが厳しくなっている。

それに、日帰りでの急ぎ旅は危険だ。迂闊な真似をすれば、二度と帰れなく可能性が大。

なんせ、首都イル・ファンとここガンダラ要塞を結ぶ街道に徘徊している魔物の強さは、かなりのもの。

ここいらの魔物3体を同時に相手すると想定した場合、精鋭部隊を

4人程度は用意しなければ完勝は見込めないだろう。

「なら、その魔物を蹴散らしながら往復するお前はなんなんだ？」

「ただの医学生です」

「お前のような医学生がいるか！」

なに、失礼だなこの人。それにこれぐらい、元貴族の令嬢でさえや
つてのけるさ。

「ええ、最早令嬢じゃないだろそれ……………」

何かを想像したのか、してしまったのかモンバーさんの顔が青く
なっていく。

あ、ぐったりした。

きつと2m超のメスゴリラみたいな姿を思い浮かべているのだろう。

あるいは、この要塞にあるというゴーレムにた令嬢型最終兵器み
たいな。

（うん、今度会ったときにナディアに言ってやる）

新しい喧嘩の種を考えつつ、僕は荷物の中から娘さんの手紙を届け
てやった。

不機嫌な顔で受け取るモンバーさん。

「…………助かる。しかしお前でも、一人ではここいらの魔物をまとめて相手するのは危険だろう?」

「師匠とのガチンコ勝負に比べたら億倍ましです。まあ、これもいい修行になりますしね」

あと、娘さん美人だし。奥さんも美人だし。

なんで、たまに家庭のことで悩んでいる門番さんを、相棒で今横にいる門番・弐型さんが睨んでいることがある。

もげる、とか。

最近は掘るぞ、に変化している。え、なにそれ怖い。

「…………尻が、なんかむずむずするな…………ともあれ坊主、あれはどこまでいった?」

「どこまでですよ。ちょっと最近は打ち止めぎみですね」

と、腰につけている自分のリアルオーブを見せる。

これは持ち主の潜在能力を覚醒させるためのアイテムだ。

戦闘を重ね、経験を重ね、強くなっていくことに成長の種子が花弁のごとく開かれる力の華、といえいいだろうか。

その内容は持ち主ごとに異なるが、人によって限界が違ふという。一枚の限界層は9層。

で、一般人は3層程度で打ち止めらしい。普通の軍人で5層程度、近衛の精鋭部隊で8層程度まで。

比べて僕は、“2枚目”の1層めに突入中。ふつーに2枚目、とか出てきた時はびっくりした。

ふつうに日課としてイル・ファンとガンダラ要塞の入り口前までを往復していただけなのに。

ちなみに2枚目に突入しましたー、と伝えた時の門番さんの顔は忘れない。

「この最終兵器医学生が」とつぶやかれたことも。つーか、最終兵器で。なんていうことを言うんだモンペさん。

「っせ。じゃ、ありがとよ」

と、レモングミが投げられる。これも結構高いもののなのに。

やっぱり、この人はなあ。ここは礼を言うべきか。

「ありがとう……さようなら、モブ」

「さっさと帰れ！」

んん、なんで怒るんだろう。

親しみをこめて、本名のモーブリアを略して呼んだだけなのに。

「いいから、ガキがこんなところに来んな！ 大人しく医学校でお

勉強しとけ！」

つまりは、学べるうちに学んでおけよ、と。

そんな、何だかんだいってお人好しな門番さんの言葉に、手を上げて応えながら。

僕はイル・ファンに帰るべく、足を踏み出した。

2話 「過去から今」(後書き)

原作のジュードはムツリ。
こっちはわりとオープン。

……… 何がか、は言わずとも分かりますね？

3話 「今が変わる刻」

治療術を使うには、3つの工程を踏破する必要がある。

まず、治療術をかけるべき部位の特定。

次に、術者がその部位にマナを通せるのを確認すること。
最後に治療術の行使、この3つだ。

各々の技能の精度は、それぞれ鍛える必要があつて。技能が高いものほど、その効力は高まっていく。

ちなみに通常の医師なら、この3工程を一人でやってのける。

だけど、学生の身ではその域まで至れない。特に一つめ、治療部位の見極めが難しいのだ。

だけど僕は違う。かつて自分を変えるため、必死になって勉強した人体の構造。

知識は、数年勉強した程度の学生よりも遥かに上だ。

「次。肘の関節の……そうそこです」

「分かった……っと、行きますよ」

患者は、転んだひょうしに肘を痛めた建築職人。

まずは僕が怪我をした時の状況を聞いて、触診。治すべき部位を特定すると、隣にいる医学生Aにそれを伝える。

あとは簡単だ。教えられた通りの部位に医学生Aが治療術を行使した。マナが上手く通って行く。

「ちょっと出力強い。0.2ほど下げて」

「分かりました」

前もって決めておいた基準。その指示通りにA君が出力を下げる。すると、うまいぐあいにマナの通りが患部へと集中していった。

そのまま数分。僕は触診しながら患者さんに終わりましたがどうですか、と聞いた。

「ん…………もう大丈夫なようです！ いや、やっぱり第五医療室は仕事が早い！ 他は今でも外で並んでいるのに！」

「褒めても何も出ませんよ？ ああ、治療は終わりましたが、3日は安静にしていして下さい。関節の怪我は厄介ですから」

「う、分かりました。それではありがとうございます」

顔をひきつらせながら去っていく患者さん。なんか、仕事の納期とか厳しいのかな。

それとも親方が怖いのか。まあ僕のしつたこっちゃないけど。

「あゝ、今ので終わりですね？」

「はい。とりあえずは。これ以上は規定に反しますし、他の治療室の方にもいい顔はされませんから」

「それにしても、今日はけが人の数が多いですねえ。今の時期は特に観光客も少ないし、原因については特に思い当たりませんが……ありましたっけ？ 何か怪我が多発するようなことが」

「私も思い当たりません。が……先程の方が言われていた言葉が気になりますね」

「……“微精霊”がない、ですか。ジュードさんもそのあたりはどう思われ……」

と、そこでA君が言葉につまる。やつちまったという顔をする。

まあいいけどな、他の奴らがするような殴りたくなる顔じゃないし。

「で、でも微精霊がいなくなるなんてありえないですよね！」

「そうですよね！ でも、確かに医療術の調整が難しかったですよ。いなくなっただけさですが、その、少なくなっただような感覚が……」

「僕にはわかりませんけどねえ。ええ、ちっとも分かりませんよ」

マナの動きなら分かる。だけど、微精霊の動きとか正直感じ取れないのよ。

現象となつた精霊術なら肉眼で確認できるから見えるけど、接したこともない相手なんぞはなから想像の範疇なのよ。

って、僻んでないですよ。だから顔を元に戻して下さい。別に貴方の事は嫌いじゃありませんから。好きでもないですけど。

と、僕の下降していく機嫌を察したのか、Aの野郎は慌てたように立ち上がる。

「お、お疲れ様です！」

と、頭を下げてすたころと去っていくA氏。ちよつとからかっただけなのに、繊細な人だなあ。

あ、戻ってきた。そうだよな、業務日報書かなきゃならないもん。僕に押し付けて帰るようならマジで睨むよ。

つと、僕はそろそろ帰るか。今日はバイトもないけど、ちよつと疲れた。

そうして立ち上がると、看護婦さんがねぎらいの言葉をかけてくれる。

「あ、ジュードさん、本当にお疲れ様でした」

「いえいえ、僕はただ指示を出していただけですよ」

マジで。言うが、医学生A君が看護婦さんの言葉に追従する。

「でも、患部の見極めは完璧にできていたじゃないですか！あと、

マナの調整を細かに指示するなんて教授にも出来ませんよ」

医学生Aが興奮している。ってこれは演技じゃないか。いや、僕より3つは年上のはずなんだけど……………この人は謙虚だなあ。

この医学校にしては珍しく、僕を奇異の目ではみない。大半は虫を見るかのような眼で見てくるのに。

ちなみに僕はそんな眼を向けてくる奴は無視する。

そのことを目付き悪いソバカスに言うと、「2点だ」と返された。ダジャレじゃねーつつの。

あと、A君が言っているマナの感知だが、あれは修行と一人旅の中で身につけたものだ。

調整というか把握は、身体能力強化の基本だからおろそかにできない。特に自己強化が力量に等しくなる武器を使わない拳法使いだから、マナの調整こそが戦闘の基本にして奥義となる。

強化しそこねた状態で亀モンスター殴ると死ねるからね。で、拳を潰された拳士など医療術の使えない医者と同じだし。

「……………」

「……………じゅ、ジュードさん、何でそんなに落ち込んだ顔を？」

「いえ、ちょっと自分の胸を自分で突き刺してしまつて」

笑顔で言うと、引かれた。看護婦さんでさえ顔をひきつらせている。つと、それよりもだ。

「ハウス教授はまだ戻られる気配がないようですが……………今日はどちらに？　　というかそもそも、何で僕を？」

なんで僕を呼ぶのかあの人は。急すぎるし、何より“これ”は嫌だつて前に言つたはずなのによ。

いくらA君でも、こうして治療を手伝うような真似は御免被る。教授がそのことを忘れるとも思えないし、何があつたんだろうか。

「あ、すみませんハウス教授の指定でして。ジュードさん以外には任せられないと。その教授は、その、今日は……………どうしても外せない用事があるようでした」

「あ……………それなら仕方ないですかねえ」

そろそろ論文の結果が伝えられる頃だし。それに、あの人はこうと決めたら割りと他のものは見ない。

それに、教授という高い役職を持っているのに、らしからぬフットワークの軽さを見せることがある。

椅子に座つて指示してれないのに、何かと自分で動きたがるのだ。

あとはあの年まで医療の道一本で生きてきたせい、独自の価値観というか、視点をもっている。

経験とか関係なく、素質や才能のみで人を見るのだ。ここを任せたのも、僕ともう一人のA君が居れば大丈夫だと判断したからだろう。この世界において精霊術を使えないというのは 結構な眼で見られることになるのだが、ハウス教授はそんなの関係ねえとばかりに無視をする。

人間クサイところもあるんだけどね。いきなり突拍子も無いことをするときもあるし。

一年前は本当に驚いた。部屋をノックされ、現れたのは渋面を浮かべた中年。否、ハウス教授。

何事かと聞けば、「娘の誕生日プレゼントに行くからついてきて欲しい」とか。

いや、貴方教授のように、相談する同年代のおっさん友達とかいないんですかと。

遠まわしに聞いて、その答えが「娘さんと同年代である僕の意見を聞きたかった」らしい。

友達の有無に関しては華麗にスルーされた。うん、やっぱり教授にまで上り詰める人間ってこんな風にどこか変だから、友達とかできなかったんだろう。

研究一本だもんなあ。論文を発表した先々月からは特に忙しくなった。文の評価はまだ得られてないが、国の上層部から及びがかったらしい。

どこかのスポンサーがついたとかで、研究費も潤って、最近では今

までに出来なかった研究にはりきっているらしい。

らしい、というのは僕はその件に関しては手伝っていないからだ。

何でも、精霊術を使える人でないと駄目らしい。

「しかし、論文の結果はどうなったんでしょうかねえ」

「教授自身、渾身の自信作だったようですけど……」

と、そんなことを話しているときだった。

医務室に突然飛び込んできた彼。僕を見ると少し顔を歪めたが、はつと我に帰るとそのばにいる全員に告げた。

ハウス教授の論文が、今年のハ才賞である、あの栄誉に選ばれたと。

研究者として最高の

「で、本人は何処だよちくしょう……………」

ハ才賞の受賞を告げられた後。看護婦さんに、すみませんが探してきて下さいと言われた僕は、少し悩んだ。

だが美人の頼みとあれば仕方あるまいと、僕は快く頷いた。

「
嘘だな」

伝えたかったから、頷いたのだ。何より、ハ才賞に選ばれるということは、ハウス教授の論文が正しいものとして受け入れられたということ。

その地位は最高位になる程高くなるし、研究も進む。僕の夢への道も縮まるかもしれない。

直接伝えて、興奮を分かち合いたい。

少し、打算も含まれているけどね。

「ソニア師匠……夢に届きそうですよ」

スタートラインに立てさえするなら、後は努力しだいでもう何でもなる。

でも、肝心の教授が見当たらねえ。

赴いたとされる研究棟に言っても、研究棟の衛兵は「もう帰った」の一点張り。

確かに、棟の退出者が書かれる紙にはハウス教授の名前がある。

だけど、何かが変だ。強いて言えば眼の前の衛兵。

（ どうしてそんなに緊張している ）

一般人ならわからないだろう。 だけど、僕には分かる。

筋肉も、マナの動きもそうだ。 いつもとは明らかに違っている。

まるで戦闘が起こるかのような。 そんな緊張が見て取れる。

（だけど、この衛兵を殴り倒すわけにもいかんし）

目立ちすぎるし、何より犯罪だ。助手の立場を追われるのは本末転倒。

そう考えた僕は、素直に回れ右をして、また中央通りの中央広場に戻ってきた。

その時だった。

「っ!？」

急に風が吹いて。

“その風が通るにつれて” 街灯の火が消えていく。

（ 精霊術。それも、かなり高度の）

街灯が消えた暗闇の中、一人思考を走らせる。

先ほどの風は不自然だった。特にどうというわけもないが、風というには“薄すぎる”。

あるいは、あの風に何らかの作用を持たせて、微精霊に干渉したのか。しかし、こんな広範囲の街灯を、さり気なく一気に消すとかそんなことが可能なのか？

そして、風にはマナが満ちあふれすぎている。

こんなの、見たことがない。つまりは

「普通の精霊術じゃ、ない……………?!」

突如膨れ上がった気配。

それは、膨大なマナの塊だった。

「っ、こうして考えてる場合じゃない」

思考に時間を割いている場合じゃない。この場はどうするか。

(……………衛兵に知らせる？ いや、もう動いている。見れば橋の上に立っていた衛兵が何かを確認している最中だ……………このまま医学校に戻るべきか？ いや、今の時期に厄介ごとに巻き込まれるのはごめんだけど、それは意味がない)

何かが起こっている。

ナディアの姿が消えたこと。

ハウス教授のこと。それに何より、衛兵の様子。あれは前もって何かを通達されている感じか？

いや、それにしても完全な戦闘態勢じゃなかった。要塞の門番さんも知らなかったようだし。

そこまで考えると、またマナの塊が大きくなる。

ここまで大きいと、その場所も感知できる。これは 研究棟

の方向！？

直後、爆発音。

「ちっ！！」

一歩目からトップスピード。踏み込み過ぎて板をへこまさないように、全力で広場を駆け抜ける。

その甲斐あつてか、見ることができた。“水の上に残された、円形の何かを”

そして、その先にあるのは排水路だ。

が。
“入り口の檻らしき鉄の格子が壊されている”と、頭につく

「……………くそ」

水場の上に浮かぶ円形に向け、近くにある石を投げる。

予想通りに、円形の上に乗る。つまり、これは足場なのだ。

直後に消えて上にあった石は水の中に沈んでいったが、これはもう間違いない。

誰かが街灯を消して。その上で、川の上に足場を作りながら潜入して。

このいかにも頑丈な鉄の格子を一瞬でぶっ壊して、中へと乗り込んだのだ。

（化物かよ）

聞いたこともない術を使う相手。目的は何だろうか、と上にある建物を見る。

そこには、研究棟があった。

「くそ！」

毒づく。だか恐らく、迷っている暇はないだろう。

乗り込んだ人物の仕事は、それはもう“早い”はずだ。そしてこの研究棟には、あんな手練が乗り込むほどにヤバイものを隠している。

毒づきながら、僕は橋の上から飛んだ。

そのまま、落ちる。壊れた排水路の前に着地した。

あとになって思う。あれが、選択した時だったのだと。

あの時の橋の上が、それまでの生活で。

降りることを選んだ瞬間、飛び降りた直後、それが音もなく崩れ去ったのだ。

あの日、僕の“日常”は終わりを告げた。

かくして、非日常が始まる。

迷惑な女神の、あまりにも急な来訪と共に。

3話 「今が変わる刻」(後書き)

ようやく原作突入。

あと、主題歌は『fly me to the sky/ang
ela』でよろしくお願いします！

4話 「現在喪失」(前書き)

ヴァイオレンス・ジュード、始まります。

4話 「現在喪失」

水路に侵入して、最初に感じた気配は一つだった。

入り口の一本道から、右に曲がる角の向こう。だけど、それは警戒するに値しない。

戦闘者の練度はマナの制御によって分かる。素の筋力は確かに必要だが、マナによる肉体強化の恩恵はそれ以上に重要。ゆえに、相手を測るにはマナを見ると師匠は言っていた。

それなりの使い手なら、高いところから飛び降りても足を痛めなくなる。また、ただの跳躍で身長の数倍の高さにまで飛び上がることができる。

そして、今まで出逢った戦う者達と比べ、目の前の気配はどうか。

（凡百のどこにでもいる衛兵だ。複数配置されているわけでもないらしい）

だけど顔を晒すのはまずい。隠れている手練が居ないとも限らない。

（ポケットにあるハンカチで、っと）

ハンカチを口元にかぶせる。あとは髪を下ろせば大丈夫だ。ちょっと視界が防がれるが、この相手ならハンデにもならない。

これで変装は完了。もう気にすることはないと、真っ直ぐに進んだ。

「おい、その……止まれ！」

当然の如く見つかる。こちらを見た衛兵が、武器である鉄の棒らしきものを構えた。

「はい、止まります。あ、こんばんは。夜分遅くにすみませんが、お伺いしてもよろしいでしょうか」

「は？ えっと……違う！ 怪しいやつ、何者だ！」

「どうも。この先が研究棟に繋がってるんですね？ で、貴方はその警備と」

「そ、そうだが……いや、待て！ 小僧！」

様子が変わる。戸惑い混乱から、決意と何事が含まれたものを秘めたそれに。

「一つ聞くんが……来たのはお前一人でか？」

え、そこでその質問ですか。

ってそういうことか。ようするに始末しますが、ちょっと仲間が居ると困るので教えてくれませんか、と。

つか話の運び方が下手な。敵意見せるのが早過ぎるし。構ってる時間も惜しい、手っ取り早くすませますか。

「勿論です。貴方ぐらいならそれで十分……じゃ、今日はこのへんで。聞きたいことは聞けました、ありがとございます」

礼をしながら横を抜ける。衛兵はすぐには棒を振り下ろさず、そのまま通してくれる。はずもない。

すれ違った直後、背後の敵意が殺気に変化した。

こちらを侵入者と、殺すべき敵とみなしたのだろう。あるいは侮られたと、怒ったのか。

どちらにせよ、衛兵の手に持つ警棒に力が入ったのは確かだ。握った手元からざりり、と肉が軋む音が聞こえる。

間髪入れず、間合いを詰めてくる。衛兵の足が、下にある水を跳ねさせた。

そのまま、振りかざしたのだろう。敵意満面に、侵入者の後頭部を殴打すべく、高く振りかざされた鉄の棒。

輪郭さえも感じ取ることができる敵意。

だが、一連の動作の鈍さはブウサギにも劣る。

僕は振り返りもしないまま、ただ左足を軸に右足を一回転。

「あつ？」

後ろ回し蹴り。衛兵の顎に当る音と、間抜けな声が聞こえた。間もなく、衛兵はそのまま前へと倒れ伏す。

衛兵の身体が水を叩き、ばしゃりとうるさい水音が鳴った。

「遅えよ」

あくびも出ない。まあ正当防衛だし、いいか。

しかし、応援を呼ぼうとはしなかったな。きっとここは警備が手薄なんだろう。

気配も少ないので、あるいは穴場かもしれない。

行けると判断し、そのまま侵入することにした。

目的を整理しよう。

第一にハウス教授の確認。もしかしたら拉致されてるかもしれない。

「思えば、あのサイン……筆跡が違ってたな」

思い返せば、そうだ。あれはハウス教授のサインじゃない。なぜ、そんな真似をしてまで教授を研究棟に止めようとするのか。

どう考えても碌な目的じゃない。

で、第二の目的だ。それは、この研究棟の研究内容………もとい、成果物があればそれを調べることに。

ハウス教授が関わってるなら………ちょっと、その、何を研究しているか見てみたい。

第三は、侵入者の確認。

あれだけの精霊術とマナは見たことがない。滅多に見れんだろうし、見ておいて損はない。

強者を見るのもまた修行って師匠も言っていたし。

「さて、行きますか」

向こうにも気配がある。あっちに何かあるだろうと、僕は歩を進めた。

暗い水路の中。梯子を登って抜けた先は、惨状だった。

「何か、こう……凶暴な魔獣が通ったあのような？」

進んだ先には梯子があつて、その前には衛兵と犬が居た。で、同じように昏倒させた後に梯子を登ったんだけど。

ああ、研究棟は美しいよ。そりやもう美麗だ。税金返せつてぐらいに。でも、周りにあるオブジェが気品を損なわせている。

そう、怪我をした人物が歩く度に残す血痕のように、いや通った痕跡というか。

おそらくは侵入者が通ったのであろう通路の上には、気絶している衛兵や犬の姿が。いや、何というか死屍累々。

ある者は地面に、ある者は通路の端にある欄干に引つかかって洗濯物のように、また在るものは積み重なったクッションのように。

そこかしこに無惨な姿で横たわっている。

「侵入者は………やっぱ一人かぁ。傷跡を見るに火に風に水、そして土………ちつ、全部使えやがるのか」

かなりヤバイ相手だ。倒れた者達の怪我のようすから、侵入者の異常っぷりが分かる。倒れている位置と川にあった水の足場を見るに、侵入者はたった一人。

そして、倒れている衛兵の位置。恐らく侵入者は、ある一点から放射状に、強力な精霊術を行使したに違いない。

一点を基点として、放射状に倒れているから、分かる。

そういえばさつきまでドカンドカン聞こえてたな。地下のせいかな、それほどまでには聞こえなかったけど。

というか、一人で4系統全ての精霊術を駆使するとかどーよ。

旅の途中で何人か、盗賊や山賊まがいの真似をする反抗部族と戦ったことがあるけど、精霊術使いとも戦ったこともあるけど。

（それでも、一人で4種の術を使いこなしている奴なんていなかった）

加え、さほど時間もかけずに倒したということは、戦闘にも慣れているということだ。

戦うことにも躊躇がない様子。戦闘にかかった時間がそれを示している。この速度は、迷いを持っているなら無理な速さ。

つまりは、熟達した技量をもって、明確な意志の元に、襲い来るものの全てを倒した。

全員が死んでいないというのもまた嫌な点だ。短時間で倒しておいて殺していないということは、彼我の戦力差にかなりの余裕があったということ。

しかし、その侵入者の姿が見えない。

この惨状を生み出したバケモンじみた侵入者は、一体どこに行ったというのか。

そして、ハウス教授も。

（……………思えば、教授の様子もおかしかったよなー）

なんととはなしに見せていた仕草。結論ありきで思い返せば、不審なものとして浮かんでくるから不思議だ。

論文の時からそうだった。共同研究ではないが、僕の理論の一部も用いているはず。数式もそうだ。

だが、特に僕に確認することもなかった。きっと教授はそれをきっちり理解していて、聞いてくるまでも無かったのだろーと思っていた。

だけど、本当にそうなのだろうか。ハウス教授ほどの人物が出す論文に、大きな間違いは許されない。実際、2年前に出した時は一応だが僕に確認をとっていたこともあった。

今日の急な診察補助依頼も、考えればおかしい。

あの人はあの人で、無神経な輩ではないのだ。結論から言うに、常ではない対応を取らざるを得なかったということ。

何か、強力な権力が何かが働いているのか

「って推理している時間も惜しいな」

見つかるのもまずい、まずは進もう。

そう思った時、2階から爆発音が聞こえた。

2階の正面奥にある扉の隙間が、炎の灯りに照らされる。

「……………おっかねえな」

侵入者が誰か知らないけど、こんな真正面から乗り込んで向かってくる奴蹴散らして。

あろうことか研究棟全てに響き渡るような爆発音を奏でる。自分の存在を、知らしめるように。

って、あ、また爆発した。

(……………控えめに言っても豪快な。いや、ずいぶんとゴキゲンな賊らしいね)

つーかちよっと関わりたくない手合いだろ、これ。侵入っちゅーか侵略になってるよ？

何というか、爆発音に身体を揺らされて、うめき声を上げる倒れた衛兵がリアルだ。

あ、また爆発した。

「ってやべえ！」

見れば、一階の角にある扉の向こうから気配が。こちらに向けて、多数接近中。

……あの位置的に、研究棟の奥に続く扉か。どうにもまずいな、これ。

隠れるか。

く????く

「くっ」

何なんだこの女は!!？

「ファイアボール！」

渾身のマナを込めた一撃。不意をついたそれは、女の横つ面に吸い込まれていく。

だが、直前でガードされた。マナの魔法障壁で大半が中和されていく。マジックガード

それでもちよつとは通っているはずだ。全部をガードされていることもない！なのに

（いや、問題なのはそこじゃない！）

「出る」

声と同時に、また。

・
・
・

また、火の巨人が女の背後に現れて。

直後、超高密度の業火が襲いかかってきた。

「ぐっ!?!」

マジックガードで正面からそれを受け止める。だけど、威力が強すぎる。

中和できない分が、アタシの身体を焼いていく。

「…………クソ!」

火の精霊術で、真正面から撃ち負ける。こんなこと、あつていいはずがない！

それに、この女
気に食わない。

容姿。瞳。髪の毛。全てが整っていて。

そして何より
その胸はなんだ。

何なんだその胸は！　っつーか何でムカツイてるアタシは！

（くそ馬鹿ジュードがー！）

馬鹿な男の顔がよぎっちまう。くそ、もう忘れたいつてのに何で思い出させる！

アタシは陛下のために、って今は目の前に集中するべきだろ！

「ああ、クソ！！」

毒づいて落ち着こうとする。だが、無理だ。この女、服装もふざけてやがる。

なんて軽装だ。いや、そのマナの量を見れば納得できるかもしれない。

だけど

気に食わない。

「気に食わないんだよッ！」

ム力つく、だから潰す！

「その胸　ぐちゃぐちゃにしてやる…！」

「それは困る」

剣に力を込める。

対する女も、こちらのマナを感知したのか、今までにない真剣な表情で巨人を呼んだ。

「レイジングサン！」

稀有な才能を持つ術者が放つ、炎を伴った渾身の剣技と。

「イフリート！」

大精霊の一撃が、ぶつかる。

極大の炎が正面から衝突し、四方八方に爆裂した。

「???? side out」

2階に上がっても誰もいなかった。

いや、あっちの部屋には絶賛死闘中のだれかが居るのだろうけど。

（うわ、なんか、これ、すげーマナが膨れ上がってますよ？）

衛兵など比べものにならないマナ。

こんな相手と戦うのに、誰かを守りながら、とかハンデ付きはごめんだ。

ああ、ハウス教授を助けるまで出会いたくはないな。

だから反対の、2階の上がって右側の部屋に行こうと決めた。

ドアの前に立ち、入れるか確認しようとして

「な、侵入者!?!」

踏み出す直前、ドアが開いた。

部屋の中と至近距離でまみえる。ああ、変な服を着ているが衛兵の類か。

その衛兵は驚きながらバックステップで一步下がり、腰にある何かを手にとって、構えようとする。

「掌底破!」

だけど遅すぎる。退くよりも早く踏み込み、右の掌打を衛兵の胸へと叩きこんだ。

肉を打つ手応えが、触れた先から伝わる。同時に、衛兵が部屋の奥へと吹っ飛んでいった。

そのまま転がり、壁らしきものにぶつかってやがて動きを止めた。

らしきものとは、部屋の中は暗く奥まで見渡せないからだ。
灯りが消されているのだろうか。でも、真っ暗というわけでもない。

なんせ、部屋の横には、淡い光を放つ円筒形の物体が

「え？」

物体が、あつて。

その中に、ヒトが入っている。

「……………」な

壁沿いに並び、ガラスのようなものでできた大きな筒の中。その中に液体が詰められていた。

一緒に、人間も詰められている。中の人に外傷は見られない。

だけど、手足をぐったりさせて浮かんでいる。身体にも何にも、生きていないなら自然とあるだろう力が、全然こもっていないくて。

呼吸の気配も感じない。何より、マナを感じない《……………》。

恐らく、ではなくて。

間違いなく 死んでいるだろう。

一瞬でそれを理解する。

だけど、その直後。

それよりも遙かに、理解したくないものを目にした。

「.....ぐ.....マ.....ア.....ア.....だ.....し.....
.....な」

苦悶の声が聞こえる。見知った声が聞こえる。

ハウス教授の声が。

よりもよって。ガラスの向こう《・・・・・・・・》から聞こえる。

意味を理解すると同時に、すぐに駆け寄る。

「教授!!」

教授が閉じ込められている。一瞬混乱するが、すべき事を見極める。教授の声は、液体の中に居るせいだろうか、この筒のせいだろうか、声も通らない。

口から水泡を吹き出し、今にも死にそうな形相を浮かべている。

そして、身体からは多くのマナが溢れ出している。

搾り取られていると言った方が正しい表現か。教授の身体から抜き出されたマナは、発生すると同時に何かに吸い取られ、そのまま跡形もなく消え去っている。

（な、んだこの装置は！？ いや、考えるのは助けてからだ！）

死なせない。思いと共に、拳に力を入れた。

「このままじゃ……………下がって、教授！」

マナの枯渇は死を意味する。こんなところでこの人を死なせるわけにはいかない。

僕は迷わず、拳を振りあげて一息ついた。

「ハアアアッ!!」

そして叫ぶと同時に、渾身の一撃を円筒に叩き込んだ。

しかし、拳の先から返ってきたのは、予想外の“硬い”手応え。

その手応えが告げる予感嫌なもので。そして、予感に違わず、円筒は割れてくれない。

（これは、見かけ通りの材質じゃない!?）

ガラスとは全然違う。一体何で、できているのか。

だけど考えず、まずは割る方を優先すべきだろう。

バックステップで下がり、助走の距離を取って、拳の先にマナを集める。

割るべきは眼前の檻。ガラスの数十倍の強度があるだろう、未知の物質。

（だけど、渾身の一撃ならば！）

一歩踏み出して。限界まで高めたマナと、気合の声の終わるが共に

「ハ、アアアアア ツ！」

渾身の一撃が、その檻をぶち破った。

亀裂が入り、筒が割れる。

流れ出る水と共に、教授の身体がこちらに倒れこんでくる。

それを腕で受け止めると、必死に叫んだ。

「教授！」

マナが ほとんど残って無い。

まずい、このままじゃ……………！

「教授！ 教授！」

叫ぶ。

「あ……………ジュー、ド、君？」

「はい！ 教授、今すぐ治療を……………」

「む、ただ。も、どうにも、ならんよ」

「教授!？」

叫ぶ。 だけど

確かに、マナが足りない。

人に流れるマナは、あるいは血に等しいもの。

無くて生きられる、ものでもない。

その意味を理解する。 してしまう。

ああ、目の前の光景と意味を理解している。 でも、こんな結末を理解したくない。

「す……………まん。 だま……………ヘイベル、 スイセ……………す、 まん、
ジュー……………だま……………して」

娘の名前。奥さんの名前。そして、僕の名前。

「すまない……………」

掠れる声の、謝罪の言葉。

それだけを、遺して。

ハウス教授は、輝く液体の中に。空気のように、消え去った。

「.....あ？」

無くなった。亡くなった。失くなった。

「あ、ああ.....」

死んだ、死んでしまった。

（え？ どうして？ なんで？ こんなところ？）

ここはイル・ファン。首都で王都。平和な、はず。少なくとも教授にとっては。

ああ、そうだ。一時間前までは、幸せな状態があったんだ。

偉大な賞の、それを祝って。

告げて。喜んで。教授も、報われて。僕も、報われるはずで。

でも今は、全部が消えた。

（どうしてなんでこんなありえない今までの努力はなんのためにベルお嬢にはなんとスイセさんにはなんてなんでしんだしんだなくなつたいなくなつたなんでこんなことに逝ってしまった僕を、娘さんを遺して！？）

思考があふれた。山のような言葉が胸の中を暴れる。身体の中のマナも。

亀裂の入る音がある。度を過ぎた肉体強化に、筋肉が軋む。

だけど痛みを感じない。その余裕さえ、無い。痛いのは理解しているが、それよりも優先すべきことがあると身体が麻痺しているのだ。

言い表せない感情が決して広くはない心の内を駆け巡り、その度になんかが削れていく。

「なん、で

っ!？」

言葉が、痛覚と音に消された。鋭い痛み。何か、小さい石のようなものが米神を打ったらしい。

「侵入者が

これで!」

見れば、衛兵だ。さっき殴り飛ばした衛兵が、こちらに向けて細長い円筒状の何かを構えている。

そこから何かが飛び出て、僕の米神を打ったのだらう。

だけど、致命傷には程遠い。全然、足りない。足りない。足りない。

「ああ……………」

三半規管を揺らされたのか、視界が歪む。平衡感覚が掴めない。

だけど、そんなものに関係があるのか？

自問して、否と答えよう。そうして、任せて身を投げた。

この、抑えがたい、黒く視界を染め上げる感情の濁流に。

（衛兵 side）

「な……………！」

撃った。確かに直撃した。まともな人間なら死に至るはずの一撃が、
まともあたったのだ。

だけど、少年は。侵入者の少年は、転がるだけですぐに立ち上がった。

そして、こちらの方を見る。

「ひつ……………！？」

いや、見ていない。見てはいない。ただこちらの方に顔を向けているだけで、見てはいない！

そうして、踏み込みは閃光のようだった。だけど、とっさに反応できた。構え、引き金を引く。直後に、構えた武器の中から高速の鉄の弾が打ち出される。

まずは避けられるはずのない一撃。

だけど、少年はそれを拳で払いのけた《……………》。

ガキンと音がなって、殴り飛ばされた《……………》弾が壁面にめり込む。

有り得ない光景。

驚く前に、俺の意識は散った。

〔衛兵 side out〕

得体のしれない武器。だが、それがどうした。関係もない。

一度受ければ、形状を見れば、その性能を看破するなど容易い。

ならば同じ。拳で当てるのも同じぐらいに簡単なことだ。

打ち出されたものを弾き、そのまま直後に間合いを詰めきる。

そして、“それ”を手で払って横に逸らしながら、その手首をつかみとる。

意識は怒りに凍てついている。まともな思考など夢のまた夢。だけど、身体は技を覚えている。

本能と身体に行動を任せる。

両者が叫ぶのは、即ち敵の撃滅。

呼吸と同じように手馴れた様子で身体が動く。

握った手首を捻りながら足を払い、すれ違いざまに突き上げの肘を上げて、“打ち上げる”。

『巻空旋・改』

本来ならば風の精霊術を応用し、敵を投げ飛ばす術。

だかこれは違う。風が使えない僕なりの工夫をこらした新しい技だ。

打撃と関節技を混合させた投げ技。

そうして、相手の腕が折れた感触が肘に走り。

みぞおちに打った一撃の感触で、消えた衛兵の意識を悟る。

だけど、この技にはまだ続きがある。投げ技の本質は、相手を崩すことだ。

崩した相手に追い打ちをかけるのは戦闘における基本。

当然の如く、投げの後には追い打ちに繋がる技があるのだ。

（ 追牙！ ）

見れば、目前には落ちてきた首筋。衛兵の、敵の無謀な延髄が目の前に見える。

これを回し蹴りで蹴り飛ばせば、人ならばひとたまりもないだろう。まずもって生きてはいられない。

胸を走る黒い衝動に駆られ、一步、踏み出す。

(……………っ!?)

だけど踏み出したと同時に、師匠の声が頭に響いた。

それは、師事する前の決まりごと。約束。そして、僕にとっては絶対に遵守すべき教え。

人を殺せる技。それを学ぶ上で、師匠は言った。

『……………決して、憎しみのままに。そして絶対に、自分の八つ当たりなんかで人を殺すんじゃないよ』

懇願するかのような声だった。それを思い出し、同時に身を支配していた殺意がはじけ飛ぶ。

追撃を受けなかった衛兵が、地面に落ちて倒れ伏した。

「は……………はは」

僕も地面に座り込んだ。とたん、全身が汗を覆う。身の底すらも冷やすかのような、冷たい汗。

今、自分が何をしようとしていたのかを思い出し、身体が震えた。

だけど、混乱が収まるわけもない。一体、この短時間で何があったのか。起きてしまったのだろうか。

思い返すも、わからない。ただ理解できるのは、まだこの胸の内に残るどす黒い欲情。

フラッシュバックする。閃光のように浮かんでは消える光景。

故郷の風景。

子供。

猿のように偉ぶるやつ。

親父。

母さん。

レイア。

そして、ソニア師匠。

思い出したが故に、最悪な気持ちに陥る。湿地で転び、泥の水を飲んでしまった時よりもひどい。

気持ち悪さが全身を犯している。それと同じくして、やり場のない怒りと、失った夢への絶望が胸を締め付けている。

何かに当たりたい気持ちが、思考を独占する。

直後に、自動で閉まっていた入り口のドアが開かれる。

（ ああ。良いところだ ）

姿を確認する前に駆けた。敵か誰かも分からない内に、戦闘の意志を固める。

ただ、自分が八つ当たりしたいがために。殺しはしない。だけど、この身は今は収まってはくれない。

「っ!？」

驚いた誰かが、こちらに向かって腕をかざしてくる。迎撃の術を放つか。

それを見ながら。

襲撃者たる僕だけど、素直に思えた。

(……………綺麗だな)

逆行で顔は見えない。

でも先に伸びる指は、まるで白魚のように美しいものだったと。

4話 「現在喪失」(後書き)

R - 15の境界線がわからない。血が出たらNG？

これ、もしかしたらR - 15かなあ。いや、全然違いますよね？

マジで分かりません。そこらへんの意見があれば、頂けると嬉しいです。

5話 「未来発心」

思考が、加速する。相手を認識するより前に倒せと、本能が叫ぶ。

それに抗わず走る。一步、二歩、先手を取れる状態でできるだけ距離を詰められるように。

ああ、相手が精霊術を使おうとしているが、そんなものは関係ない。彼我との距離はそう遠くなく、このまま走れば詠唱完了までには一撃を与えることができる。

そう思っていたが、突如悪寒が背中を走る。

（詠唱を、して、いない？）

霊力野にマナが奔っているのが分かる。だけど、詠唱の声が聞こえない。

それは一体、何故なのか。

「　　っ！」

だけど、考える前に跳躍することを選択した。

走る勢いそのままに、斜め前へと高く跳躍する。そして、それは正しかった。

「ウインドカッター！」

翻った腕と同時に、風の刃が先ほどまで居た場所を薙ぐ。切れ味は鋭く、そのマナの量は見たことがないほどに膨大だ。

なにより、詠唱を必要としない術とは何なのか。ナディアでさえ、あの規模で精霊術を使うためには、多少の詠唱を必要とするというのに。

あいつのフレイムドリルとも違う、剣に纏わせたわけでもない。真正銘の、無詠唱精霊術。

（長引かせるのは、まずいな）

無詠唱で何が出てくるか分からないのなら、多くは避けられまい。

だから、その前に倒す。

そして跳躍する勢いのまま、敵の頭上にある入り口の上にある壁を蹴った。

そのまま、地面に向けて加速する。

飛天翔駆。

本来ならば、飛び上がり、突っ込んだ上で相手を蹴り飛ばす技だ。

それを落下の勢いのまま、こちらを見上げている敵の肩口めがけて放つ。

「チイツ！」

い。 だけど相手は前転して回避した。その反応も動きも、かなり鋭

空振った足で着地。衝撃が走るが、マナで強化しているのでどうと
いうこともない。

だから、一步前に。前転で逃れた相手に、踏み込んだ。

相手の意図も同じ。着地の隙を突こうとしたのだろっ、剣を振り上
げ、踏み込んでくる。

「はっ！」

振られた剣は ただ、速かった。

だけど速いだけ。技術も何もない、速度を重視した振り下ろし。

こちらの拳は届かない間合いだが、ただ防御するのも芸がない。

迎撃を選択する。マナをこめた右の拳で、相手の剣を受け止めるた
めに。

軌跡を見切り、拳を振る。得物が互いの中央で交差し、こちらの拳と相手の剣が交した。

勢いはほぼ同等。共に弾かれ、一步後退する。

だけど、それでは終わらない。体勢を整えるのはこちらの方が速い。

(?)

違和感がある。コレほどの使い手なら、もっと剣技や体捌きのスキルは上のはずだ。なのに

(あとで考えるか)

今は何しろ殴りたい。このやりどころのない怒りを、ぶちまけたい。だから一步前へステップで踏み込むと同時に。また、正面から切りかかってきた渾身のマナをこめて掌打。

「っ!？」

相手の驚く声が聞こえる。それもそうだろう。なにせ、打ち出した剣が衝突した瞬間、横に滑らされたのだから。

やったことは簡単だ。マナで固めた掌で受け止め、そのベクトルを横に向けた。

そのまま剣を流され、相手はバランスを崩す。空振りに等しい勢いで、相手の重心の崩れる。

同時に、一歩前に出て掌底の一撃を胸元に突き出す。

だけど、そこに敵の姿は無かった。

「ハッ！」

右側面から、声。混乱する思考を抑えつけ、声のした方向へと腕を突き出す。

同時に、交差した防御の腕に衝撃が走るのを感じた

（逸らされると同時、横に飛んでいたのか！）

あのままではやられると見て、咄嗟に横へと飛んだのだろう。

大した反射神経だ。技術は熟達していなくても、反射神経は常軌を逸している。

まるで大気をそのまま感じ取っているかのようだ。

だけど、速いだけの一撃に当たってやる謂れはない。マナで固めた両腕を交差して、正面から受け止める。

そのまま。間近で、相手の正体を確認する。

（ 女！？ ）

ああ、確かにそうだ気合の声は女の声だった。

そして、目の前に見える体躯。つか胸でけー。

それに、さきほどの指もそうだ。白い、汚れない手。

しかし、女なのになんだこの馬鹿力は。

(このままじゃ押し切られる)

それを待つほど僕も馬鹿じゃない。

考えるのと行動は同じ。まずは、押されるままに、下へとしゃがみこむ。

「なっ!？」

押していたところを引かれた相手の、バランスが崩れたのを確認。

自分の重心位置と同じ高さならともかく、下に剣を引っ張られればその分バランスは崩れるのは必然だ。

その隙をついて、足払いを一撃。

劣化・転泡。

本来ならば、水の精霊術を応用した一撃。だけど無い今は、ただの足払いにすぎない。

だけど崩した上での一撃ならば十分にすぎる。しかし、手応えは返ってこず。

相手がいないのだから仕方がない。また尋常ならざる反射神経でバツクステップ、こちらの足払いを回避したのだ。

（勘もいい、な！）

不意をついているはずだけど、その尽くが外れる。おそらくは、戦闘経験が豊富なんだろう。

と、考えているところに手が突き出された。

赤い炎がみるみる内に広がっていく。

「フレアボム！」

「うあっ！？」

そして、紅蓮が集うと同時に大気もろとも爆裂した。

ガードが間に合わず、後ろへと吹き飛ばされる。

（来る！？）

マナの増幅を確認した。

「穿て、旋風」

詠唱する声も聞こえる。

開いた距離と、こっちの足払いによる硬直時間。

体勢の立て直しの時間差を利用して”決め”の詠唱術を叩きこむつもりだろう。

そのマナの量は凄まじく、これを受ければひとたまりもない。

（だけど、それは悪手だろ！）

距離は離れている

だが、それがどうした。

気付かれないように内申でほくそ笑む。指摘してやる義理もない。

ただ一步踏み込み、拳にこめたマナを前へと放つ。

「魔神拳！」

「なっ?!」

拳術においては、基本も基本の遠距離技。それはただ、拳に溜めたマナを前方に放つというもの。

だけど、遠距離攻撃はいつだって重要だ。知らない相手こそ、不意をつける。

変わらず、虚をつかれたで相手に魔神剣が直撃。

ゲート
霊力野にマナを割いていたのか、防護のマナが薄い。威力に押され、相手が仰け反った。

（ チャンス! ）

この隙を逃す手などない。後ろ足を渾身に踏み出した。超低空での、前方への跳躍。そのまま着地すると同時に踏ん張った。

足元にある液体が滑る。そのまま床と足の底の摩擦係数はほぼゼロとなった。

しかして前へ踏み出したベクトルは消えず、僕は”踏ん張ったまま前へと進む”という奇妙な体勢になる。

だけど、これがいい。

（これなら距離を詰めたまま、マナの防御を^{マジックガード}発動できる）

例えさきほどのような、無詠唱の精霊術 魔技と呼ばれる。
それを撃たれても、ガードで防げる。

そうして、距離を詰めた後に一気に決める。だからここで、例えばどんな攻撃が来ようと防いだ上で反撃を決めてくれる。

だけど、その考えは甘かった。

「イ、フリートオッ！」

ガードなど関係ないとばかりに。

炎の人のようなものから放たれた暴虐の炎熱波が、目の前を覆いつくした。

「???? side」

今日、3度目のイフリートの一撃。燃え盛る火炎が、衛兵だろう相手の身体を包んでいく。

（…………手強かった、な）

剣を下ろし、ひとりごちる。ここは何というところ魔境か。

まず、一人目。隣の部屋に居た女も強かった。かなりのマナを使われ、最後の一撃には手傷を負わされた

この二人目はそれすらも上回っているが。

このような強者を二人も警備に回しているとは。ここは、それほど重要なものを隠しているのだろうか。

実際に 国の研究所で、というのは初めてだ。黒匣^{シン}がこんなところで開発されているとは、今までにない。

ウンディーネの助言に従い、万が一を考えて裏から潜入を行ったのは正しかったということか。

いつものように正面突破をしていれば、無駄にマナを消費する戦闘を続けた後ならば、もしかすればマナが尽きて四大を使役することが出来ずにやられていたかもしれない。

特に目の前の少年は異様にすぎる。敵意なき戦意と言えはいいのだろうか。だけど純粋な戦闘能力で言えば今までに戦った誰よりも上だ。

殺気は無かったが、見せつけられたマナの黒さは、人にとっては珍しい程に深かった。

体術も十二分に練られていた。身体能力強化はあるが、それに頼りきらない技術。剣技ではない、道具も使わない相手がこれ程に厄介だったとは。

全身を駆使して打倒すべく襲い来る者。道具で補う”あの組織”とは全く違う方向性だ。いや、人間とは面白いものだと思わされる。

（しかし、危なかったな）

奇襲からの一連の動きは今までに見たことがない程に鋭かった。

随所で見せつけられた技術は、心底肝を冷やさせられたものだ。

(だけど、これで……………!?)

終わった、と。あの一撃を受けて、耐え切った者などいないがゆえに。思い込んだ心を、修正するしかない事態を目の当たりにした。

剣を握り直し、勝ったつもりになっていた心を叩く。そして再び気持ちを引き締め直した。

何故ならば。

「い、ふりーと? え、なに、四大精霊……………え、偽物? でもこの威力は……………って熱い!!!」

少年は、口に巻かれていたハンカチが燃えただけ。大きなダメージもなく、依然にかわりなくそこに立っているのだから。

「??? side out」

急激に頭が冷えた。

イフリート。炎を司る大精霊。20年前にいなくなったとされる、四大の一。

（おーけー、まずは落ち着こう）

下に投げたハンカチ、燃えている部分を踏みつけて消す。

そして、目の前の人物を改めて見る。

（ 違うな ）

衛兵の類じゃない。

目の前の女の瞳は、僕にも分かるぐらいに 澄み切っている。

間違えても、こんな研究に協力するような人物じゃあない。

と、そこで思いついたままに質問する。

「アンタも、侵入者か？」

「……………も？ どういうことだ、お前はここを守る兵士ではないのか」

「違う」

とは言っても、一概には信じられないのだろう。油断せず、剣を構えなおした。

「どう言えばいいか……………」

取り敢えず両手を上げて降参の意志を示す。

頭が冷えた。否、急速冷凍された今は、無闇矢鱈に拳を振る
いたくはない。

敵でない女性を殴るのは、趣味じゃないからだ。

でも、相手はやる気満々だ。それもそうだろう。いきなり殴りか
られたのだから。

途中にいきなり“違う”と言われても、納得はできない。

「…………一応聞いておく。お前は侵入者じゃないのか？ ならば、何
故こんなところに居る」

「教授を助けに。でも」

と、割れたガラスケースのようなものを見ながら、言う。

「来るのが遅かった。溶けちまったよ、全部。身体ごと持ってい
れちまった」

思い返す度に、得体のしれない感情が沸き上がってくる。

悲しみか、あるいはもっと別のものか。

そうしていると、女性は一剣を下ろした。

（ え、もう？ ）

まさか、今だけのやり取りで信じてくれるとは。

と、その時の僕は間抜けな顔をしていたのだろう。女性はため息をつきながら言う。

「……………嘘は言っていないと判断した。その教授とやらも、気の毒だったな」

何というか、凜とした声。同情ではないことに感謝した。

「それで、これからどうする？ もう目的は果たせないだろう。出口ならば、この先に良い抜け穴があるが」

「僕もそこから来た。というか、街灯樹消したり、水の上に足場を作ったのはアンタだよな？」

問いに、女性は頷いた。

「そうか………なら一緒に行かないか」

「一緒に、だと？」

「ああ。教授をこんなにした、この研究の目的を知りたい」

思い出しただけで頭が痛くなる。それに、奥さんと娘さんに一体何と言えいいのか。

少なからず面識のある女性だ。悲しみに歪むであろう顔を幻視すると気が滅入る。

だから、せめて詳細を。話せない内容かもしれないが、このまま逃げることはできない。

また別の意図があることも確かだけど。

「それで、知った上でどうする？ 有用ならば利用するのか」

「いや、ぶっ壊す」

即答する。

と、女性は目をきょとんとさせた。

（つーか美人だな、おい）

落ち着いて見てみる。で、結論。

（何この人パネエ）

アグレッシブな髪型をしているけど、それは彼女の魅力を損ねるものではない。むしろ何か似合ってる。

つーかスタイルがパネエっす。レイアやナディアとは明らかに違う、実に豊かな山麓をお持ちで。

「ぶしつけな視線を感じるが………おいておこう。それより、何故壊すことを選ぶ？」

「趣味じゃねーから。あと、これでも医者 endpoint 端くれなんで」

人を傷つける研究なら、それを無くするのが医師たる者の役割。

とくべつ今更、正義感を振りかざす気はない。だけど、それでも人体実験で無差別に殺すという行為は認められない。

「趣味じゃない、か」

「嘘じゃないよ？ ぶっ壊す。踏んづけて踏みにじって、開発者までぶっ飛ばす」

「疑ってはいない。だが………君は面白いな」

「アンタみたいな人に言われるとはね」

四大を使役するこんなけつたいな美人に、苦笑まじりで変な人呼ばわりされるってどーよ。

（まあ、全てが“本音”ってことでもないけど）

意図はある。仇をうつこと。そして、僕の夢を ぶっ潰してくれたこと。

殺しても飽きたらない。でも、他に道が見えたのでその憎悪は保留する。

でも、まあ、この場においては。

まずは 証拠を示せと言われる前に、示してみるのが最善。

（都合よく、衛兵さんもやってきたことだし）

足音が部屋の中に来る前に、左手で顔を隠す。

片手が不自由になるが、この程度のレベルならばそれすらハンデに
ならん。

「いつちよ強行突破と行きますかね」

「そうすることにしよう。それで、君の名前は？ 私は、

ミラ・マクスウェル」

剣を入り口の方に構えた女性。ミラが、横目で名前を聞いてくる。

同じく、こつちも構えながら横目で視線を受け止め、答える。

「ジュード・マティス。でも、ここ脱出するまでは呼ばないで」

そこで思考が止まった。

え、なに。ミラって良い名前ですね、って違う!!

「マクスウェル!？」

「声が大きい! それより、来るぞ少年!」

見れば、衛兵の団体さんが部屋の中へと押しかけてくる。

対する僕達は、一歩前に出て応戦を始めた。

思えば、この時は露程にも予想していなかった。

この奇妙で猪突猛進なお姫様と。この先長きに渡るあいだ、共闘することになるとは。

5話 「未来発心」(後書き)

題名候補のひとつ。ボツネタ。ある意味NG的な？

エクシリアというタイトル名は、天文学的な数を意味する英語、「zillion」より多く、という意味と。交差する、という意味をこめて「xillion」(エクシリオン)で、エクシリアになったという。

では、それが例えば「million」だったらどうか。

テイルズオブミリオネア？

ローエン「ファイナルアンサー？」

ジュード「ファイナルアンサー！」

ローエン「……………」

ジュード「……………」

ローエン「……………」

ジュード」……………」

ローエン「……………グランドフィナーレ!!」

ジュード「ぐああああ!!?」

ローエン「金は命より重い……………ゆえに、失敗は死と心得るがよいでしょう!」

以上。勢いで。金の重みを知るRPG。

つつーかこの爺さんって無職歴が長すぎね?

使用人になるまで、かなり時間が空いていたような気が。

昔は金に苦勞してそう。年金も無いだろうし。

6話 「賢者の槍」

取り敢えず狭い部屋を強引に脱出。途中で相手の仮面をはぎ取り、装着。

これで正体不明のアンノウン誕生。我が名は不審者Aなり。人々よ、我が拳に頭を垂れる。

そのまま1階へと降りると、増援とかち合った。数は30程度。

迂回した衛兵が後ろから来たせいで、はさみうちになる。それほど広くない通路で囲まれてしまった。

けど、そんなの関係ねえ。

数で潰そうとしているようだけど ゼロに何をかけてもゼロだ。

だけど、後ろから小突かれるのは鬱陶しい。

後ろを向きながら、僕は提案する。

「僕は後ろの方を」

「ふむ、私は前ということだな。ああ、後ろから襲ってはくれるなよ?。」

「そつちこそ。それより、まさか　ひとりじゃ無理なんて言わないよな？」

「問題ない。君の方こそ、ひとりで大丈夫なのか？」

「こんなの物の数じゃない」

アナタ程の手練ならまだしも、この程度の的など脅威ですらない。

ああ、これは誤字じゃない。正しく、まこと的だ。

「貴様らあ！」

「侵入者風情が侮ってくれたな！」

「ワン！」

一般衛兵プラス雑魚魔獣さんが怒ってる。

けど、何でだろう。

（本当のことを言っているのに怒るとは、人間がなつとらんですよ）

この犬も犬で、それなりの速度持ってたから機先を制するべきだろうに。

彼我の力量差を全く把握できていないのか、まったく。

そんなことを言っているから こうなる。

「な!？」

前へ、ステップ2つで一氣に間合いへと踏み込む。予想外の行動だったのか、馬鹿の動きが止まった。

「獅子戦吼!」

まず僕の獅子が飛ぶ。吹き飛ばされた前衛の衛士が、後方の衛士を巻き込んで吹き飛んでいった。

「ウンディーネ!」

後方で、激流が飛んだ。後ろも同様の惨状が広がっている。

（つてこのマクスウェル子さん遠慮が無いっす）

互いの持ち技確認しあう暇がなかったから、何使えるか分からないけど……………この人マジで四大を操れんのな。

さすがはマクスウェルってこのなのか？

考えながらも取り敢えずは目の前の雑魚を殴って蹴って投げる。

「グボオウア!？」

「一撃!？」

「ちょ、はや」

「どうしろってんだ　　?！」

「ウボア！」

「応援を、応援を　　！」

「やめて　　！」

「キャイン！」

軟弱な衛兵と魔獣が仲良く悲鳴を上げて気絶していく。

殺しはしない。でも、手加減なんかしない。まとめて地面を舐めてもらう。

ここでどのような研究が行われてて、自分たちが何を守っていたのか。知らないと言われても、納得できるはずもない。

さっき発散できずに溜まった憎悪。あんたらで、晴らさせてもらう。

「っ、遠くからの精霊術なら

「魔神拳！」っ、いやあ!？」

拳から発したマナの塊で、前衛もろとも術師を吹き飛ばす。その程度の精霊術なら当たってもそれほど痛くないし、

意味はないんだけど

ム力つくから優先して叩く。

と、背後にまた強大なマナを感知。

「シルフ！」

風の塊が”障害物”をなぎ倒していく。

というか、マナが大きすぎるから、そっちの方に驚いてしまう。

（四大を統括する精霊にして偉大なる大精霊、マクスウェル様か）

実際に眼で見る前なら、一笑に付していただろう。でも、あのマナと四大を使役する姿を見せられたら、納得せざるをえない。

（それにあの傍若無人っぷりも。あんなに容赦なく人を薙ぎ倒せるような女性なんて、他に知らない）
……あれ、結構いるね？

取り合えず3人の顔が浮かび上がった。それが誰かは、あえて言うまい。

（って、なんだ。女性ってそういうものだよね）

別のベクトルだけど、理不尽の塊だよね。

女性（笑）ってつきそうだなね。師匠以外は。

「……いま、なにか不愉快なものを感じたのだから？」

前方の的を全て倒したのだろう。振り返って、そんなこと言うてくるミラ女史様。

そういう妙な所で勘に鋭いのもマクスウェル様の特権か……いや、師匠もレイアもそうだったな。ナディアも。

「つまりは普通の女性 っと、これでラスト！」

お茶をにごした返事をしながら、最後の的を殴り倒す。

腹を打たれた最後の衛兵は、打たれた箇所を抑えながら地面へと倒れこむ。

「うし、これで取り敢えずは状況クリア。あとは研究所の奥まで前進あるのみだね」

「……………そうだな。いや、戦闘せずに済んで良かったよ」

お互いにね。力量差はほとんどないから、どう考えても手加減抜き
の殺し合いになってたし。

「取り敢えずは増援が来た方に進みますか」

増援倒した奥のドア。開くと、またおかわりの増援の一団が襲ってきた。

でも特別強い個体がいるわけでもなし、さっきと同じようにボコにして適当に片していく。

「で、はいしゅーりょー」

「……………分かつてはいたが、君は本当に容赦ないな」

「ノームでなぎ倒すマクスウェルさんには言われたくないねー」

「固まっている団体を鋭い回し蹴りでなぎ倒す君にも言われたくはないが？」

「僕はあくまで常識的な範疇でしょ。ていうか、本当にマクスウェル？ いや、あれ見せられたから納得せざるをえないんだけど」

「私はマクスウェルだ。それよりも、君は……………何故、精霊術を使わない？」

あー。

やっぱ、そう来ますか。

「非力な人間の身でも、君は上位の部類に立つほどの腕だろう。それほどの腕を持つ人間なら、戦闘に精霊術を戦闘に盛り込んでいると思ったのだが？」

「……………それは、まあ」

つて……………正直に、答えてもなあ。

まず、信じないだろう。なにせ相手は4大の上位。嘘を言っていると思われるのがオチだ。

というより、初対面の相手に誰であろうが、『私は精霊術を使えません』なんて言いたくない。

それに、相手はこっちを完全に信用してない。変な事を言えば、怪しまれるかもしれない。ここでまたガチの殺し合いはごめんである。

（精霊術のこと、使えないこと……………その原因に心当たりがないかを、大精霊に聞きたいんだけど）

この場でいきなり聞けるようなことでもない。さっきのやり取りと今のこの距離を見て分かるように、マクスウェル子さんはこっちをまだ疑っている。

それはまあ、当たり前なんだけど。でも、だからこそこの場でつかつな事は言えない。逃げられたりしても困る。

これを逃せば、ひょっとすれば二度と会えないかもしれないのだから。なんせマクスウェルが人間の形を取っているなんて、はじめて聞いたし、見た。」

きつと普段は存在しないとか、未踏の秘境に閉じこもっているのに違いない。ここは慎重にならねば。落ち着いてからでも遅くはない。もしかすれば偽物かもしれない。天才精霊術師とかで、4大をそれぞれ召喚できる人間であるかもしれないし。」

「ふむ、どうした？」

だから、差し障りない範囲で言い訳をするのが吉か。

「精霊術は苦手なんだよ。それよりも相手を殴る方が上手だから」

「殴る方が……それは、なんとなく君らしいな」

「……ノーコメントで」

納得はええな、おい。まー誤魔化せたからいいか。

「では医療術を使えないのも」

「……あー、あー、聞こえないー」

なんとか。なんとか、踏みとどまる。知らないから聞いているだけだろうし、あくそム力つくけど。

ム力つくけど、我慢する。だってそれは当然のことなんだから。医学生でも、医の道を志すものが医療術を使える、なんて当たり前のことなんだ。

……いや、話題を変えよう。このまま行くとまた戦わなければならぬ事態になるような気がする。

具体的には喧嘩を売ってしまいそう。

「えーっと。それよりさっきのカードキーなんだけど」

唐突に「使い方は分かるか」とか聞いてきたけど、マクスウェル特製の万能鍵とかあるのだろうか。

聞いてみると、マクスウェルさんは首を横に振った。

「そんなものはないさ。これは、君と戦う前にやり合った手練の衛兵が持っていたものでな。戦った時に落としていったので、拝借した。卓越した火の精霊術を使う奴だったよ。女にしては口が悪かったのが印象的だったな」

「えっと……もしかして銀髪？ ソバカス？」

「その通りだが、もしかして知り合いなのか？」

ちよつと警戒の意志を感じる。

だから、断言した。そこいらの衛兵なら、警戒するに値しない。

そんなもつて　銀髪でソバカスで火の精霊術強い奴なんて、一人しか思い当たらない。

「いやあ　あいつは敵です、誰よりも。で、殺したとか言わないよね」

「……………最後には撃ち合いになつてな。あちらはイフリートを受けとめたようだが、威力は殺せなかったようだ。そのまま出口から吹っ飛んでいったよ。『ぶつ殺す、必ずだ！』とは叫んでいたから、死んではいないだろうが」

「あー」

うあ、かなり物騒だな。でもあの貧乳らしいというかなんというか。

（それより、やっぱりここに居やがったか）

何を企んでやがるのか。

で、そんな事を考えているとマクスウェルさんが念押しに聞いてくる。

「本当に、友人ではないのだな？」

「むしろ宿敵かなあ」

譲るものなど一つもない、真正正銘の敵。そう説明すると、マクスウェルさんはそうかとだけ返してきた。

興味ないといった感じだ。冷たいというよりは、超然とした。

それでいて何処か歪なものを感ずるのは、彼女が人の形をしているからか。

つて、今は考えている場合じゃない。

（それより、リアルオーブを使いこなせてないなあ）

見る限り、リアルオーブの補助は満足に得られていないようだ。オーブの発光が薄いし、感じられる力も弱い。それでもこの速さでののは恐ろしいけど。

でも、剣術に関しては完ぺき素人だな。剣速は速い、間合いも理解できているけど、ただそれだけ。

剣筋に工夫が見られない。切り返しの時の腕と手首の使い方を見ていれば分かる。あれは腕力にものを言わせた剣そのものだ。

それでも生き残れたのは……圧倒的な身体能力と精霊の補助、あとは戦闘経験のおかげか。自分より圧倒的に強い相手と戦ってきたことはないを見た。

それに、メインとしていたのは恐らく精霊術。あの威力を見れば、

納得もできるけど。

「ふむ、恐らくここだな」

ようやく、到着らしい。何やら難しい顔で、左の通路にあるドアを睨んでいる。

「えっと、この先が？」

「目的地だ。あれの気配がする」

言っと、警戒も無しにマクスウェルはドアを開いた。

「……………でけえ」

最初に抱いた感想はそれだった。入り口からかかる橋の先にある、広大な空間の中央に座する台座。

その上にあつて。その場所を支配するように、”それ”は鎮座していた。

「やはりか………黒匣^{ジン}の兵器」

「ん？」

何事かつぶやいたようだが、聞こえなかった。

だけど、その声質は分かる。

この声は、敵に対する者に向けるものだ。

ともあれ、調べてみるに限る。壊すのはその後だ。

もしかすれば、ハウス教授が戻ってくるかもしれない。

そう思つてこの大掛かりな装置らしきものを操作するパネルをいじっていると、名前が出てきた。

「クルスニク賢者の槍……………」

クルスニク。確か、創世記の賢者の名前だ。

「つてえ！？」

ふと、背後に強大なマナを感じた。

振り返れば、マクスウェルが精霊術を使うための方陣を組んでいる。

「何を！？」

「クルスニクを冠するとは　　これが、人の皮肉と言うものか」

声には怒りがこめられていた。

激昂ではない。静かな憤怒が、彼女の声の底と瞳の奥で燃え盛っている。

「やるぞ！ 人と精霊に害為すこれを、破壊する！」

「っ、四大を全部、まとめて召喚！？」

イフリート、ウンディーネ、シルフにノーム。

具現化できるほどに集められた、4代の系統の長。

それぞれが、命じられるままに、破壊すると宣言した槍の周囲に展開していく。

「マクスウェル………！！」

ここに、確信を得た。

コレほどの規模、これだけのマナを制御しきるとは、ただの人間で

は有り得ない！

「はあああああつ！」

四方に展開した四大。それを四半点として、宙空に円の方陣が組まれる。

円の中央には、わずかに紫。かつ強大な、見たことのない程のマナの塊が集中していく。

だが。

「許さない……………つつざいんだよ!」

聞き覚えのある声が、装置の所から。

「ナディア!？」

「っ、ジュード!?　なんでデメエがここに……………!」

驚いているようだ。視線をこつちと、精霊術を行使しようとしているミラとを、交互に行き交う。

次の瞬間、その顔は火山のように赤く、怒りを持つそれに変わった。

「お前らまとめて死んじまえ!!」

「何を!？」

止める暇もない。何故か狂うかのように顔を歪めたナディアは、装置のすぐ横にある、操作パネルをいじりだした。

まもなくして、槍のような巨大な兵器の先端が開いた。光が溢れ、その槍のような先端の前に、フラスコを十字に組み立てたようなものが出てきて。

直後に、展開していた方陣を“マナごと吸い込んでいく”。

「マナが……吸われる!？」

「これは……!？」

こっちの体からも、マナが吸い込まれていく。

全身から、何か大切なものがどんどん無くなっていく。

「^{ゲート}靈力野に作用して……………」

言おうとして止める。そんなはずがない。

もし、そうならば。

^{ゲート}靈力野が無い僕から、マナを吸えるはずがない。

「バカ者、正気か！？ お前もただでは済まないぞ！」

隣からは、マクスウエルの叫ぶ声がする。

そうだ。こんな距離にいて、あいつも巻き込まれないはずがない。

四大も封じ込める、こんな馬鹿げた性能を持つ規格外の兵器だ。ひ
とりだけ無効化なんて、できるはずもない。

(……………いや、ちょっと待て)

「アハ、アハハハ！ みんな、まとめて死んじまえ！」

狂った笑い声。いや、それはいい。こいつは時たまこういう笑いを
する。

（だけど、ちょっと、待ちやがれよ）

こいつ、マナのことを知ってやがる。装置のことも。

この女^{アマ}ア、もしかして………！

「く、マナの使い過ぎか………このままでは………！」

膝をつくマクスウェル。だけど、そんなの知ったこっちゃねえ。

僕は、聞きたい事を叫んだ。

「ナディアアアアアアッ！！」

「はっ、なんだい糞野郎！」

殺気を、乗せられるだけ声に載せて。偽ることは許さないと、問う。

「ハウス教授を殺ったの、テメエかあ！？」

「ッッ！？」

見られたのは、驚いた顔。

「っ判断つかねえ……どっちにせよ、これ止めてからだ！！」

どうやれば止まるのか。考え、正面を見ればマクスウェルがよろけながら前へと、装置に向かって歩を進めている。

（あれか！）

装置の鍵のようなものが見える。あれをどうにかすれば、装置は止まるかもしれない。

だけど、マクスウェルが膝をついた。

「くっ、こんな……所で！」

マナの使いすぎで、動けなくなったようだ。

それはそうだろう、僕とあいつと連戦して、その上で先ほどのような4大を召喚する馬鹿げた規模の精霊術を使ったのだ。

まだ人間の形を保っているのがさすがのマクスウェルと言った所だけど、さすがにこれ以上の無茶はできないらしい。

こっちも同様だ。

「阿保な兵器作りやがって……！！！」

吸い取られる速度が早過ぎる。体内のマナが制御できないから、体もうまく動かせない。

今から歩いて、あそこまでたどり着くのはかなり危険な賭けになっちまう。

でも、今ならば。

この場所からなら、なんとかなる。

背後までたどり着いた後、短いその名前を叫ぶ。

「ミラ！」

「っ、何だ！」

「足い上げる！」

「何を?! っ、そうか！」

中腰に構えて腕を組む体勢のこちらを見て、やりたいことを理解してくれたのだろう。

なんとか、といった調子で足を上げると、こちらに全体重を載せてきた。

これで、用意はできた。あとは

「いつせーの」

「今だ!!」

跳躍に合わせ、腕を思いっきり持ち上げる。

直後、ミラは宙へと飛んだ。そのまま、パネルの上にある物体をつかむ。

「くつつ!!」

だけど、何かの反発を受けているようで、あと一步で届かない。

そして、僕の足の下から、光るリングが出てきて、それが体を拘束する。

「くそ……………」

体も動かない。見れば、ミラも同じように動きを封じ込められている。

（ …… 終われるか、こんな所で……………っ！？ ）

かくなる上は、命を賭しても。と、考えた時、脳の奥の何かがはじけて声が聞こえた。

兵器の音も聞こえない。自分の鼓動の音も聞こえない。

正真正銘の静寂の中、声は言う。

『に……げ……』

(っー？)

誰だ、と問う前にそいつは言葉を続けた。

『さ……ち……ら……使……』

『あ……子……そばを……離……ど……』

(これは……四大精霊！？)

少年のような声に、トボけた男の声。凜とした男女性の声が聞こえる。

そして最後に、男の声はこう告げた。

『ミ……を……連……逃……ろ！』

直後、四大の周囲から風が生まれた。突風が室内を吹き荒れ、そのまま僕は後ろへとすっ飛ばされ、入り口前にある橋まで転がる。

「四大が！？」

兵器の中へと吸い込まれていく。

直後、ミラはまた立ち上がった。

拘束を力任せに引きちぎり、マナの吸収をもねじ伏せ、パネルの上にある円筒状の“それ”に手を伸ばす。

（ ）

心の中が真っ白になる。辛いはずだ。今にも倒れたいだろう。

なのにマクスウェルは、ミラ「マクスウェルは膝をついたままではない。

賢明に立ち上がって、やがては

「う、あっ!!」

装置の部品らしき円筒状の何かを、声と共に引きぬいた。同時に、装置が止まる。

しかし直後に、また突風が部屋を蹂躪する。

ミラは完全に油断していたのか、その体を吹き飛ばされ、さきほどの僕と同じように橋の上に倒れる。

「っ、足場が!？」

二度の突風に、振動。足場は耐え切れなかっただろう。音を立てて橋の継ぎ目が外れていく。

気づいた僕は、とっさに崩れ行く足場を蹴って跳躍し、通路の上まで避難する。

ミラも体を起こし、尻餅をついたまま手に精霊術の陣を展開させた。色は緑だ。シルフを呼んでどうにかするつもりだろうと思ったのだが

「っ!？」

だけど、その陣はすぐに霧散して無くなった。

「ちよっ」

そして、驚く暇もない。足場は完全に崩れ、ミラも一緒に落ちていく。

金の髪が、翻って下に落ちていくようにして。

「
っ!」

気づけば、僕は跳躍していた。

「君は、何を……!?!」

「手え伸ばせえ!!」

怒鳴り声に反応したのか、ミラが手を伸ばす。

掴み、引き寄せると同時に、こちらに向かって降ってきていた足場の板材を蹴り飛ばし。

「厄日かちくしょおおおお!!」

僕とミラは、そのまま下へと落ちていった。

7話 「脱出」

「ぷはっ！」

ミラを抱えて、水から上がる。そのまま、かぶっていた面を取り、抱えていたミラを引き上げる。

ああもっ、ただでさえ服が重くてきついつてのに、こいつは！

「げほっ、げほっ……………く、助かったぞ」

礼を言ってくるが、かなり苦しそうだ。

それも仕方ないだろう。まともに水を飲んでたからな。

いや、しかし焦った。川に落ちた直後にまた精霊術を使おうとして、落ちる前と同じに術は発動しなくて。

ミラは、それに驚いたせいか盛大に口から気泡を吐き出したのだ。危うく溺死する所だった。

「ってーより、何で泳げないんだよ精霊の主……………」

まさかあそこまで泳げないとは思ってなかったぞ。

そんなお騒がせな精霊の主は、落ち着いてからこっちを見てばやく。

「流石に、ウンディーネのようにはいかないものだな」

「いや、当たり前だろ人間なんだから……………ん？」

ちよつと待て。考える暇無かったからあれだけど、ミラって人間だよな。

なんで精霊の主様が人間？ 大精霊ってのは、あの四大のようにそれぞれの系統の精霊が集まって形をなすものじゃあ。

いやでも人間の精霊ってなんだろう。

悩む僕をよそに、ミラは呼吸を整えられたようだ。

息を吐いたあと、こちらを向いて言う。

「ふう……………助かったぞジュード。いつもはもつと泳げるはずなんだが……………」

「いつもはもつと？ ………………もしかして、通常はは四大の力を借りて体を動かしているのか」

「あくまで補助だな。水の中でも、空を飛んで移動する時にも四大の力を使っている」

「まじですか」

ていうか、空を自由に飛べんのか。うわ、乗せてもらいたい。

っつーかこの服で飛んだら下からのナイスアングルがパンモロ！

(…………じゃ、なくて)

止まれよ本能。問題はそこじゃない。今考えるべきは、何故四大の力が使えなくなったのかだ。

そういえば突風が吹いた後、あの槍の中に四大が吸い込まれたように見えた。

大きい気配が消えた感じも。と、いうことは もしかして、あれは目の錯覚じゃなかったのか。

「なあ…………ミラ？」

「…………ああ。四大の力を感じない…………あの装置のせいだろうな」
ミラも見えていたようだ。同意しながら立ち上がると、濡れた髪を横に振る。

いや冷てーな、おい。

「…………ふむ」

ジト目で睨む僕をよそに、彼女はじつと正面を見据えている。視線の先は研究所の方だ。

いや、まさか研究所に再突入はしないと思うけど……何やら心配だなこのマクスウェル子さん。

「分かっているとは思うけど……四大の力が無いと、あの槍は到底壊せそうにないぞ」

「それは、そうだな」

返事をしながら、また考えむ。

いや、僕もあの兵器を壊す方法を考えるべきか。まさか地道にどかりどかりと殴って壊すわけにもいかんだろうし。

その前に拳の方がいかれる。

そうして、しばらくした後。ミラは思いついたように顔を上げて、何事かを呟いた。

「あいつらの力、か……そうだ、ニ・アケリアに戻ればあるいは」

と、納得したように頷くミラ。

すぐさま振り返ると、こちらの目をまっすぐに見てくる。

その目に、落胆の色は毛程にも無かった。

「世話をかけたな、ジュード。手助け、感謝する……………それではな。君は家に帰るといい」

「あ、ああ……………」

すっぱりな感謝の言葉に、返事をして。

階段を登って、去っていく彼女の背中を見ていた。後ろ姿も綺麗だが、考えるべきなのは、そこじゃない。

(……………なんだ、この感覚は)

違和感、という程にはつきりとしてもものではない。だけど、今のあの瞳は何だ。

かなり大きな失敗をしたというのに、欠片ほどにも、気落ちした様子が見られない。

(……………迷いのない瞳は、綺麗だ。だけど、あれは何か違う)

これは彼女が精霊の主だからか。いや、もっと根本的な所でマクスウェルの”あれ”は違う。

立ち直りが早過ぎるとか、そういうレベルにない。

あの意志の強さには、どこか狂気を感じさせられる。

先ほどの瞳を思い返すと、どこか寒気を覚えるような。

そんな時、階段の先から何か声が聞こえた。

「これは、悲鳴？」

階段の上から、女性の悲鳴が。

って、おい。

「ずいぶんと、聞き覚えのある声だったなあ、畜生！」

その方向へ走る。で、階段を登った先にあるのは、研究所前の広場だ。

そこには、ミラと 衛兵がいた。

ミラは剣を、衛兵は長い棒を。互いに武器を構え、戦闘に入っている。

（一対四か）

数にして4倍の兵力を持つ衛兵は、ミラを囲むような陣形を取っている。対するミラは 足を怪我していた。

痛みに顔をしかめながら、足をひきずるようにして、何とかといった調子で応戦している。

（逃がさないように、か）

衛兵の目論見は、恐らくそれだ。どうあっても逃げられないように、まずはミラの機動力を封じたのだろ。上からは捕縛でも命じられているのか。

他に外傷が無い所を見れば、その推測は正しいように思える。

しかし、ミラは何故にそんな一撃を食らったのか。どう見ても研究所の中に居た衛兵と同レベルだ。

まともに食らったとして、そんなにダメージを受けるような強さじゃない。

その疑問の答えは、すぐに分かった。

「はあっ！」

ミラは、足をひきずりながら間合いに入った衛兵に剣を振る。

否。剣に、振り回されていた。

まるでか弱い女性のように、剣の重さに振り回されている。

剣速はお粗末にも程がある。最底辺の傭兵のレベルにも達していない。当然に剣は防がれ、ミラは衛兵の反撃を食らう。

「……………あー、そういうことね」

四大の恩恵は無くなって。

つまりは、これが彼女の素の実力ということだ。

そうしている内にも、また衛兵の数は増えていく。

対するミラは

足音に気付いたのか、こちらをちらりと見た。

整った顔立ち。綺麗な瞳が、まっすぐとこちらを捕らえて。

しかし、直後に視線は逸らされた。

彼女は、先ほどまで共同戦線を組んでいたこちらに、しかし何も言葉を発さず。

おそらくは本格的に巻き込んでしまうことを避けるために、声をかけず。ただ無言で、敵のいる正面に向き直った。

一言も。

弱音も。

助けも、乞わないで。

ただ、自分の力のみで状況を打破せんと、剣を構える。

僕はそれを見て

ため息が出た。

研究所で対峙した時を思い返すに、彼女の戦闘経験はかなりのものだろう。

それゆえに、自分と敵との現時点での実力差も、この絶望的な戦況も理解していると見ていい。

それでも、僕を巻き込まず、ただ一人で戦おうとしている。

その背中が、眩しい程に気高くて。

「あー、うー、もー！」

訳のわからない感情と共に、頭をかきむしる。

「だらっしゅあぁっ！！」

そして、前へと走った。

「貴様　　なっ！？」

「セイヤっ！！」

まず、先頭にいる衛士を一撃。腹に拳を叩きこんで、その場に昏倒させる。

「何者」

と、相手側は突然の乱入者に驚き、戸惑っているようだが、なんにもかもが遅い。

殴った衛士が倒れるより先に、ワンステップで踏み込み。

二人が固まっている場所、その中間の位置にステップイン。

右の前回し蹴りで一人目を、続く左後回し蹴りで二人目を蹴り倒し。

「魔神拳！」

正面、直線上に居た二人を魔神拳でなぎ倒す。

残すは後方にいる3人のみ。だけど、こいつらに構っている暇はない。

そのまま振り返ると、ミラへと近づく。

「ジュード!?!」

「いいから、こっちだ!」

何か言おうとするミラの腕を引っ張る。

「痛っ！」

「くそ、背中に乗れ！」

足の怪我を思い出し、咄嗟に背中を出した。

ミラは一瞬だけ戸惑ったようだが、背中に乗ってくる。

僕はそのままミラを背負い、啞然とする衛兵をその場に残して撤退を開始した。

「ジュード！」

「名前はやめて欲しいなあ！」

いや、さっき研究所でナディアに叫ばれたからもう無理か。

「君は……いいのか？　このままじゃお尋ね者になるぞ！」

「いいから、全部後だ！　このまま海停から船に乗って、ア・ジュールに脱出する！」

「ごちゃごちゃと背中から聞こえる声を無視する。それに、あいつらは倒すべき敵で教授の仇だ。殴っても何も問題はない。」

だが、一人では流石に如何ともしがたい。ここは脱出すべきだろう。このまま、ラ・シュガル国内に留まるのは、絶対にまずい。

あるいはここ、大都会であるイル・ファンの裏路地に潜伏することも考えた。だが、それは無謀だと言わざるをえない。

時期に出口となる場所は完全に封鎖されるだろう。

それは国の手が届く場所全てに言える。つまり、ラ・シュガルにある街は全てためなのである。

それに、このイル・ファンから陸路でたどりつける街は少なすぎる。

まさか、あの難攻不落のガンダラ要塞や、自然の要衝であるファイザバード沼野を抜けるわけにもいかない。

ああ、流石は天然の要害、”輝きし王都イル・ファン”ってか！

愚痴りながらも突っ走り続ける。

間もなく、広場の向こうにある海停の前まで辿りついた。

道中、通行人からの視線が痛かったがそんな視線には慣れている。

「ジュード、あれだ！」

「あれは しめた、イラート海停行きか！」

ア・ジュール所有の船だ。いざ船が出航してしまえば、ラ・シユガルには止められまい。その権限も無い。

このまま、走って飛び乗るか。そう考えた時、目の前に衛兵が立ちふさがった。

情報が速い、もうお尋ね者にされているのか。衛兵は、確信を持って進路に立ちふさがった。

止まれと叫んでいる。だけど、止まれと言われて止まるお尋ね者は居ない。

むしろ加速したまま跳躍し、衛兵たちの頭上を飛び越す。

しかし、相手も考えていたようだ。飛び越した先、予想着地点の周囲には、衛兵の団体さんが展開している。

殺気飛び越した奴らのせいで、見えなかったのだ。見れば、先ほどまでとは1ランク違う衛兵もいる。

「ちいつ!!」

宙空で舌打ちをする。一人ならどうともなるが、ミラを背負ったままでは無理だ。

だけど、留まる方が危険だ。国も、軍事機密を見た僕達にかける慈悲など無いだろう。

捕まれば、ともすれば問答無用で処刑される。

ならば、いつそ玉砕覚悟で突っ込むしかない。

そう思った時、横から何かが飛んできた。

次々に飛んでくるそれは、石のように小さい。

その礫のようなものが、待ち伏せしていた衛兵達に当たった。衛兵たち痛み体勢を崩す。

「行け、そのまま走れ!」

「っ、分かった!」

飛び込んできた若い男の声。見れば、20過ぎの男がいた。何やら洒落た格好をしている。

かなり胡散臭い風体だが、今は確認している隙がない。考えているよりも行動すべきだと判断し、着地直後に限界まで加速した。

乱入者の攻撃に怯んでいる衛兵達の、その脇を駆け抜ける。

「船が出るぞ！」

「いや、この距離なら！　しっかり掴まって！」

「ってえ、置いてくなって！」

マナを足に集め、強化。限界まで加速し、乗り場の門をくぐり抜ける。

「待て！」

後ろから衛兵の声が聞こえるが、無視。

「背負ったまま行けるか、無理なら代わるぞ！」

「こんな役得、譲るわけにはいかんでしょ！」

非常時にあれだけど、背中感触がごちそうさまです！

「……………役得？」

「よっしゃ口チャックだミラ！ 舌を噛むぞ！」

追求を誤魔化し、正面にある木のコンテナに飛び乗る。

その上を走り、更にクレーンに吊るされた木材に飛び乗り、最後に思いっきり船に向けて跳躍。

船の甲板の上に着地。

衝撃を膝で殺し、背中のミラへ伝わる衝撃をできる限り少なくする。

でも、衝撃を完全には殺せず、ミラの姿勢が前へと傾いてくる。

（凄まじい弾力でこわす！）

何処か別の世界の電波が飛んできた。

自重。

その隣では、一緒に飛び移った、先程助けた男が着地にミスったらしい。

勢いそのままにコンテナに頭から突っ込んで、もがいていた。

何という芸人。素でこれだけの事をやってのけるとは。

「ビューティフォー」

「いや、助けるよ!」

男のツッコミが、出航する船の甲板上に響きわたった。

間話 「暗躍者」

「様。マクスウェルが、ここイル・ファンから逃げ出したようです」

「……………そうか」

様付けで呼ばれた男。報告に來た兵士の上司は、何の感情も持たずただ現状だけを把握した。

「それで、四大精霊は？」

「あの槍に囚えられたとことです。担当の者が、マクスウェルで無い方の侵入者に倒されていたようですが、代わりとしてあの女が」

「……………ふん、取り敢えずは予定通りにいったか。それで、そのもう一人の侵入者は？」

「は。名前をジュード・マティスと。タリム医学校の医学生とのことで。処理したハウス教授の助手とのことでしたが……………どうしました？」

「……………いや。皮肉なものだと思ってなあ」

男は、何かを嘲笑う顔を浮かべた。口からは、押し殺した笑い声がこぼれ出ている。

「"マティス"……まさかあの腰抜けが今更出張ってきたことはないだろうが」

「あの、首領………？」

「なんでもない。それよりもマクスウェルの方は？」

「……精霊の里とやらに戻るでしょう。ジュード・マティスとあともう一人、こちらは我らの武器を使う者のようですが、如何致しましょう」

「放っておけ。既に盤石は成った」

「指名手配はせずとも？」

「ポーズは必要だ。だが、名は伏せておけ。あの落書きのような手配書を書かせればそれでいい。しかし、ジュードか………そういうえは、ハウス教授は一つのふざけた研究をしていたな」

「はい。何でも、^{ゲート}霊力野を持たない人間が、精霊術を使うためにはどうすれば、と。そういう題目の一つでしたが」

「ずいぶんと面白い事を考えるものだ………ふむ、余計に放っておけ。手は出すな。マクスウェルに関しては、いずれ必ず見えることになる。それからでも遅くはない」

「承知いたしました」

そうして、部下が去っていった後。

男はこらえ切れないと、笑みを浮かべる。

「二十年……二十年の時を経て、ようやく始められるか」

愉悦。歡喜。男の顔には、それが浮かんでいる。

「卓は用意した。駒も揃えた。届くべき手段も整えた。ようやくだ。こめるべき弾の中身は今ここに創造された」

抑え切れない喜び。裏には狂気が潜んでいる。何より、望みそのものがまっとうなものでない故に。

「アルフレド、お前が何を考えているのかは知らん。介する必要もない、ただこちらの望みのままに働いてもらう。もとより、

お前にとっての悲願だろうしな」

虚空に向けて話す男。その目には、異常たる何かが含まれている。

「精霊の世界の住人よ。お前たちにも協力してもらおうが生きるための、餌として」

我

暗闇で。ただ、男の笑い声が響く。

8話 「方針決定」

逃げて走って、船に乗り込んで。それからまあ、色々あった。

木箱に頭ツツコンだせいで額から血を流している傭兵と、足を怪我しているミラの手当をしたり。正直もうちょっと背負っていたかったが、怪我をそのままにするのは不味い。

交易品の中から傷薬になるものを売ってもらって、それを調合して傷口に塗った。明日ぐらいには治っているだろう。

あとは、船長。急な乗船認めません、それよりも何で追われてた尋問するぞゴラアと詰め寄ってくるヒゲ船長に

「あれー尋問なんかされるとうっかり超やバイ機密喋っちゃいそうー……………それでも聞きたい？」と脅迫したり。

引きつった顔されたが、何でだろう。善意で言っただけなのに。

「あーあー、世知辛いなー、空も海も青くひろいのに、人の心は狭いのなー」

「いや、笑顔で脅迫されたら引くだろ普通……………お前さん、見た目に反して無茶苦茶な奴なのな」

疲れた顔でそんなこという傭兵。額の絆創膏が痛々しいな。

で、この芸人じみた落ちを見せてくれた傭兵さん、名前をアルヴィンというらしい。

僕達をたすけてくれた理由は、「その方が金になると思ったから」らしい。うん、正直な所は好感が持てるね。

軍部に喧嘩を売るだけの理由にも思えないけど。

「そっちこそ。奇襲のタイミング完ぺきだったよ。腕もいいようだし、なんで傭兵なんかやってんの？ その力量なら士官しても良いところまで行きそうなのに」

この傭兵、飄々としているけど、腕は良いと思う。身体強化の度合いといい、期を見る目といい。

「いや、入らねーさ。俺って縛られるのが嫌いな奴なのよ。それに軍なんて硬いしめんどくさいし、やーな命令には従わなきゃなんねえし……………なあ？」

分かるような気がする。でも、何で同意を求めるかな。確かに僕も、誰かに命令されるのは嫌いだけど。

そういう意味では、兵士には向いてない。まあ、愛国心がある奴なら良いんだろうけどな。

「でも、まあ、働ける人なんでしょ？ ああまで良いタイミングで援護してくれたし、情報収集も得意なんだろうね」

「まーな。傭兵にしても、情報が命でしょ。事情を隠して依頼する奴なんてザラだしなあ」

「ああ、それは言ってる」

それはそうだ。僕も今まで傭兵みたいな仕事をしたことはあるが、5割は依頼の内容に虚飾を混ぜていた。

後で問い詰めると、「知らなかった」の一点張り。特に商人に多かった。あいつら口がうまいし、いつの間にか丸め込まれてしまう。

騙される方が悪い、らしい。それで傭兵を怒らせて、逆に命を落としたバカもいるらしいけど。

それも、情報収集が足りないから、らしい。事前に傭兵の評判を調査しなかった馬鹿、ということで商人の間からは間抜け扱いされていた。

（アルヴィンという名の傭兵は、聞いたことがない。でも腕は立つんだろうな。情報収集もできる）

それでもあの速さはおかしいと思うんだけど……いや、勘の良い奴なら分かるか。

僕達の立場で考えれば分かる。まず、王都にはとどまれない。次にどうやって逃げるか、と考えれば答えは2つだけ。

街道を突っ切るか、船で国外に脱出するか。その賭けが当たった

ということにしておこう。

イマイチ胡散臭いし。それに、こういう悪意を見せてこない奴は厄介なのだ。得てして何かを隠している場合が多い。

表向きの関係が続けるのが吉だ。裏切られてもいいように。

それに、見たことがないあの武器。研究所でぶちのめしたあの衛兵と同じような武器を使っているのは、きっと無関係ではあるまい。尻尾を出せば即座に捕まえてくれる。

なに、表だけの関係が続けるのは得意だ。

伊達に門番ことモーブリアさんから「外面完ぺき詐欺無敵医学生」とか言われてない。

でも、この先どうするのだろうか。

アルヴィンにはまだ聞いていないが、今の状況では……出来るならついてきてほしい。

今のミラは、戦力には数えられない。彼女を守りながら旅をすることになるが、正直、それはきつい。

研究所のような狭い場所ではない、広い場所。例えば平原などでは、後ろを取られる可能性が高くなる。

マナの強化といえど、万能じゃない。特に背後からの攻撃は防御しにくく、当たり所が悪ければ致命傷になりうるのだ。

痛みも凄まじく、思わず「うわぁ！」と叫んでしまうほどきつい。

そんな痛みの危険も、落命の危険もできるだけ回避したい所だが。

（でも、どうするかなあ……ん？）

そんなことを考えている途中、ミラが甲板に出てきた。

無事な方の足と、木材を借りて即興で作った杖に体重をかけて歩いている。

「具合はどう？」

「まだ痛むが、かなりマシになったよ」

「まあ、もともとそれほど大きな怪我じゃなかったしね。明日には完治していると思うよ」

「それは重畳……って回復はえーな、アンタ」

アルヴィンが驚いている。

その理由も分かるけど。自己治癒のスピード速いもんね。マナの量が豊富なせいか、羨ましい限りだ。

何というか、見たこと無いぐらいに速い。流石は精霊の主ということかな。

そのミラは、アルヴィンに自己紹介をしていた。アルヴィンも同じで、互いに名乗りあう。

ミラの方は、今の状態でフルネームを教えるのはまずいと思ったらいい。マクスウェルの名は隠し、ミラとだけ名乗っていた。

で、落ち着いた所でこれからどうするのか聞いてみた。

ミラはふむ、といい、あの時思いついたと前置いて言う。

「二・アケリアに帰ろうと思う」

なんでも、ミラの故郷である二・アケリアは精霊の里と呼ばれる所で、そこならば四大を再召喚できるかもしれない、らしい。

ただ、その精霊の里はア・ジュールの奥地にあるので、徒歩で行くならばかなりの距離になるだろう、とか。

それにしても、精霊の里か………そういえばハ・ミルでそんな話を聞いたような。

で、詳しい場所をミラに聞いてみると、ドンピシャだった。二・アケリアは、山奥の村のハ・ミルの更に奥地にある、キジル海瀑を越えた先にあるらしい。

「遠いな………歩いて4日はかかるぞ」

「モンスターもいるだろうし、それなりに準備してからの方がいいね」

「ジュード？ その言い方ぶりからすると、もしかして私についてきてくれるのか」

「まあ、ね。何よりあれぶっ壊さなきゃならんし」

教授の仇もあるけど、教授の研究成果が軍事転用されていたのはなあ。

夢見が悪いというか、納得いかないというか。

夢の道も断たれたし。この感情をぶつける相手が欲しい。
例えそれが国相手でも。

「剛毅なことだ。それで、私か」

「あれは僕一人じゃ壊せない。警備も強化されているだろうし」

だから、僕、守る人。あなた、壊す人。

告げると、ミラは納得したように頷いた。

「願ったりだが……君には世話をかけるな」

「自分の事情で動いているだけだから」

あくまで自分で決めたことだ。そりゃあ、何かに振り回されている
感はあるけど。

昨日のこの時間は、晩御飯を食べながら勉強していたのになあ。
今日にこうなるなんて、思ってもいなかった。本当に、今でも現実
とは思えない。

だけど、道はわずかながらに繋がっている。

四大と会えるなんて思ってもみなかった。彼らがよみがえれば、聞
きたいことも聞けるだろうし。

ともあれ、今はミラを守らないと。

「それで、アルヴィンには頼みたいことがあるんだけど」

頭の後ろに手を組んで傍観していたアルヴィンに、事情をばかして依頼する。

ミラに、剣を使う術の、その基礎を教えて欲しいと。

「それは……構わねーが、なんでわざわざ俺に？」

「僕は剣使えないし。アルヴィンならやれるでしょ。剣術そんなでかい剣使ってるなら、基本はひと通り理解しているだろうし」

見た所、アルヴィンが背負っている大剣はかなり使い込まれていた。こんな大きな剣を長期間使える、ということは間違いなく剣の振り方を知っているに違いない。

力だけで使えるような大きさじゃないからな、これ。

振る時に刃筋も立てられない剣など、ただのムダに重たい鉄の塊だ。使えないならば、そもそも使わないだろう。きっと違う武器を選んでいるはず。

「その年で良く知ってるな……分かった。俺でよければ教えるぜ」

「アルヴィンも、すまん」

「傭兵だからな。依頼料は坊主から貰えそうだし、問題ない。それに、正直役得だしなあ」

「……役得？ ジュードも言っていたが、何のことだ？」

「あー、まあ、いや、あはは」

誤魔化すように笑うアルヴィン。まあ、気持ちは分かる。

（だって、剣振ってる時のミラってば
胸がたわわに揺れて
らっしゃるもんね！！）

視覚攻撃とはああいうのを言うのだろう。落ち着いた今になって改めて見てみるが、これはスゴイ。

思わず様をつけてしまいそうになるくらいには。

「でも教える時は真面目によろしく」

「わかってるさ、これでもプロだからな。でも……正直すごいよな」

頷く。男ならば、黙っていられまい。

「それで、あれを背中で堪能した少年としての感想は？」

からかうように問ってくるが、それで顔を赤くするような僕ではない。

何故ならば、背負っている途中にこの世の至高を垣間見たが故に。

で、感想を率直に告げた。

「この世に樂園があるのなら きっと、あの胸の奥に詰まっているのさ」

「断言したよおい!？」

羨ましい、とか素の本音を零しているアルヴィン。いや、その気持ちには分かるよ。

緊急事態ゆえ致し方なしのあの事態。だが、副次効果が得られるか思ってもみなかった。

思わず背負った時のあの感触。

いや、まじですごかったよあの双丘。

「どうしたのだ二人共？」

「「何でもないよ(さ)、ミラさん」「」

首を傾げる様子が、ちょっと可愛かった。

で、翌日に船は目的地に到着した。

船が到着した場所は、イラート海停。ア・ジュールにある港だ。幸いにしてハ・ミルへと続く街道があるので、また船に乗る必要もない。

そして、降りてからすぐに特訓が始まった。とは言っても、剣の握り方や振り方、戦闘中に注意すべきことを教えただけなのだが。

あとは、リアルオーブについて。ミラは、今回の旅に出る直前に、これを持たされたようだ。

人間の潜在能力を引き出すという、戦闘者ならば必須な能力を持っているこの道具。

使いこなせれば、百人力となる。

「二人共も、これを持っているのか？」

「かなり前にね。師匠から持たされた」

「俺も、だな」

見れば、アルヴィンは一枚目の5層目にまで花弁が開かれている。

前はもつと開いていたはずだけだな、とアルヴィンは苦笑するが、まあそれはそうなるかもしれない。

このリリアルオーブだが、戦いの中に身を置き続けないと、その効能を保てない。

実際の戦闘を行わない、臨戦態勢を保たない、そういった”何もしない”期間が長ければ長いほど、その花弁は少なくなっていくのだ。

「その点、お前さんは異常だけだな」

「いや、これも修行だし。常在戦場は武人の常ってね」

「お前は医学生ではなかったのか？　そういえば、私達を治療する時も治療術を使わないでいたが」

あー。やっぱり、そういう感想抱くよね。

でも、ここで真実言うのはなんか嫌だ。というか、わざわざ説明し

たくもない。

けど、そのままじゃあすまないか。よし、言い訳しよう。

「僕、精霊術は苦手なんだよ。それよりも相手を殴る方が上手だから」

「殴る方が得意……それは、なんとなく君らしいな」

「……ノーコメントで」

まさかそんなに早く納得されるとは思わなかったよ。あと、気を使ってくれてありがとうアルヴィン。

ていうか、それ何か医学生として致命的じゃね？ 格闘やってる方が向いているって、でもいやなんか複雑なきもち。

「謙遜することはなかるう。君の体術は見事だった。しかし、最近の医学生は君のように武術を修めているのか？」

「うん、割りと。ほら、医術は戦争だって言うじゃない？」

「……………そうなのか」

真顔で顎に手を当てて悩み始めるマクスウェル子さん。いや、冗談なんだけど。

横にいるアルヴィンは、無言で手を横に振っている。ツツコミなければ突っ込めばいいのに。

で、このままじゃなんだから、嘘だと説明すると、ミラは驚いたような顔を見せる。

「嘘？ …… 君は、私に嘘をついたのか」

「いや、分かるでしょ普通。あのお綺麗な医学校の中に、僕みたいなのが数百人いると思う？」

「それは…… 嫌だな」

「ああ、それには同意するぜ」

「あれ、二人共酷くない？ 何か言葉の刃が突き刺さるんだけど」

涙がちよちょ切れる。まあ、慣れているからすぐに復活できるけど。

「いや、私は嘘が嫌いだからな。その意味では、君の方が先に言葉の刃をぶつけてきたのだろう」

「普通は冗談だと取ってくれるって…… ツーかさあミラさん」

か、顔が怖いって。何で怒るかなー

「つーか自分で言うのも何だが、僕みたいな医学生が他にいるわけないでしょ。」

いや、本当に自分では言いたくないけど。

「ふむ、つまり君は…… 意地が悪いのだな。それとも、研究所でぶつけたイフリースの一撃の意趣返しか？」

「いや、単なる冗談のつもりだったんだけど。ていうかマクスウェ

ルさんって真面目すぎるって言われたことない？」

反応が正直すぎる。傭兵相手に時にはシモネタのやり取りをしていてこちらとしては、何とか扱いに困るレベルです。

その傭兵は、「イフリート？」とか言いながら顔をしかめている。

「そういうのは、とんと言われたことがない。それに……いや、私は……私に対する冗談というものは、あまり聞いたことが無い」

考えこむマクスウェルさん。それなりに人付き合いがあるような口ぶりだけど、冗談を言われたことがないとは何事か。
いや、言わないか普通は。いわば信仰対象だもんな。

奉じるべきは精霊の主。この世に現界した、偉大なるマクスウェル。リーゼマクシアを創りたまりし君。

つまりは。

「だったら、ミラ様と呼んだ方がいい？」

「やめてくれ」

返答は速かった。

「その呼び方をされると誰かを思い出してしまうし
に様付けで呼ばれるとな。正直、鳥肌が立つ」
何より君

「あはは、ひどいなあ」

そんな嫌な顔をするなんて。

（ いいことを聞いた ）

そう思ってしまうのは、僕の性格が悪いからだろうか。

でも、何ていうかこんなに感情を顕にしてくれるなら、それも悪くない。

「いや、坊主も複雑な奴だな」

ぼそりとアルヴィンが何事かつぶやいているが、聞き取れなかった。それでも、前よりは余程近いものを感じられる。力が無くなったからか、その圧倒的な雰囲気が消えたからか。

少なくとも今のミラ・マクスウェルは、話していて不愉快にならない。四大がなくなって、戸惑っているのもあるうが。

だけど、口調は ほんの少しだけど、人間味を帯びたような気がする。

昨日、四大を従え。超然としていた時よりは、余程に。

「ん、何か言ったか？」

「いや、何も」

笑顔で答える僕の、その横でアルヴィンが呆れた顔をしていた。

9話 「三大欲求+1」

はつきり言おう。今、僕は激怒している。

「ちくしょうが」

言葉に溢れる。ああ、ちくしょうめ。それぐらいに、許せないことがある。

我ながら自制は効く方だとは思うが、今はその限界を越してしまっている。

包丁を持つ手が震えているのが何よりの証拠だ。

だから、やらなければならない。以前にこの身に受けたイフリートの炎よりも熱く、濃い。

許せないという思いを基礎とする怒りが爆発する前に。

思い知らせてやれ。その選択を突きつけ、疑問さえも浮かばせなかった周囲に。

その気概を持って挑めば、ああ彼女も満ち足りるだろう。

ゆえに、振り下ろす。赤い飛沫が、大気に舞った。

「ク、クククク」

笑う。笑う。笑う。笑って刃をひるがえす。

よく切れる包丁だ。これならば、できる。満足ゆくものまでに仕上げられる。

できないはずがあるうか。最初にこれを覚えてより、8年。絶え間ない修行の後に至った位階は、そこらの素人ならば薙ぎ倒せる程に。

ああ、我は無知を憎む一人の戦士ゆえに。知識あるゆえに許容できないことを知った、一人の賢者であるがために。

さあ、戦おう。

足止めは用意している。メインディッシュが来る前の前菜。だが、決して手を抜いてはいない。

きつと喜んでくれていることだろう。そして、それを越えるメインを今より創り上げる。

敵はいざ、まな板の上にある。

「美味、すなわち戦争なのだよ」

故に我、これより修羅に入る。

風と水しか味わったことのない、ただの一人の存在の。あるべき欲求の三分の一を埋めるために。

「ってこれマジでお前が作ったの？」

「当たり前でしょ」

「いや……美味ーよ、これ。完成度たけーよ、おい」

出された料理にがつくアルヴィンを見ながら、僕は満足の息を吐いた。

下ごしらえもなしに、30分。待たせてはならぬと作り上げた一品は、どうやら満足に足るものだったようだ。

「最初の、レタスとチーズとトマトを挟んだパンも美味かったけどな。いや、これも大したもんだ。肉は少ないってのに、ばかに味わい深い。なんか、魔法の調味料とか入れたのか？」

「料理に魔法は通用しないと心得ております」

研鑽を上回る調味料なし。あとは愛とか、心とか、想いとか。取り敢えず全部こめてやった。いや、捧げたと言ってもいい。

この、無言で料理にがつついていてる彼女。ミラ＝マクスウエルの生涯初めてという食事のために。

決してアルヴィンに向けてじゃない。そこんところしく。

いや、でも僕も驚いたよ。

先ほどまで、ミラの力量と、各々の力量、そして連携の確認具合を見るために受けた依頼をこなしていた。

街道横のモンスターを退治して欲しいという依頼を達成して。

その後直後に、ミラは倒れたのだ。

曰く、腹が空いたと。

それはまあ、いい。僕も腹が減っていたし、アルヴィンだってそうだろう。

だけど、続く言葉に度肝を抜かれた。なんと彼女、今まで食事をしたことが無いという。

シルフとウンディーネより、必要な栄養分を与えられていたので問題は無いと言うが。

その時に抱いた衝撃を、僕はこの先ずっと忘れないだろう。

食欲というのは、人の三大欲求の一つと親父から聞かされている。食、睡眠、性。この3つを満たすことで、人は生きていることを実感するのだとか。

事実、そうだと思う。特に前者2つは必須だ。それでいて、この欲を解消する時の“質”が高ければ、それだけで人は満足するだろう。例えば、美味しい料理。例えば、陽の光が匂うふかふかの布団。

良き食事も、良き睡眠も、考えるだけでワクワクしてくる。味わえば、至高だ。

実際、そうだと思った。だから考えてしまった。

では、その一つが欠落している彼女は、そのひとつをずっと満たされないままでいたミラは、一体どれだけ満たされない人生を送ってきたのだろうか。

ああ、人では無いかもしれない。だけど、まるきり人ではないとも考えられない。

見せる意志。戦う姿。発する言葉。そのどれを見ても、理解できない存在とは思えない。

なればこそ許せないのだ。人には、あるいは食のために人生を捧げる者がいる。

例えば、店長のような料理人がそうだ。彼らは食を尊敬し、だからこそ料理を作る事に誇りを覚え、自らの時間を費やすことを厭わない。

その数は決して少なくない。それは、他者がその想いに共感していることの証拠とも言えよう。

それほどまでに大事な食というもの。しかし齢にして20に近いと思われる彼女は、それを知らないと言う。

許せない。到底、許容できることではない。だから、海停にある宿に走った。

必死の説得により厨房を借りて。そして戦うことを決意した。

前菜はパン。空かせている腹を取り敢えずは満たすもの。だけど、買った食材の中から厳選し、短時間で出来る工夫をこらしたものだ。アルヴィンの同意を得られたように、簡単なものではない。

慣れていることもある。修行と勉強の合間、それでも治療院の仕事が忙しい二人よりは時間がある僕が、夕飯を作ることが多かった。だから、短時間で作る料理は知り尽くしている。

「それでも30分は早いと思うけどな」

アルヴィンが言うが、それは確かだ。複数を作るならば、少なくとも2時間はかかる。

だから捨てた。待たせてはならぬと、前菜一つにメインを一つで勝負することにした。

前菜は、簡単サンドイッチ。パンはロールパンで、中身はレタスとトマトとチーズに少量の胡椒とマヨネーズを入れたもの。

最後に少し焼くのがコツだ。アルヴィンが言うに、それもなんかスゴイ勢いで完食したらしい。

二人に2つずつ、4つ作っただけでアルヴィンが食べられたのは一つだけだとか。

なんでも、ミラは電光石火の如く自分の分を完食。後に、アルヴィンの分も凝視していたらしい。

餓狼のような眼光に負けたアルヴィンは、自分の分の一つを分けたとか。

でも、あげると言った時の顔はすげー可愛かったらしい。くそ、僕も見たかった。

メインディッシュはミートパスタ。トマトをベースに、牛ミンチと刻んだ野菜を煮詰めたもの。

フライパンの上にミートソースに使うトマトを入れ、肉を入れ、細かく刻んだピーマンと椎茸と玉ねぎと人参を入れて30分ほど加熱したもの。

最後にマカロニを入れて完成。本来ならばスパゲッティを使いたいことだが、今は無いとのことなのでマカロニで代用した。

メインの味はトマト。かの赤き宝珠の如き野菜、その旨味成分は尋常でない。煮ることでまた味が代わる優れものである。

その旨味あふれるメインの中に、牛ミンチはジューシーさを、刻んだ野菜はそれぞれの旨みを、遠慮なく容赦無く染みこませていく。

玉ねぎと椎茸と人参はそれぞれ違った旨みを。ピーマンはアクセントに。

混ざり合えば、それこそ至高。地面より取れる豊穡の恵みとも言える野菜の”味”は、時に肉をも上回る。

なるべく多くの旨味と甘みを味わってもらおうと作りあげたが、どうやら成功だったようだ。

ミラさん、もう完食している。というか、満足した顔の後に突っ伏した。疲れたのだろう。

というか早すぎるな、3人前はあったはずなのに。

「美味しかった？」

「ああ！」

ちょー眩しい笑顔でそんなこと言う。
通常の、凜とした表情ではなく。崩れ、輝かしいばかりに笑うその顔はまるで子供のようだ。

（やべー、顔が整っているのは分かっていたし、凜とした顔も悪くなかったけど）

だけど、この笑顔は反則だろう。
初めての料理、初めて知る美味というもの。それに会えて歓喜しているのだろうが、その顔は無防備にすぎるだろう。

無防備な美女が、こんなにヤバイものだとは。見れば、アルヴィンもその顔を凝視している。

うん、これはちょっと、男として眼福すぎるよね。

（というか、何だろうこれは）

感謝、というものをされた事は少ない。あっても、表向きだけ。
門番さんはちょっと違うが、それでもこれほどまでに真正面から、何の含みも無く感謝を示されたことは、無い。

それは、あの日精霊術を使えなくなった時から。故郷は言うにおよばず。

イル・ファンでも、僕が精霊術を使えないと知っている者は、また別の眼で見えてくる。

汚れた者を扱うように。はれものを扱うように。
銀髪バカはまた違うが。あいつが笑顔でありがとうとか、まじであ

りえんし。

ともあれ今、僕の中の鼓動がヤバイ。

そんな笑顔を向けるな。そんなにまっすぐ、笑顔を向けなくてくれ。

三大欲求とは違うものが、満たされていくけど。

何かが解けていくと同時に、何かが締め付けられるんだよ。

「ん、どうしたジュード」

「いや……………」

笑わないでくれ、と言おうとしたが、止めた。

言える雰囲気でもないし、言われた方も、意味が分からないだろうし。

だから、首を振った。そんな僕にミラは、童女のような顔をしたまま、興奮したように言う。

「食事というものは良いな！ 人は、こういうものをもっと大事にすべきだと思う！」

「いや、大事にしてるんだけどね」

力説するミラに苦笑を返す。なんかテンションが振りきれている。

それほどに美味しかったか。

「ウンディーネもシルフもひどいな！ ああ、もっと早くに教えられていれば、もっと味わえただろうに」

「それには全面的に同意する。マジで酷過ぎるだろ、それは」

というか、傍に居る人はなんも言わなかったのか？

食事というものについて。旨い飯があれば、士気も上がるだろうに。

なんていうか、歪だ。人間じゃないから、と彼女は言うかもしれないが人間の形をしている以上、人体の理に従うべきだと思う。いち医学生として、そう考えてしまふ。あるいは食事も、人格形成のひとつであるかもしれないのに。

そんな事を考えていると、隣に居るアルヴィンがミラを凝視していた。

驚いているようだけど

あ。

（ちょっと話す必要があるな）

それから、食事を済ませた僕は、食器を厨房へと持っていった。

で、戻ってくるとミラは寝ていた。テーブルに突っ伏している。

「かなり疲れていたみたいだな」

「ああ、そうだろうね」

今に至るまで、大精霊の補助を受けられないまま活動することなん

て無かっただろうし。

「それで……さっきの事について聞きてーんだけど、少年？」

「ご想像にお任せするよ」

おそらくは知っているだろうし。港で情報を集めたというなら、わかっていないはずがない。

（ミラもなあ。研究所内で大精霊をブツパしすぎだろ）

あれでバレない訳がない。情報が漏れない理由もない。

「じゃあ、彼女が…… “あ の” マクスウェルだったのか？」

「どの、かは知らないけどね」

というか、なんだ今の口調は。精霊の主マクスウェルというのは、リーゼ・マクシアに住まうものから見れば、絶対的な存在に近い。それなのに、アルヴィンの口調からは、もっと別の何かを感じる。

（やっぱり、胡散臭いな）

通常の反応ではない。でも、何だろうこの感覚は。

この時の僕はアルヴィンに対して、何か近しいものを感じていた。

同じなような、決定的に違うような。

その理由が判明するのは、ずっと後になるが。

「……いや、いいさ。それより、寝ちまったお姫様を部屋まで運びますか。このまま寝かせておくわけにもいかんしな」

「あ、それじゃあじゃんけんね。三回勝負で」

「………独り占めは良くないと思わないか、ジュード君？」

「だって少年だし。まだわんぱくなお年ごろだし。15才だし。青春まっただ中だし」

「自分で言っつなよ!」

ツッコんでくるが、無視。

青い春の欲は、それこそ蒼天のように無限大なのだよ。

その後のことは、まああれだ。

三回勝負の激闘の末。アルヴィンが勝った。ムツツリめ。

だけどミラは、僕達の勝負が終わる前に自分で部屋の方に戻っていたらしい。

気づけば、こつ然と姿を消していた。

「……………うるさくしすぎたのが不味かったか」

「起こしてしまったようだね。って、あれ、宿屋の主人が、鬼のよ
うな形相で、こっちに」

その後。

僕とアルヴィンは怒れる鬼神から、仲良く説教を受けましたとき。

9 話 「三大欲求+1」（後書き）

・補足

料理の材料に関してはツツコミなしで。

テイルズ世界にはシチューやら牛丼やら、同じ料理が多々ありますので。

・補足の補足

でも、サイダー飯だけは認めんよ？

いや、序盤はお世話になったけど、絶対に認めんよ？

いち日本人としてどうかと思うよ？

ていうか、考えた奴出てこいつてレベル。

『OH!MYコンブ』じゃないんだから。

10話 「出発到着」

明け方、僕らは出発した。港町だからだろう、朝から潮の匂いを嗅ぐことになるとは。

なんか、故郷を思い出して切なくなった。腹が立っているというのに、なんだろうねこれは。

「で、本当に行くの？」

「ああ。弁当とやらももったしな」

「いや、ミラさん……さっきあれだけ食べて、もう心は昼食にいつてるんすか」

喜色満面のミラを見て、思わず呆れる声がこぼれ出てしまう。

昨日の料理の衝撃が、よほど強かったらしい。

少なからず感じていた壁も、今ではだいぶ薄まっているみたいだ。

で、そんなに食事が楽しみですか。

「ああ、楽しみだな」

「いや、そんなに不敵に笑わんでも」

なにこのムダな格好よさ。威厳があつた精霊の主が、今ではまるで飢えた狼のようです。

「いや、原因は少年のせいだよなあ？」

「ノーコメントで」

ていうか、料理作っただけであそこまで喜ぶなんて、誰が思うか。

「でも、慎重に行こうって意見は聞いてくれないのな」

「それは、それだ。私は一刻も早くニ・アケリアに帰らねばならない」

「中途半端な腕の 때가、一番危険なのになあ」

ミラは昨日の実戦でコツをつかんだらしく、剣を振る様もそれなりに形になっていた。
マクスウェルとしての力を失う前までの感覚を、少し取り戻したのだろう。

それでも、強行軍ができるような腕にはなっていない。

「大丈夫だ。初歩だけだが、精霊術もいくらかは使える。それに、お前たちが居るのだから多少の無茶はきくだろう」

「あー、まあそうだけど」

「だーいじょうぶだって。医療術は使えないらしいけど、薬草があるじゃねーか。昨日の内に買い込んでたんだろ？」

いいながら、肩に手を乗せてくるアルヴィン。馴れ馴れしい仕草を横にそつと移動して避け、反論する。

「それでも危ないって言ってるんだ。薬も万能じゃない。速いほうがいいってのは分かるけど、せめてもう一日は連携の確認をした方が良い」

怪我してからじゃ遅い。もし大怪我をすれば、余計に時間を取られるってのに。

「…………駄目だ。連携の確認は、移動しながらでもできる。それにな、ジュード」

「なんだよ」

「私を守ってくれるんだろう？」

じつと眼を見ながら、言う。一切の遊びがない、真剣な眼差し。約束したのだからと、眼で訴えかけてくる。

「…………はい、はい、わかりましたミラ様！。降参降参」

「様と呼ぶなと言っのに」

手をあげて巫山戯る僕に、むっとするミラ。

見ていたアルヴィンが、手を叩きながら仲裁してくれる。

「はいはい、喧嘩すんなって仲良くしろよ！。連携が鈍って怪我すれば、どっちの主張も通らないぞ。どっちも負け。そういうの馬鹿みたいだろ？」

「…………分かったよ」

正論で、その通りだ。それに約束したのも事実。

だから僕はアルヴィンの言葉に頷くと、手持ちの装備を確認することにした。

「それは……………」

僕の手にあるナツクルガードを見て、ミラが息を呑む。

それはそうだろう、今まではもっと安いやつ使ってたからな。でもこれからは本格的な戦闘になるだろうし、用意しておくにこしたことはない。

まあ、この街道の敵は弱いから相手にはならないだろう。だけど、ラ・シュガル兵や雇われた傭兵が僕達を追ってこないとも限らない。

だから僕は、今までは使わなかった自分の武器を装備した。

「そのナツクル……………」 “グランフィスト” か。いいもの持ってんな」

「まあね」

修行中の素材の大半はショップに持っていったからな。

ちなみにショップで売っている武器は、装備者のマナを増幅させる効果がある。

精霊術を使うものならば、その威力を。肉体強化して戦う者ならば、そのマナの強度を増幅してくれるのだ。

アルヴィンで言えば大剣。これは“バスタードソード”だったか。それなりにいい装備をしているな。

「そんないい装備もつてるとはな。なんだ、血に汚れるから使わなかったとか？」

「いや、これ装備してるとな。修行になんないし、何より警備兵みたいな一般兵レベルだと　打ちどころ悪ければ殺してしまうから」

進んで殺人をやる気はない。アルヴィンは察したのか、なるほどなと頷いている。

「そういえば、アルヴィンは剣を持っていないのか？」

横からミラがアルヴィンに訪ねる。予備の装備でもあれば、貸して欲しいと言つつもりなのだろう。

実際、ミラが持っている剣はちょっと鈍らな数打の剣だから。

「いや、剣は持ってない。それに、最初の内はその剣を使った方がいいって」

「何故だ？」

安物の剣を見ながら、ミラは不思議そうに言う。

「最初に強すぎる武器を使うのは良くないからな。武器に頼ってるようじゃ、いつまでたっても半人前は卒業できないぜ？」

「…………つまりは、性能に頼るなど言っているのか？」

こちらを見るミラに、僕はああと頷いた。

「強くなりたいたなら、痛い思いをしないとね。それに武器によりかかってもらうのも困る。もし武器が壊れでもしたり、弾き飛ばされたりした時を想像してみなよ」

そんな機会は、いくらでもある。それで、失った時にショックを受けて硬直されてもらうようじゃあ困るのだ。

命を賭けた戦闘をすると言うのなら。今までは圧倒的な力で粉砕していたかもしれないが、これからはそうはいかない。

「そう、だな」

そう言うと、ミラは精霊の力があつた頃を思い出しているのだろうか。神妙な面持ちで頷くと、自分の剣を握った。

（いや、本当に強い女性ひとだな。それに女らしくない気性を持つてる）

説明して、その理屈に納得すれば頷き、肯定する。女性は割りと感情で動く人が多いと思ってたんだけどな。

使命があるからか、芯が揺らいでいない。確固たる自分を持っている、というのか。

その分、強情になってるけど。

（これなら大丈夫かもな）

一番恐れていたのはパニックになって怪我をすることだ。混乱している時、心が弱っている時にそれが起こりやすい。

だから今は様子を見るべきだと考えていたのだけど、この調子じゃあ心配はいらないみたいだ。

そうだ。ミラは、精霊の力を失っている。恐らくは10年以上、連れ添ってきた相手を失っている状態だ。

常に傍にあったものが失う。それはどれほど痛みを伴うか、僕には想像もつかない。

だから、強く見える彼女の心中も、小さく揺らいでるだろうと考えていた。

だが、それは杞憂のようだ。

（それも、歪な事だと思えるけど）

それでも、ここで延々と問答しても仕方ないか。

「じゃあ出発するね。先頭はミラでよろしく。ああ、昨日と同じく“合図してくれたら”後ろの方はフォローするけど……前の敵は絶対に倒してね」

ただ今のは、ミラの剣の腕を上げることには専念すべきだろう。強い志があるならばそれに沿うだけ。

いつか僕達は、イル・ファンに特攻するのだ。その時にミラが弱いままじゃあ、色々と取れる選択肢が狭まる。

強くなってもらわなければ困るのだ。だからの雑魚街道の道中、僕とアルヴィンが無双しても意味がない。

「了解だ」

「じゃあ行こうか」

で、意気込んだ割には道中なにもなかった。

ミラも、戦う度に剣の腕が成長していく。感覚を思い出しているのか、あるいは成長しているのか。

剣速は定まらないが、剣にこめる意志は揺らがないでいる。戦う者としての気構えは、あるいは僕以上かもしれない。それにしても上達が早過ぎる。なんにせよ、あれだ。

「天才って居るんだよねどこにでも。このままの調子でいけば、半年程度で追いつかれそうだなあ……凹む」

こちらら5年も血に汗に流して頑張ったっていうのに。

「いや、数カ月間戦い続ける、ってそんなこと有り得ないだろ。な

んだ、戦争でも起きんのか？」

「修行は戦争だよ？」

「いや、ねーよ。まあ少年も大したもんだと思うぜ？ 何か格闘術でも習ってみたいだが、かなり出来る師匠についたと見えるね」

「あー、近所に居る地上最強の主婦からちょっと教えを」

師匠、元気にしてるかなあ。僕はいつの間にか夢破れ、追われる身になってしまいました。

思い出す度に何かを捻りたくなる。今は目の前の魔物に拳を向けるから大丈夫だけど。

で、アルヴィンは地上最強発現を冗談だと思ったのか、またまたご冗談をつて顔になってる。

ちつとも嘘じゃないのに。でも説明しても信じてくれないだろうから、別の話題をふった。

「アルヴィンって、それ。面白い武器もってるね？」

「ああ、これか」

言いながら、何か礫を高速で射出する武器を見せる。

「火の精霊術のちょっとした応用だな」

「聞いたこと無いけど、どこにでも売ってんの？」

「貴重なものなんで、ツテが無いとちょっと無理だな。なんだ、欲

しくなったのか？」

「いや、いらないけど っと」

そこで、リンクからミラの危機を察した僕は、すぐに駆け出した。

リンク。リアルオーブが持つ特殊能力で、組んだ相手とある程度
の意思疎通を可能とするもの。

（後ろの事は気づいていたか）

ミラの合図が無ければ、追いつけなかった距離だ。

合図がなければ、昨日の戦い始めのように、後ろから攻撃を受けて
いただろう。

（昨日のはわざとだけど）

戦いの最中に後背を気にしない、というのを実地で知ってもらった
つもりだが、良い具合に学んでくれたようだ。

今日の戦闘はこれで10度ほどになるが、戦い始めてから二度目ぐ
らいには、もう後ろに注意を払っていた。

一歩でトップスピードに、二歩目には敵を間合いの内に捉えている。
ミラを背後から襲おうという、狼の魔物の背後を。

「しっ！」

踏み出し、体重を載せた右拳の一撃が相手の肉にめり込む。

会心の一撃を後ろの受けた狼は、血反吐を吐きながら飛んでいった。

（次　　）

右後方からミラを狙っていた植物の魔物の方を向き、踏み出す。

こちらに気づき、迎撃の薦を鞭のようにして攻撃してくるが、遅い。

顔面に迫る鞭を左手で打ち払い、その勢いで回転。右の回し蹴りから体を回転させ、左の後ろ回し蹴り、最後には右の足刀を相手の頭らしき部位に叩きこむ。

「　　飛燕連脚、つと」

技の名前を後には、魔物は塵へと還っていた。

ミラの方も、狼の魔物を倒せていたようだ。死骸が塵になっていくのが見える。

「…………じゅるり」

「先生！ ジュード先生！ 何やら麗しき女性一人がよだれを垂らしております！」

「いやアルヴィン、落ち着いてよ。あと先生言っな」

慌てるのは分かるけど、あんたキャラ崩壊してるがな。ミラも、女性としてどうかと思うよ。

なんだ、昨日の食事で美食道に覚醒してしまったのか？

「食い意地が張っているというか。まあ、気持ちは分かるけどね」

なんせ、前方に見える村から、漂ってくるのだ。

それはもう、本当に美味しそうな香りが。

「甘い甘い果物の香り…………ナップル、か。そういえばそんな季節だったな」

前に来たのは、ちょうど一年前。色々と旅に修行に研究に、忙しかった時期だ。

（そういえば、あの妙な少女は元気にしてるかなー）

僕は前にあった奇妙な少女の事を思い出しながら、足を早めた。

山奥にある小さな村、ハ・ミルへと。

11話 「山奥の村の少女」

ハ・ミルに到着してすぐ、僕達は村の人々に歓迎された。迎える相手は僕だという。

ああ、以前にこの村に来た時、果樹園の方でだけがしていた人達を、僕が治療したからだろう。感謝の証ということだ。

よそ者を嫌う傾向がある村民でも、仲間を助けてくれる人は別。

何でも頼んでくれと言われたので、ひとまず宿を借りることにした。招待されたのは空き家だった。

が、掃除が行き届いているし、なかなか洒落た内装をしているようで、悪くない。

窓の外からは夕暮れが見える。そういえば、前に来た時もずっと夕暮れ時が続いていた。

霊勢が偏っているのが原因だろう。イル・ファンは完全な夜域で、24時間空は夜に固定されていたが、ここは黄昏時に固定されているようだ。

と、ミラに確認してみるが、どうやら彼女は霊勢について知らなかったようだ。

リーゼ・マクシアでは一般常識なのだが……さすがは精霊の主と

言った所か。

そう言うと、「人間が定義した言葉、その全てを知っているわけではない」とのこと。

でも精霊の力のバランスから成り立っている現象だから、把握していてもおかしくないと思うんだけど。

いや、あるいは別の視点で把握しているのかもしれない。表現する言葉が違うとか。

精霊と人では日常からして違うのだから、それもあり得るだろう。

名付けることすら必要のない、当たり前現象なのかもしれない。

まあ、精霊の世界など知らない僕にとっては、そのあたりは全く分からないことなんだけど。

だから、取り敢えずはこの美しい夕暮れを楽しむことにした。

なかなか綺麗だ。この村自体、かなりの高台にあるからだろう。

はつきり見える夕陽がキレイだ。

しかし、知らないうちにここまで登ってきたのか。

その後、僕達はひとまず荷物を置いてから、村を歩きまわった。

ナッブルの甘い香りがして、またミラがよだれを垂らそうとしていた。

ので、今日はナッブルを入れたソースを使おうと決めた。

時間があれば、明日の朝にデザートとして出せるだろう。

幸いにも、お金はある。

で、食料品屋で肉も買いつつ、また街を回った。

そして、面白いものを見つけた。

入り口から入って、少しした所にある樹の中に、なにやら紫色の水晶みたいなのが埋めこまれているのだ。

そのままじゃ届かないので、マナで脚力を強化しながら飛ぶ。

で、触つてみると紫色の水晶は、まるで宝箱のように開いた。中からお金が出てくる。

「え、これって村長のへそくりか？」

「うわ！　すごいや兄ちゃん、それ開けられたんだ！」

いや、普通に開いたけど。

「いや、どんなことしてもそれ、開かなかったんだ。大人の人達の色々と叩いてたけど、うんともすんともいわなかった」

なら、マナのせいかな。脚力を強化すると同時、一応手にもマナを巡らせていた。

結構なマナを発しながら触ったから、それが原因と思われる。

で、中から文字が書かれた手紙のようなものが出てきた。なんでもこれは大海賊アイフリードの宝らしい。

大海賊と言う割には、金額がしょぼいが。てか、名前負けしている。ひょっとして自称なのか？

つーかもっと、こう、輝くような黄金でも入れとけてんだ。世界各地にばらまいたらしいが、どうにも期待できそうにないぞ。

まあ、あって困るもんじゃないし、見つけたら取りあえず拾うときですか。

で、しばらくして食事の時間になった。

宿には調理できるキッチンがあつたので、助かった。

今日はチキンのナップルソースがけと、ポテトサラダでございます。サクッと作って出すと、ミラは先日と同じように、電光石火の速さで食らいついていく。

道中、いくらか注意したマナーを意識しているのせいか、昨日より

は遅い。

ていつか、前よりマシだけど口の端に食べかすがついているよお嬢さん。

まるで子供だ。でも、こつも食べてくれると嬉しい。いつそ清々しいものがあるし。

「そついや、こつってワインも作ってるんだよな」

「ああ、パレンジの実で作られているって聞いたけど、明日に響くから飲酒は却下ね」

「即答かよ………変なところで真面目だねえ、優等生？」

「そつ言われたのは初めてだな」

「まあ、そつかもな」

アルヴィンが苦笑している。というか、一人旅に飲酒は禁物だろうに。こつとして護衛を抱える身としては、もつと駄目なものだ。

それに、なるべく酒は飲まないようにしてるんだよ。

前に飲んだ後のことだ。飲んだ直後の記憶が無くなっていて………その場にいたナディアからは、「お前は金輪際酒を飲むな。酔うな。次は殺す。絶対に殺す」とか顔を赤くしながら言われた。

かなりヤバイことやっちゃったんだろう。見たことがないほどに顔を赤くしていたし。

なんにせよ、記憶が無くなるってのは何となく面白くないので、あれからはアルコールは取らないようにしている。

「ま、雇い主の意見に合わせますか。で、俺はそのまま休むけど？」

「あー、僕はちょっと外に出てるわ」

ちょうどいい。前に聞いた、ベストスポットとやらに出かけますか。

「……………確かに、美事だなあ」

村外れにある果樹園。その上に、僕はいた。果樹の頂上付近にある実を取るために作られたのだろう、高いところにある足場の上で、一人で夕焼け空を眺めている。

以前にこの村に来た時、治療した相手から教えてもらった場所だ。

いわく、この景色が一番良いと。

高台の更の上に位置する、極めて高所に位置する場所から見下ろせる景色は、それはもうスゴイらしい。

で、その言葉は確かだった。

予想よりもかなり高い所まで梯子は伸びていたが、すぐに頂上まで登り切った後。

開けた視界から見えたのは、圧巻の一言。

まず、空が見えた。次に、大きすぎるほどの夕陽。

広い空。遮るものはなにもなく、遙か彼方まで見渡せる。

綺麗だ、と陳腐な表現が心に浮かぶ。陳腐だが、コレ以外に現しようがないのではないか。

いつもは何の気なしに眺めている夕焼けも、こうしてみれば壮大なスケールで行われている現象だと分かる。

と、風景に見惚れていたその時である。

「あ……………」

高台の奥の方から、幼い少女の声が聞こえた。

いったいこんな場所に、しかもこんな時間に誰がいるのか。あるいは同じ目的で、ここに上がっているのだろうか。

そう考えている最中に、少女はこちらに近づいてきた。

とて、とて、と確かめるように歩く少女。

観察して分かったが、何とも儚い、寂しいといった印象を思わせる少女である。

目は下を向いているのでわかりにくいだが、顔は整っている方だと思われる。あるいは、美少女の域に入るのではなからうか。

綺麗というよりは、可愛い。セミロングで、髪の色は金。だけど、ミラほど輝かしくはない。見た目の性格のような、抑えた金の色である。

年は10かそこらだろう。それなりに整った顔だが、幼さがはつきりに残っている。

そして、見た感じミラのような活発さを感じさせる印象はない。

そのせいか、特徴的な紫色の服が似合っている。レイアともまた違う感じだ。

少女然としていえると言えはいいのか。とにかく、付き合ったことがないタイプだ。

（ああ、思い出した、彼女がそうだ。一年前にここに来たあの日から、ちつとも変わっていないな）

果樹園で治療している最中、遠目に見た時の姿そのままだ。胸に抱いている人形もそのまま。

不気味なデザインの人形だけど、余程大切なものなのだろう。

まるで人間を相手にするような力で、優しく抱きしめている。

抱かれている人形は、眼を閉じたままだが。

（……………ん、閉じて？）

なにやら違和感があるが、取り敢えずはその違和感を無視し、僕は少女に話しかけた。

「えっと、僕に何かようかな」

取りあえずは営業スマイルで牽制する。

なんていうか、この少女からは威圧感を感じるのだ。はっきりとしたそれではないけど。

そう聞くと、少女は視線を左右に逸らしはじめる。

焦っているのか、慌てているのか、それとも戸惑っているのか。

混乱した様子を見せている。

（おとなしそうな子だな……………）

今までが今までのせいかな、異世界人を相手にしているような感覚が。

いや、珍獣というか。ともかく、相手にしづらい。

どうしたものか。そう思っていると
いきなり、爆弾
が来た。

正面。抱かれている人形が、いきなり眼を開けて
！？

「やあ！　こんにちわあア！！」

「へあっ！？」

あまつさえ、自己紹介をしゃがりました。

しかも、何故か力の入ったお言葉で。

全くの予想外、かつ不気味な外見とその口に驚いた僕は、瞬間的に間抜けな声を上げて、飛び退り

「あ……………！」

少女が焦った顔をする。それもそつだろう。

なんせ、今の僕の足元には。

足場が、存在しないのだから。

「ああああああああアア」

僕は間抜けな声を出しながら、高台から真っ逆さまに落ちていった。

「天狗じゃ！ 天狗の仕業じゃ！」

急いで宿に戻るなり、僕はミラとアルヴィンに向けて叫んだ。

悪魔のような魔物が現れたと。

一刻も早くここから逃げなければならないと。

さっき高い所から落ちたせいか、着地した足がしびれているが、そ

んなことを気にしている場合じゃない。

ああ天狗じゃ。この美しい黄昏の世界を侵略しようとする悪鬼羅刹、すなわち天狗が現れおった！

でも返答は切なかった。

「あー……えっと、ジュード？ もう朝か？ 朝ごはんはデザートとやらの、ナップルが欲しいぞ」

寝癖が激しい、寝ぼけているミラ。なんて言うか、空気が一気にしぼんだ。

「ってミラ、よだれが！ 一端起きろって！ いくらなんでもそれはまずい！ あと、少年は取り敢えずそこに座れ！」

落ち着かせようと声をかけてくるアルヴィン。こっちは大人の余裕を感じました。

で、僕は深呼吸をしながら気を落ち着かせると、見たものを二人に説明した。

「ぬいぐるみ……それは食べられるのか？」

「よし分かった。いいからミラは寝ててくれ」

精霊の主は昼の戦闘がきつかったせいか、役に立たない。

語尾に（笑）がつきそうなお人は、ひとまず寝ててもらおう。一向に話が進まん。」

「で、それはマジもんか少年」

「ああ。可愛い顔してあの娘、やってくれるもんだね。まさか大人しい外見を囿にして奇襲を仕掛けてくるとは……………」

また一つ、女性の恐ろしさを学んだ僕であった。

それから対策案などを話していると、ふと背後に気配が。

「あの……………」

声がして。振り返れば、奴がいた。

具体的には、先ほどの金髪の美少女が入り口の所に立っている。

「お前は、天狗の!？」

「……………天狗、ですか？」

「落ち着けて少年……………どうみても悪い娘じゃなさそうだぞ」

カオスになりそうな場合は、アルヴィンの一言でひとまずの沈静化をみせた。

「じゃあ、それはただの喋るぬいぐるみだと？」

「そうそう！ いきなり驚いて失礼しちゃうな」

「黙れこの謎生物Xが。というかぬいぐるみが言語を解するか。この雌雄同体。ってか、性別という概念があるかどうかも怪しいわ」

取り敢えず説明してくれたが、この物体はなんなのだろうか。害する意図がないのは分かるが、こつも正体不明ではこちらが不安になってくる。

さきほどは緊張していたせいで声が上がってしまった、と言うがそんなこと誰が信じるか。

でも、実際の所は判別がつかないでいる。

というか、見れば見るほどわからない。いったい、この目の前の物体は、何科の何類に該当するのだろう。

生物学的にもおかしいとこだらけだ。いや、生物じゃないだろう。見た目は人形というか、獣を模したぬいぐるみそのものだし。

だけど、自律して動いているようにも見える。腹話術じゃないし、宙に浮遊している。

うん、見れば見るほど怪しい。

でも確かに、悪いモノじゃなさそうだな。

「あの……わたし、エリーゼといいます。エリーゼ・ルタス」

「僕はティポ。エリーの親友だよ」

なんか自己紹介をしてくる美少女＋。僕はアルヴィンを顔を見合わせる。

意外そうな顔をしている。僕も、きっとそういう表情を浮かべているのだろう。

まさかここで、礼儀正しく対応されるとは思わなかったからだ。

見れば、少女の方は若干身体が震えている。ちょっと騒いだのが怖かったからだろうか。

僕はそこまできて、ようやく自分の状態を把握した。この少女を、怖がらせていることも。

だから、苦笑しながら自己紹介をすることにした。

若干の謝罪も含めて。

「ごめん、僕はジュード。ジュード・マティス」

「俺はアルヴィンだ。よろしくな、将来が楽しみそうなお嬢さん」

「で、こっちで寝ているのがミラ。美食に目覚めた女狼と言ってやってくれ」

そこからは、互いの誤解を解いたあと。ひとまず、解散することになった。

エリーゼの方は、まだ何かを話したがっていたようだが、夜ももう遅い。

空は相変わらず黄昏で、夜というものを感じさせないが、腹時計から言って時刻はもう夜半過ぎになっている。

明日の出発に差し障ると思った僕は、少女エリーゼに帰宅を促した。

そうして、翌日。

僕は朝食をしている最中、ミラに昨日のことを話した。

が、彼女は全く覚えていないようだ。ナッブルの実を食べながら、首をかしげて「そんなことあったか」と言いたそうな顔をしている。

まあ、ミラも昨晩はかなり疲れているようだったからな。

で、朝食後の食器を洗っている最中だ。ミラが、村の入り口か奥に続く、大きな通りで何をするわけでもなく佇んでいるのが見えた。

僕も食器を洗った後、通りに出てみる。そこには、朝から働いている村人の姿があった。

ミラは、そんな人達を、眩しそうな顔でじっと見つめている。昨日の駄目っぷりが嘘のようである。

威厳あふれる精霊の主。そんな単語が脳裏に浮かぶ。

僕は何か、話しかけるのも躊躇われたので、取り敢えずは少し離れた場所に、同じように立った。

手に持っているナップルをかじりながら、黙る。

（そういえば、なあ）

思えば、こうして落ち着いて二人で居るのは初めてのことだ。

だから僕はミラに、かねてから確認しておきたかったことを聞いた。

色々があるが、本当に聞きたいことは一つ。

研究所にあった、兵器。全ての事態の中核らしきもの。

黒匣^{シン}と呼ばれるもの。

そう、賢者の槍^{クルスニーク}に使われていたものについてだ。

「……………あれは、人が手にしてはいけないもの。人の手から、離さねばならないものだ」

「それは、あの兵器が危険なものだから？」

四大を捕らえうるほどの兵器。マナを吸い取る、殺傷兵器。

なるほど、それならば確かにそうだ。どという原理でできているかは分からないが、あれは人の手にあまる。

ともすれば、無差別に多くの人間を殺傷する兵器にもなりうる。

だけど、それは剣も同じだろう。槍も。人を殺傷する存在としては、刃物も弓矢も似たようなものだ。

あれだけが特別な意味が分からない。わざわざ精霊の主が出張るほどのものなのか。

「あれは、特別なものだ？」

推測をまじえて、問う。だが、ミラの返答はにべもなかった。

今度は突き放すような口調で、答えを返してくる。

「君が、その理由を知る必要を感じないな……………」

「それは、言えないってこと？」

問いながらも、わかっていた。なんというか、崩せない壁のようなものを感じる。ここだけは退けない、というような。

確かに、あれが危険なものだというのは分かる。なにせ兵器だ。

明記も明示もされていないが、あれを平和利用するなどありえないことだろう。

兵器は兵器以外の存在には成り得ないからだ。その名を冠されたものは、全て等しく、何かを傷付けるために存在する。

だから壊すのだと、そう言えはい。

なのに、言えない。言わないのか、言えないのか。

「……………刃物と同じようなものだ。それだけではない。あれは、存在してはいけないもの。理由は関係ない、壊さなければいけない、使つてはいけないものなんだ」

「理由は教えられないってこと？」

「君も、赤子が刃物を手にしていたらどうする？ 説明する前に、まず取り上げるだろう。そういうことだ」

ミラにしては珍しく、歯切れの悪い言葉。少しだが……………言葉を選んでいような。

本当は、一言でばつさりと切り捨てたいのだろう。黒匣^{シン}とやらに対して、目に見えるほどの嫌悪感を持っている。

だから、分かった。

なにか 誤魔化そうとしているのが分かる。

「赤子、ね。まあ、精霊様から見たら、そういうものなのかな……
……でも」

僕だったら説明して欲しいと考えるよ。ミラに、そう告げる。

「赤子だからと言って 子供だからといって、頭ごなしに言
われる覚えはない。」

子供は子供で、必死に考えているんだ。そりゃあ、一人前の大人
と比べられれば、幼く、稚拙かもしれない。

だけど、明確な一個の存在としてここに居る」

だから、一方的に頭を抑えつけられる覚えはない。言っと、ミラは
困ったような表情を見せる。

「そういう意味で言ったのではないのだが………」

眼を閉じて、考えている。

そうして、数秒はそのまま黙っていただろうか。その後、やはり眼
を閉じながらミラは言う。

「上手くは言えない。だが、あれは絶対に壊すべきものなのだ。そのため、私は存在している……………」

ゆつくりと、確認するかのよう。やがて、ミラは眼を開いて、告げた。

「それこそが、私の使命だ」

告げながら、向けられた視線の先。

そこには、平和に暮らしている村人の姿があった。

「使命、ね……………ん？」

そうして、感慨にふけていた時。平和なはずの村人の顔が、緊張するものに変わった。

何があったのかは、一目瞭然だった。村人達の視線が集中する先は、村の入り口で。

そこに、ラ・シュガルの正規兵が居るのだから。

「正気かよ……………！」

ここはア・ジュール国内だ。いわば敵国。国境の先に、しかもこんなに早くやってくるとは。

用心はしていたが、本当にこんな所まで兵を向かわせるとは思っていなかった。

この兵は、僕達を追ってきたのだろうか。わからないが、聞いて確認するわけにもいかない。

「見つかる前に村を出ようか。キジル海瀑は村の奥、西に抜ける間道の先にあるから」

「……………分かった」

見つければ、ここは戦場になる。巻き込めば後々面倒くさいことになるだろう。

そう判断した僕達は、そのままアルヴィンを連れて村を出ようとする。

だが、村の奥。海瀑に続く街道の前には、すでにラ・シュガル兵が配置されていた。

山の横からか、あるいは街道の横からか。なんにせよ、先回りされていたようだ。

「どうする……………」

「殴り倒していくか。いや、でも村に迷惑がかかるかもな」

至極まっとうなアルヴィンの意見。それを聞きながらも僕は強行突破を考えていた。

補足される前に、顔を見られないままぶち倒すのが最善だと。

だけど、後ろから聞こえた声に、思考を中断させられた。

「あの……………なにしてるんですか？」

「あ、エリーゼ」

見れば、いつの間にやら昨日の少女がいた。

「ふむ……………邪魔な兵士をどうしようか、考えていたのだが」

直球なミラの意見。聞いて、僕は思いついた。

「そうだ謎の物体。いつそのこと、あの兵士を食べてくれないかな」

「りょーかい〜！」

「喋った！？　って、食べる！？」

ミラが驚いている。だけど、昨日の僕ほどには取り乱していない。

そんな僕達をおいて、ティポと名乗る遊星からの物体Xは兵士に突入。

なんかの儀式のように、兵士たちの周囲をグルグルと回りだした。

その兵士二人と言えば、恐怖のあまり頭を抱えて震えている。

「やるじゃねえか……………」

親指をぐっと上げる。隣の二人は若干顔をひきつらせているが、これをチャンスと思いねえ。

このまま突入しようと、顔を見合わせる。

だけど、また声により行動は遮られた。

「ここで何をしておる」

僕達の背後。そこには、いつの間にだろうか、巨体が立っていた。

一言で表せば、ジャイアントおっさん。ヒゲはもじゃもじゃ。

衣装はどこかの部族のものだろうか、特徴のある柄をしている。

というか、とにかくなにもかもスケールが違う。上にも横にもでかすぎるし、持っている武器もでかい。

「これ、娘っ子。小屋を出てはならんと言っに」

「っ……………」

言われたエリーゼは、少し顔を逸らしたまま口を閉ざす。

それもそうだろう。このおっさん、ただのおっさんじゃない。

体格もあるが、それ以上に

（マナの氣勢が、気配が鋭い）

あまり感じたことがないぐらいに。

実際、おっさんは道を塞いでいる兵士を見るや、「ラ・シュガルも

んめ、勝手な真似を」と言った後。

近寄るやいなや、手に持っているハンマーでぶっ倒した。

頭をかじられていた兵士は為す術もなく吹っ飛ばされ、壁にたたきつけられた後、地面に倒れる。

「……………あの二人、ついてなかったな」

アルヴィンが言うが、全くその通りである。正体不明のぬいぐるみに襲われてホラー。

視界を防がれた後、怪力のバイオレンスである。

それなんてスプラッタ。いや、兵士さんは死んでないみたいだけど。

「ともかく、助かった……………?」

ぬいぐるみ攻撃の礼を言おうとする。だが、エリーゼはすでにそこにはいなかった。

見えたのは、小屋へと走り去る小さな背中だけ。

「礼は……………いいか、帰りにしよう」

槍を壊すなら、ニ・アケリアの帰りに寄ることになる。

その時でいいかと、アルヴィンとミラに視線を向ける。

「分かった、行こうか」

「留まるのもまずいしな」

二人の同意を得て、僕達はまた出発を開始した。

12話 「キジル海瀑にて」

ハ・ミルを脱出して、5時間ほどが経過しただろうか。ガリー間道を進み続け、昼を少し過ぎた頃。

僕達は間道が終わる場所、その手前までやってきていた。

もう少し進めなキジル海瀑。で、そこを越えれば精霊の里とも呼ばれる村、ニ・アケリアがあるらしい。

「でも、今日はひとまずここでストップね。野宿して、早朝に出発しよう」

「ああ、そうした方が賢明か」

「何………？」

アルヴィンは分かってくれたが、ミラの方は何故このまま行かないのか、と言いたそうな顔をしている。

いや、そりゃ無理つてもんどしょ。

「突っ切るとしても、所要時間が不明だし。それに、海のように水が大量にある所に強行軍するのはね。そこに徘徊している魔物の強さも分からないし、迂闊に進むのは危険だから」

せめてどのくらいの距離かがわかれば、あるいは魔物の強さが分かれば。どちらかの情報を得られていれば、このまま進んだかもしれない。

「ただ、」シルフで何時間か」とかいうはっきりしない情報を

頼りに進むのは危険すぎる。

夜になれば足場も見えなくなる。滑って転んで水の中に落ちるのは本当に危険なのだ。

特にミラ。泳げない彼女を抱えて陸まで運ぶ作業は、もう二度とこめんである。あの時はぶつちゃけ溺死するかと思ったし。

「お前たちでも無理なのか？」

「無理というよりは、やりたくないかな。何よりミラが危ないし」

「あー、濡れている岩場は滑りやすいしなあ。いくらマナで防護していると言っても、岩場でこけると危ないぜ？」

それに、油断したまま浅瀬に落ちたでしょう。そのまま気絶でもしたら、死ぬことも十分にありえる。

と、いう風に、アルヴィンと一緒に未だ納得いかないような顔をしているミラ姫へ説明を繰り返していく。

そして苦節10分の説得の後、彼女は、ようやく納得してくれた。

「それならば……………仕方ないか」

渋々という顔をするミラ。まあ、シルフで移動する時の速度を自覚していない、つても強行できない理由になっているからな。

今度はちゃんと距離を把握しておきましょう。そのふてくされる様子は、何かスゴイ可愛くみえるから良いんだけど。

それから、休める所を探した。魔物が襲ってこないような、高台が最適だ。

こういうものは、探せば見つかるものだ。そして、探さなくても見つかる場合がある。

代表的な例で言えば、近くの場所に別の冒険者や傭兵がいる時だ。一足先にここらにやってきていて、同じように休む場所を探している時。

例えばそう、右斜め前にある高台の上にあるような。

「ってあそこじゃん」

見あげれば、煙が上がっている場所があった。煙の色と、漂ってくる良い匂いからして間違い無いだろう。

登ってみると、思った通りに傭兵と行商人の一行がいた。

あちらからも僕達の姿は見えていたようで、登ってきた所に近づいてくる。

「お前らは……盗賊って面でもないな、旅人か？」

「そんなところです。僕とこっちの男は傭兵ですね。彼女に雇われたんですよ」

と、後ろにいるアルヴィンとミラを指す。

「へえ………」

傭兵らしき男が僕達を見る。って、特にミラの方を見ている。全身を舐め回すような視線だ。しかし対するミラは動じない。腰に手を当て、何を見ているんだというように見返すだけ。

気にもしていない、ということだろう。

だけど僕がムカツいた。男として気持ちが分かるが、ムカツく。

「つとお、怖い怖い。じゃあこっち来なよ。困った時はお互い様ってな」

傭兵の男が笑う。そこまで悪辣な傭兵じゃないようだ。で、連れられた先には、行商人の一行と傭兵達がいた。傭兵の7人は、団を組んでいるらしい。

行商人は3人だろうか。荷物と立ち方から見ると、たぶんそうだ。しかし、傭兵の方はあれだな。言えた台詞じゃないが、眼つきが良くない。得にミラを見る眼が。

傭兵の一人。恐らくはリーダー格であろう、整った顔に高い鼻を持つ色男が、ミラを眺めながら何事かほざいた。

「へえ………上玉じゃん。初めて見たよ。あらかたの美人は知り尽くしたつもりだったけどなあ」

先ほどと同じ、舐め回すような視線。特に胸のあたりに視線が集中している。

対するミラは、腰に手を当てながら何でもない顔をしている。それを見た傭兵は、「度胸もあるじゃん」と口笛を吹いた。

「護衛が必要ってんならよ。そんな貧弱そうな奴らより、俺らを雇わねえ？」

「いや、断る」

ずっぱりと。まるで刃物のような口調で、ミラは告げた。

「お前たちと居ると、敵とは別に自分の身を守る必要が出てきそうなのでな。それに、今は別の雇い主が居るのだろう。不義理を働くような傭兵を雇いたいとは思わない」

「はっ、そりゃごもつともだな」

傭兵のリーダー格は、まいったと額を叩く。器はでかいようだ。

統率もとれているらしい。まあ、喧嘩にならなくて良かったよ。負けるとは思わないけど、後々厄介なことになりそうだからな。

で、僕達は休憩する場所を確保した後、行商人の一行と情報を交換しあった。こちらから出す情報は、彼らがこれから戻るであろう、ハ・ミルのこと。

「なんだって？ ……ラ・シュガルの兵がハ・ミルに？ とうとう国境を越えてきたのか、ラ・シュガル側は」

とうとう、という言葉。

引っかかりを感じて聞いてみると、行商人は「嫌な情報だがな」と、顔をしかめた。

「ここ数年の動きだけだな。ラシュガル軍部の中で、どうにもきな臭い動きをしている一派がいるらしい。ア・ジュールもそれに対応して、新たな研究を進めているとのことだ」

確定情報ではないがな、と。噂と同じような確度らしいが、一応気にしておく必要があるだろう。

あの研究所の件もある。あの巨大な槍は、どう考えても対軍用。戦争に使われる類のものだったし。

「だが、ア・ジュールの方が有利かな」

「へえ、何で？ 20年前の開戦では、ラ・シュガルの方が優勢だったって聞くけど？」

アルヴィンの問いには、傭兵のリーダーが答えた。

「王の差さ。ラ・シュガルのナハティガル王も、兄王を蹴落として王位についた傑物だが………ガイアス王はそれ以上の化物だぜ？」

「へえ、妙に具体的だな。アンタ、もしかしてガイアス王を実際に見たことあるのか？」

「ああ、両方の王にな。で、俺は思ったわけよ。ガイアス王の、あの刀の前に立ちふさがるなら 単独でファイザード沼野一

昼夜越えをした方が、万倍マシだってこと」

言っているリーダーの顔色が悪くなっていく。他の団員達も同じ意見のようで、全員が頷いていた。

つて、比べる対象が突き抜けている。あの沼を一日で越えようとかが、自殺と変わらない。

一介の傭兵と言えど、実際に戦っていない相手にここまで言わせるとは。ガイアス王とは、一体どんな王なんだろうか。

「ああ、そういえば20年前の……ガイアス王はまだ12才だったって話だが。それでも会戦でかなりの活躍をした、って聞いたぜ？」

「半端ねえな、おい」

アルヴィンが呆れ顔だ。僕も同意する。12才で。あのエリーゼと同じぐらいの年で、戦場で無双したって？

一体どんな化物だ。

そこからは、目新しい情報もなかったので、休むことにした。

翌日。

まだ薄暗い時に、僕達は出発した。行商人達には、昨日の内に出発する時刻を告げていたので問題ない。キジル海瀑に到着したぐらいで、普通の朝になった。

「おお、綺麗だな」

砂の平原が広がっている。その奥には海のように拾い湖が。そのまた奥には、見上げるほどの大きさの崖があり、上からは水が流れ出している。

歩ける場所は、砂浜か、岩場の上か。魔物も居るようだ。

「見蕩れてないで、さっさと行くか」

「うん、夕方までには突っ切りたいしね」

「確かに、夜のここは歩きたくないな」

確認しあい、隊列を組んで先に進んでいく。

だが幸いにして、このキジル海瀑に出現する敵の強さはそれほどもなかった。

砂場や濡れた岩場など、格闘術を使う僕にとってはかなり辛いフィールドになるが、それでも問題なくすすめるぐらいだ。

お荷物になるかと思ったミラも、かなり成長している。だんだんと剣筋が冴え渡っていくのが、目に見えて分かるぐらい。

だけど、リアルオーブのリンクはミラとつないだままにしている。成長して、守る必要が無いとはいえ、万が一ということもある。

出現する敵も、その全ては把握できなていない。今までの街道とは違う、未知の場所ということもあるので、今回は慎重に行くと昨日の内に決めたのだ。

そうして、慎重に。うまく連携しながら、敵を順繰りに打倒していく。

「っとお、また団体さんが来たぜ！」

「僕は援護を！」

「私は左だな　　はっ！」

気合と同時に振り下ろされたミラの剣が、魔物に突き刺さる。

しかし、また致命傷ではないようだ。そこに、ミラは追い打ちをかけた。

「ファイアーボール！」

火球が怯んでいる敵に直撃。まともに食らった敵が、たまらずに吹き飛んだ。

そのまま、マナへと分解されていく。

「おっとお、こっちを忘れてもらっちゃ困るぜ！」

アルヴィンの武器　　ガンというらしい。火の精霊術を応用した

というらしいそれが、文字通りに火を吹き、弾丸が瞬く間に突き刺さる。

攻撃を受けた亀がひるむ。そこに、大剣の一撃が決まった。しかし、横合いから別の敵がアルヴィンに襲いかかる。なるほど大剣を振るった後、アルヴィンの身体は隙だらけに見えたが

「油断大敵だよ！」

それは誘いだった。不用意に近づいた魔物が、アルヴィンのガンで迎撃される。

（なるほど、ああいう使い方もできるのか）

小回りのきくガンは、あくまで牽制用というわけだ。相手の体勢を崩したり、今のよう到大剣攻撃の隙を埋めるための武器。大したものだ。一人で戦っても生き残れる装備だろう。

（こつちも負けてられない）

拳打も蹴撃も足場が命。いくらマナで強化しているとは言え、体重が乗っていない拳や蹴りなど気の抜けたソーダと同じだ。

でも、僕が使える技はそれだけじゃない。師匠から教えを受けたのは、護身を元とする格闘術。環境がどうであれ生き延びるという、生存術にも似た武術なのだ。

それに、この程度の足場なら何度か経験したことがある。

だから、ミラへの魔神拳での援護の間隙を縫って。僕の方に近づいてきた魔物に、してやっつたりの笑みを返す。

「行くっ！！」

カニ型の魔物を足で搦り上げ、宙に浮かんでいる足を掴み。ふりまわして岩場に叩きつけると同時に、拳を叩き込む。

「ガアッ！！」

消えていく魔物。だが、背後からまた別の魔物が襲いかかってきた。僕は咄嗟に前へと飛び、岩場を足場にして跳躍、敵の攻撃を回避しながら、攻撃の体勢に入る。

「飛天翔駆！」

脳天へ双足蹴りを叩き込まれた魔物が、声もなく絶命する。

それを足場に、更に飛び上がり、また別の魔物へと蹴りを叩きこむ。

「おー、やるねえ少年！」

「ずいぶんと身軽だな！」

ミラとアルヴィンの声が聞こえる。どうやら、二人とも周辺に居る魔物を倒し終わったようだ。

僕達はそんな調子で次々に襲い来る魔物達をたらいながら、キジル海瀑を進んでいった。

ミラも、街道で戦っていた頃よりは、幾分かマシになっている。剣

も、そして精霊術の使い所も上達しているのだ。

近距離から遠距離まで、間合いを選ばない戦い方ができている。それでも慣れない戦い方や、経験をしたことがない徒歩での旅に疲れを感じているだろう。それなのに、愚痴の一つもこぼさないとは大したものだ。

途中、妙な形の岩がたくさんある所があり、そこはちょっと進むのに骨がおれたが。ミラは望むところだとばかりに登っていく。ちよつとパンツが見えかけてドキリとしたのは秘密だが。

「ふむ、この岩は……精霊の影響を受けているな。精霊たちが集まっているのか」

なんでも、精霊たちが集まる場所には、こうした岩が多いらしい。ニ・アケリアの近くにある、精霊が集まる山とやらの似ているそうだ。

「つまりは、この先が？」

「ニ・アケリアで間違いなさそうだな」

少し疲れた顔をしていたミラの顔が、明るいものにかわる。故郷に帰られる事が、嬉しいのだろう。

そのまま少しすると、また開けた場所に出た。大きな湖面があり、その中央を岩の足場が通っている。安定した足場だ。敵もいないので、ちよつと気晴らしにと雑談を試みた。

「もうすぐミラの故郷か。精霊の里、って言うけど、いいところなの？」

「うむ、私は気に入っている。瞑想すると力が研ぎ澄まされる気がする。落ち着ける所だ」

「へえ」

アルヴィンが感心したように頷いている。

それより、座禅を組むとミンスカがいけない感じになるなーとか、そんな事を考えてしまう僕は駄目なのだろうか。

「ふむ、何やらまた不愉快な空気が……」

「ちょっと休憩しようか！ 座ろうよ！ 硬い岩場歩いたせいか足も痛いし、疲れたままだと危ないしね！」

誤魔化しの言葉だが、二人も疲労がたまっていたのだろう。

頷き、提案に乗ってくれと足を止めた。

「いや、少年も少年っぽい所残ってるんだな」

「失礼な。どこからどう見ても普通の少年だよ、僕は」

「そう振舞いたいただけなのかも……っと、怖い顔で睨むなよ」

まあ、そっちの方が素に見えるがね。アルヴィンはそう言いながら、意味深な笑顔を向けてくる。

「何が言いたい？」

それにイラッときた僕は、思わず口調を取り繕うのをやめてしまう。だがアルヴィンは予想通りだと、また笑みを深くする。

「やっぱり猫かぶってたか。なにか、違和感があると思ってたぜ」

「で、猫剥ぎとれて満足か？」

何が目的か。身構える僕に、アルヴィンはいや、と肩をすくめる。

「猫かぶったままなんて寂しいじゃねーか。俺だってお前とは仲良くしておきたいんだぜ？」

「よく言うよ。それならその全身から漂う胡散臭さをどうにかしてくれ」

「ははっ、素のお前さんは顔と違って辛辣だな。眼つきも悪い」

「よく言われる」

返すが、どうにもアルヴィンは動じない。一体なにがしたいというのか。

訝しる僕に、アルヴィンは「話は変わるが」と前置いて、言った。

「今日、動き良くなかったな。もしかしてハ・ミルのこと気にしてんのか？」

「……………そういったつもりは、ないけど」

村人でどうにかするだろう。むしろあのおっさん一人でどうにかするレベルだ。

「本格的な追跡部隊が編成されるには、まだ時間がかかる。あれは僕達を追うための兵じゃないと思うけど？」

「それには同意だな。で、別に懸念すべき事項はないと？」

「ああ……………いや、エリーゼという少女な。たすけてくれたし、一言だけ礼を言わんと」

どうにも、寂しそうな。別れてからだけど、そんな印象を抱かせる少女だった。

謎生物は不気味だけど、まあよくよく見れば面白い存在だ。

それにしても、何故あんな所に一人でいたのか。もしかして、友達がいらないのだろうか。

（かつての僕と一緒に、と……いや、そうかもな）

そこまで考えて、なんとなく分かった。話しかけてきた理由も、あの後僕を追ってきた理由も。

「…………話し相手が欲しかったのかもな」

僕と一緒に。あの人形のせい、妙な威圧感のせい。エリーゼは、あの村の中での居場所を持っていないのかもしれない。だから、村の外の人間である僕達の手助けをしたのかもしれない。

一言、お礼の言葉を聞きたくて。もしかしたら、会話だけでもしたくて。

「どうした、なんだ藪から棒に。それに、何か…………変な顔だぞ」

「ほっとけ。こっちの話だから」

初日のは、話し相手が欲しかったのかもしれない。

すぐに追いかけてきたし、妙に追いつかれるのが早かったし。それだけ必死だったのかもしれない。

でも、あれ、ちょっと。

（梯子で降りたにしちゃあ、追いつかれるのが早すぎたような）

もしかしてあの高さから、飛び降りたとか。

いや、見た目あの華奢な身体で着地の衝撃に耐えるなら、どれだけ

のマナ補強が必要になることやら見当もつかない。

まあ、それも今度お礼を言う時に確認すればいいか。

お礼を言うのは確定だし。もしあの場で強行突破してたら、ラ・シユガル側に僕達の居場所がばれていたかもしれないし。

「まあ、何にしてももうすぐ到着だ。このまま何も無ければ
って」

あつちで休んでいるはずの、ミラの声が聞こえた。

それは、何か苦しさを感じさせるような声で。僕はアルヴィンを顔を見合わせると、そっと近づいていった。

で、岩場の向こうにまでたどり着くと、予想外の光景が広がっていた。

建物の2階ほどの高さがある岩場の上。そこに、ミラに勝るとも劣らないナイスバディなお姉さまが立っていた。

およそ女性として理想的であろうラインを描いている尻に、動物な尻尾のようなものがついている。

服も大胆だ。太もも、そして胸元から下腹までに肌を隠すものはほとんどない。申し訳程度に、網のような布で覆っているだけ。

顔もキレイだ。冷たい感じを抱かせるが、メガネをかけているその顔は、ミラとはまた違うタイプだけど、はっきりと美女だと言える。そんな、見た目痴女な格好をしている美女が、大きな本を片手に。見たこともない精霊術のようなものでミラの身体を拘束したまま、その身体をまさぐっている。

端的に言って桃源郷だった。

小声でちよつとアルヴィンと話し合う。

『すごいエロスを感じるね』

『あいつは……いや、そうだな。なんだ、お楽しみの最中か？ 何にしても眼福だな』

『いや、違つてしょどう見ても。超眼福なのは同感だけど……くそ、この距離じゃ何話しているのか分かんねーな』

アルヴィンの言葉にひっかかるものを感じたが、スルーする。

と、何やらミラの胸の中から、コースターのようなものが出てきた。

『え、なにあれ。マイ・カップならぬ、マイ・コースター？ 僕のない間にハ・ミルで買ったとか？』

『いや、俺に聞かれても分からねえけど』

『ちっ、アルヴィンって使えねー男なー』

『お前さん、素だとホントきついし嫌な性格してんのな』

『胡散臭いアルヴィンよりはマシだよ。でも』

ともあれ、ミラを助けなければいけない。

岩場の裏から回り込み、二人同時の奇襲をしようと考えた。

が、遅かったようだ。

「出てきなさいよ」

僕達が覗いていること、もう悟られていたようだ。というより、僕達が居ることを見越しての奇襲だろうしね。

ミラを人質に取られているも等しい状況だから、このまま隠れているという選択肢は有り得ない。

取り敢えずは言うとおりにすることにした。

すると、美女がアルヴィンの方に視線を向ける。

「…………あら、今度はこの娘にご執心なのかしら？」

「放してくれよ。どんな用かは知らないが、彼女、俺の大事な雇用主なんだ」

「近づかないで。どうなるか、わからないわよ」

えっと、アルヴィンの方もあの痴女を知っているようだったけど、この雰囲気は何か。

もしかして、元カノか何か？ これって痴話喧嘩？

目の前のワイルドえろえろねーちゃんってば、アルヴィンの言葉に、えらい怒ってるように見えるんだけど。

ともあれ、どうするか。彼我の距離間は20歩程度。おまけに相手には高所の利がある。

この距離じゃあ一足飛びつてわけにもいかないし。

（アルヴィンのガンなら…………いや）

確認できないが、もし彼女が知り合いというなら、アルヴィンの武器も知られている可能性が高い。

もしかすれば、ミラを盾にされるかもしれない。

だからまず、ミラに向いている注意を逸らすか、彼女を拘束している術をどうにかするべきなのだが。

（だけど現状、僕とアルヴィンだけじゃ無理）

打開策の材料には、足りない。

ならば、簡単だ。

『一度戦って、生き残りたいと決めたのなら、周辺の環境も味方につける』という師匠の教えに従い、他に使えるものを探すだけだ。

そして幸運なことに、“それ”はすぐに見つかった。

それを軸とした、簡単な作戦も思い浮かぶ。

僕は数秒でそれをまとめると、小声でアルヴィンに話しかける。

『アルヴィン、そのまま聞いてくれ……………右上にあるあの大岩、それで撃てるか？』

『……………この距離ならまず外さないな。何か策があるようだが、タイミングは？』

『一射目はすぐに。で、合図するからその時に二射目を。彼女の足元にある岩場を撃ってくれ』

『了解！』

これ以上話しあっている時間もない。

まずアルヴィンが、ゆっくりとガンを構える。

「あら、可哀想。この娘は見殺し？」

ガンを見据えながらも挑発してきた痴女を無視し、目標を右斜め前にそえる。

女は油断しているようだ。しかし、この武器をみて動揺もないということは、アルヴィンについてはある程度は知られているということか。

それが、この場では上手く作用する。もしガンを知らないものとして捉えていたのなら、敵の警戒は深まっていただろうから。

そして、アルヴィンが見据える先には、崖に張り付いている岩で。

引き金が引かれると同時に、数発の弾丸が岩に直撃した。

直後に、“それは起きた”。

衝撃を受けた大岩。

その横から突如、大きな足が生える！

「なっ」

拘束している痴女が驚きの声を上げる。それはそうだろう。

なにせ、岩だと思っていたものから足が生えて、突然動き出すのだから。

（よし、予想通り！）

マナを注視すれば分かる。あの大岩は、巨大な魔物が擬態していたものだったのだ。

前に文献で読んだことがある、突然変異種的大型魔物。

生態は分からないので何故あの場所でじっとしていたのかは不明だが、恐らくは眠っていたのか、ただ動くのが面倒くさかったのか。

だが、撃たれたショックはかなり堪えたのだろう。覚醒し、何やら物騒なマナを出し始めている。

「今！」

そして合図と同時に、僕は走りだした。

合図を受けたアルヴィンが撃つ。

弾は彼女の足場となっている岩に命中し、敵の女はそれに驚いた。

集中が乱れたせいか、ミラを拘束していた術が解かれ、宙に身体を縫いとめられていたミラが、そのまま下の地面へと落ちる。

「ミラ、こっち！」

着地するミラの手を引きながら、即座にその場を離脱する。

そして、間一髪。

先ほどまで立っていた場所を、魔物の巨大な足が踏みつける

軽く、地面が揺れた。

その中で僕はミラの手を引きながら、ひとまずアルヴィンが居る所まで退避する。

「上手くいったな………っと、どうやらこっちに来るみたいだぞ！」

見れば、あの痴女はどこかに行っていた。逃げたのか、吹き飛ばされたのか。

どちらにせよ、目の前の魔物をどうにかするのが先決だ。

距離は開いている。この巨体、そして先ほどのような機動力を見るに、注意すべきは突進の一撃。

まずはそれを避けてから懷に……………

「って、ミラ!？」

横目に、ミラの視線が地面へとそれたのが見える。

目の前の魔物から、彼女の足元にあったコースターのような、円盤形状のなにかに視線を向けて

「ば、前を、危な」

と言いながらも魔物のマナが膨れ上がるのを感じ。僕は、言葉では間に合わないことを悟って。

だから一歩、僕は注意を逸らしたミラの前に踏み出した。

予想通りに突進してきた巨体の前に立ちふさがるが

「っ、ジュード!？」

巨体の体当たりをまともに受けた僕は、ガードした腕ごと、ボールのように吹き飛ばされた。

12話 「キジル海瀑にて」(後書き)

・突発的な声優ネタその1

リアラ「ねえ、ルルウの声で“栗”って言うてみて?」

ミラ「……………くり」

デューク・リアラ「あはははははは!」

・ボツにしたIFネタ

ジュード「お前は……………アルヴィン・H・ダベンポート少尉!」

アルヴィン「いや会社同じだけど作品が違うから!」

・突発的な声優ネタその2

アルヴィン「ピッピッピッ……もう止まっちゃえよ時間」

ジュード「あ、DJ　ンドルさん、コ　ドルワ。ぶるっきゃおう
ぶらむにー」

アルヴィン「ハイ皆さんコン　ルワーって人のネタパクってんじ
やねーよブツ殺すぞこの野郎！　ってあーぶるっきゃおうぶらむに、
ねーって間違えてんじやねーかこのボケ！

ってこれは流行るよ絶対うけるってモニターの前のちびっ子諸君
も暇があったら叫ぶんだ、ハイ　」

13話 「戦いのあと」(前書き)

リアルオブの設定に関しては、独自の設定となっております。
原作ゲームの通りになると、どうにもおかしいことになりそうなので。

13話 「戦いのあと」

急速に視界が変動していく。それだけの勢いで飛ばされているのだ。ただ僕はやるべき事を優先した。リアルオーブのリンクで、ミラへ『逃げて』と送る。

（ よし ）

強く念じたからだろう。ミラは即座にその場から飛び退いた。

間に合ったのは、ガードの瞬間に僕が踏ん張ったから。魔物の突進の速度はかなり緩まっていたから、回避できたというわけだ。

考えながらも、僕は背中にマナを回す。直後に岩へとぶつかった。

一瞬だけど、呼吸が止まるような衝撃が背中を襲う。数力所だが、岩肌にぶつかって切れたようだ。

血が肌を流れていくのを感じる。

「ジュード!」

「無事か!」

二人の叫び声。それに対し、親指を立てて返答。ミラには『大丈夫

だから前に集中して』とリンクで念を送る。

確かに今の一撃で負傷はしたが、この程度なんということもない。
怪我のうちにも入らない。

せいぜいが打撲といった所だろう。魔物の一撃も弱く、正面から受け止めたわりには痛くない。

だから反撃に出ることにする。

何より。

（借りは、返さないとなあ！）

痛いものは痛いのだ。痛いし……本気でムカついた。

強敵ならば戦意を奮っていただろうが、こいつは弱い。違うからムカつく。

自分に対しても、だ。弱い相手に足をすくわれるほど、苛立つことはないから。

フラストレーションが溜まっていたせいもあるだろう。今の僕の胸中では、怒りの火で煮えたぎっている。

ああ、先日の傭兵の分も、このクソ魔物にぶつけてやるか。

丁寧、丹念に

拳と蹴りを、骨身に染み渡らせてやる。

「いくぞあー！」

僕は笑いながら、着地と同時に魔物へ向けて走りだした。

『ミラ、ファイアーボールを！』

同時に、ミラに指示を出す。

援護を受けながら、まずは一撃、鼻っ柱に叩きこむために。

だが、そう簡単にはいかなかった。

「ジュード、右だ！」

アルヴィンが叫んだ方向から、巨大な腕の一撃がうなりをあげて襲いかかってきた。

「甘え！」

腰を落とし、拳を横薙ぎに振りぬく。

マナで固めた裏拳が、巨腕の一撃を打って落とした。この程度のマナなど、物の数ではない。

（でも、リーチが長いな！）

だけど間合いでいえば、あちらの方が圧倒的に有利だった。

剣やガンといった中距離武器や、飛び道具。または精霊術があれば違ったのだろうが、その全てが僕には扱えないもの。

いや、魔神拳はあるのだが、それよりも殴りたいのであって。なにより、直接殴った方が威力も出るし。

「業火よ、爆ぜよ………ファイアーボール！」

ミラの精霊術が炸裂する。だが、相手は怯むだけにとどまった。

単純に火力が足りていないのだ。四大の力を失う前であれば、もっと威力は出ていたのだろうが。

「言ってる場合じゃないか、魔神拳！」

ミラの、術後の隙を埋めるように、マナの塊をぶつける。相手が怯み、その間にミラはまた距離を取った。

（それにしても、危なっかしい）

失った直後よりは、かなりマシになっているが、それでも間合いの取り方が大胆すぎる。

フレアボムにウインドカッター、無詠唱の精霊術を使いながら、なんとか戦えてはいる。

だけど、ちょっと相手に近い間合いで戦い過ぎている。あれじゃあ、いつ死角からの不意打ちを食らうか分からない。

相手の腕は大きく、その気になれば背後から抱き込んで潰すような攻撃も可能だろう。

あるいは、また突進の一撃を受けかねない。

（まずは僕に惹きつける。その後、攪乱しながら殴り合うか）

ひとまず初撃をぶち込み、こいつに僕を意識させなければならない。

その後でなら、ミラを援護しながらでも戦える。守りながらもこいつを叩き潰せる。

アルヴィンは一人でも問題ないだろうし。

だが、どうやって僕を意識させるか。

強烈な一撃を叩きこめるのであれば話が速いが、この状況じゃあれは難しい。

助走しながらの一撃は無理だ。

間合いまでたどり着くのが難すぎる、絶対に途中で邪魔をされて、勢いが殺される。

不発に終わるだけだろう。

とはいえ、近寄った上で、腰を落ち着けて拳を叩きこむというのも時間がかかる。

ミラは、あ、ちょっと、危ないって。

（早く。何か、利用できるものは……って、発見！）

視界の端に、アルヴィンが大剣を切り上げているのが見えた。

そこで、先日話し合った例の技を思い出した。

普通に飛んでも叩き落されるだけだろうが、あの技ならば問題ない。

僕はミラとのリンクを切って、アルヴィンのリアルオーブとリンクすると同時に、叫んだ。

「ミラ、今は一端下がって！ 僕に注意を向けるから、またファイアーボールを頼む！」

「っ、分かった！」

リンクを切られた時に、少し動揺したのか。気を取りなおしたという風に答えると、指示の通り、後ろに下がった。

『アルヴィン！　いくぞ、僕の踏み台になれ！』

『いきなり何を

』

「共鳴術技だ！　リンクスキル前に話した！　その剣で僕を……………」

手早く説明。下地があるので、分かってくれるだろう。

「なるほど、そういうことか！」

作戦を告げると、アルヴィンはすぐに納得してくれた。

「じゃあ牽制の後、行くぞ！」

言いながら、アルヴィンはガンで相手を牽制しながら、僕が近づくの待つ。

そして、僕がその範囲内に入ったと同時に、大剣を構えた。

「ミラ、詠唱準備！　僕が“蹴った”直後に、お願い！」

「分かった！」

「行くぜ、ジュード！」

そして、アルヴィンが剣を斬り上げた。僕はその上に乗り、自分の跳躍力をプラスして、空高く舞い上がり。

落下する勢いに、マナの威力を加えて。

「「飛天翔星駆！」」

敵モンスターの巨大な背中へ、右足で蹴りを叩き込んだ。

『ガアアアアッ！！』

魔物の悲鳴がする。しかし、構うものか。そのまま僕は背中に捕まると、立ち上がる。

背中に乗っている僕を、魔物は叩き落とそうとする。

だが、それもワンテンポ遅いよ。

「業火よ」

そう、僕に意識が集中しているのなら。

「爆ぜろ！ ファイアーボール！」

ミラの術を止められない。その上、意識の外からの攻撃なので、不意打ちにもなる。

そして、狙い変わらず、ミラが放った火球が魔物の頭にぶち当たった。

火が弱点なのか、あるいは不意をつかれたからか。

魔物はたまらないといった感じに、また怯む様子を見せて。

（隙あり、だ！）

機は我にあり。

立ち上がり、腕を交差。直後に力いっぱい振り上げて。

「これでも」

そして赤くなるほどにマナを、拳の先に集中させて！

「喰らえっ！！」

渾身の力で、振り下ろす。硬化したこの振り下ろしの下段突き、
”烈破掌”は本気で打てば岩盤をも打ち砕く。

その一撃は、見事に芯まで通ったのだろう、直撃した拳の先から、
確かな手応えを感じた。

その証拠として、魔物が悲痛な叫び声を上げて暴れまわる。痛がつ
ているのだろう。

「つとおー！」

流石に乗っていられなくなったので、跳躍し、砂浜へ。

詠唱を終えたミラの前に、守るように着地する。

「よし、援護ありがとー！」

「……………本当に無茶をするな、君は」

「無茶じゃないさ。それにこの魔物は弱い」

威圧感なんて感じない。あの時のミラの方が、万倍は怖い。

だから、無茶でもなんでもないと答えると、ミラは苦笑を返した。

まあ、言葉にこまるか、今の発言は。

「なににせよ助かった。いや 先ほどの礼は、こいつを倒してからにするか！」

「いいええ、戦闘前に良いモノ見れたから、それで良し！」

「ちょ、正直すぎるぞジュード少年!？」

まあ、そんなこんなあつて。

あの一撃に恐怖を覚えたのか、僕の攪乱にあっさりとペースを乱された巨大な魔物は、ものの40秒で僕達に倒された。

倒れて、マナに還元されていく魔物を見ながら、僕はすっきりして

いた。

鬱憤も晴れたし、ミラも無傷だし、貴重な工……げふんげふん。

「ま、言うこと無いぐらいの快勝だね？」

「しかし、案外脆かったな……いや、それでも油断していたら、どうなっていたことやら」

「まあ、運が悪ければ……死にはしないまでも、足止めされるぐらいの負傷はしていたかもね」

そう言うと、ミラは真剣な顔で頷きを返す。

「確かに、正面からあの一撃を受ければ……あのタイミングでは、私では防御しきれなかった」

「まあ、僕もね。ああいうのを得意としているから」

僕は、精霊術は使えない。だから、精霊術の修行をしたことがない。

だけど マナを扱う技術なら、師匠を除く誰にも負けない自信がある。

細かさなら、レイアに一步劣るだろう。

だけど、防御や攻撃といった、咄嗟の対応が必要になる場合の“精度”と“精度”。

五体を武器として使うので、そのあたりはとことんまで鍛え上げた。

今の僕ならば、常人の数倍の効率で、その結果を導きだすことができるだろう。

（それでも、あの一撃はぎりぎりだったんだけどね）

と、いうよりも。

「まさか、あそこで目の前の敵から意識を逸らすとは思わなかったよ」

あの瞬間は、本気で焦った。そう告げると、ミラは少し申し訳なさそうな顔をする。

殊勝な表情だ。なんか、見たことない顔をしてる。

「それについては、反論のしようがないな……助かったよ。あれも無事回収できたんで、結果はOKなのだが……」

自分の胸元を軽く叩くミラ。

（いや、パネエっすね!?!）

シリアスが吹っ飛んだ。

てか、叩くとそのでかいのが……少しだけど、ぷるんと揺れます。

（く、興奮したせいで背中が!?!）

ちょ、止めてくれませんかね。

こっちも色々あるんですよ。血流が早くなると、背中が痛くなるじゃないですか。

思わず敬語になってしまった僕だが、ポーカーフェイスで我慢しつつ、何とか気をとりなおした。

で、水面下でたばたしている僕の目をみながら、ミラは言う。

「先ほどは……すまなかった。岩にぶつかっただろう。どこか、怪我をしたのではないか？」

「いや、怪我は無いよ。まあ、僕が提案した休憩つてもあるし。自業自得つてもあるから」

怪我はないというのは嘘だが、僕に原因があるのも事実。

でも、こんなの大した怪我じゃないし。というか、守ると決めたのは僕だ。なのになんで、ミラは僕なんかのことを心配しているんだろうか。

わけが分からない。それに、欲しいのはそんな言葉じゃない。

「…………ミラ。こういう時は謝るんじゃないさ」

言うつと、ミラはきよとした顔をした後、その顔を微笑にかえた。

「ああ　　ありがとう、ジュード」

「どういたしまして」

うむ、受けるなら謝罪より感謝の方が気持ちいいよね。あと、笑顔の方が眼福だね。

そんな風に、余韻を味わっているというのに、アルヴィンが横から乱入してきた。

「いやー、ジュード君……俺とミラにする態度、あまりにも違わなくねえか？　つつーか、王様と一等兵ぐらいの扱いの差だと思うんだけど？」

「それは自然の摂理だよ」

笑顔で言い切ってやる。何もおかしいところはないじゃないか。

野郎と美女。胡散臭い男と、キレイかつなんか可愛いおねーさん。

対応が別になるのが、世界の真理だ。一緒にする方が失礼だろう。主に世界に対して。

「ミラだって女性なんだし。美女を守れるなら、怪我なんてなんのそのって考えるでしょ……って、ミラ、変な顔してるけどどうしたの？」

「いや、私を女性扱い……は分かる。だが、私を守る者扱いにする？」

「うん。約束したし」

即答すると、また不意をつかれたように、目をぱちくりとさせるミ

ラ。

その後、口を押さえて、くすりと笑った。

「えっと、どうしたの？ ……まさか実は男とか！？」

そんな立派な双子の山を抱えているのに。驚いていると、こつりと頭を叩かれた。

「誰が男だ。いや、君は私を人間のように扱うのだな、とな」

微笑むミラ。

その時の顔は、何というか、今までとは違っていて。料理の時とは別に、別の感情から笑っているように見えた。

それが、本当に綺麗な顔で。

だから僕は、思わず動揺して、余計なことを口走ってしまった。

「いや……だつて、さあ。見た目人間だし、さっきみたいに触れると変な感じをしているのが見て取れたし。女性なんだなあ、って思つて……………あ」

気付いた時には、遅かった。

「……………さつき、触れられる？ ……なるほど」

綺麗なはずの笑みが、恐ろしいものにかわる。声が、その、笑顔なのに低くなってるんですが。

「ふむ、眼福と言った意味がわかったぞ……先程の一部始終を見ていたのだな？　すぐに動かないで、じっと観察していたと」

「いや……チガイマスヨ？」

目を逸らす。でも、威圧感が消えてくれない。

そんな中、何とか誤魔化そうと口を開こうとした時。

「で、少年。あの場を見た感想は？」

「ぶっちゃけ混ざりたかった、って痛え！？」

ごつりと、今度はゲンコツが落とされた。

（つーかアルヴィン、その横槍はナイスタイミングすぎるだろ！）

これ以上ない間で話しかけられたから、思わず素直に答えてしまったじゃないか。

ひょっとして復讐か。差別に対する復讐なのか。あれは区別だというのに。

「まったく……昨日の傭兵といい、君といい。男というものは皆、そんなモノなのか？」

呆れたような、怒っているような。

そんな口調で、ジトリとした目で睨まれながら、叱りつけられました。

怖いから反論もできない。

で、数分後。

そのあとは、ミラを襲っていた痴女について話した。

一体何者なのか。何故、ミラを狙ったのか。

「……………実はレスビアンの変態、とか」

初っ端から爆弾発言を投下。しらはつくれそうなアルヴィンに対してのそれだったのだが、胡散臭男うさんくさなおは華麗にスルーした。

で、ミラにはジト目で見られた。そんでもってまた怒られた。

おのれアルヴィン。戦う前もなんかムカつくこと言ってたし、いつかやってやる。

「……………何にしても、見たことのない精霊術を使うやつだったな。腕も、相当たつと見たけど、どう思うよ」

「ああ……………確かに、な。地面に方陣が浮かんだかと思うとな。次の瞬間には、マナの輪が出てきて、すぐに捕らえられてしまった」

「一瞬で、か」

なるほど、見事な腕だ。とすれば、逃げたのだろう。道中の戦いを見られていたと仮定するなら、こちらの力量も計られていたと見て間違いない。

「そうだなあ。直接の戦闘力は分からないけど、見た目　ソバカスの銀髪チビぐらいのマナは持っていたようだし。まあ、スタイルは天と地ほどの差はあったけど」

「それはもういい。だが、銀髪チビとは………研究所にいた、あいつか。なるほど、それぐらいの力量はあったろうな」

「いや、銀髪チビって誰？」

「年中発火している危険な野犬だよ。なんか酔っ払いみたいな歩き方してるから、見れば分かると思う。力量は………僕よりちょっと下ぐらい、かな。なんにせよ厄介な敵だよ」

性格はともかくとして。あいつの力量は断じて舐めてかかれるレベルじゃない。

一人ならともかくとして、今のように誰かを守りながら戦う状況とかは、考えたくないぐらいに。

きつと決死の戦いになる。

「だから……早く出発しようか。ミラが四大の力を取り戻せたのなら、話もまた違ってくるし」

取り戻せるかどうかは分からないが、力が戻るならそれに越したことはない。

僕の提案に二人は頷いて、荷物をチェックし始める。

「しかし、とんだ休憩になったね……」

「だが、もうすぐだろう。周囲を警戒したまま進むとするか」

そうして僕達は、またニ・アケリアに向けて歩き出した。

それから、雑魚の魔物を蹴散らしながら進んだ。

道中、雑魚を相手に。さきほどアルヴィンと使った共鳴術技を披露した。

ハ・ミルで考えたそれを、何パターンか試して、ミラに解説しながら

らどんどんと歩を進めていく。

「では、先ほどの技が？」

「“飛天翔星駆”ってね。僕がよく使う技、“飛天翔駆”の強化版だ」

案はあって、アルヴィンにも話していたのだが、練習はしたことがない。

ぶつつけ本番だったが、よく上手く当たったものだ。着地点を間違えば、間抜けなことになっていただろう。

「二人で行うのか……コンビネーションが肝になるな。ああ、だからリアルオーブを？」

「戦闘中に余った、余剰マナを貯めてからね。互いのリアルオーブの余剰マナを共鳴させた後、意識を深い所でリンクさせた上で、初めて使えるようになる特殊技なんだ」

「便利な技だな……だが、私には説明しなかったのは、どうしてなんだ？」

「まあ、基本の戦い方を知らないうちは、ね。取り敢えずは、まともになれるようになってからって思ったんだよ。集中も途切れるし、逆効果になる可能性が高いしね。でも、リアルオーブもかなり成長してきたようだし……」

いくらか、動作補助のみだけど、オーブの種は咲いていた。

このリアルオーブに示されている種は、その色ごとに、マナの運

用効率を高めてくれるのだ。

花は自然に咲いていく。リソースは限られていて、そのオーブの出来る範囲にも限りはあるけど。

だが、マナによる腕力増強、脚力増強、敏率増強。マナによる防御硬化、精霊術行使時の変換効率改善、精霊術防御に使うガードの効率改善。

そして、マナ総量の底上げや。

自分の使う技を登録すれば、その精度や威力を上げることできる、優れもの。

戦う者にとっては必須の、本当に重要な道具なのだ。

今では、作る技術が失われているせいか、かなりの貴重品になっているのだが。

「で、ミラも……自分の使う剣技を、いくつか考えたんでしょ？」

「ああ。力を失うまでを含め、今まで培ってきた戦闘経験からな」

「なら、早めに登録した方がいいよ。その上で、数をこなした方がいい。その上で、共鳴術技を考えようか」

そんな風に戦闘談義をしながら。

それでも周囲の警戒を怠らないまま歩いて、一時間ほど経過した後だろうか。

「あれは……」

ようやく当初の旅の、最終目的地が見えた。

砂浜の終わりに、村の門なのだろう、大きめの建造物と。

その前に立っている、村人らしき人の姿が見える。

「あそこが、ニ・アケリア？」

「……そうだ。入り口から出入りしたことはないが、あの門の形状と、表面に描かれている模様には見覚えがある」

なるほど、ならばここが真正正銘の精霊の里というわけだ。

と、ミラの声の中に、少し違う感情が含まれていると、そう思った。

「ミラ？ えっと、何か変な所があるとか」

「いや、ここが私の故郷だよ。だが、徒歩で戻るのは本当に初めてなのだ。だから、かな。道中、辛かったというのもあるが……」

確かに、シルフで移動するのとは、理由が違っただろう。坂道も多かったし、慣れない状態で魔物との戦うこともあった。

最後に、大型の魔物と戦って。道中、優しい旅ではなかった。

そのせいだろう、ミラの声は、凜としたそれではなく。

どこか、普通の子供のようなものを感じさせる声で。

「何か、胸を動かされるものを感じてな。本の知識で知っていたがこれが、帰郷というもののなのか」

「……………そうだよ」

感動を覚えている。つまりこの故郷は、彼女にとっては、本当に大切な場所なのだろう。

故郷が大切なのだ。僕とは、違う。

だって、ル・ロンドには、思い出したくないことが多すぎるあら。

師匠は好きだ。レイアも、まあ幼馴染だ。母さんも、嫌いじゃない。

だけど、記憶の底にこびりついて、拭っても消えてくれない奴らの顔が多すぎる。

あそこは以前の僕が“亡くなった”場所だ。夢が碎かれた場所だ。だからきつと、ミラみたいな顔で戻ることとはできないだろう。長年過ごした、生まれ故郷なのに。

（嫌だなあ。背中が痛いはずなのに）

今は、胸が痛い。

喜びの念を全身から発しているミラの背中。

それを複雑な心境で見守りながらも、僕はミラの故郷である二・アケリアへと足を踏み入れた。

14話 「ミラと謎」(前書き)

キーポイント

後日、ちよつと改訂する予定

14話 「ミラと謎」

ニ・アケリア、精霊の里。目的地に到着したというのに、僕は達成感を感じられないでいた。

奇妙な感情に襲われているのだ。意外と普通の村だった、とかそんなことではない。

原因は、村人の行動だ。

「すまない。イバルはどこにいる？」

ミラは、村に入っただけの正面にいる老人に話しかけた。

「ん？ イバルなら、マクスウェル様を追って……………」

返事をしながら立ち上がる老人。だけど、ミラの姿を視認してから態度は違った。

劇的に変化した。まとう気配も変化していく。

「今、帰った。遅くなったな、長老」

ミラが、ニ・アケリアの長老とかいう人物に言う。祈るように膝を ついているその長老は、ミラの問いかけにしかし答えない。

祈っているだけ。「よくぞ帰って来られました」などといった、歓迎の言葉もない。

驚き、すぐにひざまずいてしまつて、それきりだ。

（……………“わたし何かにお声をかけてくださるなんて”、か）

ミラの言葉に対して、長老の言葉はそれだけ。これでは、会話になつていないではないか。

他の村人も同じだ。確かに、村人は集まつてきている。尊敬の念をこめているのか、目を輝かせて彼女のことを見ている。

だけど、また労いの言葉も何もない。

「……………やっぱ、本物なんだよな」

「うん。だけど……………」

アルヴィンの言葉に、いつもの嫌味は含まれていなかった。歯切れが悪い。

僕と同じだ……………この光景を前に、何とっていいのか分からないでいる。

ひとつだけ言っておくと、村人たちの顔に負の感情なんかは含まれていない。

でも、その表情はあるいは憎しみよりも“酷く”思えるのだ。

何と言えいいのだろうか。どう表現すれば良いのか。

ミラは確かにここに存在している。彼女のマナはここにある。

なのに、村人達は“ミラ”を見ていない。それはまるで、遙か彼方の星を見るような視線。

遠くにあつて届かない輝きをとらえるかのような目だ。

困った表情で村人たちを眺めているミラ。

以前、彼女は信仰の対象ではなかつたかなんて考えいたが、それは間違つていなかったようだ。

実に神様らしい。遠くにあつて君臨する者そのままの所作で、彼女はそこに認識されている。

(……………なのに、この感情はなんだろう)

僕はミラの事を色々と見てきた。イル・ファンからの短い旅だったが、それでも薄い付き合いじゃない。

まず、研究所で戦った。黒匣^{ジン}とかいう兵器に対して憤りを感じていた。

イラート海停では、美味しそうに食事をしていた。その時のミラは、人間そのものだった。

ハ・ミルでは、疲れているせいか、あまり元気がなかった。

先ほどのキジル海瀑では、不用意な発言に対して怒っていた。男はみなこうかと、呆れてもいたけど。

……なんてことはない。彼女は、感情のある人間だった。

使命にひたむきであることは分かる。それが、マクスウェルとしての責務なのだろうから。

でも、それとは別に“ミラ”という存在は確かにここに在るのに。

“こっちに来られないで下さい”なんて風に、崇め奉られて遠ざけられるような存在じゃないのに。

（ああいう顔を見せたことがない、んだろっけどなあ）

違和感は消えない。

あるいは巫子とやらも、あんなミラは見たことがないのかもしれない。そのことに僕は、どこか優越感を感じていて。

同時に、どうしようもない哀しさを感じている。主に、ミラへの対し方についてだ。

「緊張するな。普段の通りに接していればいい」

ミラが、困ったように長老に言う。だけど長老や、村人たちは顔を上げない。

ただ、こう言うだけだ。

「私なんか、お声をかけてくださるなんて」

馬鹿の一つ覚えみたいに、繰り返すだけだ。

（きっと、これが普通なんだろうな）

普段からこうなのだろう。ミラと長老の言葉とやり取りから、いつもこういったやり取りが行われているだろうことは、容易に推測できる。

わからないのはミラだ。話しかけたとして、こうした受け答えが返ってくるということはわかっていたはずだ。

なのに、違うと言いたそうに彼女はずっと長老に向け、言葉を発し続けている。

「……………分かった」

そうして、数秒の沈黙の後。

困った風な顔が、本当に一瞬だけ　泣きそうな顔に変化する。

すぐにそれは戻ったが。気丈なミラに。

「では、イバルは外に出ているのだな？」

言うが、頷くだけ。イバルとは誰だろうかなんてどうでもいい。

最後までこうなのか。今の里の人達の視線を理解できない。

人であるのに、人外を見るかのような視線に対し、納得することができない。

そんな僕の心情はさておいて、会話と呼べない会話は終わった。

「手を止めさせて、すまなかった」

それだけを告げて、歩き出すミラ。付いてきてくれといったげに、こちらを見る。

顔は元に戻っている。だけど、どこか裏に影を感じる顔だった。

そんな顔をされたら、無言で頷かざるをえないだろうに。

「行こうか。私は、これからすぐに社に向かい……そこで四大再召喚の儀式を行う」

ミラは僕とアルヴィンに喋りながら、村の奥へと歩いて行く。そし

て彼女が近づく度に、村の人達は平伏していく。

まるで古の時代の王だ。偉大なる王にひれ伏す民のように扱われている。

だけど、それは畏怖ではないと見て取れる。敬意であり、そして義務だ。

まるで自然現象にするような態度で、村人達はその場にひざまづく。

（子供達は、また違うようだけど）

だけど将来は大人たちと同じようになるのだろう。“マクスウェル様”に対する接し方は、親から叩き込まれるはずだ。

無礼のないように。星の輝きに手を組んで祈るように。所作を仕込まれ、誰もがやっているからそれは正しいもので、だから子供はそれを疑いもせず。

（じゃあ、ここに居るミラはなんだよ？）

“マクスウェル”は居る。だけど、そこには“ミラ”は存在しないのではないか。

事実、彼らは見ていない。マクスウェルを崇めているだけ。使命を果たさんとするマクスウェル様を尊敬の眼差しで。

ミラなどどこにもない。ミートソースをほったにつけながら、美味しそうに料理を食べているミラなど、想像もしたことがないはずだ。

もとより食事など取ったことがなかったと彼女は言っていた。ああ、これならば納得もできるじゃないか。

星は星だから輝いている。そこに疑問の入る余地はない。

誰もが、星の性格など。星が何かを食べるなんて、そんな事思いつきもしやしないんだから。

「……………ジュード、どうした？ ……巫子が不在のようなので、手伝ってもらいたいと言ったのだが」

「……………あ？」

「おいおい、少年。安心するにはまだ早いんじゃないのか？」

アルヴィンの呆れたような声。全く聞こえていなかったので、もう一度聞き返す。

「村にある、四つの祠。そこにある石……………よしよしせき世精石を、社に運んでもらいたいのだ。巫子のイバルが不在のようなのでな」

「えっと……………それ、僕達にもできるの？ 村の人でなければできない、とか」

先ほどの様子を見るに、この村のしきたりというか慣習。特にマクスウェル様関連は、特に厳しいと思うのだが。

「いや、そんなことはない。他の者は……見ただろう。普段は、巫子以外は私とあまり接していないのでな」

話にならない、とミラは言う。それは、どのような意味なのだろうか。

会話にならないから、と言いたそうに見えるけど。

(……まあ、今は儀式を優先させようか)

ごちゃごちゃ考えていても埒があかない。それに、最重要目的は帰郷じゃない。ミラがマクスウェルとしての力を……四大精霊の加護を取り戻すことだ。

なら、手伝わないなどという選択肢は有り得ない。

それに、力仕事は男の仕事だ。先の戦闘の怪我は塞がっておらず、背中の痛みはまだ収まらないが、それでも石を運ぶくらいはできる。

ここで断る、なんて。

心情から言っ、そんなことは絶対にできないし。

「分かった。それで、社の場所は？」

「村を抜けた先だ。二・アケリア霊山のふもとにある」

運び、社に向かっている途中、気分転換も兼ねて様々な話をした。

それから得られた情報は、意外なものが多い。

「じゃあ、その服は巫子のイバルって人が？」

「デザインして、仕立ててくれた。手先が器用なのでな」

このデザインは動きやすさを重要視した結果、らしい。

それでも大胆すぎるんですが、なんて無粋なことは言わない。

（ただ、ジュードは巫女のイバルとかいうお方にグツジョブ、と惜しめない賞賛を送らせていただきます）

というか、他の村人の服装と違うんだけど、との問いに、そんな答えが返ってくるとは思わなかった。

その他、家も特徴的なデザインをしている。村人達は牧歌的、というか、先程の光景がなければ、普通の田舎町に見えたことだろう。農業に、畜産に、はたまた装飾品を作ったり。普通の生活を送っているように感じられる。

そんな風に周囲を観察しながら、石を集めていく。石は大きく、両手で持たなければもてないほどの大きさだった。

マナで腕力を強化しているので問題はないが、一気に持つてはいけない。アイテムパックもいっぱいだ。

だから一つはアイテムパックに、一つは手で持って運ぶことにした。

「というかミラ、これって石というよりは岩……………」

「うむ、頼んだぞ男の子」

にべもなかった。

それから、出発前の準備に入った。僕達は一端解散し、それぞれに必要なものを買出しにいくことにした。

ミラはなにやら長老を話があるようだ。アルヴィンは「私用」らしい。特に追求しても躲かれそうなので、追求はしなかった。

僕は行商人からはアイテムと食材を、近くにあった食材屋からは新鮮なブウサギの肉をもらった。

これがあれば、3時のおやつ……………というよりも、間食としてだが、

良いものを作れるだろう。香辛料も良質のものが売っている。

買い揃えながら、替えの肌着を買った。一番下の肌着は、血で塗れているのもう洗っても着れないだろうから。

そうして、休憩時間が終わり。

集まった後、ニ・アケリアや村人について、休憩がてら話をしていると意外なことが聞けた。

ミラの出生について聞いた時だ。

彼女には親が存在しないという。20年前、四大を伴ってあの村に現れたと。

その頃はまだ赤ん坊だったらしい。3才ぐらいまでは、四大が村の人達に世話をするよう命じたのだとか。

ミラも、生まれた当初は、四大に触れることすらできなかったらしい。

それもそうだろう。四大はそれぞれの系統に属する精霊を集め、それを媒介として現世に形を成している。

マクスウェルとしての力が無ければ、触れられるだけで大怪我をしてしまうとのことだ。

実に不便なことだと思った。

ちなみにマクスウェルはそれぞれの系統の精霊を媒介にするのではなく、人間を媒介にするらしい。

よつつの精霊、それが最も集まり、バランスよく調和がとれている

のが、人間の身体なのだと。

それにしても衝撃的事実だ。

20年前、四大が消失した大事件
グラン・ロスト 大消失。四大が召喚できなくなったというその原因が、育児休暇だというのだから。

ミラのお守りをするために、専念するために、姿を消したのだという。

なんと荒唐無稽な話か。常識が吹っ飛んでいく。

同じ20年前には、ファイザード沼野の会戦
ラ・シユガルとア・ジュール間で戦争が起こったが、もしかしてあれにも関係しているのではなからうか

（いや、それは違うかな）

戦争の原因はまた別だろう。あれは戦争で、純粹なる人間の世界の話だから。

女神の誕生と、戦争とに関わりがあろうはずがない。

（精霊の主

美女の姿をするマクスウェル。ぶっちゃけ女神

……ん？）

と、まあふざけたことを考えている最中……………根本的な疑問に行き着いた。

それは、何故ミラは女性の姿をしているのだろうかということ。人間ならば考えるだけ無駄なことだが、ミラは違う。

（想像上の話だけど、マクスウェルとはもっとう……………じじむさいような）

主だからして、ヒゲの生えた長老のような容姿をしていると。勝手な話だろうが、そんな姿を想像していた。

それがなんで、こんな美人に生まれたのか。カモフラージュか、カモフラージュなのか。あるいは視覚心理戦のためか。

確かに、この容姿とスタイルに、あの服は反則と思う。

（……………それはまあ、誰かの趣味だから、ということでは納得ができる……………かも？）

男だからとして納得もできよう。ウンディーネ以外は男なのだから。精霊とは言え、野郎はみな兄弟。シルフとノームとイフリートが結託すれば、それもありうる……………？

(って、ん？……………ちょっと待てよ)

何気なく、またふざけた思考を走らせている最中だった。なにやら、納得できない……………引っかけた所があることに気付いたのは。

同時に発生する、どうしようもない違和感。僕は、それを掘り下げることに専念した。考えるのが最善だと判断して。

物事を論理だてて順序的に組み立てるのは得意だ。小さい頃から現在まで、精霊術を使うために、色々な事を考えてきたから。

その経験を活かし、組み立てる。出生。生み出すもの。ミラの姿。四大の性質。

手持ちの情報を組み合わせていき　　気づく。

ミラが生まれて、現在に至るまで。

どうしても、必要となるピースが欠けているように思えるのだ。

それは端的に言えばこうである。

（ 誰が、ミラを生み出したのか ）

四大がミラを生んだ？

……違う。四大が力を合わせて、主であるマクスウェルを造るなんて、理屈にあわない。四大はマクスウェルに従属する精霊のはず。ならば、誰が産み出したのか。

（ ……ミラは、そうだな …… 名言はしていないけど、20年以上よりの前の記憶を持っていないだろうな。だって、“老人くささがない” ）

知識としては持っている。だが、体験はしていない。そんな感じを思わせる。

少し事情が違うのかもしれない。だけど、間違っていないように思える。

先の表情もそうだ。

なんせ、“反応が初心すぎる”のだ。とても、何千年も生きているような存在に見えない。

（今は力を失っているから？）

それは否、だ。世界を作ったというのなら、世界を知り尽くしているはず。

故に、もっと泰然としているべきなのだ。料理で一喜一憂している様は、眩しいがおかしい。

事実、僕は……ミラが偉大なる精霊の主なんて、そんな高等な存在として捉えられなくなっている。これはちよつと、致命傷なのではないか。

“男とは”の発言も、疑って考えれば実におかしい。

もっと、世界の全てを……それこそ、腐るほどに熟知しているのが当たり前なのだ。

世界を作った。ならば、知らないことはないだろう。それ故に管理できるのだ、と。

複雑な感情抜きでいえば、それが偉大なる精霊の主として最も相応しいあり方だから。そのあり方から外れる道理もない。

（でも、僕は……ミラの事を、神様なんて。そうは見られなくなっている。ここが、どうしても引かかる）

マクスウェルとして、ではなく　ミラとして。

一人の女性としか思えなくなっている。

（あるいは、僕がオカシイだけなのかもしれないけど）

楔として胸に残る痛み。脱落者としての自分だから、そんな事を考えてしまうのかもしれない。

事実、精霊の理なんて、精霊術を扱えない僕にとっては、ある意味医術所より難解なものである。

精霊に対したことがない僕だから、精霊のことが分からないのかもしれない。

（…………どこまで行ってもつきまとう、か）

精霊のこと、^{ゲート}霊力野についての問題が、ここに来て絡まってくるとは思わなかった。

（でも、おかしい点多すぎるだろう？）

生誕の謎。ここにきて、結論が出ない。四大が集まって、相談して決めた？

それは、違うだろう。

四大は均等で、対等だ。その四大の全てが、目的を一緒とすることに違和感を覚える。

音頭をとる人物がなければ、実現しないだろうに。

つまるところは、一つ。

あるいは マクスウェルのもう一つ上に。

彼らを統率者する者が居なければ、ミラが生まれることについての、説明にならないような。

しかし、今現在の手持ちの情報ではそこが限界。それ以上は分からない。

そこで、僕は出発する直前、出口付近にいた長老に話を聞いてみることにした。

「貴方は……………」

「ミラの護衛、ですかね」

僕がミラを見ると、ミラが頷いた。その後、話を聞いてみることにする。

まずは、この世界を何千年も前に作ったマクスウェルについて。

直接聞いても答えてはくれないだろうから、遠くから聞いてみることにしたのだ。

何か、他所では聞けない話を聞けるのかもしれない、と。

聞くと、長老は嬉しそうに話します。

まずは世界の創世記について。このリーゼ・マクシアは、かの偉大なる精霊の主に作られた。それは一般常識だ。その話に関して、齟齬はない。

だが、その内容が微妙に違う。

創世記には、マクスウェルともう一人の人物を欠いては話せない。

その人物こそがクルスニク。世界を創生するマクスウェルを補佐した、偉人。類まれなる知識を持っていた賢者。

普通の創世記には、そう記されている。

だが、長老の話は違っている。クルスニクは、マクスウェルを補佐した者ではなく。

“マクスウェルに従った最初の人間”が、賢者・クルスニクと言っているのだ。

まあ、槍のことはおいといて。この村の者が、クルスニクの末裔であるらしいが、それも特にどうでもいい。

“従った最初の人間”とはどういうことだろう。

世界に広まっている創世記とは、異っている。

（内容が、解釈が、少し異なっているか………どちらが正しいんだろうな）

創世記だからして、多少の違いはあるだろう。

しかし後者である場合。もし長老の言う内容が正しいとすると、腑に落ちないことがある。

世界を作ったのが、マクスウェル。ならば、人はそのマクスウェルに従って当たり前だ。

なのに、“最初に従った”とはどういうことだろう。

その物言いは、まるで………“世界が作られる前に、マクスウェルに従わなかった者がいる”ことを思わせるが。

（いや、そんな存在は有り得ないだろう）

精霊術無くして、リーゼ・マクシアは成り立たない。生活の一部、人間でいえば臓器そのものと言っても過言ではない。

無くして生きられる者はいない。ゆえに、精霊を必要なものとして、最重要なものであるとしている。だからマクスウェルのことを、偉大なる精霊の主と呼ぶ。

創生の頃から変わっていないはずだ。齒向かう人物なんて、生まれさえもしないはず。

(どうにも、おかしな点多すぎる)

あるいは、ミラ＝マクスウェルが、問答無用で破壊すべきと主張するもの。

“人と精霊に害為すもの”と、マクスウェルである彼女が断言するもの。

黒匣^{ジン}。

全ては、その先に答えがあるのかもしれない。

あの槍の秘密の、その向こう側に。

（だけど、今は目的を果たすべきだろうなあ）

そう考えて話を切ろうとしたのだが、長老さんがなにやらヒートアップしていた。

長老も、村の外の人間、いわば他所の人間に偉大なるマクスウェル様のことを説く機会が少なかったからだろうか。

そこからはマクスウェル賛歌が続いた。

食事も睡眠も取らずに成長した、とか。使命を果たすべく、昼夜を問わず動いてくださる、とか。

クルスニクの末裔である私達を守ってくださいる、とか。

「……………ちょっと待って。クルスニクの末裔は自分たちだけ？」

前言はムカツイたが、それはいい。だけど、ラ・シュガルの六大貴族、”六家”こそがクルスニクの末裔じゃあ。

それが違うと？ ……………彼らはマクスウェルに付き従った6人の子孫であるとされているけど。

ア・ジュールはそのことを信じていない輩が多いが、それは信憑性の高い情報だ。身分の高さが証明しているようなもの。

だから、世間一般からは、“六家がクルスニクの縁者の末裔だなんてものは嘘”だと主張する者は、ラ・シュガルの六家を陥れる詐欺師か、蛮族と言われる部族が多い

ア・ジュールの馬鹿。どちらかであると認識されている。

それをばか正直にアルヴィンが言うと、長老が沸騰した。

反論した長老は、静かに叫ぶ。

「その伝承の方が怪しい！………事実、六家はマクスウェル様から“世界の秘密の守護”を託されていない。それが、何よりの証拠だ」

「……………世界の、秘密？」

秘密ってなんだ。世界の秘密。それは、あるいはミラに繋がることではないかと思って。

僕は、もっと話をと一歩踏み出して ミラに手で制された。

まるで、それ以上は許さないと告げるように。

「ジュード……………長老も」

「っ！これは、わしとしたことが……………お許し下さい」

また平伏する長老。だけど、今はそうした方が正解だろう。

ミラの声は、それほどまでに低く。少量だが殺気さえ混じっていた。

「えっと、ミラ？」

「……………なんでもないさ。それより、石は集まった……………出発する
としようか」

その声は、反論を許さないというような口調で。さつさとミラは歩き出してしまった。残されたのは、じっと地面を見ている長老と僕達だけ。

僕はアルヴィンと目を見合わせると、互いに肩をすくめた。

「おっかないね。顔色も、表情も……………悪い」

「まあ、仕方ないと思うがね」

帰ってきてから。そして今の話を聞いて、気分が悪くなったた
ことは、推測できる。

僕の立場であつてもそうだろう。ミラだけが特別、人間からかけ離れているなんて、そんな風には思えない。

「行こうか。お姫様がお待ちだぜ？」

面白くなさそうに言うアルヴィンの言葉に頷き、僕もミラの背中を

追って歩き始めた。

そうして、社の前にまで来た。魔物はそれほど強くなく、石を運びながらも対処できるぐらいだった。

道中、たむろしていた魔物をボコつたり。共鳴術技の発案をして、その練習をしたり。

特に危険はなかったので、さくさくと進めた。

「さくさく、ね……………君が世精石をもったまま戦おうとした時は、本当にどうしようと思ったが」

「いや、世精石アタックって……………素敵じゃん？」

それぞれに四大の系統が宿っているらしいし。ぶつけたら火とか風とか出そう。

ちよつとした精霊術気分を味わえるじゃないですか。そう言つと、ミラは呆れながらため息をついた。

「その発想は無かったよ……………しかし、肝が冷えるのでやめてくれ。本当に君は……………何をしだすか分からないな。まるで本で見たびっくり箱とやらだ」

「いや、場を和ます冗談のつもりだったんだけど」

「場が凍ったぞ。まったく心臓に悪い……………」

「お詫びに特製のサンドイッチをプレゼントしたでしょ。まあそれで手打ちに……………」

「ああ、あれは美味かったな。味付けもさることながら、肉の旨味が格段に違った。深みがあるというのか。

野菜もしゃしゃきとしていて、歯ごたえも抜群だった。あれは……………もしかして、二・アケリアで売っていた材料を使ったのか？」

「かなり質が良かったんだよ。ちょっと田舎だけど、舐めてました自分」

お詫びにと差し出した特製サンドイッチ。

ブウサギの肉を味付けした後、野菜と一緒に挟み込んだ特製サンドイッチ。

故郷の味だからか、ミラのほっぺたは落ちそうになっていた。それほどまでに美味しかったということだろう。

しかし、ミラは何かに気付いたのか、ジト目になっている。

「……………君は、あれか。美味しいものを差し出せば、私が引き下がるか思っていないか？」

「そうでしょ？」

「……………違う。と、思う」

ミラは馬鹿正直だった。くくく、順調に餌付けは進んでおるわ。

そんな顔をしていると、ミラに見つかった。やべえ。

「全く……君は思っていたより意地が悪いな」

「っ、照れるな」

「いや、間違いなく褒めてねーぞ少年。あと、ミラはその剣を抜いてもいい」

そこにアルヴィンが乱入してきた。さっと、視線を交わす。

「……………なっ、裏切ったな胡散臭い男、略してウザ男！」

「いや、略せてねーから。あと、さり気なく悪口追加すんの止めてくんないかな？ 俺って実は心がよえーのよ。滅茶苦茶繊細なハート持ってんのよ」

と、胸を抑えるアルヴィン。嘲笑を浴びせてやろつ。

「ふ、本当の事を言っただけが悪い！……………あと、最後のはツッコミ待ちか？ そうなのか？ つまりは覚悟完了か？」

「やめろ、って目がマジに！？」

「うるせー大岩ぶっけんぞ！ 大岩だ、また大岩だ、って連投も可能だぜ？」

あの怪しいねーちゃんとも知り合いっぽいからってよう。

いくらか追求するけど説明しやしねえ。

ガンに関しても、だ。するりするりと追求を躲しやがる。

本人も自覚しているんだろう、ニヤニヤと笑ってやがるし。

そのあたりの苛立ちをぶつける意味“も”あつて。

アルヴィンに鬱憤含めた意念をぶつけてやりあっていると、隣からミラの笑い声が聞こえた。

「えっと、ミラ？」

「いや、すまない……………その、なんだ」

口を抑えながら、おかしそうに言う。

「お前たちは見ていて飽きない。なぜか、そう思ったのだ」

ミラが、笑いながらいう。

「……………ちっ」

「なんでこつち見て舌打ちすんだお前はあー！」

「一緒にすんなってポーズだよ。なに、僕の猫を無理やり剥がした

貴様が悪いのだよ」

「猫？ ……剥がすとはまた猟奇的な」

「ひどいよねー」

「咬み合ってねえ……あと、少年はもう少し年上に対する話し方
つてのを学ぼうな」

「いや、冗談だつて。ほら握手握手」

岩を置いて握手を求める。しかし、アルヴィンは半眼になった。

「なんか、掌が赤いんだけど？ マナが唸ってるんですけど？」

「いけない、ついまなをこめてしまったー。ぼくっておちやめさん」

「棒読みかよ！ ……ってそれ、あのでかい魔物に喰らわせた
きつつい技じゃねーか！」

「流石はプロの傭兵。一度見た技は、忘れないんだね」

「……ひょっとして、こいつがこの旅の最大の強敵なんじゃねー
か？」

アルヴィンがぼそりと呟いた。

「……失礼な、こんな良識な一般人をつかまえて」

「ちょっと待て。いい加減に反撃するぞ、俺も」

そんなこんなで漫談を続けていると、ついにミラはおかしくなったのか笑い出す。

「っ、いつの間にか……………仲良くなったのだなお前たちは」

「「いや、ねーよ」「

「ほら、息もぴったりだ」

くすりと笑うミラ。

その顔は、ニ・アケリアに到着する、その寸前のものに戻っていた。

あそこを出発する時の顔でも、長老や村人達に対して向けていた顔は、どこにもない。

それを見て、僕はアルヴィンに視線でサインをする。

（ありがとう）

実はというと、村からここまで。歩いている時のミラの顔は、なんか見たくない“色”をしていて。アルヴィンに、それとなく視

線でサインを送っていて。

（ちょっとわざとらしくったがな）

アルヴィンは、それに乗ってくれたのだ。

まあ、言いたいことは言ったのだけど。

結果はオツケーだ。ミラの顔が、元に戻った。

これで気兼ねなく前にすすめるというもの。

（ああ、そうさ。世界に対する謎。興味深いし、考える価値もある。疑問点も謎もひどく魅力的なものだ）

それは確かだ。僕だって一端の知識人。

世界の謎なんてロマンを前にして、魅力を感じない方が嘘というものである。

あるいは、精霊術が使えないという僕の特異体質が、分かるかもしれないから。

それは本能に刷り込まれたものだ。このリーゼ・マクシアで人として生きるに必須な技術。

人として生きられる、最低限のラインを越したい。それならば、片足片目、片腕さえも献上しよう。

それほどに、僕は渴望している。旅の目的の一つでもあつて。ミラについてきたのも、その目的を達成するためだ。

だけど同時に、譲れない想いがある。

それは ミラがそんな顔をしているのが嫌だと。笑わせたいという、そんな単純な想いだ。

綺麗な顔が曇っているのが嫌で。

四大を従えていた時のような、無機質な暴君を思わせる表情に戻っていくミラが、嫌でたまらない。

村人にしてもそう。食事も睡眠も？

ふざけている。独りよがりと言われるかもしれないが、気に食わないという考えは止められない。

探究心が、ある。だけどそれとミラの事、その想いの強さは今は等号で結ばれるようになった。

その両方を知りたいと思う自分がいる。

精霊術のこと。そして、ミラのこと。その奥にある秘密も。

（興味がある、っていつのか）

どちらかは、判別がつかない。謎と彼女自身のこと、そのどちらに惹かれているのか。

わからない。だけど、あの顔は もう二度と、させない。

変えよう。嫌なものは、自らの手でどうにかするべきだから。

だから僕は、笑わせるためにも動くべきなのだ。師匠や、レイアに對するように。

あるいは、もう一人。僕と同じような、願っても届かなくて、一度壊されて。

そんな痛みを抱えながらも、どうしようもないと叫んで。

発散させないと臓腑を焼くというのに、無理に溜め込もうとしていたどこかのチビに對するように。

（って何を考えた、僕は）

今は、ミラだ。“マクスウェル”だけど“ミラ”な、ミラを。

我ながらミラミラ言っているとは思うが、止められない。
だから、それを何とかして変えるべく動いた。

石ぶつけようとしたりして、慌てさせて。食事で機嫌を取って、喜ばせて。

感情を揺れ動かせば、ミラが戻ってきた。アルヴィンと即興で Comedy を展開したのも良かったようだ。

ある意味で本気が混じった一芝居だけど、上手くいった。

アルヴィンも満足だろう。

僕と同じように、ミラを見ながら、微妙な表情を浮かべていたし。

（しかし、この男も分からないなあ）

胡散臭いを人形にすればこのような男が出来上がるのではなかろうか、それぐらいに得体が知れない傭兵。

実力を隠している可能性が高い。そうでなければ、あの場面での共鳴術技は決められないから。

けど、嫌なものばかりでもない。短い付き合いだけど、それははっきりと分かる。

隠している實力を見せること、わかっていたはずだ。それなのに、僕達を助けるためにだろうか、隠したままでいなかった。

こうして、漫談に付き合ってくれてもいる。怒らずに、合わせてくれた。

それだけの男気は持っているのだ。

だから、礼を言うことにした。

ミラが少し前に行った後。彼女に聞こえないように、小声で伝えようと。

対するアルヴィンは
来ましたが、とばかりにまた厭らしい
笑みを浮かべている。

読まれているのだ。

僕はそんな仕草に、“このやろつ”と思いながら。

それでも僕は礼の言葉を口にした。

『サックス、中年』

「お前な!!」

「え、なんで怒る？」

「不思議そうな顔をするなよ！」

なんでそんなに大声を。前にいるミラが驚いてしまっているじゃないか。

告げると、アルヴィンは手をわなわなさせた。

「はあ……馬鹿らしい。少年、素直に礼を言うのが照れくさいのなら、最初から言っなよ」

「はあ、誰が照れ隠しだ！？ 一体僕がいつ照れたって証拠だよ！ このおっさんが！」

「てめっ……お前、本当に面倒くさい性格してんのな。というか中年はよせ、おっさんじゃない！ 俺はまだ26だぞ！？」

「え、おっさんじゃん」

「……………お前とはいつか決着をつけなきゃならんようだな。というか、お兄さんと呼べ」

「いや、アルヴィンがもう少し秘密を打ち明けてくれたら……………つて、呼んでるよ」

ミラが僕達を呼ぶ声が聞こえる。

前を見ると、社へ続くのだらう、長い階段が見えた。

恐らくはあれがミラの社に続く道なのだらう。

もうすぐ到着だと、僕はアルヴィンより先にミラへと駆け寄っていく。

「ほんとに似てねえなあ、少年……………あの生真面目なお医者さん」とは、大間違いだぜ」

そんな、後ろでつぶやかれたアルヴィンの声を聞き逃したまま。

15話 「巫子登場」

霧が濃くなっている街道。その奥に、階段はある。

樹に包まれるようにある長い石の階段が、森の奥へと続いてく。

それを登って数分。登り切った先に、大きな建物が見えた。

向こうには、ニ・アケリア霊山が見える。

そのふもとに、でんと大きい一軒家が霊山に続く道を遮断するように建っている。

「ここが、ミラの社？」

「そうだ」

「へえ。じゃあ、ミラはここに住んでんだ」

「住んでいる、か。考えたことはないが………そういうことになるのだろうな。人の生活とはまた違うものだと思うが」

「何もない所だな。こんな所で、退屈しなかったのか」

アルヴィンが言うと、ミラは腰に手をあてながら答える。

「別に、気にすることもあるまい。私の使命においては何の問題もないからな」

「生活は必要ないって？」

「そうとは言わないが」

ミラの言葉に、ふと思いついた。

「生活とはまた違う………生息していた？」

「魔物か私は」

「痛っ」

ミラのツッコミがずびしと頭に入る。

「何か、どんどんマクスウェル扱いされなくなっていくな………」

「そんなことないよミラ様」

ただミラ「マクスウェルとして見ているのであって。

マクスウェル分が村で補充されたようだから、僕はミラ分を補充しようかと思つて。

そう思っている時、ミラはまた巫子を思い出したのか、何ともいえない顔をしている。

「よせと言っているだろうジュード。それとも君が巫子の代わりを努めてくれるのか？」

いたずらっ子のような口調。ミラは笑うと、社の方を向いた。

僕は望む所だ、と石を両手に運び出した。

社の中には何もなかった。奥に別の部屋があり、そこに書棚などあるという。

儀式には広場を使うという。奥にある玉座みたいなものは、今回は使わないらしい。

「……………で、これでいいの？」

指示通り、広場の床に書かれている四色の紋様。

その上に、それぞれの石を並べ終わる。

これで、四大を呼び戻す儀式の準備は完了したらしい。

世精石を四方に、その中心の座にミラが座る。

「……………では、始めるぞ」

「……………っ！」

場が一気に緊迫する。

（パンツは見えない）

残念無念。

アルヴィンに視線を送るが、首を振る。どうやらアルヴィンにも見えなかったらしい。

おのれ絶対領域。

と、煩惱まみれの僕をさておいて、ミラは真剣な顔で儀式を続けている。

最初の構えは、クルスニクの槍を破壊しようとした時と同じだ。

弧を描いた手に方陣が現れ、同時にミラの中から、マナが溢れでた。

それは一つの流れとなり、ミラの意志の元に、一定の方向へと荒れ狂っていく。

まるで嵐を制御しているかのよう。世精石の力のお陰だろうか。四つの系統だろう、四色のマナが生まれ、ミラの方陣の中へと収まっ

ていく。

しかし。

「くっ！？」

「ミラ！」

石は砕けてしまった。ミラは倒れそうによろめいた。

その時、背後から気配が近づいてくる。

（奇襲！？　こんなタイミングで　　）

かなり早い。僕は振り向きざま、気配に一撃を加えようとして、

「ミラさげふウア！？」

走ってきた銀髪の男に、リアット。

首にカウンターの一撃をくらった男は、縦に一回転した後、顔から地面へと着地した。

「イ、イバル!？」

「少年……………ついにやったな」

「ついにつて何!？」

あと、二人の責めるような視線が痛い。

つてイバルつて名前は……………たしか、巫子の名前だったような。

「えっ、巫子つて女じゃなかったの」

「女と言った、覚えはないが」

そんなこんなで、脳震盪を起こして気絶しているイバルを起こすことになった。

とはいっても時間がもったいない。きつめ気付け薬を嗅がせると、すぐに覚醒させた。

ほら、こんなに巫子が元気に飛び跳ねて！

「やったね、アルヴィン。ってなんでそんな恐ろしいものを見る目で？」

匂いは広がらないようにしてるから大丈夫なのに。

「いや、何でもねーわ。でもその薬を俺に使うのはやめてくれな」

ちよつと引くアルヴィン。

「お前！ よくもやってくれたな！」

「いや、本当にすみません。この通り」

さておいて、イバルは巫子。つまりはミラを心配して駆け寄ったのだろう。

そこで、僕が昏倒させてしまった。これは謝るしかないだろう。

薬に関してはアレ以外の方法が無かったし。

「ジュードは、敵襲だと勘違いしたのだろう。あまり責めないでやってくれ。それよりもイバル……………綺麗に一回転したようだが、大丈夫か？」

「あれしきの攻撃、私には通じません！ そんなことよりミラ様、心配致しました……………と、これは。四元精来喚しげんしょうごいかんの儀？」

何故今このような儀式を。

巫子のイバルは儀式の内容を把握した後、しかめっ面で立ち上がり
ちよつとよろけながら、虚空に向かって呼びかける。

「イフリート様！ ウンディーネ様！」

きつと、いつも呼べば姿を現してくれたのだろう。しかし、イバルの声に呼ばれた四大は応えない。

「ミラ様、いったい何が……………」

問われたミラは、少し黙り込んだ後、イバルに向かって説明した。
イル・ファンで起きた事。そして、今現在何を目的として動いているのかを。

アルヴィンに聞かれてしまったが、それも仕方ないだろう。どうせ予想はついてたろうから。

「んで、精霊が召喚できないのって、そいつらが死んだってことが？」

「バカが、大精霊が死ぬものか！」

「……………あれ、常識？」

「僕に聞かないでよ」

死んだ精霊は化石になるって話は聞いたことがある。だけど、その実どうかなんて僕が知れるはずがない。

で、イバルが言うには、大精霊も死ねば化石になるという。ただ、力だけは代替わりするらしい。

記憶は受け継がれないらしいが、力だけは次の大精霊へと継承されると。

「ふん。存在は決して死なない、かくりよ幽世の住人……………それが、精霊だ」

「だったら……………」

ドヤ顔でポーズを決めるイバルはおいといて、僕は結論を口にする。

「やっぱり、あれは見間違いじゃなかったのか」

最後、四大精霊はあの槍の中に吸い込まれていくように消えた。

もしかして死んだとも思ったが、再召喚の儀式に応じないということとは違うようだ。

代替わりしていない。だけど、呼びかけに応じない。

つまりは、だ

「四大精霊は、今も賢者の槍クルスニクにいる。捕まっているんだ」

「バカが！ 人間が四大様を捕らえられるはずが無い！」

「じゃあ……えっと、イバル。巫子のイバルとしては、どう考えているんだ？」

「それは……」

押し黙るイバル。考えているのだろう。だけど、それ以外の回答があるとは思えない。

主であるミラの呼びかけにも応えない理由なんて、出られない事情があるから。他には考えつかない。

まさか四大精霊がストライキを起こしたと思えんし。

「……………何もない空間で、卵がひとりでに潰れた場合。その原因は、卵の中にある。『ハオの卵理論』ってやつだよな？」

ちよつとドヤ顔のアルヴィンが 学生ならば誰もが知っていることを口に出す。

「僕の、嫌いな理論だけだね」

「へえ、どうしてだ？」

「前提として、条件を決め付けるのが嫌いなんだ。それに、夢がないじゃないか」

もしかしたら未知のパワーが働いたかもしれないじゃないか。既定の視点に囚われていて何になる。

そう言つと、捻くれてるよなあ、とアルヴィンに言われた。

なにさ、夢をみたっていいじゃないか。

こちららアルヴィンと違って、夢多き少年だもの。

それに、そんな荒唐無稽な話を 信じられなければ。

ゲート
霊力野の無い人間が精霊術を使うなんて、夢みtainな目標を追って

いられないじゃないか。

しかし、槍の力はそれほどだったとは思わなかった。最後の一撃の時に見た、四大を束ねる大精霊達。

桁が違う存在を逃さない。つまりはそれほどの拘束力を持っているということ。

マナが吸収されていく、その勢いも尋常じゃなかったし。

「四大を捕らえられるほどの黒^{ジン}匣だったというのか……………」

ミラの落ち込んだ声に、僕とアルヴィン、そしてイバルもはつとなる。

3人とも、俯いているミラを見た。

「あの時……………私は、マクスウェルとしての力を失ったのだな」

「ミラ……………」

弱々しい声。研究所を脱出した直後も、そんな顔は見せなかったのに。

ミラは立ち上がると、こちらに背中を向けた。顔を見られたくないのだろう。

「ミラ……」

「今はいい。一人にしておいてくれ」

励ましの言葉をかけた方がいい、と思うけど。

考えたいこともあるだろうし、ひとまずは落ち着いて

「そうだ、貴様達たちは去れ！　ここはミラ様の社、ニ・アケリアの中でも、最も神聖な場所だぞ！　ミラ様のお世話をするのは、巫子であるこの俺だ！」

つてな空気を完全に無視し、ポーズを決め、ドヤ顔で歯を輝かせながらイバル。

視線でアルヴィンにサインを送るが、首を横に振った。僕と同じ感想だ。つまり処置なしということ。

で、落ち込んでいるミラもそれを聞いていて。

「イバル。お前もだ。もう帰るがいい」

「……………は？」

全くの予想外って声を出すイバル。

ってバカやめろ。背中から不機嫌のオーラが出ているのが分からないのか。

凹んでいる時にそんな事して、怒るに決まっているだろうに。

「ミラ、様？」

「イバル」

名前を呼ぶミラ。しかし目が危ない。ジト目じゃない、混じりっ気なしのマジ睨みだった。

目が見たこともないほどに釣り上がっている。

イバルも同じなのか、思いっきり腰が引けているな。

その、たじろぎ気味のイバルに、ミラは容赦なく告げる。

「有り体に言っぞ

うるさい」

死刑宣告のような端的な言葉に、イバルは音もなく膝から崩れおちた。

「かくして、巫子・イバルはこの世から去ったのであった……………」

「っ、勝手に殺すな！」

「おや、生きてたんだ」

乾燥したワカメみたいになつてたのに。

瞬時復活するイバルを見て、僕は味噌汁にワカメを入れすぎた時のことを思い出していた。

まあ、今はワカメよりイバルだ。

「どうしてミラ様はあんな言葉を……………」

「いや、凹んでる時に騒がしくされたんだ、そりゃム力つくでしょ。まあ、そう落ち込むなってワカメ」

あと、首大丈夫？　って聞くが、何やら睨まれた。

「誰がワカメだ！　この、貴様らがしっかりしていないのおかげでミラ様があんな事に！」

手を上下左右に動かしながら喚くイバル。何か奥義を繰り出すようにじたばたと動きながら、八つ当りしてくる。

しかも文法間違ってるし。正確には“おかげ”じゃなくて“せい”だろう。事実を言えば、それも違うのだが。

「くそ……………俺がついていっていれば」

「二秒で敵に発見されたらうなー」

さっきから手をバタバタと動かして、うっとうしいやら騒がしいやら。じつと見ていると面白いのだが、こんな騒がしい男を隠密行動なんかに連れていけないだろう。

研究所内で四大をぶっ放しまくるミラもミラだけど。

はっ、つまりは似たもの同士……………隠密より侵略をつてか。

あなどれんな、奥が深いよニ・アケリア。さすがは精霊の里。

と思っていたと、アルヴィンの呆れ顔が見えた。おっさんには、この騒がしさはきつかるうよ。

「なんか無礼なこと考えられてるような気がする。だけど、マジで短気な奴だな……で、これからどうするよ、少年」

「僕はここで待ってるよ」

やるべき事は話し合うとして、まずは休憩だ。一区切りもついたら、これからのことを決めていかなければならない。

槍を破壊するという目的は変わっていないのだから。

それに、もうすぐ夜だし、ミラもお腹が空いたら戻ってくるだろう。そう思つての発言だったが、イバルはいたく気に入らなかつたらしく、何やらつつかかってきた。

「いいか！ これからも、ミラ様のお世話は俺がする！ ぽつと出の、どこかの馬の骨かもわからん奴が……余計なことはするなよ」

「世話、ねえ……それって食事も？」

「ミラ様は食事をしない！ 四大様からマナを……っ!？」

そこで気付いたのだらう。イバルが、驚いた顔になる。

四大がない今、ミラは食事をしなければ生きていけないってこと。

「今まで通り、僕が作るって。さっきも美味しそうに僕の作った料理を食べていたしー」

「な、ミラ様が食事を！？」

「食べなきゃ死ぬっての。それよりもなにか。食事をするぐらいなら、いつそ飢えて死ねと？ それも余計なことだって言うのか？」

「ちょうどいい。お世話をしている巫子様に、一度聞いてみたかったんだ。」

「なんでミラは食事をしたことがない？ 旨いもん食べればやる気も出るってことは、そこらへんのガキでも知ってることだろ」

「それが、どうしてだ。聞けば、眠ったこともないという。何故、二大欲求を封じ込めるのか。」

「必要だったはずがない。食事の匂いを嗅いだことがないなんて、あるはずがない。けど必要なものとして育てられた。」

「自らを使命に捧げていたからか。ミラをマクスウェルとして“扱っていた”からか。」

「おいおい、落ち着けよジュード。ミラにはミラの事情があるし、こいつにも事情がある。習慣もなにかもが違うんだ。俺たちとは、視点そのものが違うって可能性もあるだろ」

「だから、それを責めるのも決め付けるのも早急だし、間違っている。」

「アルヴィンが言うが、それでも僕は納得できない。」

(…………でも、確かに)

頭ごなしに責める問題ではないのかもしれない。ミラもこいつも、
今までの生活があったのだ。

だから、ちょっと。落ち着いて、軽く謝ろうとしたのだが

「その通りだ！ それに、ミラ様は今まで食事をしなくとも、使命
を果たしてこられた！ これからは……………食事を作るが、それでも
出会ったばかりのお前に責められる筋合いはない！」

「んだとこの増えすぎるワカメが。やんのか海藻類」

カチンときた。特に最後の言葉。時間がそんなに大切か、あとドヤ
顔すんじゃないよ。

ぶっ飛ばすぞこの野郎。

「ふん、俺は強いぞ。お前のような、子供じみた顔している奴には
負けない」

ふふん、という顔をするイバル。

「けっ、ラリアットの一撃で昏倒したくせに、よく言うよ」

「ぐ、あれは汚い不意打ちだったからだ！ 正面からやれば、お前のようなチビにやられるか！」

「ぐ、お前だって僕とそう変わらないじゃないか！」

イバルは髪の毛が立っているからか、背は高く見える。だが、素の身長は誤差の範囲だろう。

事実　こうして、正面からメンチの切りあいになると、視点があうのだ。

こいつも、僕も……ミラよりは背が低いけど。

その時、横からアルヴィンの声がする。

「……………どんぐりの背比べ」

「「何か言ったか?！」」

「いや」

両手を挙げ、降参ーと言うアルヴィン。

ちっ、このおっさんはほっとこっ。

でも、このままじゃ埒あかねえ……………間違っている云々はともかく、こうまで言われて黙っている僕じゃない。

ここは分かりやすく男らしく決着をつけようか。

「……………階段の下、草原でぶっ飛ばしてやるよ。――対一の勝負だ」

要約すると“表え出るやコラ”。

「ふん、ミラ様に迷惑がかからないようにか……………望む所だ！」

逃げない所は褒めてやろう。

さあ 野郎同士、拳で語り合おうじゃないか。

16話 「夢の傷痕」

草原の上で僕達は向き合う。互いに、武器なし。

ただし、マナの強化はあり。使う得物は己の拳だけ。殺しあいをしたいのではない。

“お話し合い”をするのに、刃物も精霊術も必要ない。そう思っ
ての僕の提案に、イバルは同意した。

そうして、拳での語り合いは始まった。

「お前に、ミラ様の何が分かる！」

「何も分からねえよ！ 短い付き合いだからな！ だけど、五感も感情もある一人の人間だってことは分かる！」

「ミラ様は精霊の主だ！ 使命のために、ミラ様は戦われている！」

「だからって、使命だけに生きなくていいだろう！ 笑顔だって、そりゃ超絶綺麗なんだぜ！ あとちょー可愛い！」

「……………う、嘘を言うな！」

「って、笑った所を見たことねえよかよ！ 人生損してるなあ、今度僕が笑わせるから、一緒に見るかぁ！？」

「お、俺の手で見る、必要ない！」

「料理を作ってたか!？」

「そうだ！ 知ったからには全力でやるまで！ よそ者の手など要らないっ！」

「僕がしたいからするっ！ ほら論破完了っ！」

「どういった理屈だ！」

「あと、何であんな服にした?! 正直ありがとうございますっ！」

「普通の服だと、シルフ様の力で飛ぶ時に服に風が入って膨れ上がるだろうがっっ！」

「なるほど納得っ！」

最初はミラのことを、途中からは、痛みに混乱したせいか、思ったことを。そのまま口に叫びながら、僕達は幾度と無く拳をぶつけ合った。

途中から何を言っているのか自分でもわからなくなったが、それでいい

明確ではないが、何となく理解できた。上っ面の言葉ではない。

総じて、思う。ミラのことと、役割。イバルもそうだ。

イバルは、考えもしなかったただけなのだ。マクスウェルが食事をするなんて、ましてやそれで笑うなんてことを想像もしなかった。

発想そのものが無いのだ。だから、それが当然だと思った。その中で、必死にマクスウェルに尽くしてきたのだろう。

（だけど、はいそうですかと納得できるか！）

責めるのは酷だとして、同情なんかしてやらない。

事実としてミラの20年があつて、それは覆せないのだから。

そうして殴り合つて、10分は経過しただろうか。

「はあ、はあ、はあ……………やるじゃねえか。でももう限界だろ？」

「ふん……………お前の方こそ、膝が笑つてるぞ」

互いに強がる言葉をかけあう。形勢は完全に互角だった。この巫子、なるほど口だけではない。

素の肉体も鍛えているが、マナの制御技術が半端ではない。今までにあまり見たことがないレベルだ。

繰り出される拳は速く、キレもあるのでクリーンヒットされると意

識が飛びそうになる。

何とか耐えられているものの、気を抜けば即座にKOされるだろう。手数も多い。口の中はあちこち切れているし、殴られた顔が痛すぎる。

鏡を見れば、目の前のこいつのように、内出血で青くなっている自分の顔が見られるかも。

だけど、先に。

倒れてなんか、やるもんかよ。

あっちも同じのようだ。その顔にまた戦意が宿っていく。

「これからだ……いくぞ！」

「来いやぁ！」

と、また拳での語り合いが再開されようとした時。

「
スプラッシュ！」

ミラの放った水の精霊術に吹っ飛ばされ、気を失った。

「起きたようだな……ジュードも、そこに座れ」

で、気絶している間に運ばれたらしい。気がつけば社の前の広場にいた。

起きるなり、イバルと一緒に正座させられる。イバルの方は先が目覚めていたのか、勝ち誇った顔でこちらを見ってくる。

よし、上等だ。第二ラウンドといこうか。

しかし、そこでミラに止められた。

「やめろ。それで……なぜ、あんなをしていた」

殴り合いのことを言っているのだろう。僕とイバルが同時に答えた。

「いや、それはこイツが挑発してきた（ました）から……」

「……はあ。言い訳は聞いていないのだが？」

ミラは頭痛がすると言いながら、片手で頭をかかえると深いため息をついた。

「まったく、これからが大変だというのに……………それで、もう一度聞くが何が原因で殴り合っていたのだ？」

「それは、コイツが……………！」

またハモる。それを見たミラは呆れたのか。もういいと首を横に振った。

気まずい空気が流れる。

そんな中、ミラは僕のアイテムバックの方を見る。

「ジュード、取り敢えず手当を頼む。君も、イバルもだ。この大事な時に、大怪我でもされると非常に困るからな」

若干表情を和らげて、ミラ。しかし、笑顔のまま彼女は宣告する。

「次は、無いからな？」

「申し訳ありませんでした」

素直に謝る。事実、うかつな行動だったから。全力で殴り合ったせいで拳が痛いし、筋肉を酷使したので全身が痛い。あと2日は休まなければ出発できないだろうし。

断じて笑顔のミラが怖かったわけではない。

ともあれ、治療だ。

僕は自分のアイテムバックからあらかじめ煎じていた薬草と、ガイズを取り出して腫れている頬や拳に処置をしていく。

「ほら、手え出せ巫子殿」

「ひ、必要ない！ これしきの痛みなど……………っ!？」

イバルは平気だ、と言おうと立ち上がる。だが、その寸前に、頬の痛みが響いたのか、涙目になった。

「大人しくしとけて、いいから。治療行為に悪ふざけを挟んだり
はしねーよ」

「ぐ……………」

半眼になりながらも大人しくなったイバルに治療を施していく。処置は10分程度で終わった。僕もイバルも包帯のガーゼだらけだ。

これが美女を守って、となら格好もつくのだろうが、全くの自己責任なので不名誉な傷ということになるだろう。

「それはそうだ。君もイバルも、もう少し先を考えて行動して欲しいものだな」

ミラにそんなダメだしをされるとは。

僕は呆然として、おもわずアルヴィンの方を見る。

つていねえよあの野郎。

「ああ、アルヴィンなら先に村へ戻ったぞ。お前たちが喧嘩しているのを伝えてくれた後にな」

「村に？」

「ああ。ジュードもイバルも、ひとまずは村で静養していてくれ。それに、もう夜だが……ここに泊まるわけにもいかないだろう」

「しかし……！」

イバルが反論するが、ミラは抑えこむように視線を叩きつける。

「私も、少し……一人で考えたいことがある。だからイバル、今夜は二人をお前の家に泊めてやってくれ」

ミラの言葉に、イバルは心底嫌そうな顔でこちらを見る。

だが、巫子が逆らえるはずもない。すぐに跪いて、承知いたしました、と答える。

「……………ついてこい」

「うーい」

睨みながら言うイバル。僕はその後をついていこうと、立ち上がった。すぐに、ミラに呼び止められた。

「ジュードは残ってくれ。少し話があるのでな」

「で、話ってなに？」

「一对一で話すことなのか。イバルがちょっとした部外者扱いされたからか、ものすごい眼で睨まれたんですけど。」

「ああ……………」

ミラは僕の問いに答えず。近づき、顔を寄せてくる。

（な　　）

迫ってくる顔。金の髪、長いまつげに柔らかそうな肌。

左右対称に整っている美貌は、至近距離で見せられると鼓動が高鳴るほど。

そして、ミラはそのまま。

僕の背中を触ってきた。

それはキジル海瀑で受けた”傷の所”で。思わず痛みにも声をあげてしまう。

「やはりな。私をかばった時の傷か」

「なんで……………」

気付いたのか。上手く隠せていたと思ったのに。

聞くと、アルヴィンから教えてもらったと言う。

「イバルとの喧嘩の時に気付いたらしい。君が、背中が痛む素振りを見せていた、とな」

「アルヴィン……………」

あのおっさん、なんて余計なことをしてくれるのだろう。眉毛むしってやるのか。

「イバルと互角だったのはそのせいだろう。イバルは確かに腕は立つが……………それでも君の専門分野である殴り合いで、互角に張り合えるほどとは思えないからな」

「まあ……………」

実戦ならいざしらず、殴り合いって限定なら負けなかっただろう。

ミラの言うとおり、背中の中の痛みをせいで拳に力が入らなかったのだ。背筋は下半身と一緒に、拳打を撃つときには要となる部位だ。

力がろくに入らないから、突き出す力も弱くなっていた。全くの言い訳なんだけど。

「問題はそこではない。ジュード、怪我をしたというのに何故隠していた？ 何故、私たちに嘘をついた」

怒る、というよりは困惑している顔。純粹に疑問に思っているからだろう。

誤魔化すにも意味がないと判断した僕は、その問いに素直に答えることにした。

「心配されるほどじゃないと思って。ほら、手足がもげたってほどじゃないし」

心配されるような怪我じゃない。若干、甘めに見積もっていたのは確かだから、そんなに強くは言えないのだけ。

そう答えるが、しかしミラは納得してくれない。腕を組んで、困惑の表情は消えていないのだ。

「分からないな……人間は、自分を大事にする生き物ではないのか？ 怪我をすれば、人に言えはいいだろう」

「そんなに大したことじゃないよ。死ぬような傷でもないし、僕が

痛いのを我慢すれば済むことなんだから」

そつだ。それに、こんなに心配してくれているのは何故だろう。

理由が分からない。僕は、精霊術を使えない人間で。

周囲からは、価値がないと言われる人種だ。

「だから、さ。別にこんな僕が怪我をしたって、特に何を心配することもないだろう？」

ミラも、使命を大事にしていればいい。生憎と僕は死んでも構わないと思っている。

死にたくないから、最後まで足掻こう。でもあの夢を叶えるため、命を捧げる覚悟はとうに用意できているのだ。

「……………分かった。だが、背中を見せる。せめて治療させてもらう」

その後、私はジュードの治療をはじめた。教えられた通りに、背中
の傷に練られた薬草を塗り、ガーゼで包んで包帯で止めていく。

（これは、酷いな）

出血は止まっている。体内のマナを循環させたから、止血だけでは
きたのだという。

だけど、それだけで済むほどに背中への傷は軽くない。さぞかし痛ん
だことだろうに。事実、肌着の半分は血の赤に染まっていた。

それなのに、何故あんな言葉を言うのか。心配するなと彼は言うが、
これは一般的には軽傷と呼ばれるような傷ではない。

男がするというやせ我慢か。

だが表情から察するに、彼は本気で大したことがないと信じている。

（なんだ、この違和感は）

こんな僕が、と。ジュードの口から出た言葉を前に、私は何
も言えないでいた。

理解不能の感情に襲われたからだ。

それは何なのか、はつきりとは分らないが、胸が締め付けられているような感覚がある。

（何故、君はそんな風に笑う）

覚悟に対して感嘆の念は抱いている。命を賭けるという言葉に、なるほど嘘はないのだろう。

今までの行動を見るに、ジュードの行動理念は一貫している。

助けられたことについて、本当に感謝をしている。

研究所で溺れかけた所を掬い上げてもらったのが最初。

脱出して、兵士に見つかり、苦戦していた時も助けてくれた。他人の振りをして、巻き込まないよう一人で戦おうとしていた私の前の立ち、兵士をなぎ払い。

足を怪我していた私を背負って、船まで連れて行ってくれた。

もしジュードがあの場合にいなかったら私は溺死していただろう。あるいは、ラ・シュガル兵に捕まっていた。

海停についてからも世話になりっぱなしだった。食事の時もそうだった。

彼は鬼気迫る表情で調理場に入り、出てきたものは至高と呼ばれる料理。あの時は精霊の使いか何かと勘違いしたものだ。

戦いに関してもそう。文字通り、身体を張って守ってくれたこともあった。

約束はしていた。言葉として口約束はしていた。

だが、実際に目の前で身体を張られる所を見ると、また違う念が胸の底から浮かんでくる。

その後に、私を女性扱いする所までも。マクスウェルである私を、女として守ろうなどと、そのような者が現れるとは思ってもいなかった。

（嬉しいような、気恥ずかしいような）

あるいは、スケベな心があるからだろうか。それは置いておいても、ジュード・マティスという少年は大した男だとも言える。

強さだけではない。彼の行動からは、思いやりを感じるのだ。何やら隠そうとしているようだが、私やアルヴィンから見ればみえみえだ。

子供らしいと言えばそうなのだろうか。アルヴィンに対して、素直

ではないが、そう嫌ってはいない事も見て取れる。

きっと、親からは良い教育を受けたのだろう。彼の行動は、深い愛情を受けた者が取る行動そのものだ。

（それなのに、ジュードは自分の事を軽んじている）

自分を大切にしないのだ。人間はまず自分のことを大切にするといい。それは当たり前で、自然なことだ。

なのに、ジュードはそれがすっぱりと抜けている。まるで自分には価値がないというように。

（矛盾している。ちぐはぐだ）

価値があるという言い方は嫌いだ。しかし、他人から見れば羨ましがられよう、大したものを持っているのに、自分ではそう思っていない。

捨て鉢とも取れる。自分が死んだことによって周囲にどういった影響を与えるのか、分からないはずがないだろう。

思えば、研究所を出てからもそうだった。

あの場で私に手を貸すということ。それはすなわち国を敵に回すということ。

その前、教授の研究について語っていたこともそうだ。発端である人物を殴る。なるほど、立派な心だが、一介の医学生が思うようなことではない。

なのに、容易く踏み出せる。傷があっても告げない。力量に関してもそうだ。

四大の加護がある私と伍する力量。イバルにしても、決して弱くない。選ばれた巫子として、幼い頃からそれこそ地獄のような訓練を受けているから、あれだけ強いのだ。

それに、匹敵する医学生。修行の期間を考えれば、イバルには数年及ばない。才能だけで埋まる差ではない。

（素の筋肉も、鍛えられている。見惚れるほどに）

ひきしまっていて、無駄な所が一切ない。これも、男らしいといえば、そうなのかもしれない。

だけど全身のところどころに見える、傷の痕のように。

（胸元にある、大きく深い傷痕のように）

各所に”影”が見えてくるのも、確かだった。

私は、面と向かって、人と深く関わったことはない。だけどジュード・マティスという少年は、そんな私でさえ分かるぐらいの大きさで。

心の中に何か重大な”歪”を隠しているのだ。

(……………何があつた、とは聞けないのだろうか)

ジュードは少年だが、男としての矜持を持っている。

自分に自信がないという理由、過去に何があつたか、聞いた所で答えてはくれないだろう。

だから、私は言葉で示すことにした。

「ありがとう、ミラ」

僕は背中 of 処置が終わった後。即座に着替え、ミラに向き直る。

ミラは何やら真剣な表情で考え込んでいた。

何をそんなに考えているのだろうか。ひょっとして、四大のことだろうか。

それも明日に考えればいい。イバルも交えて話した方が、後々に面倒くさいことにならないだろう。

と、告げようとした時、ミラは顔を上げた。

まっすぐに、こちらの瞳の奥を見据えるように、正面から視線をぶつけてくる。

そして、言った。

「ジュード、ありがとう」

ぼん、とミラの手が僕の頭に置かれる。

「本当に助かった。君が居なければ、私は二・アケリアに戻ることができなかっただろう」

「ミラ……」

感謝の言葉に、胸が熱くなる。

素直に感謝された事は、あまりない。それこそ5年前のあの事件から。

そうして感激している僕に、ミラは言葉を続ける。

「君の事情は聞かない。聞いても答えないだろうから。だけど、これだけは言わせてくれ」

（……………え？）

凍りつく。ひょっとして、僕が精霊術を使えないことがばれたのか。

護衛はクビなのか、喧嘩したからダメなのかと、目の前が真っ暗に

なる。

しかし、出てきた言葉は予想外のものだった。

「私達は、目的を共にする同志だろう？ …………… だから、今回のような真似はするな。何より、私が心配をするから」

「心配……………」

「そうだ。君が私の無茶にするように。私も、同じようなことを思うから」

「…………… つか」

その時、胸中に浮かんできた言葉を僕は知らない。ただ、たまらなくなつて。

「あれ？」

両の目から、涙がこぼれた。気付いた僕は、即座にミラに背を向ける。

「…………ジュード？」

「何でもないから！」

泣いている所なんて、みつともなくて見せない。

問われても困る。自分でも、何故涙が出てきたのか分からないのだから。

しかし、僕はミラに心配させていたのだろうか。

（事情を知らないから、ってのもあるだろうけど）

この時、僕ははじめて思った。ミラに、精霊術を使えないことを知られるのが怖いと。

知って、嫌われれば。一体僕はどうなるのだろうか、と。

「うめん……」

知らず、口の中からは謝罪の言葉がこぼれていた。秘密を持っていること。ミラもあるのだろけれど、僕の方がもっと罪深いものなのかもしれない。

世界とかの謎じゃなく、自分に関することについてだからだ。偽りをもって接するという行為は、ある意味での裏切りに等しい。

だからこそ謝罪の言葉。だが、ミラは勘違いしたようだ。

このような時に言う言葉は、そうじゃないだろうと言ってくる。

（ミラの時とは事情が違うのに）

チクリと刺す胸の痛みを感じる。だが、僕は目的のために。それを隠すようにして、言った。

「
ありがとう」

我ながら、白々しい言葉だと思う。耐え切れず、僕はミラの社から走って飛び出した。

外は霧が深い。まるで今の自分の胸中のような。

その中で僕は走りながあ、誓った。

（酒を飲んでやる……………！）

逃避なのは分かっている。だけど、今夜はなにもかも忘れたいと、そう思った。

16話 「夢の傷痕」(後書き)

感想で原作ジュード君が皆さんに言われている。

でも、仕方ないとおもう。

シリーズの主人公の目的というか行動理念を並べてみて分かった。

以下、テイルズシリーズの各作品の、重大なネタバレを含みます。
未プレイな方、ネタバレが駄目な方はブラウザバックをお願いいたします。

以下、作者がプレイした作品の、ちょっと感想。うる覚えなものあり。

P：父さん達の仇を討つ！　ダオスをたオス！

D：爺ちゃんみたいな兵士に！　ミクトランぶっ倒す！

E：暴走気味の幼馴染を止めるため　平和な老後のために、あと世界のため

D2：さあ、英雄、英雄！　リアラアアア！

S：コレットを守る！　ミトスを止める！

R：クレアアアアア！　クレアアアアアアアア！

A：俺は悪くねえ！　俺が悪い。ごめん。変わるから。見てくれ
ティア。

V：泥棒取っ捕まえるぜ！　さあ、人誅、人誅！

X：巻き込まれちゃった　どうしようか　取り敢えず自分に出来る
ことを　黒匣を壊そう。ミラが危ないって言うし　ミラについてい
く！

ミラミラミラア！　ミラいなくなった　ミラが助けてくれた命
だし、頑張るか！　ミラ戻ってきた！これで勝つる！　聞いた話、
黒匣って必要らしいよ

黒匣、一方的に壊す、ダメ、絶対　黒匣の代わりに源^{オリジン}霊匣があ
るってさ！

取り敢えず、人を信じようじゃないか！　源^{オリジン}霊匣の研究開始で
投了です。

……………ひどくね？　信念が迷子になるRPGじゃね？
もしくは後半を指して、揺るぎない信念を探すRPGか。ミラはと
もかく、ジュードが酷い。

てか、こうして並べてみるとエターニアのリッドって異彩を放って
ますね。

主人公の中では、シリーズでも一・二を争うぐらいに好きなんです
が。

16・5話 「子鬼上戸」(前書き)

お酒は二十歳になってから！

忘れたいことができてから！

B Y ウイスキーは ントリーと主張する人狼より

16・5話 「子鬼上戸」

「それでは、お嬢様？」

「ああ。陛下に渡す情報は以上だ」

ラフォート研究所で行われていた実験の内容。それに携わっていたもの。

賢者の槍の詳細も含め、イル・ファン内で得られた情報を書いた手紙を、ボーボーの足に括りつける。

「じゃあ、頼んだよ」

クルツクーと返すボーボーを見送る。分かっているのか、分かっていないのか。

だけどあの子は間違えない。卵から孵した私の愛鳥。学術名はシルフモドキと言われるあの子は、私にとっては風の大精霊そのものだ。力強く羽ばたくその姿には、少し嫉妬を覚えるけれど。

「お嬢様？」

「アグリアと呼んでよ、プラン」

間違ってもナディアとだけは呼んでくれるな。思いを言葉に乗せて送るが、プランは堪えた様子もない。

さすがは肝が太い。” 医学校で情報収集をこなせるだけはある” か。

「これから発つのですか？」

「アタシはここで目立ちすぎた。迂闊に動くのもまずいからね」

研究所で動き過ぎた。警備の者には顔を覚えられてしまったし、これ以上この街で、陛下のためにできることはない。

あの槍の” 鍵 ” も、今はマクスウェルが持っていてしまった。鍵を作りなおす動きがあるらしいが、そんなに速くは作り直せないだろう。

そう、マクスウェル。ジュードと一緒にこの街を脱出した大精霊。なるほど、あのマナの量は 確かに、本物であることを疑わせない。

どう奪い返そうか。考えている時、プランから予想外の言葉が。

「ではお嬢様、ジュード君との進展はいかほどに？」

「はあっ！？」

思わず答える。何を言っているのか。分からないと言う前に、プランは言葉を挟み込む。

「お嬢様唯一のオトモダチでしょうに。私は心配しているのですよ？」

「余計なお世話だよ！」

「……………なら、そういうことにしておきますが」

落ち込んだ風に、プランは言う。さて、なんでアンタがそんなこと。

「お嬢様が、素で喧嘩できる唯一の相手。それはもう、私も覚えて
いますよ 職場も同じですからね」

言うとおり、プランはハウス教授の医療室の看護婦を務めている。
教授の助手であつた、ジュードにも近い位置にいる。

「しかし、ハウス教授は？」

「死んだよ。研究成果だけはもっていかれたみたいだね。用済みと
マナの補充、一石二鳥ってやつさ」

そう、ハウス教授はイル・ファンで活動する組織に消されてしまつ
た。マナを吸い取られ、殺されたのだ。

教授はマナのやり取りなしで。つまり^{ゲート}霊力野なしでマナをやりとり
し、精霊術を行使する方法を研究していたようだけど、どうにもそ
れが組織にとって有用だったようだ。

国にも大きな影響力をもっている組織に、成果だけを奪われ、始末
された。アタシとしてもその動きを把握していた。とても止められ
るような状況じゃあなかったけど。

「そうですか……………ジュード君、落ち込んでいるでしょうね」

「まあ、な」

ダメージは受けているに違いない。それ以上に、アタシの事を憎んでいるとは思うけど。

あの状況では、そう思われて当然だ。教授をアタシが殺した。そう見るのは自然なこと。

（手は下していないんだけどね）

かといって、わざわざ説明なんかしてやらない。アタシを殺すというなら、殺し返すだけだ。

事情を説明して和解するなんて、そんな光景、想像もつかない。

「ナディアお嬢様？」

「だからアグリアと呼べって言うてるだろ。ジュードの事？　はん、今頃は凹むあまりやけ酒にも手を出しているんじゃないか？」

言いながら、あの惨事を思い出す。思い出したくもない、あの時の言葉。声。言動。肌の温もり。

「何やら顔が赤くなっていますが」

「うるさい--」

叫ぶ。あんな事、思い出すだけで顔から火が吹き出そうになる。

あれは、ジュードと一緒に傭兵じみた任務を受けていた時。村に魔物が出て、それを蹴散らして。

ジュードは、驚いて高所から落ちた村人を治療して。勘違いされた後にもらったものが、バレンジワインだった。

しかも10年以上寝かせた、ムーンライトという超高級酒、それも2本。

アタシも一度飲んでみたかったので、イル・ファンに持って帰ってきて。店長が作ったハーブ鳥と、アタシが持ってきたチーズと、ジュードが作ったミートパスタ。

交えて、飲んだ時に”あれ”は起きた。

（美味しかったよ。口当たりもよくて、飲みやすいからって、どんどん飲んだ。それがいけなかったんだ）

しばらくしてジュードは変わった。変貌した。豹変した。

「お嬢様、もしかして酒宴での？」

「あれは、アタシの生涯の不覚だったよ」

「詳しくお願いします」

食い入るように迫ってきたプランにちょっと引きながら、思い出す。

そしてガラにもなく、祈った。

どうか、アタシと同じように。

酔ったジュードにからまれて、痛い目を見る誰かがいますように、と。

あいつは、駆け込むように入ってきた。家主のイバルに怒られているが、まるで聞いちゃいねえ。

いいから酒を飲もうぜ、と村のどこからか買ってきたのか、酒を5本手に持っていた。

俺も飲みたい気分だったし、イバルもそうなのだろう。ヤサグレ気味だった巫子殿は、「なんで俺が」なんて顔をしながら、ジュード

の意見を飲んだ。

ミラ様がどーとか言っていたが、あいつも興味があったのだろう。友達いなさそうだし。

それよりも、対等な立場の人間がいなかったのかもしれない。ミラは上で、村人は下。

その上下を繋ぐ役割を担っている巫子は、実は対等な相手に飢えていたのかもしれない。

だからか、ジュードのただならぬ勢いもあって、結局は男3人で飲みだした。

ジュードが買ってきた食材で、簡単なつまみを揃えて。

そうして酒宴が始まって、30分が経過した頃か。

黒髪の悪魔が、出現したのは。

まず、優しくなった。ジュードは酔ったのか、顔を赤くしながらも、イバルの言葉を真剣に聞きつつ、うなずいて、話の流れに乗って。

うんうんと同意を示しつつ、時には感情を交えて話を盛り上げていく。聞き上手とはこういうことか。

「ミラ様は俺の憧れなんだ」

「お役に立ちたくて、頑張った。修行だって必死にやった」

「時々俺が買ったアレ系の本をかってに持っていかれて、後が怖い」
などといった。

素面ではとても言えないだろう発言を次々に引き出している。いや、酔っていたって普通は言わないだろう。

恐るべきはジュードの話術とオーラだ。にこにこと、いつもとはまるで人が違うようなそれは、それでも警戒心を薄れさせるには十分な効果があった。

（こういう所も、あの医者と違う。似ていない）

ずっと昔に去っていった“主治医”。二・アケリアに到着した後、私用だと外した際に受け取った組織の伝書鳩。

それで、確認したから間違いない。ジュードはあの生真面目を絵に描いたような医者の子なのだ。

そんな、今となってはどうでもいいことを思いつつ、俺は二人の事を観察していた。

場が急変していた。なにか、ジュードはニコニコしながらイバルに質問を連発していた。

その様子は異様だ。イバルは顔を赤くしながら、眼をグルグルと渦巻のように回している。

それも、ジュードの質問の内容が揃って“アレ”だったからだろう。

「ミラの胸って大きいよね。実はあの衣装ってイバルの趣味？」

「空気読んだ方がいいと思う。そうしたら、ミラもイバルの事を見なおしてくれるって」

「イバルって強いよね。冗談抜きで、イバルより強い相手と戦ったことって無いよ」

「ふとももは至高。そうだろう、同志イバル」

「ねえ……パンチラって言葉、素敵だよ」

これをなんと言おう。笑い上戸ではない。泣き上戸でも、ましてや絡み酒でもない。

基本は素直だ。褒めていることもある。だけど、臍腑をえぐるような発言も色々ある。

イバルは誤魔化そうとするが、ジュードは脈を手に取り、「嘘だね？」と笑顔。

責めずに事実だけを告げてくるもんだから、イバルとしても反撃ができない。じつとされるがままになっている。

（おいおい……天然上戸？ いや、これは）

鬼上戸か。人を襲う魔物とは違う、また異質な生き物のよう
な。

まずい。これはまずい。

と、思った時には遅かったのだが。

気づけば、ジュードは何やら床に倒れ込んでいるイバルを背にして。

俺の方に、盃を持ちながら迫ってきたのだ。

「飲もうよ、アルヴィンも」

そして地獄が始まった

俺も、最初の方は自分のペースを保てていたし、ジュードの話術に

乗せられなかった。

酒は強い方でもないが、我慢はできる。

しかし、酔ったジュード。子鬼といおうか、こいつの恐ろしさはとても抑えられるようなものじゃない。

それに気付いたのは、ちよっとつまみを作るから、と。ジュードが席を外し、料理を持ってきた後だ。

「はい、アルヴィン」

「あんがとよ」

軽く礼をいいながら、つまんで。

俺の脳髄に電撃が走った。

(これは、この味は……………)

故郷の味だ。こいつが知るはずもない、俺の故郷の味。

一体なんのつもりか。問い詰めようとする寸前、ジュードは自分から答えた。

「んー、アルヴィンって父さんと似た空気をまとってるし。なら好物も、好きな味も同じかなって。あはは」

酔いに顔を真っ赤にしながらジュードは言う。間違いない、こいつは気づいていない。

それなのに、勘というか、訳のわからない感覚で真実を的確にとらえてやがる。

（まずい……………！）

「では、ジュード君は酔うと感覚が鋭く？」

「頭の回転も速くなりやがるな。アタシが好きな料理を、しかもいつもとは違うレベルで。それで美味しい酒を進めながら言葉巧みにこつちを褒めてくるんだ。アタシが言いたくもないことも、引き出してきやがる」

「それは…… お嬢様のような方には辛い。ある意味天敵ですね」

「そうだよ。それに……」

褒める言葉にも、何やらジュードの“想い”といったものがこめられている。

普段なら絶対に言わないような褒め言葉。でも、それは本当に感情がこもっていて。

「感極まったのか、抱きついてくるし……」

「お嬢様？」

「っ、なんでもない！ なんでもないからな！」

余計なことを口走ってしまった。急いで取り消すが、プランには聞

こえていたようだ。

口元を抑え、笑いをこらえている。

「じ、ごほん！　それで、お嬢様は何を言われたのですか？」

「……………髪がきれーだの、眼つきがよければ可愛いだの。思ってもいないのに、よ」

いつものやさぐれジュードなら、絶対に言わない言葉。でもそのギヤップと。

頭が混乱させられるのもあって。酔いがどんどん進められていくのもあって。

いつの間にか、恥ずかしいことを口にだしていることもあって。

翌朝、アタシは羞恥のあまり、ベッドを焼き壊してしまったほどだ。

（二度と、あいつと飲むか……………！）

陛下にだって誓おう。というか、あいつは危険だ。酔ったあいつは兵器になる。ほっとけば何人虜にするか分からない。

だから飲むなといった。

次にあんなことを言えば許さないし、抱きつくことも許さない。

「で、その言葉の中で。お嬢様が、一番覚えていられたものは？」

プランの言葉。笑いもあるが、真剣な言葉もある。

こういった所は、母親と同じだ。アタシの乳母だったプ
ランの母親。

優しい声で、似たような顔で。もう一人の母親と言えるそんな風に
言われたから、アタシは思わず素直に答えてしまった。

ジュードに言われるまで。まったく気づきもしなかった、ジュード
にほめられた、アタシの長所を。

「……………声が、綺麗」

歌がうまい、かな。

プランに教えた後。

耐え切れなくなって、“私”の顔はあの時のように、炎のように熱くなった。

「アルヴィンって、寂しがり屋だよね」

「……………ああ？」

「誕生日とか祝ってもらったこと少なそう」

かちんと来る。なんでお前にそんなことを言われなければならない。言うが、次の言葉を前に、何も言えなくなった。

「僕も、そうだから。だから何となく分かるんだ」

「お前………お前は、両親が居るだろ」

「医者だからね。誕生日に祝ってもらえることは少なかったよ。でもまあ、ソニア師匠やレイア、ウォーロックさんには祝ってもらえたんだけど」

イル・ファンに来てからは、全く。笑いながら言うジュードの言葉に、俺は過去のことを思い出してた。

確かに、誕生日を祝ってもらえたことなんて、数えるほどだ。

こっちに来た頃は母さんに。仕事についてからは、全くと言っていいほどに無かった。

（いや……あつたか）

相手は、かつて同棲していた彼女。別れる前、一度だけ祝ってもらった事がある。

おままごとみたいな真似を、と俺はバカにしている。それでも、言いたくない感情に襲われたのを覚えている。

今はもう、一緒にはいられない関係になったが。

（あいつも、変わっていないな）

格好も前のまんまだ。青少年には目の毒だったのに。

（そういえば、あの時も。酒を、強くもないのに飲んでいたっけな）

大人の振りをしていた。大人になりたかった。他人の都合に振り回される存在から、子供から、そんな立場から脱却したかった。

だから、大人ぶって。

(…………っ！)

たまらず、酒をあおる。鼻に、きついアルコールの香りが抜けていく。

たまらず、涙が出た。アルコールのせいだ。

決して、悲しいからじゃあない。

言い訳をするように、隣を見る。そんなんじゃないかねえ、と。

だけどジュードは、変わらぬ笑みを向けていて。

(こいつも、複雑だよな)

俺が気づいていること、ミラも気づいているだろう。こいつの歪は分かりやすい。

疑ってみれば一目瞭然だ。微笑ましい部分もある。

汚れた方向に突出していないのも、違った面白さを感じさせてくれる。思わず手を貸してしまいたくなるぐらいには。

その奥が見たくて。こうして乗って、酔った後に豹変するかとも思っていたが、どうにも想定していた“傷”とは違うようだ。

（ほんと、分からねえよ。人間も、精霊も、この世界も。分からないことだらけだ）

愚痴るように言う。

と、その時玄関の入口が開いた。

「すまない、明日の予定を……………ってなんだこの臭いは!？」

ミラだ。入るなり彼女の知らない臭い、アルコールのそれを感じて驚いたのだろう、一步引いて戸惑っている。だが、これが何の臭いなのか。ミラは気付いた後、ジュードに向かって詰め寄る。

「ジュード！ お前たち何をしている！」

怒っている。そりゃそうか。

怪我人、病人にアルコールはご法度だ。ミラとしても、それぐらいは知っているのだろう。

「聞いているのか？」

怪訝な顔をするミラ。しかしジュードは、ミラの顔を見たまま硬直している。

そうして、徐に口を開き、言った。

「綺麗だ」

「……………は？」

「ミラって、綺麗だね」

「いや、あの、ジュード？ 大丈夫か？」

ミラにしては珍しい。真正面からの唐突な言葉に、ちょっと混乱しているようだ。

顔も赤い。こっちからは見えないが、さぞかし真剣な眼をしているのだろう。

「綺麗だ……………」

一歩、ジュードはミラに詰め寄る。

そして、また徐に手を差し出し。

「えい」

その手が、ミラの胸元に埋まった。ふにゅっと、いう擬音が鳴った気がした。

「つつつつつ！」

ミラの顔が炎に鳴った。顔が、夜に輝く山火事よりも赤く染まる。

「ばかものっ！」

で、ビンタが炸裂した。ジュードは張り倒され、イバルに折り重なるようにして倒れた。

音からして、その強烈さは分かる。眼をぐるぐる回して、気絶していようだ

ミラはそのまま出ていった。社の方に戻るのだろう。

俺は呆然と見送ることしかできなかった。

そして、折り重なって昏倒する二人を見る。

「……………ほっとくか」

最後の一杯を飲むと、寝ることにした。

その日は、夢は見なかった。

17話 「危機は突然に」

鳥の鳴き声と共に目覚めた。体中が痛い。変な体勢で寝てしまった時のようだ。

僕は身体を起き上がらせ、その原因となったものをみようと、腹の下に敷いているナニカを見る。

「なんだイバルか」

銀髪の褐色小生意気巫子。そんなことはどうでもいいと、二度寝しようとする。

いや、ちょっとまって。

「はあっ、痛あ!？」

驚くと同時、全身に痛みが走る。身体には筋肉痛、ほっぺたには謎の痛み。

急いで外に出て、近くにあった湖面で顔を見る。

なにやら、大きな紅葉が出来上がっていた。

「いったい何が……あ、ミラおはよう、てちょちょちょ！」

無言で襟首を掴まれる。そのまま、引きずられていった。

「ちょ、ミラ、あの？」

「いいから黙ってついてこい」

有無を言わせぬ口調だった。あの時のイフリートみたいな威圧感だ。これは黙るしかない。

そのままイバルの家まで引きずられて、到着すると地面に座らされて、長い長い説教が始まった。

主に昨日の僕の所業に対してだ。話の途中、目覚めたアルヴィンも説教に加わってくる。

と、言われてもなあ。

「僕、昨日なにかしたっけ？」

「……………もしかして、覚えていないのか」

「うん。というか、何故にイバルが下敷きに？」

未だにベッドの上で寝込んでいるイバルの方を見る。なんであれを下敷きにして寝ることになったのか。あとほった痛い。

巫子はうんうんと魘されているが、夢見が悪いのだろうか。

顔も土気色である。まるで二日酔いの店長みたいな感じだ。って、
そういえば。

「酒を飲んだんだっけ」

道理で記憶がないわけだ。おもえば、昨日は酒を片手にイバルン家に特攻したんだっけ。

で、僕が酒を飲むとどうなるのか、ミラと、アルヴィンに説明した。
アルコールが入ると、記憶がなくなること。とある人物から二度と
飲むなと言われていた事。

忠告した本人が、顔が赤かったことも含めて。

「…………いや、そいつの言うことはマジで正しいわ。お前、もう酒
飲むなって」

アルヴィンが珍しく真剣な口調。うん、なにやったの酔った僕は。

聞くが、二人は口を紡ぐだけ。ミラは、珍しく頬を赤に染めていた。

どうやら僕は、本格的にまずいことをやらかしたらしい。聞くが、
教えてくれなかった。

そんな気まずい雰囲気の中での朝食が終わる。

その後、方針を決定することになった。

これからどうするのか。それを話し合うのだが その前にや
っておかなければならないことがある。

アルヴィンの雇用についてだ。ニ・アケリアまでとの約束だった。
ひとまずの区切りはついたし、どうしようか。

ひとまず今回の依頼料を払うべきだろう。提案したのは僕だし、僕
が と言いだそうとした時、ミラに手で制された。

「私が全額払おう。とはいっても、村長に預けておいた村の貯蓄か
らになるが」

「ミラ？」

「私が雇ったのだ。そうでなければ筋が通らないだろう」

断固払う、とミラが言う。

「へえ。大丈夫なのかよ？」

「四大の力が使えていた頃にな。ソグド湿道で珍しい魔物を狩って
得た素材品を売っていたのだ」

ソグド湿原とは、ニ・アケリアから繋がる街道の一つ。

とはいっても、キジル海瀑より遙かに危険な所らしい。ア・ジュールの街の一つ、”シャン・ドウ”の近くに繋がっている、普通の旅人ならばまず使わない街道とも呼ばない道。

そこで得た素材品を村長に渡し、村長が村人を遣わして、行商人に売りつけていたらしい。

もしもの時に貯蓄をしておけという、ウンディーネの提案があつてこそだ、と言っていたが。

「……………なら、大丈夫か。それにしても”シャン・ドウ」、ね」

「英霊の集う聖地、だっけ。闘技場のある街だよね」

歴史家であり、教師でもあるカーラさんが住んでいる街でもある。

「知っているのか？」

「何度か行ったことはあるよ。知り合った人もいるしね」

「……………へえ、例えば？」

なにやら妙にからんでくるアルヴィン。一体どうしたというのか。街の名前を聞いた途端、何やらまとう空気が変質したけど。

まあ　　言ってみて、反応を見るのもいいか。どっちもカタギの人だし。

「一人は、カーラさん。カーラ・アウトウェイさん。メガネをかけた美人の歴史家で、ア・ジュールの歴史というか、遺跡について教

わったんだ」

なんかみよーな連中に絡まれていた所を助けて、それで知り合ったんだ。聞けば歴史を学んでいるというから、色々古文書のありかとか聞いた。

同時に、部族間の抗争についても少々。

そういえば歴史家っていうのに、巷で話題のガイアス王については言及しなかったな。話しにくいようだったけど、なんでだろうか。

「それで、もう一人は？」

「二人目は、イスラさん。薬剤師での女性でね。泣き黒子のある、これまた違ったタイプのびじ……………ってどうしたのアルヴィン、変な顔して」

「いや……………なんでもねーよ」

どう考えても、何かあるって顔だ。

と、突っ込もうとした時に、ミラから横槍が入った。

「ふむ。知り合いとは、二人とも女性なのか？……………それも、美人の」

「うん」

率直に答える。だけど、ミラの機嫌が何やら急降下。いったい何があった。

聞くが、答えてくれない。というより、今はアルヴィンのことについて決めるべきだろうに。

「アルヴィンに関しては……出来れば雇用を継続したいな。今はなにより戦力が必要だ。ラ・シュガル相手の大立ち回りをするようになるが、受けるか？」

「……勘弁してくれ、と言う所だけだな。確かに、聞いた通りにあの国が人体実験をしているってんなら、断るわけにはいかないだろうーよ。金をもらって人助け。俺も貴方もハッピーに、ってのが俺の傭兵としての心情だしな」

ちよろけるアルヴィン。あいかわらず、こいつの真意は読めない。そもそも存在するのだろうか。だけど、アルヴィンほど有用な戦力がいないのも事実。

信用においても、だ。今から新しい人を雇うのには時間がかかりすぎるし。

ということで、本格的な方針を話しあうことにした。

まずは第一目的について。いわずもがな、クルスニク賢者の槍の破壊だ。

「あれは二度と使わせてはならないものだ。一刻も早く破壊する必要があるのだが……」

問題点は多々ある。まずは、どうやって研究所があるイル・ファンに侵入するか。

方法は2つ。海路か、陸路だ。

「海路……船でイル・ファンに直接、つてのは無理だな。リスクが大きすぎる。最悪、港についた途端に包囲されかねない」

そうなればアウトだ。僕達3人対ラ・シュガル軍になって、あとは数の暴力でこっちが潰されて終わり。

手配書が回ってないわけもないし、まともに乗船すればすぐにばれるだろう。

密航という手もあるが、厳戒態勢にあるだろう今の状況では、途中でばれる可能性が高い。

そうなった時のリスクも高いのだ。知られた後の対処は神の如き迅速さが求められる。判明してから、船員から港へ連絡が入る前にその報告を止める必要がある。

止められなければ港に大軍が配置されるだろう。で、逃げ場はないわけだ。

すなわち、失敗すれば死ということだ。

海上だし、逃げ場などない。まさか船員全員を皆殺しにして航路を変えさせるわけにはいかないし。

「となると……サマンガン海停からカラハ・シャルルに向かう陸

路？」

でも、サマンガン海停には警戒網が敷かれていないのだろうか。その疑問には、アルヴィンが答えてくれた。

「ガンダラ要塞があるんだ。わざわざカラハ・シャルを越えて警戒網を敷く必要はないだろう」

そうだった。ガンダラ要塞は、堅牢で知られる鉄壁の要塞。中には、対軍用の巨大ゴーレムも配備されているという。

正面からの突破はまず不可能な、あのモン・バーンさんもいる難所だ。できればそんな事にはなつて欲しくないけど。

「とはいっても、二択しかないか……それならば後者を選ぶべきだろうな」

アルヴィンが言うと、ミラはそうなのか、と疑問の声をあげる。

「そういうものか？ 前者の方がずいぶんと簡単に思えるのだが」

ミラは、早く着くし、偽装も簡単だろうと言う。だが、ラ・シュガル軍もそう甘いもんじゃない。

近衛の兵は警備兵より格段に上だ。それに、相手の実状も分からない今、海路は危険すぎる。

「失敗」死つていうのは勘弁願いたいよ。後者の案なら、失敗しても逃げるができる」

生きているなら、また別の方法も取れる。その時に、一か八かで海路という手段を取ってもいいだろう。

方針が決定すると、僕達はひとまず解散した。

出発は明日だ。今のままでも戦えるが、怪我を直しておいた方がいいだろう。

僕はグミを食べ、ひとまずの体力回復をはかる。

これは下準備だ。グミだけで傷は癒えない。

ここからは　　僕のオリジナルの技で治す。

それは精霊術を介しない、特殊な治癒術。以前にカーラさんから教えてもらった遺跡で見つけた古文書に書いていた、とある武術の奥義らしい。

とはいっても、”他人に対しては絶対に使えない自己治癒のみの技”。

見つけた時は、ものすごい肩透かしを食らった覚えがある。「治癒術だと思ったのに！」

と、犬のように雄叫びを上げたものだ。

ともあれ、有用なのは確かなので、一年かけてようやく習得した。

名を 集気法。

誰にも教えたことがない、僕だけの秘術。切り札の内の一つだ。

（精進を怠らずの精神。師匠の教えは、守っています）

静かな所で瞑想すれば、マナの循環速度も早まるだろう。それは集気法の効果である、自己治癒力を高めることになる。

ミラに良い場所がないか聞くと、また意外な場所を教えられた。

「確かに、ここなら邪魔も入らないしね」

その場所とは、ミラの社の前だ。樹に包まれているし、ここならば魔物も入ってこないという。

静かで、霧も深いため、一種心地よい閉塞感を感じる。瞑想をするには最適の場所だな。

「それでは、な……………私はあちらで素振りをしている」

「ういゝ」

見送る。

そうして、瞑想を始めた。

「集気法」

声を出し、自分の意識に宣誓をする。同時に、体内にあるマナを循環させていくイメージを作る。

体内のマナを感じ取り、血液に載っていると仮想して。それをゆっくりと、時計回りに回し始める。

五感が高まっていく。神経が鋭くなっているのだ。森の木々が風に吹かれ、わずかに揺れる音。

遠くに居るだろうミラの、素振りの音さえも聞こえる。

（……………ちょっと、様子が変わったな）

どう話したらいいのか分からない、みたいな。昨日に僕がやらかしたせいだろう。

その前の事もあるだろうが。

瞑想をしながら考える。そのまま、二時間程度が過ぎた頃だろうか。体内の傷が、あらかた治ったのを感じる。やはりグミと併用すれば、集気法の効力も高まるな。

どんどんと五感が鋭くなっていく。

目を閉じれば、世界が広がった。

今の僕なら、見たことはないが
じ取れているのではないか。

”精霊”のように世界を感

鼻に、木々と土の香りを。耳に、木陰のざわめきを。

広がって、広がって、広がっていく。まるで世界と一体になったか
のよう。

虫の鳴き声。鳥のはばたき。木の葉が落ちて行く音。

普段ならば気づかない音が聞こえ、見えていないものでさえ見えて
いるかのような感覚がある。

闇に落ちていくような感覚。光に広がっていくような感覚。

その中で。

僕は、隠れていたものの気配を、察知して”しまつて”。

それは、僕に悟られたことを察すると、はっきりとした声で告げてきた。

473

『しかし、気づかないでいいものまで。気づいて、しまつてゐるものではないか?』

（ な ）

次の瞬間、全身に雷に撃たれたような衝撃が奔る。

産毛が逆立ち、背筋が芯から凍らされる。

「誰、だ！」

叫びたいが、声が出せない。振り絞ったはずの声は、まるで老人のように枯れていた。僕の声とは思えない。

それでもこのままじゃまずい。僕は声を発したであろう人物が居る方向に向かい、左手を前にして構えを取った。

腰を落とす。重心は後ろに、カウンターの体勢だ。

前方には木々が並んでいるだけで、一見なにもないように思える。

だが、そうと認識してしまえば、分かる。

この先に 怪物がいる。キジル海瀑で戦った巨大な魔物でさえ、比べ物にならない威圧感。

巨人だ。不吉な巨人がそこに居る。

僕は僕自身に問うた。もし、この先にいる何者かが襲ってきたとして、勝てるかどうか。

（無理だ）

即答する。疑いに入る余地など欠片もない。

戦う前に“逃げるしか無い”、と思ったのははじめてのこと。

それもそうだろう、威圧感でいえば師匠以上である。

師匠が本気になった所は見たことがないが、それでもこれほどの威圧感を出せない。

質の違いもある。目の前の人物のそれは、対峙する者の全てを跪かせるかのような、攻撃的なモノ。

一切の遊びもない、例え対峙したとしても、一合で”斬り伏せられる”。

それ以外のイメージが浮かばない。

勝負の前に負けを悟らされる。それほどまでに、目の前の相手は圧倒的だ。

（でも、ここで退くわけにはいかない）

ミラが居る。もう少しすればここに戻ってくるだろう。

それなのに、ここで僕が退くわけにはいかない。逃げるのも駄目だ。誰と合流したって、こいつには勝てない。

『面白いな少年。勝てぬと分かっても逃げないか』

男の、大人の声と言う。凜とした声は、どこかミラを思わせるものがある。

しかし、遊びは一切含まれていない。

それもおかしい。いま来られれば、僕はやられるだろう。対処法なんて皆無だ。

なのに、何故動かない。じっとこちらの様子を伺っているだけ。

これではまるで、僕を試しているかのようじゃないか。

『……………こういったこと、柄ではないがな。俺がこうまで試したい
と思った相手は初めてだ』

心を読まれたのか、即座に肯定された。予想は正しかったのだ。

僕は今、目の前の化物に試されている。

(……………クソ野郎)

ああそうだな。これほどまでの相手、誰かならば試されることさえ
も光栄と、そう思うかもしれない。

だけど、僕には容認できない行為だ。

試すという行為は 相手の全てを見下す、という行為に等し
いのだから。

つまるところは、こうだ。

僕は今、こいつに、完全に舐められているということ。

察した瞬間、脳の奥が沸騰した。

（馬鹿にするな ！？）

しかし、沸騰した感情もマナも、目の前の化物に散らされた。

「なっ！？」

相手のマナが更に膨れ上がったのだ。僕の激昂を抑えるように強く。

事実、僕は相手のマナに飲まれていた。怪我はない。だけど、心を
圧迫してくる。

まるで深い海を思わせるかのよう。信じられないぐらいに大きく、
濃いマナ。

この量に、この密度、これほどのマナが存在するのか。

すでに僕の理解の範疇を越えている。

（こいつ………本当に、人間か！？）

あるいは大精霊と言われた方が納得もできる。

どこか遠くから来た怪物と、そう表現した方がしっくりくる。

気配は動きを見せない。じっと留まっているだけ。

気づけば、僕の顔は汗にまみれていた。額から流れた汗が目に入っ
た。

目がしみるが、今は瞬きもできない。

対峙しているだけで体力が消耗していく。

このままではジリ貧だ。待っているだけでは、いずれやられてしまう。

状況を打破するには 前に。

この障害を越えるには、前に進むしか無い。ただの勘でもあるが、この相手に背中を見せるのだけはまずい。

（一か八か、突っ込むしかないか）

後ろに寄っていた重心を、前に。つま先に偏らせる。

待つ構えではなく、攻める構えに転じる。一足飛びに間合いを詰めれば、あるいは何とかなるかもしれない。

「はっ！」

マナで全身の筋力を強化。限界まで振り絞る。

汗がマナの噴出により、一気に散った。攻めの気は悟られているだろうが、どうせ隠したって無駄だろう。

ならば、威圧して、^{あっ}圧す。取るに足りない相手でも、舐めれば痛い目に会うということを教えてやる。

(5 4)

カウントダウンを始める。マナをつま先へ、拳へ集めながら。

(3)

色々な人達の顔がよぎる。師匠、レイア、母さん、アグリア。

村であつたエリーゼという少女。

(2)

やるしかない。実戦では使ったことがない、一撃。

ばかみたいに隙が大きいから、まず当たらないだろう。それでも、実行する以外の選択肢はない。

脳裏に、ミラの顔がよぎる。何をしたか、聞いて謝りたかったが、

それも叶いそうにない。

昨日の今日なのに、なんて状況だ。思わず笑みが零れそうになる。

つて、女性ばかりだな。まあ、男相手には
碌な事をされ
た記憶がない。

だから仕方ないってもんだろう。

(1……………)

マナを限界に。最後に、一歩。

踏み出そうとして

『なるほど、な』

それだけを言い残して、眼前の気配が消えた。

まるで最初からいなかったかのように。

「は……………」

思わず息がこぼれる。漏れでたのは、遊ばれたという屈辱ではなく、安堵から来るもの。

直後に、全身のマナが散り、筋肉が弛緩していくのを感じて。

そのまま前のめりに倒れた。顔面を強かにうつたが、それも気にし

てられない。

気が、遠くなっていく。

『ジュード!?!』

視界が暗闇に閉ざされる寸前、ミラの声が聞こえたような気がした。

小高い丘の上にその集団はいた。

長身の男に、中背で細身の男。大男に、派手な格好をした女性。一見すればばらばら、関連もなさそうな一団だが、共通している部分がある。

総じて、強者ということだ。

「……………それでは、よろしいので?」

細身の男。黒い衣をまとっている男が、傍らにいる長身の男に言う。

「あの少年ならばマクスウェルを守りきれんだろう。そして、それはラ・シュガル側がかき乱されることを意味する」

長身の男が、面白そうにいう。周りに居る者たちは、長身の男のいつにない様子に驚きを見せた。

「随分と、買われているんですね。兵士でもないただの一人の少年を」

女がたずねる。普段ならば疑問さえも挟まないだろう。だが、長身の男、心酔する主君のかつて見たことがない様子に、戸惑っているのだ。

「……………直接ではないが、知っているのだな。お前が翻弄されたと聞いて、面白くも思った」

命までは取らない。ただ見極めたかったのだ、と長身の男が言う。

その言葉に、女は黙った。両者は初めから立場も違うし、何より存在としての格も違う。

女が弱いのではない、長身の男が強すぎるのだ。

それだけにこの男は、強者揃いの一団の中でも、更に際立っていた。

「あれならば簡単に潰されはしまい。ならば、雲を乱す竜巻にも成りうる。ラ・シュガルの目を奴らに向けさせるのが得策だ。今は、こちらの動向を出来る限りラ・シュガル側に知られたくない」

「ええ。我らはマクスウェルの一団が、ラ・シュガルを混乱させる。その間に 影に、静かに、我らがなすべき事を進めるのが得策かと」

黒衣の男が同意する。

「アグリアから何か連絡は」

「失われた“鍵”を新たに作成する動きがあるとか」

「…………捨て置けんな」

そして、大男に向けて言った。

「ジャオ。例の娘の管理はもういい。お前は“鍵”の件を探れ。あれはこちらの切り札にもなりうる。入手しておくに越したことはな

い」

「いや、しかし……………！」

驚いたように、大男が反論しようとする。

だが、黒衣の男はばつさりと言葉を切った。

「ラ・シュガル兵どもが去ったというなら、もうお前が直々に護衛につく必要はない」

「^{ブースター}増霊極のデータが無事なことから、優先事項が変化するのは当然ね」

「う、うむ……………」

女の後押しの言葉に、大男は唸った。彼自身、自分がどういった立場にあるのか理解しているが故だ。

「プレザ。お前は単独でイル・ファンへ潜れ」

「アゲリアは？」

「研究所の件で、ラ・シュガルの“あの”一派から警戒されているようだな。連絡役はまだ警戒されていない、彼女を伝ってこちらに情報を送れ」

プレザと呼ばれた女。彼女は黒衣の男の言葉に、マクスウェルはいのか、と反論しそうになるが、口をつぐんだ。

「了解。でも、アグリアはまだこちらには？」

「例のシルフモドキで連絡があった明日には到着する予定だったが、昨日に海上で嵐にあったそうだな。船は航路途中の、ル・ロンドに避難。一日だけだが、滞在することになったらしい」

シルフモドキとは、^{ゲート}霊力野が発達している鳥だ。風の精霊術を使って、長距離間を移動することが可能な、連絡に最適な鳥だ。

人間の^{ゲート}霊力野も見極めるし、その位置をも確認することができるので、街にいない相手とやり取りすることもできる。

その名は伊達ではなく、優秀なシルフモドキは嵐の中でも飛べるほどの、強靱な飛行能力を持っている。

「なら、明後日には合流できそうね。イル・ファンにはそれからでも？」

「ああ。直接聞かないと、分からないこともあるだろう。確認だけは念入りにしておけ。ジャオもだ」

「了解」

「……………分かった」

黒衣の男の言葉に、二人はそれぞれの
頷き、場を外す。

複雑な感情をもって

残っているのは二人だ。

やがて、長身の男が口を開いた。

「今ある“鍵”の在り処、心当たりはあるのか」

「“駒”をつかつて探らせている途中です。それよりも……………」

丘から見える、ニ・アケリアの里。そこでは、少年がマクスウェルに背負われ、巫子が住むという家に入っていた。

「マクスウェルのこと、本当によろしいので？」

“鍵”は、マクスウェルが持っているだろう。視線だけで告げるが、長身の男は正面を見据えて動かない。

まるで一本の刃のような、強靱な意志。男の目からは、折れず曲がらない、不屈の鋼を思わせる何かがあった。

「今は利用できるものを最大限に利用すべきだ。最早開戦は秒読みの段階。もう二度と……………ファイザバードでの無様は、繰り返さない」

「けして油断をせずに、ですか」

「出来る限りの手は、全て打て。その上で全力を尽くす」

強大も極まる刀に、油断はない。

ただ、全身全霊をもって、真正面から斬り伏せる。身体から溢れるマナに、黒衣の男でさえ畏怖を隠せない。

「……………承知しました」

長身の男の言葉に、黒衣の男は同意を返した。そのまま、その場を去っていく。

少年を試した王もまた。家の屋根に一度だけ視線を落とした後、丘から去っていった。

17話 「危機は突然に」(後書き)

おまけ

集気法はシリーズおなじみの技。秘伝書は原作のアイフリードの宝や、各地に隠されている“特定スキル習得本”のひとつということ
でよろしく願います。

治癒は治癒だけど自分だけ癒せるので意味ねーっつの、ってな技。
ある意味で、ジュード君にとっては酷いフェイントとなる秘術です。

18話 「孤独なる少女」

「大丈夫か、ジュード」

「ああ、問題ない」

「とてもそうは見えない顔色だが……………」

予定通りに二・アケリアを週発し、キジル海瀑を越えてすぐ。

ハ・ミルまで続く道、ガリー間道に入った所で僕達は野宿していた。

顔色の悪さを心配しているのだろう、ミラとアルヴィンが聞いてくるが、こんな問題ないさ。

あ、でもちよつと吐きそう。

「やっぱり、もう一日休んでから出発の方が良かったんじゃないのか？」

「それは……………」

話をふられたミラが、口ごもる。しかし迷ったあと、断固とした口調で言う。

「私だけでも行くと行っただ。危ないと、着いて来ることを決めたのはジュードだろう」

そうなのだ。謎の襲撃者のせいで、僕がマナの大半を消耗してしまつて、昏倒した翌日。ミラは、自分だけでも先行して情報を集める

とか言い出したのだ。

襲撃者の力量を知っている僕は、もちろん却下。だけど時間がないと渋るミラも、意見を曲げなかった。

一刻も早くイル・ファンへ向かう必要があると。使命を優先するミラに、それでも危ないところちも譲らず。

最後には、折衷案としてこうなったわけだ。

僕は、ついて来るだけで戦いはしない。ミラとアルヴィンの二人に任せると。戦いもしなければ、マナの過剰消費による疲労も軽くなるだろうと。

それで確かに、症状は軽くなった。ほぼ一日、歩いているだけで、昨日よりは随分と体調は回復してきている。

「大丈夫だって。明日には全開になってるさ……イバルとは違って」

ちなみに飲み過ぎたイバルは、今日の朝によやく体調が回復した。僕達に付いてきたがったけど、ミラの「お前はこの村を守ってくれ」の一言に固まった。

そうして僕を睨むイバル。でも他に適任はいないのだ。僕じゃあ二・アケリアの里の人々の信頼は得られないだろうし、土地勘もない。

その点でいえば、イバルの方が上だ。飛行が可能な魔物も使役できるらしいし、守り役としてお前以外にありえないだろうと。

謎の襲撃者のこともある。そう頼むと、イバルは渋りながらもうなずいてくれた。

まあ、途中に何か言いたそうにしてたけど。反論しようとして、何かを思い出して黙りこむ、というのが何回もあった。

「お前、飲んでいた時の記憶はないのか」と聞かれたけど、なんであんなに何度も確かめるように言うのか。

アルヴィンに聞くと、「本当に覚えてないのか、こっちじゃ判断つかんもんなあ……なるほど、その後も怖い、か」と一人で納得していた。

いやマジで覚えていないっつーの。覚えていたとして、それは一体なんなのか。もしかして脅しにでも使えそうな何か？

それでちょっと怯えたようなりアクションを見せていたのか。

襲撃者に関しては、正体は不明のままだ。事情を話すと、イバルからは「夢でも見ていたんじゃないのか」と言われたが、断じてそんなことは有り得ない。

ミラも頷いていた。あの時の、倒れる時の僕の顔を見たからだろう。安堵の顔をしていたと言っていたし、間違いなくとてつもない何者かが、社の近くに存在したのだ。

アルヴィンは、「もしかしてバチが当たったんじゃないか。あるいは、ミラを影で守護する大精霊か何かが、お前にお灸を据えたのかも」と言っていた。

失礼な。あんなトンデモ級の化物をけしかけられるような事をした覚えはない　　酒を飲んだ時以外には。

敵勢力という可能性もあるが、もしそうなら不自然だと言える。僕だけに気配を悟らせたのと、現時点で何のアクションも起こしてこないのはおかしい。

警戒しないわけにもいけないので、非常に頭が痛い問題なのだが。

「もし襲ってきたら、どうするよ?」

「逃げるさ。目的は別だし、やり合っても勝てない」

クルスニクの槍を壊す。それが最優先事項で、謎の襲撃者を倒しても意味はない。

逃げられないなら、戦うしかなくなるが。できれば勘弁願いたいかな。

別に、逃げられる状況を作り出せる小細工用の道具として、いくらか調達しておいた方がいいか。

いつかはきっと、ぶっ倒す。僕を舐めた報いというものを受けさせてやる。黙って萎んでいるような男じゃないってことを証明するのだ。

でもミラ達と一緒に居る今は、戦うことを避けるべきだろう。あの

切り札も、できれば使わないで済ませたいし。

使うことを決めたのは僕だが、あれは無謀だった。どう考えても実践できるようなレベルじゃない。

それでも、他にやるべきことはある。イル・ファンに向けて、このままの戦力では心もとない。

状況を打破できる技は練っておいた方がいいか。

「例えば、共鳴術技とか。ミラはどう思う？」

「そうだな……一人よりは、強力な術技を使える。積極的に使っていくべきだろう」

協力すれば、個人の通常技よりも威力は大きくなる。集団で戦うことを選択するなら、共鳴術技を活かさないのは勿体なさすぎる。

「対多数の技も考えないとね。で、いくらか案はあるんだけど」

「ほう……いやでもこれは……ここをこうやって」

「それより、こうした方が良くねえか？」

その日は、僕とミラ。ミラとアルヴィンの共鳴術技を話あいながら。

意見を出しあいながら、夜は更けていった。

その翌日、僕らはハ・ミルに到着した。入り口にラ・シュガル兵の姿はないので、逃げ帰ったのだろうか。

そうであれば、それが最善なんだけど。そう思って色々と注視してみているが、どうも村の様子が変だ。

平穏な村の姿は、今のここにはない。まるで、魔物が溢れる街道の緊張感そのまま続いているような。

空気が、戦うことも起きるだろうと、そう思わせるほどに引き締まっている。

どう考えても、穏やかな状況ではない。

と、そこで人々のざわめきが聞こえる。

「入り口のあたり、か」

「行ってみよう」

いつでも戦闘に入れるよう、準備してから入り口前の広場に向かう。

しかし、そこに敵は居なかった。

広場の中央にいたのは、たった一人の少女。ミラとはまた違う金色の髪。

紫の服に、間違えようもない謎な物体を傍に浮かべている。

そんな彼女 エリーゼに向かって、石を投げる村人の姿だけだ。

瞬間、意識が真っ白になる。

（ なんだ、これは）

「出て行けよ、おら！」

「疫病神！ つ、あんたなんかいるから！」

声と共に、石が次々に投げられる。

エリーゼは、何も言い返さず、必死にしゃがみこんだまま、村人の罵倒と投石に耐えている。

石が、彼女の横に落ちて音になる。エリーゼはその音に驚いたのだろう、小さく悲鳴を上げて、身体を更に縮こまらせている。

「やめて！ ヒドイことしないで、お願いだよー！」

ぬいぐるみのティポが村人に向かって、叫んだ。しかし、村人は聞く耳などもないと、罵倒と投石を浴びせることを止めない。

重なる。重なって、しまう。

僕は彼女だ。そして、ティポはレイアだ。

重なって、歪んで、重なって。

気づけば、僕は駆け出していた。

「ジュード！」

「ちょ、坊主！」

静止の声が聞こえるが、知ったこっちゃねえ。

僕は走りながらマナを拳に集め、今まさに石を投げようとしている

村人の、その身体に狙いを定める。

（ やめろ ）

どこかの誰かの声が聞こえる。だけど、冷静な思考回路などとうに吹き飛んでいる。

無論、殺しはしない。だけど、石を投げたことを生涯にわたって後悔するぐらいには、殴る。

あと一步の距離まで来ている。そのまま踏み込み、拳を握りしめる。掌に、肉と骨が軋む音が鳴る。そのまま腰を捻って、目標へ、回転すると共に拳を

「ちいっ！」

撃の音が鳴る。直後に振りかぶった腕に衝撃が走った。

拳筋がぶれ、拳は村人が投げようとした石だけに当たる。

「お前っ！？」

驚いた村人の声。僕がやろうとした事を察したせいだろう、盛大に

睨んでくる。

だけど僕は気にせず、音の発生地点である、後ろを向いた。

見れば、アルヴィンは銃を構えたままだ。

その先からは、今の発射の余韻だろう、白い煙が立ち上っていた。

その視線に遊びの色はなく、こちらの眼をじっと見据えている。

「……………なんのつもりだ、アルヴィン」

「それはこっちの台詞だぜ？ ………………今は護衛が最優先だろ」

銃を腰のケースにしまい、肩をすくめるアルヴィン。その視線に、先程のような真剣さはない。いつもと同じ、暖簾に腕押しのこと”抜け”た”視線だ。

もう一人、ミラもこちらを見つめている。

こちらはまた違う。非難の色があるけど、それよりは困惑の色の方が勝っている。

何故いきなりこんなことを、と。

（くそ）

その視線のお陰で、冷静になる。そして優先すべきことを認識すると、行動に移した。

未だしゃがみこんでいるエリーゼに駆け寄り、声をかける。

「……………大丈夫？」

「……………」

エリーゼは黙ったまま、頷きもしない。その顔に傷はついていなかった。

石が当たった様子もない。当てるつもりがなかったのか、それともコントロールが悪かったのか。

どちらにせよ、反吐の出ることだ。

そのエリーゼの顔が、少し変わった。何かを見つけたようだ。

その方向を見れば、老婆の村長の姿があった。ここの宿泊場所を提供してくれた時とは違う、まるで怨敵を見るかのような眼で、僕とエリーゼの方を見ている。

「お前のせいで……………こっちは散々な目じゃ！」

「僕達のせい……………いったい何があったっていうんだ」

周囲を見渡せば、怪我をしている村人の姿が見て取れた。死人はいないようだが、それでもこの人数が一気に怪我をするとは。

どう考えても穏やかなことではない。恐らくはラ・シュガル兵の仕業か。しかし、僕達のせいでもないだろう。僕達を追ってきたとして、行き先を素直に話せば済むだけだ。

村長や村人達も、僕達の行方などを兵に聞かれたとしよう。だが、拒む理由はない。恩を感じたからと拒んだのならまだ分かるが、それでこちらを責めるだろうか。

エリーゼが責められている理由も分からない。困惑していると、ミラが横から口を挟んできた。

「ラ・シュガル軍にやられたか」

「そうらしいが……それでも腑に落ちねえな。村長さん、この村には何かラ・シュガル軍に狙われるものでもあるのか？」

思えば、前にこの村に来た時もそうだ。あれは僕達の追手ではなさそうで……ならば、この村に用があったということだろう。

その理由と、今の状況を見るに答えは一つ。

「エリーゼか？」

「っ、よそ者にかかわるとろくなことにならん！ お前たちも、さっさとこの村から出てゆけ！」

取り付く島もない。村長は人が変わったようなヒス気味の声を残す

と、こちらの質問には答えないまま。

話を逸らしたまま、さっさと立ち去っていった。

村人たちも同じように解散して、それぞれの家へと戻っていく。

「あつ」

エリーゼも家で戻るのだろう。僕の脇を抜け、空き家のある方向へと走りだした。

夕焼けの下、あの時と同じ背中が見える。脇目も振らず、地面だけを見て走っていくそれはまるでこう言っているようだ。

（追ってこないで、か）

明確な拒絶の意志。それはまるで、あの日の僕のように。

「ミラ、アルヴィン」

名前だけを言った所で、二人はこちらを見た。

「……………オーケー。さっきのような短絡的な行動に出ないなら、いいぜ」

「はあ……ジュード。私たちは、村人からラ・シュガル軍の動向を聞くとしよう」

ため息をつきながら、ミラは言う。

使命第一だというミラが、こつこつ言い回しをするのということは

（情報を集める。だから、それが終わるまでの時間は待つ、か）

つまりは、時間をくれるということ。

「……………ありがとう、二人とも」

止めてくれたことも含めて、礼を言う。そして僕はエリーゼを追うために、空き家のある方向へと走りだした。

間道に続く道の近く。果樹園の横に、空き家はある。まるで倉庫として使われているような立地だ。

僕は閉ざされているドアに手をかけた。

そのまま開くと、木質のドアがきしみ、中からナップルと、バレンジの香りが漂ってくる。

倉庫としても使われているようだ。だけど走っていった方角から、ここにはエリーゼがいるはずなのだ。

しばらく探すと、部屋の奥に扉を見つけた。

(ここか)

二回もないこの家の構造から、これは地下へと続く階段を隠している扉か、あるいはただの物置か。

開けて確認すると、階段の方だった。そのまま地下へと降りていく。

そして階段の先。ワインの倉庫となっている部屋の奥に、エリーゼは居た。

悲しんでいるのかも分からない。顔が見えないからだ。

エリーゼは、石を投げられている時と同じように。壁に向かってしやがみこんだまま頭を抱えている。

まるで外にあるものを拒絶しているかのよう。ぬいぐるみのティポも同じようにして、隅っこに蹲っている。

僕はその小さな背中を見て、傍らのティポの様子を見て、なんとも言えない感情を覚えた。

(嘘だ)

本当は、自分自身、この感情の名前はわかっている。

これは 怒りだ。同情もあるけど、それよりも怒りの気が強い。

なんでこんな少女が、こんなに暗い倉庫の奥で、一人膝をかかえて震えなければならない。

エリーゼが僕達に話しかけてきた理由、今ならば分かる。彼女は話し相手が欲しかったのだ。

村人たちとエリーゼを見るに、恐らくはそういうことだろう。

厄介ことを抱え込んでいるよそ者。よそ者に厳しいこの山奥の村で、彼女がいったいどういう処遇にあったのか。

きつと想像しているイメージと大差はあるまい。

（山奥で、人との交流もないまま。じつと、孤独な境遇を強いられていた）

だから、だ。彼女は村にとってのよそ者だから、僕に話しかけてきたんだ。

（……………怖い、か）

震えている。あんな所を見られたと、震えている。

恐れているのだろう。

だから僕は、近づくより先に、まず声をかけることにした。

「大丈夫。僕はあんなことしないから、大丈夫だよ」

その声は、取り繕ったものではない。心の底からの声だ。

それが伝わったのか、ひとまず少女の震えは収まった。おずおずと立ち上がる。

だけどこちらに背中を向けたままだ。まだ不安があるのだろう。

もしかしたら、少女自身、その理由がわかっているのかもしれない。

自分がラシュガルに狙われる理由というものを知っているのかもしれない。

（だけど、それはこの少女のせいではないはずだ）

こんな少女だ。自分から、軍に追われるような過ちの道に転がり落ちていったわけがない。

まずは話をしよう。挨拶をして、話をしよう。全てはそれからだ。

「こんにちは。前にも、二度ほど会ったよね」

「……………」

「あの時は助かったよ。ありがとう」

笑顔でお礼を言う。すると少女は、こちらを向いてくれた。

その目には不安が残っている。

「改めて自己紹介をしようか。僕はジュード・マティス。君は……」

自己紹介をしてから、少女に視線を向ける。貴方の名前はなんですか、と。

本当は覚えているけど、今は話すきっかけが欲しい。そして少女は、名乗った。

「エリーゼ……………エリーゼ・ルタスです」

「ぼくはティポ！　ってお兄さん、ぼくたちの名前を忘れたのか、酷いよ」

「いや、あはは。もう一度自己紹介から始めようとおもって、ね」

「ふん。じゃあ忘れないように、もう一度教えてあげようかな。
僕はティポ。彼女の名前はエリーゼ！　ぼくはエリーって呼ぶけどね」

「ご丁寧にどうも。僕は……」

膝を落として、しゃがみこんだ体勢に。視線をエリーゼに合わせて自己紹介をする。

「僕は、ジュード。ジュード・マティスっていうんだ」

「ジュード君、さっきはありがとう！　石をたたき落としてくれたんだよね！」

「ありがとう……ごじます」

積極的にお礼を言うてくるティポと、控えめに小声でお礼を言うてくるエリーゼ。

エリーゼのほっぺたは、少し赤くなっていた。

「いや、あはは」

さっきの事を思い出して、頭をかく。本当はもつと過激なことをしようとしていたなんて……こんな可憐な少女相手じゃ、口が裂けても言えないな。

それに、師匠の教えを破る所だったのだ。正直、気が凹む。けど、今はエリーゼのことだ。

「まあ……誰も、怪我しない方がいいからね。それに、ほら、僕って医者のお卵だから。どうしても人が怪我する所は見逃せなくて」

「それは……まえに見たので……知って、ます」

「村を襲った魔物に、怪我させられた人を治療したんだよね。でも、あの時に一緒にいた怖いおねえさんは、いないの？」

「あのおっかないお姉さんとは別れたよ。今はかつこよくて美人なお姉さんと、胡散臭い男と一緒に、かな」

「ふうん、友達いっぱいいるんだねー」

それから、色々な話をした。まずは僕のことを簡単に説明する。

ナディアとか、レイアのこととか。面白おかしくはなすと、エリーゼの顔が少し緩んだ。

その後に、彼女の境遇に関しても話してもらった。

（やっぱり、か）

村八分どころか、顔を見れば石を投げられるような、酷い目にあっていたらしい。

「ジュード……その、どうしたんですか」

「ん？ ああ、ちょっとね。それよりも、そのおじさんはどういった人なの？」

「エリーをここに閉じ込めた悪い人だよー」

「水霊^{リヴィエ}盛節に、一緒に来たの。でも、最近、居なくなった」

「エリーゼのご両親は？」

聞くが、エリーゼは無言で首を横に振った。つまりは、両親も居ないのか。

あの大男、ジャオに連れられてこの村にやってきたらしいが、何を目的としているのだろう。

しかしそのジャオも、僕達がハ・ミルを発ってから、姿が見えないらしい。今まではジャオがラ・シュガル軍を退けていたと。

だけど、ジャオは居なくなった。

相手は軍だ。戦闘専門の傭兵や、部族の護衛がない村などひとまりもないだろう。殺さないまでも、乱暴されて、それを止められる人物もいない。

エリーゼとティポはこの空き家に隠れていたので、見つからなかったらしいが。

（それでも……やっぱりか。エリーゼが目的と見て間違いない）

ならばジャオは、エリーゼの護衛か。あの腕から察するに、どこか

の部族の手練か。

姿が見えないということは、自ら護衛することをやめたか、あるいは上司に任を解かれたか。

どちらにせよ、彼女がこの村に取り残されて一人でいるというわけだ。狙われている理由も分かっていない。

つまりは、責はこの少女にないということ。他の誰かの都合に振り回された結果、その拳句に、エリーゼはこの村に取り残されているということだ。

ひょっとして迎えが来るかもしれないが と、聞いてみるが、
答えは思った通りのものだった。

「うつん……わたし……お友達……いないから」

しゃがんでいる僕よりも下に。エリーゼは視線を落として、悲しそうに答えてくれた。

「エリー」

ティポも、名前を言うだけ。他に何も言わない。と、いうよりも、
言えないのだろうな。

本当に友達や知り合いといった、頼れる人がいないのだろう。

僕はそんな彼女の表情を見て。

気づけば、手を差し出していた。

「なら、僕が最初の友達だね」

「え……………」

エリーゼが驚いた顔をする。

だって、そうじゃないか。

「自己紹介した。お互いの名前を交換した。色々なことを、話し合
った……………ほら、友達でしょ？」

「あ……………」

「ほら、友達の握手握手」

エリーゼの手が、僕の手を握る。ほんとうに小さくて柔らかい、女
の子の手だ。

「よろしくね」

「はい……………」

エリーゼは今までよりも少し大きな声で返事をした。それが恥ずかしかったのか、慌てたように視線を落とした。

白かったほつぺたを桃色に染めて、恥ずかしそうにしている。

（ちょ、おい、待て！ この子、冗談抜きに可愛いすぎる……………！）

恥ずかしそうに視線を落としている所も。それでいて、不安げに上目遣いでこちらを覗いている所も。

その結果、僕と視線が合って、また恥ずかしそうに下を向くところも。

（か、可憐な少女とはこういうことか……………！）

レイア（笑）や、ナディア（爆）とは違う。ミラとも、また違う。なんだこの生き物は、僕の知っている女性とは違う。

可愛さのあまり、思わず頭を撫でくりまわしたくなるじゃないか。

こう、撫でて撫でて、しまいには火が出るまで撫で回してしまいそうだ。

「わーい　ともだちー　ジュード君は友達ー」

隣ではティポも嬉しそうにはしゃぎまわっている。

「ははは、ティポも友達ー、って噛むな噛むな」

手を出した所を、嬉しそうに噛んでくる。痛くないけど、なんか視覚的に嫌です。

「もー、つれないなあジュード君はー」

「ティポ……め、です」

「ははは。大丈夫だよ、痛くないし」

言いながら、おかしそくに笑いあう。

そうしてじゃれあいながらも、僕は心の隅で決めていた。

この孤独なる少女を。

出来る限り。

たった今より。

絶対に一人にしないことを、心の奥に刻みつけた。

18話 「孤独なる少女」(後書き)

解説

水霊盛節は5月でございます(公式コンプリートガイドより)

19話 「ハ・ミルからイラート海停へ」

村の広場の前。僕は情報収集が終わったミラに、エリーゼを紹介する。

その後は、少し離れた場所、でも眼の届く場所まで離れて、ここで待っていてくれとエリーゼに頼む。

そして僕はまた、ミラの所へ戻った。

しかし、その目に遊びはない。どうやら、エリーゼを連れてきた理由と僕が言いたいことについて、彼女は察しているようだ。

真剣な表情で、矢のような視線を飛ばしてくる。

「ふむ……それで、ジュード。いったい何のつもりなのか、はつきりと君の口から説明してもらおうか」

嘘は許さない、という口調。僕はもとより誤魔化すつもりはない、正直に答えた。

「エリーゼを連れていきたい」

言った。予想通り、その途端に場の空気が重たくなる。原因はミラから発せられている威圧感だ。

じろりという目がこちらを向く。それだけでは納得できない、理由を説明しろと言っているのだろう。

僕は用意しておいた理由を並べ立てる。

「…………彼女、ラ・シュガル軍に執拗に狙われているようなんだ。で、この時期に狙われるってことは…………分かるだろ？」

「黒^{ジン}匣が関連している可能性が高い、か？　しかし確証はないのだろう。これからの旅は困難も極める。連れて歩けば、少女にも危害が及ぶ」

もつともな意見を返してくる。確かに、僕達はお尋ね者になっているだろう。いつラシュガル軍に狙われるとも限らない立場だ。

だけど、危険に關していえば、こっちの方が得策だ。エリーゼがこの村に残るよりはマシな状況になる。

今、この村には戦える者がいない、つまりは守り手がないのだ。

両国間がきな臭い状況になっていると聞くし、こんな時に、本格的な侵攻があればひとたまりもないだろう。

この程度の小さな村、しかも防衛戦力のないハ・ミルなら、軍の中队ひとつで制圧は可能。

「結果、村人たちは殺され、エリーゼは見つかって連れて行かれる。僕達と一緒に旅をすれば、そしてエリーゼは僕達と共にいることを

告げれば、それも防げるだろう?」

村人に協力してもらってもいい。行商人に、裏から噂みたいなものを流してもらってもいい。そうすれば、村人たちも納得する。

だが ミラの顔は、晴れない。

「……………ジュード」

名前だけを呼ぶ。その視線は、以前変わらず厳しい。まだ穴があると、そう言っているのだ。

（ああ、初めからわかってるさ。今の理由や理屈の中に、いくつかの穴があるってことは）

戦争が起きるとは限らない。連れて歩いて、余計な敵をおびき寄せてしまう可能性だってある。

エリーゼが狙われる理由についても。黒匣^{ジン}とは全く別のことで狙われているかもしれないという可能性もある。

ミラの言葉は至極当然な意見だ。全くもって間違っちゃいない。この状況下においては、どっちかと言えば、理屈的には僕の方が間違っているのだろう。

ミラはそれを指摘している。一人の人間を守って歩くことについてもだ。エリーゼの前では言わないけど、分かる。

だけど、これ以上エリーゼをこの村に置いておきたくないのだ。あの様子から、相当に恨まれていることは察することができる。

ジャオが戻らなければ あるいは戻っても、状況は変わらない可能性がある。ジャオが帰れば、閉じ込められる。いなければ村人に迫害される。

そのままじゃあ、村人との距離は縮まらない。何よりエリーゼが狙われている以上、これ以上の進展は望めない。

下手をすれば、この先ずっとエリーゼはこの境遇のままになってしまふ。

（そうだ、夢を失った時の僕のように）

子供だった。振り返れば、それが分かる。師匠がいなければ、ずっとあのまま突き進んで。そのまま、腐れた男になっていたかもしれないから。

エリーゼはもつと酷いだろう。僕は、それは嫌なのだ。何としても回避すべきことだと思っている。

かといって、そんな個人的な理由で先約を反故にするのも、間違っている。

ああ、僕も最初からミラを説得できるなんて思っていない。状況から言えば、僕の考えは愚者のもの。子供を連れていこうなんて意見こそが間違っているんだから。

正直、ミラを説得できる理屈なんて用意できない。

(……………だけど、今ここで。エリーゼを見捨てることなんて、絶対にできない！)

あの日あの時、師匠が僕にしてくれたように。

僕も、エリーゼを助けて上げたいのだ。

そうしなければ、あの日から今まで願っていた僕が折れる。僕を支えてきた柱が折れてしまう。

だけど理屈では無理なら……………気持ちで説得するまでだ。

「ミラ」

「なんだ、ジュード」

じつと、その目を真正面から見返す。

「全部、僕が背負う。責任を持つ。ミラも、エリーゼも、僕が守ってみせる」

片方だけで厳しいのに無茶だ、と理性は言う。

だけど、それを無視する。

二人とも、だ。自分からした約束を、自分から破るつもりはない。

先に約束したミラも、そしてエリーゼもだ。両方共、絶対に守ってみせる。

だから と、そこでミラが口を開いた。

「それは……………例え、自分が傷ついててもか」

確かめるような口調。僕はそれに即答する。

「ああ。そんなの当然だろう?」

約束したのは僕だ。言い出したのは僕なのだ。なら、自分以外に背負わせるものじゃない。負担にはなるだろうが、自ら言い出した負担ならむしろ望むところだ。

「ジュード……………」

対するミラの目は、僕の顔を捕らえたまま細まっている。

観察されているような様子は苦手で、僕は少したじろぐ。だけど、それでも目はじつと逸らさない。

しばらくして、ミラは目を閉じると、ため息をついた。

「……………分かった。どうせ、言っても聞かないだろうしな」

「ミラ！」

「ただし！ 出発は今すぐにだ。今日の夜中にはイラート海停に着いておきたいからな」

「っ、分かった！」

「何処に言っていた、アルヴィン」

「ちょっと情報収集をね……………っと、やっぱりか」

アルヴィンの視線を追う。そこにはジュードが居た。エリーゼの前で、腕を組んで満足そうにしている。

対面にいる二人は、ジュードが説明をしたのだろっ、嬉しそうには

しやぎまわっている。

それから二、三会話をした後、二人は空き家がある方へと走った。恐らくは、エリーゼが持っている荷物を取りにいったのだろう。

道の向こうに消えていく二人の子供の姿。

それを見送っていると、隣から声がした。

「ずいぶんと、やさしいんだな」

「……………こうした方がいいと思っただけだ。お前も、先ほどの様子を見たのだから分かるだろう」

激昂したジュード。あの時の拳は、下手をすれば大怪我を負わしていた。自分を御せる者が、あるいは冷静な思考を保てる者であれば、ああいった真似はしない。

「ジュードの精神が不安定になってしまっ、その方が困る。それに、私はエリーゼの歩調に合わせて、進んで行くつもりもないぞ」

足手まといになれば捨てていく。仮に命を落としたとして、私は立ち止まらない。

もとより一人で完遂してきた役目だ。一人になったとして、止めなければいけない道理などない。

「おいおい、一人で出来るつもりなのかよ」

「出来る……とは、最早断言できないな。だけど危険だからといつまでも同じ場所に留まっていられない。何事も成せはしないからな」

それに、だ。

「私には、果たすべき使命がある」

生まれてから今まで、貫いてきたことだ。すでに私の一部で、あるいは全てでもある。

それを止めることなどできないよ。そう言つと、アルヴィンは複雑そうな口調で聞いてくる。

「例え、危険があつたとしても？　もしかしなくても命を失う、そんな危険があつたとしてもか。その使命つてやつのためならば、死をも厭わないつて言えるのか」

「言えるさ」

私は迷いなく答えた。何より、それこそが私の存在意義なのだから。それにあの槍は危険すぎる。本当はあの場で壊さなければいけないかつた、この世にあつてはならない、一刻も早く壊さなければならぬものだ。

今までの黒匣^{ジン}とは違う。規模も強さも、明らかに違いすぎる。一度発動すれば、取り返しの付かないことになるだろう。

ここで止まれば、あるいはもっと多くの人間が死ぬことになるだろう。それを防ぐために、ミラ＝マクスウェルは存在する。

「何より、人と精霊を守る。それこそが私の使命なのだから」

見返して、言う。するとアルヴィンは、ついと眼を逸らした。

丘の向こうに見える夕焼け空を見ているのだろうか。そのまま、すつと零すように言った。

「……………強いよなあ。おたくも、ジュードもさ」

「強い、弱いは関係ない。出来る出来ないは問題ではない。私がやらなければいけない事なのだ。他の誰にも、任せるわけにはいかない」

「……………そ、つか。ならもう何も言わないよ」

「ああ……………と、来たようだ」

見れば、ジュードがエリーゼを連れてこちらに駆け寄ってくる。

「おーい！」

こちらに振られる、見かけよりも大きな手。もう一方の手は、エリーゼの手を握っていた。

彼女はといえば、頬を染めて。少し下を俯きながら歩いている。

しかし

(……………まるで別人、だな)

足取りが違う。背筋が伸びている。その顔も、影を感じさせるものではない。それもそうだろう。今までの境遇から救われたのだから。それを成したのは、このジュード・マティスという少年。

この先、彼は余計な荷物を背負うことになるだろう。負担も増えるし、無茶をして大怪我をするかもしれない。

エリーゼだって、救われていない。現に今、エリーゼは村を出ていくその最後に、少し笑顔を作って、村人達に手を振ってる。

だが、誰も反応せず、ずっと視線を逸らしてその場から去っていくだけ。それを目の当たりにしたエリーゼは、また悲しい表情を浮かべている。

だけど、村の出口を向いた時の顔は違う。心なしか、視線を上向きに。胸を張って、歩こうとしている。

あるいは、今の行為は村との決別を意味していたのかもしれない。最後の最後に、自分に優しくない村人達の反応を見て、それを踏み出す力としたのかもしれない。

どちらにせよ、エリーゼという少女は変わったと、そう言えるだろう。

最初に出会った時の、すぐるような表情。二度目にあった時の、どこか寂しそうな表情は、無い。

成したのはジュードだ。それも、意志と行動だけで。

黒匣^{ジン}を壊さずに、人を一人、救ってみせた。

(……………人、と。精霊を守るために)

自分でアルヴィンに告げた言葉。それはずっと自分を支え続けてきた信念の言葉だ。

だけどこの瞬間だけは、なぜか、それがまるで別な言葉であるかのような。

胸の中に、言い様のない違和感が浮かぶような感覚が、うごめいていた。

ハ・ミルからイラート海停を結ぶ、イラート街道に出てから数時間歩いた。

エリーゼは思っていたよりも健足で、僕達にも何とかついてこれている。

戦いながら進んでいる僕達とは違って、疲労度が小さいこともあるだろう。だけど、息も切らさずついてこれると思わなかった。

疲れたらおぶっていいこうと思っていたが、その心配もなさそうだ。

これなら、共鳴術技の練習もできそうだ。

試しに、とそこいらの弱い魔物が固まっている場所に、ミラと並んで突っ込んでいく。

「ミラ、あれをやるよ!」

「っ、分かった!」

僕のリアルオーブとリンクさせているミラのリアルオーブから、

マナの塊を感じる。

直後に、ミラが持つ剣の先に、マナが集められた。

剣によって増幅されたマナはその密度を増され、それは靈力野^{ゲート}からの指令によって変換される。

やがては見た目も緑の、風の精霊がミラが持つ剣に集まっていく。
僕も、拳の先に装着したフリストにマナを集め、増幅させて

「行くぞ！」

「ああ！」

叫び、ミラの風の精霊術に呼応して放つ！

「「絶風刃！！」」

十字になった巨大な風刃が、一気に魔物を切り裂いていく。

（やっぱり、精霊術使いとの共鳴術技は良いよなー）

ナディアの時もそうだが、まるで風の精霊術を使っているかのよう

な感触があるのだ。

最初に使った時は、三日間は興奮して眠れなかったほど。

「うまくいったな……どうした、ジュードにやついて」

「い、いや、なんでもないよ」

急いで表情をもとに戻す。そういえば、「ニヤつくなバカ」とナディアに蹴られた時のことを思い出した。

バレるのも不味いし、自重せねば。

それから色々試した。だけど、有用な共鳴術技は放てなかった。

使えるのは、僕の“魔神拳”とミラの風の精霊術“ウインドランス”を合わせた技、“絶風刃”だけ。

それ以外は相性がわるいのか、威力が低かった。

ちなみにナディアとは相性がいいのか、威力が高い共鳴術技は複数ある。

そのひとつが、僕が使う腕力を特に強化する武術技である”鋭招来”と、ナディアが使う技”グランドファイア”を合わせた共鳴術技、“絶炎陣”。

放射状に炎の波を撃ち出す技だ。魔物に囲まれた時などで、多用していた。

それよりも、アルヴィンの方が共鳴術技の相性が良いってどういうことだ。

僕の“魔神拳”とアルヴィンの“魔神剣”を合わせたマナの塊の固め撃ち、“魔神連牙斬”

僕が、アルヴィンの斬撃を踏み出いに天高く飛び上がり、落下の勢いを利用して双足蹴りを決める“飛天翔星駆”。

アルヴィンのマナを込めた強化弾を、僕のマナをこめた掌打で撃ち出し、共鳴させ大きな弾丸にして撃ち出す“拒甲掌破”。

使える技が3つもあった。どれも、要所要所で使える技だ。

男であるアルヴィンとの相性がいい、という事実になんぞ落ち込むが、それでも使えないよりはましだ。

自分を説得して、なんとか気持ちを落ち着かせる。

敵もいなくなったことだし、今はのんびりタイムだろう。

その間、エリーゼは先頭に居るアルヴィンの所にいた。僕の時とおなじように、たどたどしく自己紹介をし直している。

「あの、その……………エリーゼ・ルタス、です」

名乗るエリーゼ。アルヴィンはエリーゼに気付かれないように、こちらを見た。

どうすればいいのか、だろう。だから僕は視線で「頼むよ」と告げる。

するとアルヴィンは、無言でウィンク、承諾する意図を返してくれた。

「オレはアルヴィン……………へえ、前見た時も思ったけど五年後にはすっげえ美人になるな、エリーゼは。その時までよろしく、な」

「そんな……………わたし……………」

「あー、これってナンパだ！ アルヴィン君はナンパマンー」

恥ずかしがるエリーゼと、リズムよく相槌をうつティポ。

そこにミラが、難しそうな表情を浮かべながら、言う。

「私はミラという。よろしくな、エリーゼ、ティポ……………
…で、だ。何か当然の状況といった風なんだがな。

このぬいぐるみは、何故しゃべっている？」

「え……………」

戸惑うエリーゼ。しかしすぐに、以前からずっとしゃべっていた、と説明する。

なにもおかしいことはない、こちらに同意を求めてきた。

「そっだよ、ねー？」

僕はティポの同意に頷きながら、更にアルヴィンに同意の流れをよこす。

「ねー」

呼びかけを見たアルヴィン。

迷うかと思ったが、間髪いれず、ミラを見て「ねー」という。

だけど。

「きもち悪いぞ、アルヴィン」

「26にもなつて”ねー”はねーよなー」

「ちょっと、寒くなった……………です」

「年を考えた方がいいかもねー」

「ちょ、ひでえなお前ら!?!」

アルヴィンの叫び声が、イラート街道に響き渡った。

夜になる少し前には、イラート海停に到着した。下り坂だったおかげか、往路よりずっと早い。

とはいっても、今日の船はもう出航済みだ。船着場に居る船員のもとに行き、明日にサマンガン海停行きで出航する船の船室は空いているかたずねる。

「あー、サマンガン海停なら空いてるよ。明日の一番に出る船だったね?」

「はい」

「それなら………ひー、ふー、みー、よー………うん、4人でちようど満席だね」

「朝一番だというのに、随分と多いんですね」

「少し前に、ちょっとしたことがあってね」

聞けば、首都圏全域に封鎖令が出たらしい。ラシュガルの軍船でない限りは、イル・ファンの港にすら入れてもらえないと嘆いていた。しばらくは、サマンガン海停行きの船しか出ないとも。

（派手にやるねえ）

不穏分子を入れたくないのだろう。それは僕達が、あるいは

（強国の関係もな。きな臭いって噂も流れてるし。行商人の情報は侮れないから、もしかしたら本当にア・ジュールとの戦争が起こるのかも）

実際、研究所で対軍用の兵器が開発されていたのだ。あの規模にあの威容、絶対に対個人用に作られたものではない。

僕達が侵入するしないに関わらず、あれはあそこで作られていた。使われるために。

その意味することなど、一つしかない。

（僕達の行動は、切っ掛けだったのかもしれない）

何かが、起ころうとしているのだ。

僕は夜の海から流れる冷たい風に吹かれながら、胸の中に言いようのない不安を感じていた。

19話 「ハ・ミルからイラート海停へ」(後書き)

あまり進まなかった。

次は、間話、「アグリア in ル・ロンド」

なんかアグリアが踊ってるようなタイトルだな…………。

間話の2 「アグリア、ル・ロンドにて」(前書き)

アグリア一人称の幕間でございます。

間話の2 「アゲリア、ル・ロンドにて」

穏やかな街は嫌いだ。アタシに、居場所なんてないことを思い知らされる。

「つたく、なんでこうなったのか」

朝に港を発ち、昼に嵐に揺られ、揺られ続けて気づけば夕焼け。

船は目的地であつたイラート海停に辿りつけず、船航路の途中にあつたル・ロンドに寄港することになったのだ。

『本当に申し訳ありません！』

頭を下げながら謝る船員の姿を思い出し、苛立ちに襲われる。嵐だから仕方ないと言えば頭のひとつでも小突いてやるつもりだったが、ああも素直に謝罪を示されたら、文句の一つも言えないじゃないか。

他の客も同じように謝られていた。宿の宿泊券が配られていたのも同じだ。

ここ、ル・ロンドに唯一あるという宿屋。一日で修理しますからここに泊まって下さい、と船長から直接に渡されたものだ。

知り合いの宿屋らしい。

(……………連絡は済んだし、やれることはないか)

ボーボーもしばらくは戻ってこないだろう。ウィンガルはボーボーを酷使する奴だ。

今頃はあちこちに情報を伝達しているに違いない。

参謀だから、あの手の連絡手段は重宝するのだという。

一度、譲ってくれと頼まれ いや、頼みじゃない。

”譲れ”なんて、命令にしか思えない言葉があつた。本人は頼みのつもりだったと言っていたが、流石は元最高位上級部族のロンダウだ。

アタシが言うのもなんだが、ものの言い方がなつてない。

あの貴族連中ほどに悪意が見えていたら、アタシはこの仕込み杖を抜いていただろうけど。

もしくは、ジュードのような

(……………あー、やめだ、やめ)

思考が横に逸れるのを感じて、アタシは首を横に振る。本当は炎の一発でも吹き出してやりたかったが、嵐のせいか身体が酷く疲れている。

今は宿に行くべきか。ここは鉾山都市だし、さぞかし汚い宿が待っている。待っていることだろうしな。

聞けば、港のすぐ傍にあるらしい。いけ好かない潮の香りの中を歩く。

周囲には馴染みの施設。海停というか、港の造りはどこも同じだ。混乱しないように、と決めたらしいが、こつも同じでは飽きがくるつてもの。

それでも、人が全て同じということでもないらしい。行商人から買物をしている人間の様子が違う。

見るからに屈強な体格を持つ者が何人か。あれはおそらく元鉱夫つてやつらか。

イル・ファンに居た頃に聞いたこともある。かつては鉱山として賑わっていた街だけど、その資源も尽きかけていて。そのせいで鉱山の多くが閉鎖され、職を失った者も多いと。

首都、王都だからか、イル・ファンに流れてくるものも多かった。

一時期のあの酒場では、夢敗れたという鉱夫が、うるさくも毎日、飽きずにくだらない歌を歌っていた。

嫌になるぐらいに聞かされたから、メロディーも歌詞も覚えてしまった。たしか、こうだったか。

『掘れよ、掘れ掘れ掘りつくせ。男はだまってツルハシ振って、ヨホホイよさいと振り下ろせ。

輝く石も輝く夢も、掘って壊して掘り起こせ。宝は女、そして美女。魅惑の笑顔で待っている。いつしか見えるさ岩の向こうに、彼方に眠って待っているから』

簡単なメロディーを軽く口ずさむ。本当に小さな声で、他人には聞こえないような音量。

しかし、それに気づくやつが居た。

「おー……………」

子供だ。いや、ガキだ。6つぐらいか、ガキとしか言えないようなガキが、驚いたような顔でこっちを見てやがる。

嫌な、予感がした。そしてそれは的中した。

「おねーちゃん、歌うまいねえ!!」

「ばっ」

急いで口を塞ぐ。聞かれてたのも恥ずかしいのに、まだ恥を上塗りさせようとするがこのガキは!

ああもう、この街のやつらはこんな阿保ばかりなのか。

アタシはうんざりしながら、ガキに言い聞かした。

「ストップ。喋るな。いいな?」

ちよつと脅してやると、ガキは青い顔をしたまま黙つた。ふん、いい気味だ。

そつだ、こいつにちよつと聞いてみるか。

「なあ……この街に、治療院つてあるだろ。そこはどこだ？」

そこは、歩いてすぐの場所にあつた。建物の大きさはそれほどでもない。

他の家と同じぐらいの大きさ。違う所があるとすれば、それは人の出入りが多いことか。

客の回転が早い。というよりは、患者と呼ぶべきなのだろうけど。それでも、出ていく人間と入っていく人間の数は多い。尋常な早さではないと言えるかも。

（プランはいつも、患者の数が多すぎるって愚痴つてたけど……）

酷い時は10人が一気に押し寄せるとか。それでも、ここの医者と

やらならば上手にさばけるのかもしれない。

ディラック・マティスとエリン・マティス。あいつが語ろうともしない両親、医者夫婦ならば。

遠い、と。あいつが言っていたそんな二人ならば。

―そんなくだらないことを考えながら、治療院を見ていた時だ。

とんとんと、肩を叩かれたアタシは、咄嗟に振り返る。

「きゃっ!?!」

急に振り返ったことに驚いたのか、肩を叩いてきた女はいやに耳に障る悲鳴を上げた。

そう、女だ。治療院の場所を聞いたガキに連れられてきたのか、同い年ぐらいの女がそこに居た。

ヘッドドレスに、馬鹿みたいに明るい服。アタシには死んでも似合わないだらう服だ。

そんな、むやみめったら、無駄に明るい服を着こなしている女は、やっぱりムダに明るかった。

「えっと、この人が？」

「うん！ 歌うまいけど、おっかないおねーちゃん！」

「おいコラそのガキ」

黙ってろって言っただろ。言いながら頭をわし掴んでやる。
痛い痛いと呼ぶが、いい気味だ。

「ちょ、ちよつと!？」

「黙ってな。約束も守れなくだらねいガキにや、良い薬だろ」

「た、助けてレイアお姉ちゃん!」

「ほいきた」

瞬間に、掴まれたのは腕の付け根。そこを握られたと思ったら、次には腕の力が抜けていた。

ガキがアタシの手から逃れ、ぱぱつと逃げる。

腕を掴まれてるアタシを見ながら、自分の唇を横に引っ張る。

「っ、やーいやーい、ざまーみる! レイアおねーちゃん、この目付き悪いやつ、やつつけて!」

「って、コラ! 知らない人にそんな事言っちゃダメでしょ!」

ガキの脳天に、拳骨が決まった。たまらず頭を抑えつけ、痛いとい
いながらうずくまる。

互いに悪意の見えない、ぬるま湯のようなやり取りを見たアタシは、
思わず舌打ちをする。

しかも、だ。

「レイア……アンタ、もしかしてレイア・ロランドか」

「へ？　そ、そうだけど、なんで私の名前をしって」

狼狽える女は無視して、観察する

茶の髪に、小柄で細身な体型。花飾りがついたヘッドドレス。

極めつけは、無駄に元気で明るい声。確かに、あいつが言った通りだ。

「それに、胸もない」

「……って、はあ！？　え、ちょ、今なんて言ったのあなた！？」

いきなりの言葉に、数瞬反応遅れての激昂。なるほど、妙に間抜けなところもあってるな。

幼なじみだろうか、あいつは本当にこの目の前の女のことをよく知っているな。

その深さまでは知らないけど、少し話ただけで分かるぐらいに知り尽くしている。

そう思うと、なんか腹が立った。

「っ、キンキンうるせえんだよ」

自然、対応にも遠慮がなくなってくる。はじめからする気もないけど。

心底うざったそうに耳を塞ぎ、鬱陶しいという視線を向けてやる。

するとレイ いや、もうブスでいい。ブスは、手をわなわなさせて震えはじめた。

「こ、この傍若無人さには覚えがあるなあ……………あなた、ひよつとしてジュードの友達でしょ」

「何を根拠にそう思うんだ？」

「ん、乙女の勘！」

両腕を挙げて胸を張るブス。アタシが着ている服はイル・ファンのもので、そのあたりから推測したのかも とも考えたけど、まさかの勘一本勝負って。

あの陰険でも妙に頭の回るバカとは違う、正真正銘の馬鹿だ。

自信満々なところも鼻につく。ともあれ、これだけは否定しておかないとね。

「友達じゃないさ。でも、そいつが無駄に腕のたつ、頭もキレる陰険な医学生なら、あたしの知ってるバカかもな」

「ん……………キレるってどっちの意味で？」

「両方だよ」

「ってやっぱりジュードのことじゃない！」

「即答かよ……………」

あと、これ以上の会話は駄目すぎるね。会話のテンポがとことんあわない。

話していると、何かイライラしてくる。

もういい、これ以上の深入りはしないほうがいいか。

あの馬鹿から聞くに、あいつの師匠、こいつの母親は想像以上の化物に違いない。

ア・ジュールへ行く途中である今、余計なやぶ蛇に手をつっこんで怪我をするのも馬鹿らしい。

興味はあるけど

「いや、いいか。それでアンタ、ここに住んでるってんなら、宿の場所知ってんだろ」

「へ？ えっと、うちに用？」

「……………なんだって？」

で、話を聞けば、こいつの家がこの街唯一の宿だということ。

「マジかよ……………死ねよ船長……………」

「え、なに。私の家が宿だとまずいこともあるの？」

当たり前だろうが。決意した途端それかよ、と思わず声が漏れてしまふ。

「滅茶苦茶問題ありありだよこのブスが……………」

「ちょ、何！？ 失礼な人 ってそんな所までジュードに似てるし！」

「ああ！？ アタシのどこがアイツに似てるっていうんだよ！」

「なんかこー、妙にひねてるところ！」

「お前もあたしに失礼だろうが……………っ！」

「あ、ごめん」

途端にしゅんとなる。散々言われてるつてのに、ちよつと言った後に指摘されただけでおれた草のようになるブス。

（ああ、いやだ。毒がない会話は）

毒がある会話は、あしらうのが面倒くさい。だけど慣れているから、何とも思わないのに。

こついった会話は、心が痛まないけど、別の所が痛んでしまふ。

ああ、嫌だ嫌だ。特にこつという奴は苦手だ。

無駄に明るい。だから、光ものは臭い”。こちらまで侵食されそうで、たまらなくなる。

話しているだけで、感情が暴走していく。そうして、高ぶりそうな感情のままに、更に口を開こうとした時だ。

突然、気配がそこに生まれた。

何かがあたる音がした。

「こらレイア、店の前で喧嘩すんじゃないよ！」

「痛っ、ってお母さん！」

叩かれたのだろうか、後頭部を抑えるブス。それは、普通の親子の会話で。

だけど、それだけでアタシは固まらざるをえなかった。だって、一切が見えなかったのだ。

このアタシが、今の刹那に何があったのかって聞かれたとして。

それを説明できる材料が、”抑えているから、そこを叩かれたのであろう”という根拠だけなんて、こんな馬鹿な話があるかよ。

その当事者は、何食わぬ顔でこちらを見ると、納得したように頷いた。

「で、アンタがお客さんだろ？ 船長から話は聞いてるよ、部屋に案内するからついておいで」

およそ客商売をする者ではない口調。だけど、それに不快感を感じず、何より逆らえないものを感じたのは初めてだった。

そうして案内された部屋は二人部屋だった。他の乗客は全員男性客だったから、アタシに配慮したのだろう。

（しかし、あれがあいつの師匠……なるほど、化物だ）

アタシも、並外れた達人なら見たことあるし、知っている。剣を向けられるだけで、敗北を悟らされるほどの傑物。

いずれがリーゼ・マクシアの頂点に立つ、本物の英雄だ。

このアタシが、心の底から敵わないなんて、そんなみつともないことを思った初めての人。

だけど、あのソニアとかいう女将は別タイプの人外だ。なにせとても”そう”は見えない。

（あいつの師匠だ。それにさっきの気配遮断。達人だけど……見た目からは、なにも察することができなかった）

初対面で。案内されるまで、色々と確かめたが、分からなかった。

達人であるのは間違いないのだ。なのに、そうは思えないとはどういった理屈だろうか。

あらかじめ事情を知っているからこそ分かるが、知らないなら絶対に気づかないだろう。それほどまでに、あのソニア・ロランドという女将の隠形は完璧だ。

まるで思考の迷路にはまってしまふような。あるはずなのに、そこにはないという事実が逆に恐ろしさを際立たせてくれる。見えないからこそ怖い、というのか。

確かに、宿を経営する時に武の威圧感はいらない。理屈は分かる。だから悟らせないようにしているのだろう。だけど、こうまで完璧に隠されるなんて。

（あいつが強くなるはずだ）

師匠が師匠なら、弟子も弟子ということだ。考えるだけ馬鹿だろうと、アタシは夕食の知らせがあるまで、ベッドの上に横になった。

外からは、子供の声が聞こえる。

まだ遊ぼうぜ、とか。

また明日、とか。母親らしき人が怒って、連れ帰る声とか。

(本当に……気に食わないよ)

穏やかな街は嫌いだ。アタシに、居場所なんてないことを思い知らされる。

夕食はすぐに。呼ばれた先のテーブルに、料理が出されていた。

どこにでもあるような、普通の料理。しかし、その味は悪くなかった。

そう、味が悪くない。すぐに食べ終えたし、食後の飲み物も悪くない。

だけど　　なんだ、この従業員は。

「アンタ、なんでアタシのテーブルに？」

「えーっと……………ちょーっと話を聞きたいかなあって」

「……………ジュードの話か？」

「そう！」

「失せろ！」

「ちょ、一刀両断！？ ちょっとは考えてくれても！」

「うっさいよ馬鹿、人の食後のティータイムを邪魔するんじゃないよ！」

しっしっしと手を振る。だけどこのブス、諦める様子がない。

正直鬱陶しいので、どっかに行って欲しいんだけど。そう考えていると、ブスの背後に影が見えた。

「……………レイア？」

「ひっ、お母さん！？」

「あんた、お客さんになにやってんだい？」

「えーっと、これは、その……………てへ？」

舌を出して誤魔化すブス。当然、長年の付き合いであろう、というか母親である女将に通じるはずもなく、襟首ひっつかまされると、奥の厨房に引きずられていく。

「ちょ、お母さん勘弁！ 勘弁だから！」

「大丈夫。痛いのは一瞬だよ」

「おとーさん！」

「すまんレイア、無力な俺を許してくれ……………」

まるで寸劇だ。というより、話が噛み合っていないような。

そんな様子を、他の客 おそらくは地元の者だろう、夕食を食べに来ている客は、「またレイアちゃんか」とか言いながら眺めている。

「いや ……」

「レイアー……！」

断末魔が響く。しかし、客はスルーしたまま、食事を続けている。

なんだかね、この店も。まるでイル・ファンにいる、店長のあの店のようだ。

（そういえば、弟子だって聞いたような……………まあいいか）

面倒くさいと、出された紅茶を飲む。悪くない味だ。

そうして、落ち着いていると、入り口の扉が開き、また客が入ってくる。

その客は疲れた顔をしていた。黒い髪に、白衣が映える。

どこかで見たことのある顔だ。と、いうよりも
ジュード
に似ている。

（あれが、あいつの母親か）

疲労に染まっではいるが、凜とした表情は残っている。普通の母親に、疲れた医師を足したような顔。

「お、エレンじゃないか。しかし、今日もかい？」

「ごめんなさい、ソニア。最近は患者も多くて、ちょっと長引いてしまうから、ね……………あら、レイアさんの姿が見えないようだけど？」

「ちょっと休憩しているのさ。あの子も疲れてるようだしねえ」

しれっとそんな事を言う下手人。ジュードの母親の方も慣れているのか、苦笑ですますと、荷物を受け取って店から去っていく。

（……………ふん。見た感じ、普通の母親だったけどね）

あいつは零していた。母親は苦手だ、父親は嫌いだ、と。しかし、母親の様子を見るかぎり、あいつが苦手とするような、そんな風には見えない。

一体何が原因つていうのか。紅茶を飲みながらそんなくだらないことを考えている。

だけど、どうにも首が座らないというか。疑問を感じると、解決しない性質なのだ、アタシは。

それでも、誰かに聞かなければ答えの出ない問いだろう。

そうして考えこんで数刻。気づけば、客はアタシだけになっていた。

女将はといえば、テーブルとその周辺の掃除をしている。

今ならば、聞けるだろうか。

そう思った時、ふと視線が返ってくるのを感じた。

「……………なんだい、女将サン。アタシに何か用があるとでも？」

「無いさ。というより、アンタの方が何かあるって見えたけどね」

「ちっ……………」

視線というか、意識の方向を感じ取られていたようだ。

変に言い訳するのも趣味じゃない。

「女将サン、ジュードの武術の師匠だつてな」

「まあね。そういうアンタは、あの子の友達かい？」

「はっ、あり得ねーよ」

頭から否定してやる。友達の対極に位置するやつだ、あいつは。

そういつた道もあつたかもしれないが、今更無理だしね。

「…………話に聞いていた通り、気難しい子だね。それに、あの子に似てる」

「勘弁してくれないかねえ、その台詞はアンタの娘に何度も言われてんだよ。ま、否定してやったけど」

「そんな粋で収まりたくない、ってかい？」

不意の一言に、心臓が跳ねた。

どういうこつた、ババア。

「睨むんじゃないよ。ただそう感じたから言ってみただけだよ。その様子を見るに、凶星だったようだけどね」

「ちょ…………そんなんじゃないよ、ババアー!!」

「まあ、女の子が照れなさんな!」

バンバンと背中を叩いてくるババア。腕で振り払ってやろうとしても、上手く避けられてあたりやしねえ。

まるで酔っている時のアイツのようだ。するっと躲され、気づけば懐に入られるような感触。

「それで、あの子は元気かい？」

「あー…………元気っちゃ、元気かもなあ」

指名手配されるぐらいには元気だよ、とは周囲に聞こえないように言った。

当然のように聞こえていたのか、ババアは表情を変えずに、マナの調子をわずかに変えてきた。

敵意ではなく、探るようなそれに、アタシは感嘆した。こんなの、ア・ジュールの諜報部隊にだって、逆立ちしてもできない。

それでも害意はない。真意を探りたいのだろう。アタシは気にした様子も見せず、そのままに調子を変えず、会話を続ける。

「変わらないって感じかな」

「…………その様子じゃ、ねえ。やっぱり、あの子は変わっていないのか」

「変わっていない所もあると思うけど？ みょーにスケベ、というよりも 男と見れば突っかって、女には優しい所とか」

アタシ以外の女には、敵対していたとしても、それなりの配慮を見せる。

だけど、男は別だ。取り敢えずは社交辞令、ちょっと踏み込んでくると、口悪く対応して遠ざける。まるで試すかのように、悪ぶって対応するのだ。

その上で牙を向いてくる奴には、本気で容赦しないけど。

（例外はガンダラ要塞の門番と、ハウス教授だけ……）

口ずさむと、聞こえていたようだ。ぴくりと、マナが動くのが見えた。

そういえば、そうだった。この師匠に薦められて、あいつはイル・ファンにやってきたのだ。

尊敬すべき、我が師匠。何度も繰り返されたせいで、耳にはタコができているだろう。

だけど、そんな師匠が こんな言葉を聞かされれば、どう出るのか。

好奇心にそそのかされたアタシは、とある言葉を装填した。

しながらに、考える。今からいう内容は、全くの嘘である。責任はあるかもしれないが、直接に関わってはいない。

だけど、今のこの女将では、分からないことだ。だから口に出せば、

信じこむかもしれない。

そういった時、憧れの師匠はどういった様子を見せてくれるのか。知りたいという誘惑に勝てず、アタシは呟いた。

『ハウス教授が死んだし。まあ殺したのは、アタシなんだけどね』、と。

「

」

化物は、宿の中の空気を変えなかったな。そのまま、マナを戦闘態勢のそれに持っていく。

鋭い刃のような、大金槌のように破壊力が高そうなそれを、アタシだけに叩きつけている。

対するアタシは まあいいかも、思っていた。

何故そう思ったのかは、自分でも分からない。ただ、そう思ってしまったのだ。

手から力が抜ける。足からもだ。こんな手練、一対一ではどうしようもない。

なにもかもが弛緩する。緩まっていく。

だけど、次の瞬間には別のものに変わった。なぜなら

（マナを、戻した？）

ババアは、マナを平時に戻した後。こちらを見て、にやっと笑った。
そのまま、ぽんと頭を叩いてくる。

「聞いてた通り、難儀な子だね」

「なにを………！」

「あの子じゃなくても、罰されたいのかい？」

その言葉は、矢となって胸に突き刺さった。

死角からの言葉。それは、すんとアタシの胸に突き刺さり、場所を占有しやがった。

「でも、それは私の役割じゃないようだしね」

「あ、私は………」

続く言葉に、何も言い返せない。

だけど、なんだろうこの感情は。気づけば、脳裏にあの時の声と顔が浮かんでくる。

怒った顔も声も、見てきた。だけど、あれほどまでに突き抜けたのは、見たことがない。

『ナディアアアアアアッ！　ハウス教授を殺ったの、テメエかあ！？』

あんなに怒るなんて。分かっていたけど、正面からぶつけてくるなんて。

あれから数日たったが、毎日のように夢に出る。そして、夢の中のアイツは言うのだ。

裏切り者、と。

（そうさ、裏切り者さ……………分かっていたはず。事実、そうさ。だけど、なんでアタシは……………）

こんなに落ち込んでいる。馬鹿馬鹿しい思考だけど、それが泥のようにはばりついて離れてくれない。

胸が痛い。抑えても、収まらない。

それに、頭も痛い。

と、その時。ぽんぽん、と誰かが頭を叩いた。

それはまるで大切なものを扱うようだった。

優しく、労るような手の調べ。

（　　　）

その感触にアタシは、母さまとプランの母親、乳母のことを思い出していた。

優しくった二人。頑張って、頑張って、見てくれて、褒めてくれた二人。

もう居なくなってしまった人達でもある。アタシから、”私”に戻っていくような感覚。

何も知らなかったお嬢様。トラヴィスという馬鹿げた檻を、壊す前のお嬢様。あそこに戻るなんて、未来永劫有り得ない。

だから”私”は 必死に、振り払った。

（甘える、なんて……………それだけは、出来るもんか！）

既に戻れない所にまで来ている。最後の分水嶺とも言えるが、決意したアタシにとっては、もう戻れないのだ。

だから、この感触に浸ることはできない。席から離れると、女将から距離を取った。

睨みつけ、殺気をこめたマナをも叩きつけてやる。

だけど、返ってきたのは敵意ではなく、悲しみの感情だった。

「やっぱり、かい……………それが、アンタの選ぶ道なんだね？」

「ババア……………」

「本当に、難儀な子だよ。あと、ババアはやめとくれ」

こつん、と頭を叩かれる。

「悪かったね。これ以上は聞かないよ……………だけど、一つだけ。あの子は、元気かい？」

言葉を聞き直す。少し悲しそうなその顔に、私は 何故か、敵わないと思ってしまうて。

力でもなく、本当に、勝てないなんて思ってしまった。

だから、正直に答えてやる。

「有り余るぐらいに、元気だと思う。念願の巨乳の女としけ込んだようだし、ねえ」

意味ありげに行つてやる。

だけど、返つてきたのは苦笑。そして、宿の奥に消えたブスの叫びだった。

「な、それは一体何よ　　!？」

「ちょ、うるせーよお前は!！」

「うるさくてもいい! それよりも、巨乳の女って誰!? あと、しけ込んだってどういう意味!？」

「うるせーな! 前半は、火遊び大好きな、危ない女だよ!」

イフリートを使役した、とは省いてやる。

「後半は……………えっと、どういう意味だ?」

後半は、プランが言っていた言葉をそのまま言っただけ。

けど、アタシにも分からない。しけ込んだって一体どういう意味だろうか。

「おかーさん?」

「女将サン？」

「えーっと……………そうだ、おとーさんに聞きな！」

そこでババアの華麗なスルー。奥からタイミングよく、旦那の方が出てきた。

「お父さん！ えっと、シケコンダってどういう意味！？」

「しけ込んだ！？ まてレイア、お父さんは許さないぞ、そんなことー！！ 相手は一体誰だ、ジュードくん以外にそんな男が！？」

「落ち着けよ……………で、旦那サン。しけ込んだって言葉だけど、いったいどういう意味なんだ？」

聞くが、混乱したように周囲を見回す。

『ちよ、よその娘さんと実の娘に卑猥な言葉攻撃のコンビネーション……………？ これは夢か、夢であってくれ！？』

って言っているが、知ったこっちゃねえ。

追求すること、一時間。ついにはダウンした旦那サンのせいで、アタシもブスも、真実を知ることにはかなわなかった。

目覚めは爽快だった。朝日に、鳥の鳴き声。

朝食にも文句をつける所なんてない。平穩無事な一日が始まるのだろつ、そこかしこから安らかな空気が流れこんでくる。

「もう、行くのかい？」

「行かなきゃ、ならないからな」

「そうかい」

止めもしない。何もこちらの事情を話していないのに、おおよその様子は知られているかもしれない。

そんな荒唐無稽考えさせてくれる女将、あいつの師匠は、黙ってアタシの頭を手をおいた。

拳動さえも見せない、正真正銘の達人の業。驚く暇もなく、女将は告げる。

「泣きたい時に、泣ける相手を探しなさい。可愛いんだから、頼めば誰だって胸を貸してくれるさ」

笑う。

「弱さも強ささ。できれば、あの子とよろしくね」

「…………それは。それだけは出来ないと思うけど?」

「誤解は解くべきさ。その上でなら、誰も文句は言わないよ」

事情を知らず、端的に、告げられる言葉。

だけどその言葉には、抗いがたいマナのようなものが含まれていて。

思わず、私はうなずいてしまった。

そして置き土産として、一言だけ残してやる。

ブスの姿も見えたようだし、ちょうどいい。

「ジュードを追ってくる奴らがいるかもしれない。そしてあいつが一緒に消えた相手っていうのは　　マクスウェルと名乗る、四大精霊を使役する女だった」

それだけだ。告げて振り返り、港に向かって走る。

途中に、治療院の正面に、メガネをかけた医師が立っていた。聞こえていたのか、驚愕の表情を浮かべている。

「アンタは嫌い、だってよ」

そのまま、港まで駆けていった。

道すがら、朝だと慌ただしい街の人の様子が見える。

頑張ればいつもと変わらない明日が続くと、そう思い込んでいる人間がたくさん。

本当に　　穏やかな街は嫌いだ。かつての光景は遙か遠く。

一緒に居たかった人達は。一人を残して、全て死んだ。

もう、アタシに。居てもいいなんて場所が存在しないことを、思い知らされる。

（だから、アタシは行くしかないんだ）

決めたから、戻ることはしない。例え、あいつと殺しあうことになったとしても、立ち止まらない。

走るんだ。

今となつてはただ一つとなつた、アタシが存在してもいい居場所に向けて、守るために、貫くために。

遠く、懐かしい母さまの声が聞こえたような気がした。

間話の3 「一行旅道中、一幕の序」(前書き)

間話らしく、ジュード以外の一人称でござりまする。

間話の3 「一行旅道中、一幕の序」

「わぁ……………」

「おつきいねー！」

どこまでも広がっていく海原。向こうの向こうにまで広がっていくそれは、途中から青空と溶け合っている。

漂ってくるのは潮の香り。ハ・ミルではこんな臭いがなくて、だから最初は驚いてしまった。

もしかしてなにかいけないものが漂っているんじゃないかって、ジュードに説明されるまでは、そう思っていた。

なにもかもが新しい。

山奥のあの村には無い、数少ない記憶の中でも、見たことのないものばかり。

生まれてはじめて、連れられながら自分の足で踏み出したこの旅は、ときどきのわくわくだった。

見ているだけで、退屈しない。街道でこつちを食べようとしてくる魔物は怖かったけど、それも退屈しないもののひとつだ。

怖いだけですむのは、ジュードが守ってくれているから。戦えば前に立ち、一番に魔物を退治してくれるから、怖いけれど恐ろしくはない。

それにしても、魔物に襲われるのも初めてだ。ハ・ミルに来る前は、魔物と出会うことすらなかった。

あの時は、おじさんのワイバーンで移動して、空中に魔物はいなか

ったから。

（だけど、その前はどうしていたんだろう）

忘れてしまった記憶。それは、ハ・ミルに来る前にいた、炭鉱のよ
うな場所 じゃなくて。

それより前に居た場所のこと。今、傍にいないパパやママのことを、
私は覚えていないのだ。

でも、誰かが私を守っていてくれたのは覚えている。大きな背中。
あれはきつと、パパのことなんじゃないかって、思う時がある。

（それが、私の旅の目的）

ジュードからは、旅の目的を持った方がいいと言われた。連れ出す
のは僕だけど、歩くのは私で。

だから、自分の足で歩くための力を支えるものとして、目的や目標
のようなものが必要だって。

そう言われて、すぐに浮かんだことがある。

それが、パパとママを探すこと。

私の、私が居てもいい居場所を探すことだ。周囲の人からイジメら
れない場所を。

石が飛んでこないし、嫌な視線も飛んでこない。そこにいる人が、
居てもいいって、笑って言うてくれる場所を探すこと。

ジュードは、両親がみつかるまで、私の居場所が見つかるまで、私
を一人ぼっちにはしないと約束してくれた。

ちよつとだけ。ジュードにも目的があつて、その最後の最後を果たす時は危険だから、故郷の街にいる”ししょうさん”という人に預けるけど、
やることが終わったら、私の目的を手伝うって言ってくれた。

（戦いに行く……………んだ、ジュード達は）

ぜんぶは説明してくれなかったけど、ジュードとミラは、今から危ない所へ向かうそうだ。
人を不幸せにするものを壊しに行くつて。

少しだけど、説明してくれた時のミラの顔を思い出す。本当に真剣で、村の人達とはまるで違うものが。
本当につよくてかたそうなものがこもっているつて、そう感じられた。

（私も……………戦える……………？）

ぎゅつとティポを抱きしめる。精霊術で戦う。身を守るために戦う。ジュードを守るために。助けてくれた彼を守るために。もし死んだら、なんで考えたくもない。

私は、その、みんなの助けになる術を
持っている、けど。

（護身のためだと、おじさんに教わった術があるけど）

人を助ける術も。村人に受け入れられるようにつて、怪我を治す術を教えてもらった。

（でも、守ってくれるつて言っていたし）

戦うのは怖い。

それに、私なんかが戦っても意味がないと思う。ジュードは本当に強いし、アルヴィンも強い。

ミラも、詠唱もなしに精霊術を使えるぐらい、すごい人だ。剣も使えるし、私なんかよりずっと凄い人だ。

背も高く、ジュードが格好いいって表した意味もわかる。おっぱいもおつきくて、戦ってる時にも揺れて。

時々ジュードがそれをじっと見つめている時もある。というより、ミラってあんな格好で恥ずかしくないのかな。

自慢のばでいーというやつなのだろうか。

「ばりぽー！」

「うん、そうだねティポ」

ちよっと、羨ましく感じる。私も、あんなに……ジュードを魅了できるような、大人の女の人に成りたい。

そんなことを考えていると、船室から考えていた人が出てきた。居るだけで、周囲の視線を集める人なんて、そんなに多くない。

そのミラは、外に出るなり船の前の方へ行った。まだ到着しないと聞いていたのに、何をしにいくのだろうか。

ちょっと知りたいな、と思った私は、ミラの後をついていく。

船はそんなに広くない。少し駆け足をする、すぐに追いつくことができた。

その先に見えたものは、また見たことのないもの。

（まるで、物語のようだね、ティポ）

船の前の方に出たミラは、じつと船の進路の先を見据えている。こちからは背中しか見えないが、それでも特徴的な美しい髪が印象的だった。

風と共に、さらりと流れていって。陽の光のせいか、輝いて見える。すっと立つその姿は後ろから見ても格好よくて、女の人だっていうのに、弱さを感じさせない。

まるでおとぎばなしに出てくる剣士のような。

その剣士様は、しばらくすると振り返った。

そして私とティポに気付いたのか、こっちにやってくる。

「エリーゼか。船酔いは大丈夫か？」

「だい、じょうぶ……です」

「エリーは回復も早いんだよねー。って、そんなことよりミラ君は

何をしていたの？」

「私か？ 私は……少し、考え事をな」

そう言うと、ミラは私の顔をじっと見てくる。一体何だろうと、私は首を傾げて聞いた。

「えっと……な、なんですか。私が、なにか？」

「ふむ……いや、そうだな」

すると、ミラは突然、私の頭の上にその綺麗な手をおいた。確かめるように、すっと頭を撫でてくれる。

「……あの、ミラ？」

それでも、何故いきなり撫でてくれるのか。何もしていないのに。聞くと、ミラは真剣な顔で答えた。

「ふむ……里の者の、な。子供にしていた行為を真似たのだが……嫌か、エリーゼ？」

子供は喜んでいただけがな、と首を傾げるミラ。

「えっと……あまり、やってもらったことが……ないし……」

「エリーは嫌じゃないって！」

「そうか」

ミラは優しく、触れるようにすすつと頭を撫でてくれる。ちよつと不器用な手つきで、髪に引っかかりたりもしたけど、この感触は嫌じゃない。

それにしても、突然どうしたんだろう。それより、行為を真似たと
いうのが気になる。

自分はやつてもらったことがないのだろうか。

「えっと、ミラ君は頭を撫でてもらったことがないのー？」

ティポが、私の聞きたいことを聞いてくれた。ちよつと聞きにくい
問いだ。

それなのに、ミラは即答する。

「ふむ、無いな」

迷いも見せず、ミラは断言した。記憶を確かめる素振りもなく、有
り得ないというように告げる。

「そもそも、私には親というものが存在しない。私を守護する者た
ちは居たが……頭を撫でる、ということはしなかった」

「里の大人の人達からもー？」

もしかしたら、私と一緒に。住んでいた村の人達から、嫌われてい
たのかも。

親がないというのも、私と同じだし。そう考えて聞いてみるが、
逆に大切にされていたという。

「……触れるのも恐れ多い、というぐらいにな。敬われていたし、
彼らにとって私は特別な存在だ。頭を撫でるなど、考えもしないだ

ろっよ」

それは良い事のように聞こえる。だけど、ミラは笑ってはいなかった。

そうであるとして、事実を述べているだけののように、言葉を紡いでいる。

特別な存在。そういう意味では、私とミラは一緒だったのかもしれない。

「うん、エリーとミラ君は似ているところがあるよねー」

「ふむ、似ている？」

「うん、私は……………村のみんなから、嫌われていたけど」

「ミラ君はボクでも想像が出来ないぐらいに敬われていたんだねー。それでも、距離を置かれていた、っていう点では同じ？」

「それは……………」

「もう、ティポ！」

怒る。

ミラが、硬直してしまったじゃない。それでも、ミラは苦笑しながら、言った。

「いや、それも一理あるな」

何かを思い出したのだろうか。ミラの様子が、少し変わる。

何を考えているのか分からないけど、これは悩んでいるのだろうか。そうしてじっと考えた後。ミラは、私とティポに優しく笑いながら、言った。

「撫でてくれる人もいない、か。それでもお前たちの方が、辛かっただろう?」

「うん。でも、ボクもエリーも、ジュード君に助けられたからねー。だから、僕達は平気だよー」

「……………そうか。強いんだな、エリーゼもティポも」

優しく頭を叩いてくれるミラ。ぽふ、ぽふ、という音がしているような。

その手つきは、さっきよりずっと優しくて。熱がこもっているように、思えた。

本当に、優しくて、暖かくて。

だから、ちょっとした光景が浮かんできてしまった。

(…………ママ?)

感触が重なる。かつてと今。昔と現在。

遠く。

本当に昔、まだママと居られた頃に、こつされたような気がして。

(そして私は……………)

お返しに、とやって、喜ばれた事があるはず。

少しだけど、それを思い出して だから私は、ミラの腕をつかんだ。

「どうした、エリーゼ?」

「うん……………その、ちょっと、頭を」

「ふむ、屈めばいいのか?」

はっきりとは言えなかったけど、言葉の意図を読んできたのか。

ミラは膝を曲げて、すっと頭をこっちに降ろしてくれる。

そこで私はすかさず、ミラの頭の上に手をおいた。

そして、 にしたのと、同じように。ミラと同じように、
頭を撫でた。

「エリー、ゼ？」

「撫でてくれたから。お返し、です」

少しびっくりしたのか、ミラの眼が丸く見開かれている。

もう子供じゃないけど。それでも、ママは喜んでくれたと思うから。

そして、ミラもママと同じで。驚きの眼が、優しいそれに変化していく。

「……………優しいんだな、エリーゼは」

柔らかいものを帯びた眼。ミラは美人で、眼も綺麗で、だからちよ
っと怖かったけど。

今のミラの眼は、私から見てもとても魅力的だと、そう思えるもの

になっていた。

頭を撫でるエリーゼ。されるがままになっているミラ。

ほんと、こっちに来てからあまり見たことがない
光景ってやつか？
心温まる

それにしても、酷い境遇だったのに、他人を気遣うことができる、
か。

「…………… 良い、娘こだよな、冗談抜きで」

「うん。アルヴィンと違って、素直ないい子だと、ほんとに。だから、連れだしたんだけど」

ジュードが皮肉まじりに返してくる。素直じゃないのは、お前も一

緒だろうよ。

「それより、あの子はある村で何してたんだ？」

「匿われていた、つてのが僕の予想だけど」

「やっぱりねえ」

一目見た時から、何か既視感があった。そして二度目だ。

ラ・シュガルの軍に追われているようだし、間違い無いだろう。

（ともあれ、今は迂闊なことはできないか）

ジュードとミラ。この二人を敵に回して、勝てるとは思わない。

特に実行した時の、ジュードの奴の反応。それはそれは、想像以上のものになるだろう。

激怒した隙をつくまでもなく、やられる可能性が高い。

そんな事を考えている時、連絡用の鳥がやってきた。

手を掲げて、そこに鳥を留まらせる。

足にある手紙を取り、用意しておいた手紙をくくりつけ、放してやる。白い鳥は、そのままばさばさと羽ばたいて、青い空の向こうへと飛んでいった。

見送りながら、手紙をポケットの中に入れる。

（これは……後で見よう）

ここで見られるような内容は書いてないだろう。それに、目の前の光景がどうにも　　らしくなく、引っかかってしまう。

一端、間をおかないと、とてもじゃないが手紙を読めそうもない。

「手紙？　珍しいね、それ。鳥でやり取りしてるんだ」

「ん、まあな。多少場所がずれていても、マナを追って追跡してくれるし。俺のような風来坊にゃ、最適なのよ」

「ふーん。で、何の連絡？　何を送ったの？」

疑いの視線を向けてくるジュード。旅の途中だったのに、一体何をやり取りする必要があるのか。

追われている身としては、それが知りたいのだろう。

（これは、下手に誤魔化すとまずいな）

肩をすくめながら　　答える内容を組み立て　　説明を、
してやる。

「遠い異国の愛する人に。素敵な女性が、目の前に現れたってな」

「……………アルヴィンって、ロリコンだったんだ」

「ちげーよ！ そつちじゃねーよ！ いやエリーゼも可愛いけど！」

「やっぱり……………」

「なんだその納得した面は！？」

昨日の発言といい、俺のことをどう思ってるんだ、こいつは。

小憎らしい坊主、しかし今度は話題を変えてくる。元に戻した、というべきか。

「ふーん。で、手紙でやり取りしてるって人って？ もしかして、恋人とか」

「あー、そんな所だよ。こうして手紙を出さないと、ちょっと心配なんぞな」

「もしかして、前に襲ってきた痴女とか」

その問いには、肩をすくめるだけで、何も答えない。

しかし、また微妙なことを聞いてくる奴だな、こいつも。

それだけ疑っているということだろうけど、このままでもまずいか。

（切れる札を、一枚）

切ると、決心する。この先のためにも、だ。

二人が離れている今、ジュードに叩きつけるのが最善だろう。

「なあ、ジュード。俺だって人間だ。お前と同じように隠したいことがある。大人だし、他人には知られたくない部分があんのよ」

「……………僕の、隠し事？」

「あるだろ？ 例えば お前が」

特に気負わず、告げる。

「精霊術が使えないこと、とかな？」

「 ！？」

思ったとおりだ。俺の言葉を聞いたジュードの、その反応はまるで雷鳴にうたれたような。

それぐらいに劇的だった。まるで、用意しておいた言葉が、シヨックによって軒並みかき消されたように。

驚愕の表情で、こっちを見てくる。

「な、んで……」

「身近に、似たような奴がいるのを知っているからだ」

本当に、一番に身近な奴が、な。

「それは……その、ミラには？」

「言ってねーよ。どういう反応されるか分からないからな」

ある程度は、予想もつくが。

まず真っ先に 疑うだろうさ。お前は、”そう”なのかって
ね。

（それは、今はちょっと不味いんでね）

言わないというより、言えない。とばっちりがこないとも限らない
からだ。

ほぼ、こっちの都合での理由である。でも、ジュードはいい具合に
勘違いしてくれているようだ。

「心配しなくても言わないさ、って変な顔だな」

「いや……新鮮な反応だと思って。知ってるなら、もっと、こっ
ち……」

「蔑みの視線があつたはず、つか。まあ、今までがそうだった事は予想もつくが」

使えて当たり前のこの世界じゃあ、異端扱いされるだろうがな。

「それでも、おにーさんも色々と見てきたことがあんのよ？ 少年と同じ、隠したいことが、さ」

「……………分かった。悪い、アルヴィン。余計な詮索して」

「良いさ。お前だって間違えることがあるんだなって、安心した」

「は、間違えてばかりだと思っけど？」

自嘲するその顔に嘘はなかった。本当に、間違え続けてきたのだから。

でも、今は違っただろ？

「それが見えないから不安になんだよ。あー、いい。ほら、現美女と将来美女の二人が呼んでるぞ、色男」

「は？ つて、あ……………」

見れば、前方に。ジュードを呼んでいる、二人の姿がある。

「行けよ」

「分かった……ごめん、アルヴィン」

「いいさ。体調も戻っていないようだし、存分に癒されてきたらいい」

「りょーかい！」

そのまま見送った。ジュードは駆け足で、遠ざかっていく。

その足に、ゆらぎはない。疲れているだろうに、マナの調子は万全に戻っていないだろうに、それでも誰にも感づかせないと、しっかりと一歩、踏みしめている。

「本当に不安定だけど、しっかりとした奴だな いざとなれば、ばらされても殺すんだろうな、お前」

意志の強さというか。心の強さが、尋常ではない。

素性をばらした上での、リーゼ・マクシアでの生活。笑ってられるほどに、容易いそれではなかったはずだ。

世界に一人だけという孤独。助ける手はあつたろうが、抱えるのは自分しかない。

それなのに、今この時でも突き進んでいる。あるいは、揺らがないだけの何かを持っているからだろうか。

（それは、行動する意志を、士気を支える　　信念か）

さきほどの光景を思い出す。まるで親子のようなやり取り。

互いが互いを慈しみ。見ているだけで、ほっとさせるようなものがあつた。

（……………母さん）

俺の支える信念。かつての光景が、重なっていく。

今ではもう、そんなことを望めるような年でもないし、望めるような立場でもないけど。

（最悪の気分だな、マジで）

昼かどうかは知ったことが。酒でも飲んで寝ちまおうと、俺は船室へと向かった。

背後に、はしゃぐ少年少女の言葉を残して。

取り敢えず頭を撫でてみた。問答無用。エリーゼと同じ、柔らかい感触が掌に返ってくる。

「ちょ、ミラ!?」

「大人しくしている、ジュード」

透き通るかのような、柔らかい髪質。顔に似合っていると言った方がいいのか。

童顔の、ある意味少女のような容貌。性格は正反対だが、それにしても肌が綺麗すぎるのはどういうことか。

身体に傷を負っているのは分かるが、顔に傷を負っていることはない。

「えっと…………ミラ?」

「そのまま。では、次はエリーゼの番だな」

「う……………ん」

返事をするエリーゼの腰を掴んで、抱え上げる。エリーゼは少し嬉しそくにしながら、それでも目的の行動を完遂した。

すなわち、ジュードの頭を撫でるのだ。

「ありがとう、ジュード。えっと……………よく、やりました？」

「うむ、それで正しいぞエリーゼ」

「いきなり男を子供扱い！？」

「感謝の気持ちを表したのだ。それとも、嫌なのか？」

「え……………つと、嫌じゃないけど」

それきり、頬を染めながら黙るジュード。

とても、私とエリーゼを守ると豪語してみせた猛者には見えない。

「ならば受け入れろ」

と、私も頭を撫でる。

実際、本当に感謝しているのだ。

守ると誓ったし、責任を持つといった。それ以上に口を出せるわけがない。

（…………私との先約があるのに、と、あの時。ちょっと、思っていたということは言えないが）

それでも、エリーゼはいい娘だ。あのような境遇にあつて、私のような者を気づかえるほどに。

使命を優先しなければならぬ私には助けられなかったが、あのままでいたら果たしてどうなっていただろうか。

一連の事象を考えると、胸が痛む。それを考えると、ジュードには感謝せざるをえないだろう。

今の私ができないことを、自ら受け持つて、責任を持つて果たすと言ってくれたのだから。

（最も、本人はそう考えていないようだが）

感情というものの、そのままに。自分自身の気持ちで動いた結果だろうと思う。

そういう点では、本当にできる部分がある。

思ったこともない感情だが、尊敬

痛いのは嫌で、疲れるのは嫌。それが人間だ。ジュードは、それを知りつつも行動できる男。

大した奴だ、という以外に表現のしようがない。あるいは、いい男なのか。

（大人しく頭を撫でられている様子を見ると、とてもそうは思えないのだが）

ただの少年にしか見えない。この身体のどこに、あれだけの意志の力を宿しているのか。

危うい所はあろう。里に居たという化け物のことも。あれから、体調も戻ってはいないだろうに、それでも私との約束を守るべく、意志を組むべく、休むことを拒否する。

一体何が、彼をつき動かしているのだろう。そんなことを考える時がある。

マクスウェルと知って。それでも私をミラと呼んで、その上で守ると宣言する少年。

(……………ん、なんだ。鼓動が早くなったような?)

ドクン、と心臓が跳ねたような。考えとき　　恥ずかしい?

そんな感情と同時、妙に甘い感覚が頭の中を占有したような。

(いいさ。今は、撫でくり回してやる)

エリーゼと一緒に。そして、その頭をくしゃくしゃにしている最中だった。

「取舵いっぱい」

「よーそろー」

船の前の方から声が聞こえる。その直後、船は左に曲って。

いきなりの進路変更に、船がわずかに傾いた。

「うわ!?!」

油断していたのだろうか。バランスを崩したジュードが、こちらに倒れこんでくる。

私とエリーゼにしても予想外のことだったので、踏ん張ることもできず、後ろに倒れてしまった。

「つつ

！？」

痛い、ということよりも先に、異様な感触に支配された。

胸。

胸に、ジュードの手が。あの夜と同じように
って、エリーゼも！？

「痛え……………っ！？」

「ジュー、ド……………」

「あー！ ジュード君、エリーゼを押し倒したー！ ミラのおっぱい揉んでるー！」

「ティポ！？」

ジュードが叫ぶ、ってそれより手をどける！

「うわ、ミラ!?」

声が聞こえる、同時に、ジュードは起き上がろうとして手を支えに、起き上がろうとして。

「んっ?!」

胸に、妙な感触がして。私は思わず、変な声を出してしまった。

エリーゼも一緒なのか、赤い顔で自分の手で胸を押さえ込んでいる。まるで隠すように。それを見たジュードは、顔を赤くして、その場で頭を下げた。

「ご、ごめん!」

「ジュード……」

「ジュー、ド」

「ジュード、君」

「ちょ、今のは予想外のアクシデントだって! ってエリーゼ、ほつぺたを桃色に染めて上目遣いはよして、ほんと洒落にないから!」

「ジュード……君という奴は」

「そんな眼でみないでよ、ミラ!」

そう言われても、そんな事をされたらな。
ちよっと気持ちよ…………げふんげふん。

（いや！ そんな事は考えていないぞ！）

イフリートに知られたら炎と共に怒られそんな思考が浮かぶが、即座に振り払う。

その隙に、ティポがジュードの前にすすと飛んでいった。

そして、面白そうな表情を浮かべながら、言う。

「ジュード君…………男は正直になった方がいいんじゃないよ？ ほら、本能のままに突き進め！ でも、責任は取った方がいいね！」

「ちょ、この謎生物がけつこうな重いことを言いやがるな！？」

ジュードが、ティポの頭をわし掴む。そのまま、びよんびよんと伸ばそうと縦に引っ張った。

「わー！ やめて、ジュード君！」

「黙れ！ いい機会だ、解剖してやるぜ！」

顔を真っ赤にしているジュードが、眼をぐるぐる回しながらも、ティポを掴んで振り回す。

エリーゼは我にかえったのか、急いでジュードを止めるべく抱きついていた。

（……………まったく）

慌ただしい光景を、私は苦笑しながら眺め続ける。

（でも……………もし、ジュードに撫でられたら、どつという感情を浮かべるのだろうか？）

そんな、埒も無いことを。全くに有り得ない未知の光景を想像して。

言葉には言い表せない、でも温かい感情に胸を占拠されたまま。

触れた胸と、その奥の感情を、自分の腕で包んで隠しながら。

不安定な波に揺蕩う船の、水しぶきの音と共に、眺め続けた。

間話の3 「一行旅道中、一幕の序」(後書き)

キーワードは、撫でポ(嘘)

20話 「サマンガン海停」

「やってくれるじゃないか……ナハティガル！」

早朝に船に乗った僕達は、その夕方にサマンガン海停に到着した。

ここならば、警戒網はしかれていまい。そう考えたのだが甘かった。

迎撃は、あった。ここに、あった。

船を降りて、まず最初に受けたのは迎撃だったのだ。

僕達は見てしまったのだ。

直に剣や矢や精霊術が飛んできたということはない。

襲ってきたのは 悪意の塊。

敵は恐ろしく周到に、僕達の身体ではなく、心を傷つけるべく罠を

仕掛けてきたのだ。

ぶっちゃけると、僕とミラの手配書、その拡大版が港の中央に貼り出されてました。

（なんだコレ、なんだコレ）

バストアップという、なんだか通常とは違う仕様で書かれたのであろう手配書。

そのあまりのあまりっぷりは、思わず二度繰り返してしまうほどだ。

まず、僕の手配書を説明しよう。

なんか拳が林檎のような赤い球体になっていて、そこから物騒な爪が生えてる。

《キラリ》と光ってるって、妙な描写はいらねーよバカ。

まあ、それはいい。いや、良くはないんだけどね。
それよりも、顔だ。

なんだこの絵は。マジで僕のことを探しているのか
というの
も、どうでもいい。

ぶつちやければ人外の顔すぎる。輪郭おかしいし、目と目の間が開きすぎている。

5歳児レベルの落書きにしかみえない。それでいて、妙に性格悪そうな眼つきに仕上げられているのに腹が立つ。

次にミラだ。癖っ毛が強調されているのと、横顔イラストなのがまた妙にイラッとする。

アホ毛も書かれているあたりに、なにがしかのこだわりを感じる。つつーか髪はそれなりに似て見える、というと怒られそうだけど。

また、手配書のミラは指を立ててそこから炎を出していた。いや、そんな精霊術使ってねーだろってのに。

あとは

「何故、私の胸のあたりに画鋏が……………」

そう、なぜか胸のあたりに画鋏が刺されていた。おっぱいに2つ、画鋏が2つ。深く根元まで刺されているあたり、何がしかの意志を感じてしまう。

そこでちょっと近くにいたおっさんに訪ねてみると、「銀髪の嬢ちゃんか、なにやら出航前に念入りに刺していったぞー」らしい。

あのナイチチめ、出る胸は打たれる、むしろ決れるという意味表示のつもりか。

（そんなんだから、お前は無乳なのだ！）

ってなことを考えていると、エリーゼが驚いた様子をみせた。

「この手配書……ジュード、ミラ？」

「わー、ふたりともキョーアクー！？」

「ちょっとまってその美少女と謎生物」

この形容できない意味不明な絵を、僕達と断定するのか。うん、可哀想だけどエリーゼとティポにはちよつと後でお話する必要があるかもしれない。

「美少女、って言われました」

「うん、嬉しいがっている仕草も可愛いけどあとでお説教ねー。で、なんか言えよヴィンちゃん」

「……………不幸中の幸いだな……………これならっ、捕まる心配もなさそうだ」

「うん、てめーもこっち向いてから言おうね」

フォローしてるつもりか。

声が笑ってるし、肩も小刻みに震えてるじゃねーか。まだ素直に爆笑された方が腹も立たねえぞ。

そして、残るミラは驚いていた。

「これが……本当に、私だと？」

愕然と、なんだかショックを受けている。嘆いているという風ではないのが気にかかる。

率直に聞いてみたところ、「非常事態だ」らしい。

えっと、何が非常事態なんだろうか。

「私がこの現在の外見となったのは、人間の半数……つまりは、男性に対して有利だからだ」

「生々しいな、おい！？　って、そのスタイルも！？」

「いや、ノーム曰くそれは『天然物』らしい」

「それならよかった」

危うく膝から崩れ落ちてしまうところだ。

そうだ、偽乳などこの世にあつてはならぬものなのだ。パッドはま
だいい、女性の可愛げが具現したのだと見逃そう、って店長が言っ
ていたし。

でも偽乳だけはダメなのだ。

と、いうよりも他に引っかけた部分があるだろう。今の言葉の一部に違和感を覚えてしまう。

ミラが、人間と戦うのを前提にするのってさ。何だかおかしくない？ 人間を守るんだろうミラは。

精霊の主人ってーのに、人間と敵対することを前提に身体を形成したのは何故なんだろうか。

ミラの肉体を構成したのは四大みたいな感じだけど。これ、ひよつとして何がしかのヒントになるのかな。

（ミラのことだし。ひよつとすれば冗談を真に受けているのかもしれないけど）

嘘をつかれた経験が無いからか、ちょっとした冗談でも真に受けてしまう事あるし。

別の意味で冗談が通じない性格だと言えよう。

「っと、二人とも。そろそろ不味いかもしれないぞ」

「視線が集まってる……そうだな、ひとまず離れるか」

「目立つのもまずそうだしな」

ミラが頷き、僕も同意する。

引っかけたあれこれは後で考えとしても、今はここから離れるべきだろう。

手配書の絵は、それはもうド下手だ。本人を前にしても舌かんで死ねって言えるレベル。

落書きじみたこの絵を見て、パツと見て僕達と繋げられる可能性は少ないと思う。

だが、それでも大体の外郭と髪の色、一部の特徴などは掴んで書かれているのだ。

港を見渡せば、兵も巡回している。ラ・シュガル軍ではない、カラハ・シャルの兵士だが、見つければ面白くない事態になることは間違いない。

僕達は急いで、そこから立ち去っていった。

ひとまず、小休憩。宿屋に入って、受付をすませ、ひとまずコーヒータムと洒落込んだ。道すがら情報も集めたし、方針を決めるべきだろう。

そんな中、最初に口を開いたのはミラだった。

「……………ジュード。私が手配書のように非魅力的ならば基本戦略を見なおさなければならぬのだが」

「えっと、つまり？」

「お前の視点で正直に答えてくれ。私は、魅力ある存在だろうか？」
え、そんなこと。エリーゼの前で語れないっす。具体的にはちちしりふとももの素晴らしさを語ることになるから。

気にせず赤裸々に語ってもいいのだが、教育に悪いだろう。どうかエリーゼはおしとやかにあの銀髪娘のように口悪く育って欲しくないし、棍棒女のように乱暴になって欲しくない。

ということ、率直に嫌らしくない風に答えることにした。

全てはこの一言につきる。

「まことに良きおっばいでした」

「よし燃えろ」

「熱い!？」

「ジュードは……おっばいが、好きなんですか？」

「こっちは別の意味で痛い!？」

弱・フレアボムが小炸裂。立てた親指が焼かれた。

言葉の短刀が、単刀直入に胸に。いや全くの自業自得なんだけど、貫かれた心が痛む。なけなしの良心が焼ける。

やめてよしてそんな目で僕をみないで。

「あー、君たち？ 漫才してないで、さっさと行動方針を決めるぞ。あとミラ、宿屋の中では火気厳禁な。イチャついて恋の炎を燃やすのも禁止」

「イチャつく、という言葉の意味は分かんが……ふむ、恋とは燃えるもののなか。物騒だな？」

「あら、ミラ様は経験なしか。あれは、そうだなあ……つかむしろ、燃やされるっていう方が正しいな。どちらにせよ物騒だ、なあ？」

アルヴィンがこっちに聞いてくるが、僕がそんな事を知るわけねーだろ。旅に勉強に忙しかった僕に、彼女なんて出来たことねーです。

「そんなことよりさっさと情報をまとめようぜ」

「おや、つれないねえ。ま、確かに手っ取り早くやることを決めてしまいますか」

言つと、アルヴィンは周りに視線を配りながら、話を始めた。

「ここ、サマングン海停からカラハ・シャルルに続く街道なんだがな。今は、軍による検問が行われているらしいぜ」

カラハ・シャルルへと繋がる道、それはサマングン街道。その中央よりやや海停側に、軍が陣取っているという。

「……………海際で無理なら陸で封鎖、ってことか」

「そのとおりだな。ラ・シュガル軍の兵士が、あの手配書を片手に、怪しい奴を探しているって話だ。身分が怪しいやつは、通されないらしいぜ?」

「そうか……でも、あれを日がな一日中持つて検問ってなんだよ。まるで罰ゲームじゃないか」

あんな、精神の正気度を下げられる落書きを一日中眺めながら立ち仕事ってか。罰ゲーム以外の何ものでもない。むしろ拷問の域だ。とはいっても、あれが出回っている時点で、こっちの精神的ダメージも特大になっているのだが。

「でも、なあ。あの手配書そのとおりの人間がいるわけないだろう。どっちかっていうとモンスターの絵だったぞ、あれは。」

「それでも唯一の手がかりなんだろうな。服装を変えられれば、意味がなくなるようなもんだけど。あるいは　　誘い、という可能性もあるぜ?」

アルヴィンの推論は、こうだ。こちらの目的は知られている。そして、侵入経路も予測されている可能性が高い。

ならば、港の入り口で油断させて、実は兵士達は詳しい似顔絵を持っていると。

「無い、とは言い切れないか。最悪を予想してしかるべきだし」

「そうそう。もしくは、研究所でお前さん達と戦った警備兵を、物陰に潜ませているのかな。印象深い容姿をしているミラなら、よっぽどの変装をしないと簡単に見ぬかれちゃうぜ」

一理ある。オーラというか、マナによる威圧感もあるし。今はなりを潜めているが、それでも気配の質は変わっていない。

一度対峙したことがある兵士なら、気づかれる可能性が高いか。

「なら、あそこに行くしかないか」

「どこだ？」

「サマンガン街道の横にある樹海。サマンガン樹界だよ」

木々が海のように広がっている場所、樹海。そこはこの海停を出てすぐ、街道の左側の岩場を登った先に入り口がある。

以前、薬草を探すために、一度だけだが通ったことがあるのだ。

あの樹海を抜けた先は、サマンガン街道のカラハ・シャルル側に通じていたはず。

「聞いたことはあるな。だが……エリーゼには、ちょっと厳しいんじゃないか？」

「それは……」

確かに厳しい。あの樹海は起伏が激しく、蔦をつたって登ったり降りたりを繰り返さなければ抜けられない。

魔物もいる。視界も悪いので、もしかすれば奇襲を凌ぎ切れないかもしれない。

「ふむ……アルヴィン、別のルートは？」

「今のところは思いつかないな。海停の中でしばらく聞き込みをするかして、情報を集めれば別の道も見えてくるかもしれないが」

「……そんな時間は、ない」

そしてミラはジュード、と僕の名前を呼んだ。

「おまえは、守ると言った。あの言葉に嘘はないのだな」

「嘘は、ない。守ってみせる」

「ならば樹海に行く。エリーゼを置いていけないのなら、それが答えだ」

「……はい。私も……それで、いいと思います」

小さな声。少しふるえている声で、エリーゼが僕に言った。

「足手まといには、なりません。怖いけど……でも置いて行かれる方が、もっと怖い、です」

「そうだよー！ 僕とエリーをおいていかないと、寂しいよー！」

エリーゼは僕の服の袖をちよんとつまみながら。ティポは僕の腕に

柔らかに噛み付きながら。

二人とも、同じことを言う。

「……………分かった。全力を尽くす。いざとなれば僕が背負うから、心配しなくてもいいよエリーゼ」

「はい……………」

「ボクも守ってねー！」

「ごめん、それは無理」

笑って却下する。

「ひどいよー、ジュード君ー！」

「いや、無理。というか飛べるから疲れはしないだろ。あと、何されても死にそうにないんだけど」

雰囲気的に。魔物に殴られても、ぼよんと跳ねるだけで死にそうにない。

「あはは、大丈夫。ティポは……………私が、守るから」

「ありがとうー！」

ティポと笑いあうエリーゼ。頬がやや赤くなっているのは、一緒に

行けるのが嬉しいからだろうか。

何にせよ、置いていかなくて済んだのは幸いだ。

それにしても……

「置いていけ、とは言わないんだねミラは」

「お前は変に律儀な所があるからな。置いていけと言っても聞かないだろう」

「ごもつとも」

それなら、検問を強行突破する方を選んでいた。そうならなくて何よりだ。

「決まりだな。とはいっても、俺もフォローはするさ」

「ありがとう。じゃあ、腹ごしらえといきますか!」

「うむ!!!」

食事と言った瞬間、ミラのテンションがただ上がりになった。

具体的にいうとエクスクラメーションマークがみつつ並ぶぐらいに。

「メタはよせ。それで、今日は食べたいものがあるのだが」

「リクエストとは珍しいね。って、ミラって食べ物の種類とかに詳しくなかったっけ？」

「ほとんど知らない。だが、それは食欲をそそる臭いを発しているな」

「嫌な予感がする……………って、もしかして昼に隣の船室で出された、アレ？」

「そう、マーボーカレーだ！」

「予感的中！　ちょ、ミラまで僕をマーボーカレーに染め上げるのか！？」

「全く意味が分からんが……………そんなに食べたのか？」

「うちの近所には、棍棒振り回す猪娘がいましたね……………」

その名もレイアという。

で、なんでマーボーカレーが出てくるのか、その経緯を昔語り風に説明した。

三行だけど。

一、猪娘がわけもわからず怒る。

二、わけがわからないけど、喧嘩を売られたからには買わざるをえない。

三、仲直りにと、師匠が作ったマールボーカレーを持って家にやってくる。

「いや、美味しいんだよ？ でも、いくらなんでも週3であんなに濃い料理を食べるのはね？」

「確かに、あれを短期間に食べるのはな。濃い味の分、飽きやすいだろうし」

「そうそう。いくらかアレンジを加えたりして、何とか凌いだけどさ……お陰でマールボーカレーを加工する技術が嫌というほどに向上しました」

マールボーカレーアレンジ技術に関しては、リゼ・マクシアで覇を争えるほどだと思う。

「そんなに喧嘩してたのか」

「うん。こと武術に関しては競いあうライバルのような関係だったし。どっちも負けず嫌いだったから、ぶつからないって選択肢なんて思い浮かびもなかったよ」

引くことを知らない子供たちでした。今でも変わってないと思うけどな。

うんうんと頷く。うなずいて、うなずいて、目をちらりと横に向け

る。

見えたのは、何やら笑顔になっているミラとエリーゼの姿。

え、なにゆえ。

「ジュード君、レディーの扱いがなってないな」

「な、謎生物にダメだしされたっつ！？」

しかも女性の扱いを、雌雄同体に。

普通にショックである。でも、怖いのでミラとエリーゼには何も言えないのである。

そんな中、ようやくとミラが口を開いた。

「…………ふむ。ならば、私も思い出の。あの、ミートソースの料理を頼む」

「え、いいけど」

思い出つていうほど経っていないけど、とは言わなかった。ただ助かったという気持ちで、頷くだけ。

「なら、今日はスパゲッティにしようかな」

幸いにして時間はある。食感を考えると、少し太めのものを使うべきだろうか。

でも酒はなしね。

「私は……………その、えっと」

「遠慮しなくていいよ？ さすがにサーロインステーキ持って来いとか言われたら財布と格闘する必要があるけど」

「そんな高いの……………！ う、いえ、その……………ふわふわの玉子焼きが食べたい、です」

おずおずといった様子で、恥ずかしそうに言ってくるエリーゼ。下を向いて恥ずかしそうに。

っていうか、そんなに遠慮がちに言う料理じゃないのに、遠慮しちゃってまあ。

「ともあれ可愛いから良し」

「ジュード君……………言葉、もれてるぜ？」

「本音ゆえに致し方なし。っつーかアルヴィンもニヤついてんじやねーか。で、そっちはなんか食べたいものがあるのか」

口封じがわりに作ってやんよ、と言外に含ませる。

対するアルヴィンは、少し考えた拳句に、ああと言った。

「俺も卵焼きな。でも、こっちは砂糖ので頼む」

「甘い味付けのやつか？ なんつーか、まあ意外と子供っぽいな」

「おにーさんもたまにはそういうのを食べたい時があんのよ。あと、俺は甘党だしな」

「糖尿病には気をつけろよ」

医者として言わせてもらおう。

「分かった。何故かは知らんが、説得力がある」

「そうしてくれ。でも、甘いもの系統か……まあ、そっちの方も作れんでもないけど」

とはいえ、普通の料理と比べれば、バリエーションは少ない。特にケーキ系統は、数種類程度しかつくれんし。

「ふむ、私も興味があるな。例えばだが、ジュードは何が作れるんだ？」

「ホットケーキ……とか、そういうボケはミラには通じないからおいといて。ケーキ系でいうと……アップルパイとか、ピーチパイ、あとはチーズケーキってところか」

作ってる時に胸焼けするけど。そして、出来上がった時には臭いのせいか、腹がいつぱいになっているという。

あ、空気を読まずに僕の取り分をもたいらげるバカ二人を思い出した。具体的に言えば茶髪と銀髪。

想像の上で殴っておこう。体重が増えるのもあるしダブルショックだ、ざまあ。

「なんで菓子と聞くだけで悪い顔になる？」

「癖です」

「なるほど」

疑問を抱くことなく、納得された。微妙に傷ついた。

「いつも悪い顔している気がするけどな、ジュード君は。それにしても、ピーチパイねえ……それは親父さんが好きなものか？」

「……まあな。ちよこつと口出しされたこともある。でも、何でそんな事を知ってやがる」

ああ見えて甘いもの好きな親父。でも外面はいいクソオヤジは、そんな事は話さない。

親父が甘いもの好きななんてことを知ってる人は、僕を除けば二人しかいないのに。

「いや、全く知らなかったさ。でも料理するのは家族に作るために、

つてのが基本だろ？」

「そこで親父が出てくるところが胡散臭いんだけど……まあい
いや。どっちにしろ、今から作るのはさすがに無理だぞ」

「へいへい。次の楽しみにとっておきますかね」

「そうしてくれ。なんなら店で売ってるのを買ってこようか？」

「いいさ。“こつち”に売ってるのは、ちょっと味が違うんでね」

「…………“こつち”ねえ」

はてさて、地域ごとに味がちがったつけ？ 言葉のニュアンスも微妙だし、また何か隠してやがるな。

でも、余計な詮索はしないうった所だ。それに、時間がない。

「ついでに、他のデザートを買ってくるよ。エリーゼもミラも、甘いものは好きだろ？」

「興味が無いと言えば嘘になるな。嘘はよくない」

「は、い。果物系は大好きです」

はい、素直じゃないのと、可愛い返事頂きました。アルヴィンは無視無視。

「ともあれ、さくつと行って作ってくるよ。厨房は借りられるみた

いだしな」

「ああ、楽しみに待っている」

「私も……………いい子に、しています」

「ボクもー!」

「ああ、頼むぜ」

三人と一体の声を背中に、僕は厨房へと向かった。

デザートはチーズケーキあたりでいいか。数は、いち、に、さん、し……………と数えた時だ。

ふっ、と思い浮かぶ。

「……………そういえばティポって、なに食べてんの?」

結局、怖くて聞けませんでした。

20話 「サマンガン海停」(後書き)

遅れましてすみません、装甲悪鬼村正ショックから立ち直るのに時間がかかりました。

コンプリートした後は、作者の斬殺死体が転がっていたそうなの。

善悪相殺スラッシュはものの見事に自分の心を真っ二つにしましたよ。

暗黒大河の名に恥じない、見事な一大スラッシュダークアドベンチャーでした。

21話 「樹界の中で」

サマンガン海停から一時間ほど歩いた先、岩場を登った所に、そこはあった。

入り口は狭く、その先は暗くてよく見えない。

それほどまでに、木々が生い茂っている。

そう、ここにあるような、陽の光が少ししか届いていない証拠だ。ほぼ隙間なく、万便に、木々の葉の幕で空が覆われているのだ。

天の恵みの象徴である太陽ではなく、生い茂る深緑達が空を支配する世界とも言えよう。

ゆえに、“樹界”。

サマンガン樹界と、この場所は呼ばれている。

「思ったよりも視界が悪そうだな……準備はオッケー？」

入口の前で、僕達は装備を確認することにした。僕はナックルガードで、ミラは剣。

アルヴィンは銃と大剣だ。

そして、エリーゼは杖を持っている。僕が買ってプレゼントしたものだ。

用途は、万が一の時の護身具として。

見たところ、エリーゼのマナの総量は多い。同年代の子供たちと比べれば、破格のものだ。

だから稚拙とはいえ、マナをコントロールすれば、自分の肉体を防

御することもできるだろう。

マナの増幅器である杖を持っていれば、その効率も防御力も上がるはずだ。

とはいっても、それに期待することはない。この杖が使われない、使われる機会がおとずれないのが最善だろう。

僕が守りぬけば、それでいいのだから。そう、危機におとし入れる気など、毛頭ないのだ。

それでも僕とて人間である。万能の力を持っているはずもない。精霊術も使えない僕が万全を語ろうなどと、学院の誰かが聞けば一笑一言にこきおろされるだろう。

それに同意する気もないが、事実事実として認識する。

だから、もしもを考えて然るべきなのだ。

守ると宣言した人間の義務もある。

誰かに対して安全を誓うのであれば、もしの場合まで想定するのは当然のことだから。

それに、この樹界は視界が悪く、障害物も多いから、死角が生じやすい。

歩いている途中に、見えない場所から奇襲される回数も増えるだろう。

僕はマナの気配は読めるが、それでも全ての気配を読み取ることなどできない。

（それに

また、怪物が現れるかもしれないしなあ）

それは、瀑布であつた大型の魔物ではない。

ミラの社の前で遭遇した、正体も不明の化物語に出てくる怪物だ。

まさしく、物

僕はあれの恐怖を知ってから、周囲の気配を頻繁に探るようになった。

集中していれば気づくことができるはず、と。

そうだ。“あれ”に奇襲されるなど、考えたくもない。

“あれ”に比べれば、そこいらの魔物など塵芥のようなもの。

（そう、たとえば目の前にいる魔物なんか

ん？）

じつと正面に居る、狼系の魔物を見る。

さきほどから、気配は感じていた。こちらの姿を察していたことは間違いない。

だけど、数秒発つてもいつこうに襲ってくる気配を感じないのはおかしい。

目はこちらを向いているし、こちらを視認していないということは有り得ないのに。

狼型の魔物は、そのままじつとこちらをひと通り観察した後、森の奥へと消えていった。

それはミラ達にも見えていたようで、おかしいなと首をかしげている。

「ふむ、あのような魔物は見たことがないが」

「こっちもだ。でも、もしかしたら……………いや、断定はできないか」

アルヴィンは何かを知っているようだが、勘違いだと首を横に振っている。

知っていることがあれば教えてもらいたいんだけど。

「不確定な情報だからな、余計な雑音になりかねない」

間違った先入観は、逆効果になりかねない。そのあたりを言っているのだろう。

それは、確かにそうかもしれない。

妙な情報に踊らされ、勘違いした対応をするわけにはいかないのである。

「でも、なんだろう。もしかして警告かな。これ以上、こっちには来るなって」

「そうかもな。でも、行くしかないんだろ？」

「当然だね」

旅に障害はつきもの。それを乗り越えてこそ、次の目的地へとたどりつけるのだ。

いつもの旅と変わらない。

僕はミラとアルヴィン、そして少し怯えているエリーゼに頷くと、警戒をしながら森の中へと入っていった。

戦い方は、環境に応じて変えるべきだ。

広い場所と、狭い場所。草原と森の中では、同じ戦術は取れないから。

「はっ！」

呼気と共に、右手と左手を連続で突き出した。

いつものように弧を描くのではない、直線的な打突が魔物の腹部に突き刺さる。

草原であれば、周囲の魔物を巻き込むように、また遠心力によって威力を出すためにと、回し蹴りや巻き込みの裏拳で薙ぎ払うように攻撃していただろう。

だが、この樹海ではその戦術は使えない。

円運動を行えるような、広いスペースなどできないからだ。
回転中に木々に引っかかる可能性も高く、また近くにいる味方をも巻き込みかねない。

そうなれば大惨事である。

落ち着いて、直突きや前蹴りといった直線的な打撃で一体一体、確実に仕留めていくのが最適だと言えよう。

だが、戦場は常に一長一短。

狭い場所、こうした樹界でこそ、有効になる戦術が存在する。

「ジュード、団体さんで来たぞ！」

「ああ、下がって、ミラ！」

例えば、そう。

狭い通路の前で、敵が固まっている時などに、使える技がある。

技の原理は簡単だ。原理は魔神拳と似ている。

まずは体内にあるマナを両手に練りあげる。

そして、一步前へと踏み込むのだ。

目前には敵意をもつ魔物。その鼻つ柱をにらみつつ、脳裏に勇猛な獅子を描き。

そして、極大の呼気と共に
叫ぶのだ。

「獅子戦吼！」

言葉は形に、マナは獅子の塊に。

何者をも吹き飛ばす獅子に模られたマナの砲弾が、魔物の集団を蹴散らす。

直撃を受けた魔物は、ひとたまりもないだろう。そして、狭い場所での利点が生まれるのはここからである。

いつもならば、一体だけに効果がある技だが、敵が密集していて、またこうして狭い場所でこそ得られる付加効果がある。

狭いがゆえ、吹き飛ばされた魔物に他の魔物が巻き込まれる。そして間接的にだがダメージを与えられるのだ。

また、木々にぶつかったりしてダメージを受ける運の悪い魔物も。もっと悪ければ、地盤の割れ目へと落ちて行くやつもいる。

共通しているのは、いつも以上に、そして一度に多くの魔物に痛打を与えることができること。

そして全身に与えられた衝撃は、魔物でさえも意識を奪われる。

それを人は、好機と呼ぶ。

「よし、もらった!」

「ああ、止めだ!」

倒れて動きが鈍くなった魔物が、ミラとアルヴィンの追い打ちによって次々に倒されていく。
普通に対峙していれば一分はかかっているだろう魔物が、ものの十数秒で片付けられていく。

ここで戦っていくうちに、組みあがったパターン戦術の一つだ。

基本戦術は、正面に向けての一对一だが、固まって押し寄せてくれは僕の出番となる。

獅子戦吼で一蹴、のちに追撃する。

後ろから敵がせまっている場合はまた別だ。

正面をミラとアルヴィンに任せ、僕は背後へと回りこみ、はさみうちを防ぐ。

後ろに控えているエリーゼを守るという意味もあるのだが。

こうして、役割を決めて、混乱を防ぎ、余計な時間をできるだけ減らしていくのが最善。

馬鹿正直に、単純な戦術で正面突破を続けていけば、早々にバテてしまいかねない。

環境に適した戦術は、戦いの労力を和らげてくれる。傭兵にとっての、基本的能力というか、必須能力でもある。

特にこうした僻地、足の怪我や体力が尽きることと、死が等号で結ばれる土地では重要になる能力になるのだ。

アルヴィンと僕の提案、そしてミラの意見も加わって出来上がった陣形。

それを組んだまま戦い、樹界を突き進んでいく。

幸いにして、以前に来た時と、魔物の種類は変わっていない。

以前はでかい樹というか、大きい植物のような外見の魔物に手こずっていたのだが。

それでも、今は物の数ではない。

と、噂をすれば陰というか。その魔物が、正面からやってきた。

「また来たか……ジュード、私の余剰マナは溜まっているぞ！」

戦い方が様になってきたというか、熟練の域に達しつつあるミラ。

「耐久力が高くてめんどくさいし、頼むぜお二人さん！」

何だかんだいって要領のいいアルヴィン。今も、銃で牽制してくれている。

「ああ　横薙ぎの大ぶりの一撃の後、懐に！」

そして、僕である。

この3人であれば、むしろこうして単独でこられた方が楽なのだ。

（ミラの成長率は、若干おかしい部分があるけど）

嫉妬じみたものをこぼしつつ、敵の攻撃を見切り、ミラへとリンクで語りかける。

ミラが頷き、敵の大ぶりの一撃の後、一緒に敵のふところへと飛び込んだ。

「行くぞ！」

「ああ！」

拳打と剣戟の牽制が突き刺さる。

そこから連撃だ。僕の左手にマナが、ミラの剣には風の塊が。

生まれ、その2つの力は、リアルオーブの能力によって合わさっていく。

風の精霊とマナが融合され、十字の風刃と形を変えて、突風のように飛翔する！

「「絶風刃！！」」

極大のマナ2つに、この程度の魔物が抵抗できるはずがない。

草の魔物は巨大な風の十字斬に切り裂かれ、やがて自然の中へと散っていった。

「あー、そろそろ休憩しようか」

「そうだな」

まだ樹界の中だが、休める場所をみつけたのでひとまず休憩することにした。

無理は禁物だ。それに、エリーゼの方も疲れが溜まっているだろうし。

「って、わりと平気そうだね、エリーゼ」

「私は……………その、戦ってない、から」

「それでも大したものだと思うぞ。弱音も吐かない」

「そうそう。弱々しい言葉を吐いたら、怖いおねーさんに置いていかれるもんなー？」

「むー、アルヴィン君！？ ミラ君はそんなことしないもんねー」

「まあ、流石にここに置いていくのはな。見殺しにしなければならないだろう。アルヴィンなら置いていくが」

「やれやれ。都会派の俺には似合わない場所だから、そうとも言えないんだけどな」

「いや、お洒落かもしれないけど、都会派はそんな大剣振り回せないからね。でも、僕のようなひ弱な医学生なら……」

「吹雪く雪山の奥地からでも生還しそうな奴が何を言っている。お前なら大丈夫だろう。ふむ、こついつのを信頼というのか？」

「間違ってないけどね……でも納得できないというか」

「ボクもー。あんなでかい魔物を殴り飛ばすジュード君なら、大丈夫だと思っなー」

「医学生か……え、それってギャグのつもりか？ つーかお前みたいなのが百人規模でいてたまるか。中隊規模であの“獅子戦吼”とかいう技を使われたら、たまったもんじゃねーぞ」

「えっと、私も……ジュードは、頼りになるって………思います」

「信頼が痛いなあ!？」

なにこの敵だらけ。

分が悪いので、話を変えることにした。昨日に海停で、宿の前の船着場で起きた事件と、海停の入り口で聞いた珍しい話についてだ。

事件の方は、表面だけ。内容は、女性が何者かに殺害されたということ。

詳しい事情を知っているのは僕とアルヴィンだけで、女性二人に教えるような内容でもないから、表面で流していたが。

（女の諜報員。敵方にばれて、トカゲの尻尾切りにされた、か）

女性であることを活用した諜報部隊。他の部族からは下衆の集団とも噂されている、とある部族の者らしい。

僕の方はア・ジュールの部族にそれほど詳しくないので分からなかったが、アルヴィンは知っていた。

昨日の夜遅くに、男ともめていたキャットという女性。彼女は翌日の朝方に、船着場で死体となって発見された。

それを見て、アルヴィンは彼女が所属しているであろう、諜報部隊の名前を呟いた。

“ガーベツジ隊”と。妙に確信を持っているようだから、恐らくは間違いないのだろう。

ただこれだけの情報で察することができるとは。ほんとに過去に何をしていたんだろう。

で、話をして気が滅入ることは避けたいので、話題をサクツと次に移した。

こんな所で疲労するような話は避けたい。

もう一つの話、海停の入り口にいた、老人から聞いたお伽話のようなもの。

老人は語った 魔装獣という魔物と、魔装備と呼ばれる武器について。

まとめていうと簡単だ。

北方のとある部族にいたトリルという者。彼は、魔物の^{ゲート}靈力野に手を加えることができる、異端の能力を持っていた。

研究の末、完成したのは六体の強力な魔物。その魔物達は肥大化した自らの^{ゲート}靈力野から、闘争本能を具現化したような武器を作り出し、己の身体の一部とした。

その武器を、魔装備。それを宿す非常に強力な魔物を、魔装獣と呼ぶ。

20年前の戦争、かのファイザード会戦中に起きた大津波によって、秘術を知るトリルごと、魔装獣も押し流されてしまつて。トリルは死に、物騒な六体の魔物も、今はどこにいるのか分からないらしいが。

だが、決して近寄ってはならないと言われた。一度対峙すれば、死以外の結末はありえないと。

「それには、完全に同意するよ。あれは相手にしちやいけないものだ」

「へえ、見たことがあるのか？」

「話を聞いた時は言わなかったけど……故郷の鉱山で一度、ね。因縁がある、と言えばあるのかな」

最も、向こうは直接的には何もしてこなかったけど。

「どんな風に、だ？」

「話したくない。聞いても面白くないし、長いし……こんな樹界で聞かせるような話じゃないしね」

つまりは、暗い話だ。己の恥部でもあるから、積極的には話したくない。

「それにしても、^{ゲート}霊力野に手を加えるか……」

その秘術を教えてもらいたかった。もしかすれば、あるかも分らないけど、自分の脳の中の^{ゲート}霊力野を何とかできたかもしれないのに。

「えっと、そういえば……」

「ジュード君って、精霊術を使わないんだねー。それでもめっちゃ強いから、気にならなかったけどー」

「あー、まあ、ね」

苦手なんだと、苦笑しながら答える。

苦笑はできているだろうか。笑えているだろうかと思いつながら。

（なんで、こんな一言で動揺する）

エリーゼにも、ミラにも知られていない。二人からは、何も言われていない。

だけど、胸の奥にもやややが浮かんじまう。心の中にささくれが、苛立ちがぼつと滲みでてくるよう。

こんな感情、二人の前で出したくはないのに。だから誤魔化すように、提案をした。

「そろそろ、いいか。もう出発しようか？」

「いや？ もう少し休んだ方がいいだろうな。それ以上、無理をさせれば後々に悪影響が出てきかねない」

「……………僕が？」

「あまり鈍いと思ってくれな。あの　　社の前の怪物の一件。あの時の疲労の影響が、まだ抜けきっていないだろう。隠しているようだが、戦いぶりを見ていれば何となく分かる」

「同感だな。威力は出てるが、身体のキレが戻っていないぜ？」

「あー……………大丈夫、だって」

言葉につまる。実際は、大丈夫じゃないからだ。

あの直後よりは、大幅に回復はしている。だけど、絶好調とも言えないのは確かだ。

特に足回りが鈍っているし、判断速度に関しても、いつもより下がっているのは否めない。

よくて不調といった所だろう。周囲を警戒しすぎて疲労が溜まっているのもあるが。

（ここは、言うことに従った方が、いいかも）

胸中にそんな考えが浮かぶ。

でも それに従うことは、できない。

「大丈夫だ。だから、行こう」

提案すると、アルヴィンとミラはため息をつきながらも、うなずいてくれた。

エリーゼとティポは、少し不安な表情になっていたが。

そうして、道中をまた進んでいく。

先ほどよりも早く、そして少し乱暴な拳打で敵を蹴散らしていく。

これならば問題ないだろうな。

そう思った時、僕は何かを踏んでしまった。直後、霧のようなものが当たりに広がっていく。

同時に、目と鼻に痛烈な刺激が走った。

「っ!？」

たまらず、咳き込んでしまう。

（これは　　ケムリダケか!）

ショックを与えれば、催涙性の胞子を撒き散らすキノコだ。そういえば、この樹界には多く生えていたのを思い出す。

「どこ………こほっ、こほっ、どこですか!？」

「勘弁してくれ………この煙はなんだ？」

「おそ、らく、ケムリダケだ………ということは、催涙性の胞子が？」

エリーゼもミラもアルヴィンも、そして僕も。
全員が目をかばいながら歩き、何とか胞子の霧を突破する。

だけど、眼や鼻に入っただ胞子はすぐに消えてくれない。

一度入ってしまうと、しばらくは涙が止まらないうと、図鑑で見たことがある。

その効果は間違いがなく、涙は数分してようやく止まってくれた。

魔物の奇襲がなかったのが不幸中の幸いだっただろう。

もし視界が奪われている間に、魔物に襲い掛かられていれば。

やられはしないだろうが、エリーゼが怪我をしていたかもしれない。かなり、ぞっとする想像である。

「しかし、ジュード。もっと足元に注意して歩くべきだぞ」

「……………ごめん」

謝る。ほんとう、ミラの言うとおりだ。何があるのか分からないし、根が地上に露出している場所なのに、足元の注意がおろそかになっていた。

結果が、ケムリダケを踏んでしまった。

「謝らなくてもいい。だが、二度目は勘弁してくれよ?」

「ああ。戦闘中にあの煙は……………魔物にも効果があるだろうが、こっちの視界が奪われるのは、かなりまずいしな」

「分かった。でも、僕は大丈夫だから」

こんな所で休んでなどいられない。

休憩できる場所まで戻るのも一苦労だし、なにより早く汚名を返上しなければならぬ。

だから僕は大丈夫だと主張して、突き進むことを提案した。

今度は足元に注意して、キノコを踏まないように、慎重に。

やがて、樹界の出口に差し掛かった。もうすぐ、この暗い樹界を抜けられるのだ。

だけど、最後の障害物が、出口の前に立ちふさがっていた。

出口を抜けようとしたその瞬間、突然周囲から気配が現れた。樹界の入り口でみかけたおかしな魔物、そしてその同種が数匹、こちらを取り囲むようにして出てきたのだ。

「こいつら……っ！」

周囲を警戒する間もわずか。

直後に現れたのは、巨大な敵そのものだった。

ハ・ミルの出口で見かけた、手練の巨漢。

ジャオというエリーゼの保護者が現れたのだ。まるで、僕達を待ち構えていたかのように。

「あんたは……………！」

「おっきいおじさん……………！」

アルヴィンとエリーゼが驚いているが、それもそうだろう。

まさかラ・シュガル側の大陸の、しかもこんな僻地で遭遇するとは夢にも思わない。

情報は漏れていないはず。ならば、見つかった原因は何なのか。

それは、まもなく判明した。

「おうおう、よう知らせてくれたわ」

ジャオは横に居る狼型の魔物の頭を撫でながら、そんなことを言う。そこまで来て、ミラが口を開いた。

「イバルの他に、魔物と対話できるものが居ようとはな」

驚いた風に言う。そうだ、確かイバルも魔物を使役することができたはず。

あの夜、酒を飲む前にあいつが自慢していたかのように話していた。記憶の片隅の残滓程度だが、かすかにそんな単語が残っている。

「魔物使役……………それで、そんな希少能力を持つアンタが、どんな御用で？」

「知れた事。さあ娘っ子、村へと帰ろう」

近づきながら、ジャオはそんな事を言った。

「少し目を離している間に、まさか村を出ているとはのう。心配したぞ」

ジャオは優しく、手を差し出してくる。そこに悪意など、欠片も感じられなかった。

純粹にエリーゼを案じているのだろう。

だけど、エリーゼはそれを拒絶した。

差し出された手を避けるように、僕の背中の後ろへと回りこみ。

そして、ティポが叫んだ。

「イヤー！ ジュード君、かばってー！」

目をバツテンにする謎生物。それを見たジャオが、うめくような声を出す。

そして困ったように、頭をかいた。

「……………どういうことだ？」

「何がじゃ」

「アンタ、全部わかってるだろ。エリーゼがどういった目にあっているのかも」

ジャオは、エリーゼの身を案じている。そして、その意志を尊重し

ている。

無理に連れ帰ることなく、同意を求めているのが証拠だ。

「……………すまんとは、思っておる」

謝罪の言葉だ。この一言には、万感が込められている。主成分は、己の不甲斐なさ。

ああ、このジャオという人は、巨漢だからといって心の中までは鈍くできていない。

むしろ、鋭いのだろう。だからエリーゼがあのかでどんな目にあっていたのかも、理解しているはずだ。

ミラも、似たようなことを思ったのか、エリーゼとどんな関係にあるのかをたずねた。

「……………その子が、以前いた場所を……………生まれ育った場所を知っておる」

「その、場所は？」

率直にたずねる。

だが、言葉は返ってこない。返ってきたのは沈黙。そして、ジャオの視線がわずかに逸らされたこと。

横目で見えるエリーゼの視線は。おずおずと僕の背中の横から顔を出していたエリーゼの視線は、地面へと向けられていた。

言葉になくとも、理解ができてしまった。

その場所は、エリーゼの故郷は、もうこの世には存在しないのだということを。

「アンタは……………だから、ハ・ミルを故郷に？ エリーゼの帰る場所にしようってのか。あんな、女の子一人を追い出すような場所を……………！」

「連れていったのはお前たちであろう！ それに、こんな所にまで連れ回すとは！」

「っ、危険な目にあわせているのはわかってる！ だけど、隠れ家みたいな倉庫で一人泣かせているよりは……………！」

「お前たちには関係ないわい！ さあ、その子を返してもらおう！」

手を、エリーゼに伸ばしてくる。

僕はそれを、身体でかばった。

「……………仕方あるまい！」

ジャオが、背負っていた大木槌を右手にもって構える。

尋常ではない重量のはずだ。なのにそれを、片手で軽々と

しかもアルヴィンの大剣よりも軽いとばかりに。

「来るぞ！」

アルヴィンの声が、戦闘開始の合図になった。

先頭にいた僕と、こちらに近づいてきていたジャオ。

自然、最初は僕とジャオの一对一になる。

（まずは様子見を……………っ！？）

思った時には、最初の一撃が繰り出されていた。

大木槌で、地面を叩いたのだ。柔らかい地面がその強烈な衝撃に耐えられるはずもなく、砕け散る。

そしてその破片が、僕に襲いかかってきた。

「くっ！」

石はないし、巨大な破片でもない。

だからダメージにはならないが、

（牽制に　　）

次の瞬間には、すでに間合いを詰められていた。

巨漢に見合わない早さに、完全に先手を取られてしまった。

振り上げられた大木槌が、僕の脳天に振り下ろされる。

（防御、は無理か！）

受けたとしても、かなりのダメージを負ってしまう。

そう判断した僕は、咄嗟にバックステップで回避をする。

直後、大木槌が再び地面を叩いた。

（好機！）

振り下ろされたからには、また振り上げる必要がある。

そしてそれは、絶好のチャンスになりえるだろう。僕はバックステップした後、即座に踏み込んで右の直突きを繰り出した。

つもりだったが、気づけば僕は宙を舞っていた。

右頬が、痛んでいる。いったい何がおきたのか。

かすかにだが見えていた相手の一撃に、僕は戦慄を隠せない。

（あの巨漢で、技も十分ってか！）

ジャオは木槌を振り下ろした直後、手を離すとその場で回転。

勢いのまま、僕に裏拳をぶちかましたのだ。で、死角から襲ってくる一撃に反応できず、こうして殴り飛ばされている。

「ジュード！」

「っ、大丈夫だ！ ミラとアルヴィンは周囲の魔物たちを！」

エリーゼには手を出さないだろう。

だからと、僕は受け身を取り、立ち上がりながらも、二人に指示を。

使役されている狼の魔物を任せる。

「ふん、一人でワシに立ち向かうか！」

「それが、彼女を連れだした僕の責任だろう！」

保護者というなら、守って大丈夫だという力を示さなければならな

い。

そして僕は、正面からジャオに向かっていった。

「獅子戦吼！」

「戦迅狼破！」
せんじんろうは

くしくも、同型。獅子の形をしたマナの奔流が僕とジャオの間でぶつかり、そして砕け散った。

追撃は、スピードに勝る僕の方が有利！

「掌底破！」

「ぬうつ！」

体重がたつぷりのった右掌底の一撃が、ジャオの腹部に突き刺さる。そこからは追撃だ。返しとしての左の突き、そこから側頭部へ向けての右回し蹴り、

「飛燕連脚！」

勢いを殺さず、飛び上がりながら連続の蹴撃を繰り出した。

だけど打突点の先から返ってきたのは、硬い感触だけ。

初撃を除く全ては、その大きな腕で受け止められていたのだ。

（は、んしゃ速度も ！？）

達人級かと、驚いている暇はない。

まず見えたのは、軽い振り下ろしの一撃。

マナをこめた腕で、それを受ける。だが、止めはしたものの腕はしびれてしまう。

そこに、追撃が入った。振り下ろした大木槌を片手で、ひるがえしたかと思つた瞬間、それは弧を描いて僕の側頭部に迫ってきた。

「ぎっ！？」

とつさに片手で防御したが、今度は止められなかった。勢いに圧され、僕の身体がわずかに飛ばされる。

同時に、ジャオのマナが膨らんだ。

それは大木槌の先に。集まつたかと思うと、ジャオは地面へと勢い良く叩きつけた。

「まおうちがくじん
魔王地顎陣！」

それは、技の名前なのだろう。効果は、寸分違わず。

叩きつけられた地面は裂け、まるで魔王の顎のように大きなものに。

同時に吹き飛んできた地面の破片が、僕の身体を打ち据える。

右腕と腹部に、やや重度の打撲。内出血が起きる自分の身体を客観視で診察する。

（マナの防御が足りてない！）

万全であれば、こうまでダメージは受けなかった。

とはいっても、もしもを語るのはおろかだろう。

「どうした、小僧！ そんなものか！」

「っ、誰が！」

言葉を返しながら、正面へと突っ込んだ瞬間、右に跳んだ。

今までいた空間を、ジャオの一撃が通りすぎる。そして僕は、側面から襲いかかる。

左の突きは脇腹に。返す刀で右足刀、そのまま左腕にこめたマナを振り上げる！

「魔神拳！」

「ぬおっ！」

速度を重視した連撃から、至近距離での魔神拳。

全てきまり、ジャオの体勢が崩れるのを察すると、さらなるに追撃に入った。

左右の拳と蹴撃の高速コンビネーションである、連牙弾。

そこから巻き込みながらの裏拳と打ち上げの拳撃を組み合わせた、臥竜空破。

最後に得意である飛天翔駆を連続で叩きこんだ。

だけど、全部は直撃しなかったようだ。硬い感触がわずかに残る。

しかし大半は当たっていたはず。事実、ジャオの顔色はわずかに変わっていた。

「マクスウェルに付き従う、ただの小僧だと思っていたがな」

「っ、アンタ知って!？」

「今は関係ない! それより、まだまだぞ小僧!」

「はっ、こつちこそ!」

余計なことなど、考えている暇もない。少しでも気を緩めれば、叩き伏せられて地面に寝っ転がることになる。

そうして緊張感を保ちつつも、互いの技量は離れておらず。

そのせいだろう、そこからは一進一退の攻防となった。

攻撃と防御が激しく入れ替わり、その度にどちらともなく傷が増える。

時間にすれば、一分も経過していないだろう。だけど、僕にすれば一時間に思えるほど、長く感じていた。

巨漢に、大木槌。何をするにもスケールの大きい一撃が、間断なく襲ってくるのだ。

恐怖もあつてか、攻と防、それらを一合するにしても、雑魚より何倍も長く感じられている。

それでも僕は、小回りを意識しつつも攻撃を捌き、回避しながらも反撃に出ていた。

守りに回っては、押し切られるだけだ。必死に追いつき、攻めの意識を保ち続ける。

そうしてしばらくは、戦えてはいた。

だが、時間が経つにつれ、形勢は完全にあちらへと傾いていく。

最初の方にもらった一撃、特に打撲の影響が大きいのだ。激しい動作をすると痛みが増加してしまい、どうしても動きが阻害されてしまう。

ミラとアルヴィンも、統制のとれた狼の攻撃に翻弄されていて、仕留め切れないでいる。

「ジュード！」

「だ、いじょうぶ、だから！」

「冷静になれ！　ここで、倒れる気か！」

「大丈夫だ！　こいつを倒して通れば、問題ない！」

そうだ。エリーゼを一人にしないと誓った。

誓ったのだ。だから、ここでこいつを倒さなければならない。

「馬鹿者が……………アルヴィン、あれを狙え！」

「なにを……………つとお、分かったぜ！」

「エリーゼはこっちに！」

「は、はい、でもその前に！」

「ボクもー！」

背後から何やら声が聞こえる。

「ジュードの、怪我を……………行きます！」

マナが膨らむ。エリーゼのマナが、不自然なほどに大きく。

「みんなに、安らぎを……………」

聞こえるのは、詠唱の声。やがて声は、その術の名前を描いた。

「ピクシーサークル！」

足元が光る。見えたのは、光に輝く方陣だ。

そして僕はそれを知っていた。

夢にまで見た、医療術の上位版。

一度に多くの人の怪我を癒す、方陣形式の治癒精霊術なのだから。

（
）

何なんだのこれは。

えっと、脳みその奥を何かに殴られたような音が？

がつんと音が。

鐘のような音も。

いったい、なんで？

「ジュード、ぼけつとしてんな！」

同時に、アルヴィンの声と。そして僕の脳裏に響き渡る音と、同質のような激音が。

アルヴィンが放つ銃弾、その銃撃の音が空間に反響した。

同時に、煙が当たりに立ち上る。

「ぬ、ケムリダケか！」

「
ジュード、こっちだ！」

僕の腕が掴まれる。布で口をおさえているかのようにぐもった声。でもこの声は、アルヴィンだろう。

鼻と目に、催涙性のものが染み渡っているので誰かはよく分からないが。

「おい！」

「あ、う、うん」

近くでの大声。そこで僕はようやく正気を取り戻していた。

「分か、った……………逃げる」

でも、声がつまく出てくれない。

なにより、あの医療術の輝きに、思考のほとんどが占拠されている。

それでも走る。出口へと走らなければいけない。

だけど、ケムリを抜けたと同時に、背後から声がかかった。

「くっ、エリーゼ……………」

ジャオだ。でも、襲ってはこない。

視界の晴れない今、下手に攻撃をすれば、エリーゼに当たるからだろう。

ジャオはそのまま、声だけをエリーゼに向ける。

「……………なぜだ、娘っ子。その者たちといても、安息はないぞ」

胞子の霧の中から聞こえてくる声に、淀みはない。催涙性のガスはジャオの目と鼻に直撃しているだろうに。

考えられないが、ジャオは尋常ではない精神をもって催涙性ガスの刺激に耐えているのか。

それでも、宣告するように、それでいて優しい口調だった。

だけどエリーゼは、地面に視線を落としている。

「あんそくって、いったいなんなんですか……………？ それに」

声は、掠れていた。

まるで泣いているかのように。

だけどエリーゼは、顔を上げた。

「ジュードは……友達って言うてくれたもん！ ミラは、頭を撫でてくれたもん！」

叫び、ティポも叫んだ。

「もう、一人で寒い部屋に残されるのは嫌！ 寂しいのは、イヤだよ！」

少女とぬいぐるみ。孤独を知った二人の叫び声が樹界に響いた。

悲しみの感情に染まっているせいか、声は奥の奥にまで届いてくる。

「エリーゼ……ワシも、連れて行くのは本意ではない。だが……」

言葉の間に、自嘲の笑いが挟まった。ジャオは、首を横に振る。

「ワシが……………許してくれなどと、口が裂けてもいえないな……………
っ、ごほっ」

ついにジャオが、目を押さえてうずくまる。

「行け、小僧！　っ、今回だけは見逃してやる！」

「……………分かった」

「諦めたわけではない。それまでは守れるだろう。だがもしエリ―
ゼを死なせれば、ワシがお前を殺しにいくぞ！」

「ああ、分かってるよー！」

そのまま僕は、エリーゼと手をつなぎながら、脇目もふらずに走った。

暗い暗い樹界の終わりへ。光の射す方へ。

ミラが、居る方向へ。

後ろめたいものから、目を逸らすように。

21話 「樹界の中で」(後書き)

何とか間に合った。

今年最後の更新です。良いお年を。

来年からも頑張ります。

22話 「人間だもの、人間だから」

樹界を抜け、目的の街 カラハ・シャルルについたのは夜だった。

表通りの店はその大半が閉店しており、見えるのは家々の中からこぼれる薄明かりだけ。

宿を取る作業は事務的だった。ここに来るまでの道中と同じ、誰も声を発しようとしなない。

（僕のせい、なんだけど）

自覚はしている。自分が原因なのだと。

いつも通りの調子を見せず、不景気な空気をばらまいているせいだ。

ミラが幾度か話しかけてくるが、うまく言葉を返せない。

アルヴィンは黙り込んだまま。観察するように、こちらに視線を向けてくるが、それもどうでもいい事だ。

問題はエリーゼとティポ。二人は、じつと黙り込んでいる。

そして地面に視線を縫いつけられているかのように、俯いていた。

その理由も分かっている。

樹界を抜けた後、僕の怪我が治りきっていないと、エリーゼは治癒術をかけてくれた。

その時の顔は 戸惑いか、はたまた羨望か。

鏡がなかったあの時にどうした表情を見せてしまったかは不明

だが、それでもエリーゼの顔を見て推測はできた。

（怯えていた。怖がっている）

そして、それきりだ。何か、僕の顔にあってはいけないものを感じ取ったのだろう。

あれからは、物理的にも距離を取られていた。

僕は嫌われたのだ。そして、エリーゼは落ち込んでいるのだろう。

おそらくは、拒絶されることを怖がっているのか。

彼女としても自覚があるのかもしれない。

尋常ではない、精霊術の腕。あの年であれだけの精霊術を扱える子供なんて、見たことも聞いたこともない。

天才にしても外れすぎている。

そこに、僕はエリーゼが村で嫌われ、恐れられている理由が分かった。

なぜ分かるかっていうと、それはあの頃の僕と同じだからだ。

明らかなる異端。通常ではありえない存在は、まるで異物を取り込んだ水の如く。

砂糖であれば溶けるだろう。だけど全くの異なる個体は、周囲に溶け込めず水の上に浮く。

やがては水かさが増えると、その異端は排除される。また水の中に飛び込んでも同じ。

どうあっても溶け込めない。そういった扱いを、エリーゼは受けていたはずだ。

なぜ分かるかっていうと、それはあの頃の僕と、そして今の僕と同じであるから。

そんな、考え込んでいる時だった。

「ジュード……」

エリーゼの声だった。後ろから、まるで糸のようにか細い声が聞こえる。

僕はすぐさま振り返り、彼女の方に向き直った。

「あの……わたし……」

エリーゼは俯いたままだ。ティポさえも黙り込んでいた。

やがて、その顔を上げた。

「もうしないから……嫌われるようなこと、しないから」

その眼には涙が溜まっていて。やがてそれは雫となって、頬を伝う。

それを見た僕は、死にたくなつた。

「眠れねえ……………」

その深夜、僕は外に出ていた。周囲には兵士が徘徊しているが、その数は少ない。見つかったとして、殴り飛ばせばいい。立ち向かうのなら、薙いで払ってくれる。

今はどうあっても、あの部屋には戻れないのだ。

そのまま僕は街道に出た。街の入口には、大樹があった。まるでカラハ・シャルルを守るように立っている大きな樹。

僕はそれに頭をぶつけた。何度も、何度も。マナによる強化など行うものか。

ただ痛みを感じるために。幾度と無く、頭突きを繰り返した。

やがて頭の皮膚がやぶれた。そこから溢れる血が、額を伝っていく。

「情けねえ……………」

守るといったはず。誓ったはずだ。なのに一日も経過しないまま、僕は彼女に傷を負わせてしまった。

それがたったひとつ、彼女が精霊術を使っただけで。治癒術でも癒せないだろう、形の無い傷を残してしまった。

彼女は助けようとしてくれたのだ。それなのに僕が返したものといえば、彼女の心を傷つける刃となりうる、そんな態度だけ。

どうしようもなかったという気持ちはある。僕には背景があつて。過去があつて。

だからあれは反射的なことで、自分のアレはどうしようもないことなんだって。

だけど、そんなことは言い訳にしかないのだ。エリーゼにとっての事実のひとつだけだ。

それは
僕が、あの村人達と同じような態度を取ってしまったこと。

（でも、事情を話して分かってもらおうなんて……そんな浅ましいことなんか）

出来はしない。そんな馬鹿げたことを。

歩いている道中、冷静になった後に気付いたことではある。それでも、何も言えない自分が情けない。

あまりの不甲斐なさに、涙が溢れてくる。自分が情けなくて涙が出てくる。

こんな姿、誰にも見せたくない。

なのに、こんな時だからこそ近づいてくる奴がいた。

足音から分かる。隠そうともしていないのもあるが。

「アルヴィン……」

「よう、少年。こんなところで夜遊びか？」

振り返らず、名前だけを言う。明るい声がまた癪に障る。

努めてしているのか、何も考えていないのか。

どちらにせよ、エリーゼのことに關して話があるのだろう。

このタイミングで追ってきたといは、そういうことだ。事情を知っているこいつ以外、このタイミングで僕を追ってくる奴なんていないし。

背を向けたまま努めて平静に、涙顔をみられないようにして言葉を続ける。

「そっちこそ、こんな夜中に。一体何のよう？」

「いやいや、何のようって聞かれてもよ。気づいたらベッドはもぬけの殻だったし、ほんとマジ焦ったぜ……って、これでも俺は心配してんだぜ？」

「……その遠まわしな性格は、さ。一回死ななきゃ変わらねーのか？」

本題に入れ。言葉に含めて言うが、アルヴィンはいつもの調子を崩さない。

「いや、さ。今の3人の中で、少年の裏事情を知っているのは俺だけだろう？」

「だから、なんだ」

聞き返す。返ってきた言葉は、予想外の言葉だった。

「お前は悪くないぜ」

責める言葉ではない、むしろ赦しているかのように、甘く。

「少年のせいじゃねーんだぜ？ 仕方ないだろう。少年にとっては正に青天の霹靂だし……自分には無い才能を持っている相手を妬むのは、自然なことだしよ。」

子供だし、特別珍しいものじゃねーだろ？」

子供だから。仕方がない。アルヴィンの言葉は、すっと胸の奥に入っていた。

「だから、よ？」

「自分を責めなくてもいい、って言うのか？」

「ああ、そういう事になるか。それに何度も言うが、お前さんは子供だ。元々が無茶なことだったんだ。それに、見ただろう？ あの年であれだけの精霊術を扱えるなんて、よ。」

どう考えても尋常なことじゃねえ。エリーゼがラ・シュガル軍に狙われてたって理由は、あれのせいじゃないのか？」

「……………多分、な」

それは、考えていたことだ。間違っではないだろう。

そしてだから、とアルヴィンは言葉を続ける。

「そうになると、厄介だぜ。追手のレベルも、想定していた強さの……そうだな、一段か二段は上と見た方がいい。そんな奴らがこの先襲ってくるんだ。少年もミラも、やらなければいけないことがあるんだろう？」

重い、しかも持っていて痛む荷物なら、いつその街の大人だかに預けてしまってもいいと思うぜ」

反論を許さないほど、連続での言葉。

確かに、理屈にはかなっているだろう。あくまで大人の視点で考えるなら。アルヴィンの立場であるのなら。

そして感情、何よりも“情”を抜きにするという前提であれば、正論に聞こえる。

大きな目的を前に、些事は極力省くべきは正道。余計な文章が多い論文が評価されないように。

正しいことではある。アルヴィンの理屈なのだろう。それは一つの理で、間違っではない何かがあった。

(……………僕のせいじゃない。予想外だった。自分が大事だろう。ミラの目的も。だから　仕方ないってか)

考える。理由を並べた。自分に要因はないと、そう考える言い訳の材料。

それは、一つの選択肢に導くための理屈だ。

（賢者の槍の破壊を優先する。もともとが不確定な要因だったんだ
クルスニク
って）

理屈である。それは、正しい理屈である。

その考えを助長するように、アルヴィンの声が響く。

「恐らくは今、お前が考えている通りだと思うぜ？ 傭兵をしたのなら分かるだろうさ。荷物の選別は慎重にすることだ。余計なものを抱え込む余裕がないのなら、捨てて行けばいい」

重荷は自分の動きを鈍くして。

それが死に繋がる可能性がある。だから荷物の選別は慎重に、またムダのないものを。

恐らくは旅人が旅をする際、また旅を始めた後、まず一番はじめに学ぶことだ。

それを元に、アルヴィンは言っている。その理屈に従い、エリーゼはこの街に残した方がいいと。

信頼できる者を見つけるか、金を払って預ける。そうしてそのまま、本来の目的を達成すべく、先へ薦め。

教授の仇を討て。そして人と精霊に害為すものを壊しに行け。

アルヴィンが示しているのは、そうだったことだろう。

四大のこともある。心の中に、そうした想いがあることも確かだ。

四大を助け、ミラを助ければ
ようになるかもしれない。

もしかして、精霊術を使える

それは、一つの理でもある。道理である。人間としての生命を優先するのなら。

三大欲求、そしてもう一つある人間としての欲。それは自分のなすべきことを成したいという欲だ。

賞賛されたいという欲。自分としての“何か”が確立され、それを認められたいという欲。

それがゼロである人間は少ない。生きるための欲求と、そう言い換えてもいい。

生きるために必要なことなのだ。言い換えれば、生存以上のものを
目指すための材料。

というのなら、生きる上で目的を果たすというのなら、それは正しい理屈である。

目の前にある大樹のように、真っ直ぐに伸びるために生きる。自分の欲を最優先し、自らの理屈を最優先にして、上に。

小さい樹のままで終えたくないのなら。余計なものを抱え込んで、潰れたくないのなら。

こうして、大きな樹になって、誰からも認められる。

そして自らも傷つくことなく、生きたいというのなら、不確定であり、害になりかねない余分なものは捨てていくべきだ。

そこまで考えて、頷いて

僕は頭を振りかぶった。

「そおい!」

勢い良く、大樹に頭突きをかました。

痛い。額から血があふれでている。

だが、それでいい

それがいいのだ。

「少年よ、気でも狂ったか？」

「元からさ。僕は宿に戻るよ」

「…………賢くないな。利口とは言えないよ、少年の選択は」

「だから僕は、こうして今ここにいる」

諦めれば、きっと僕はあの故郷の街にいたまま。

見て見ぬ振りをすれば、きっと僕はイル・ファンのあの学校にいたまま。

だけど、僕が今、こうしてここに来たのはなぜなのか。

それは、師匠の言葉もある。

だけど、あの時の“あいつ”を否定したかったからだ。あの言葉を認めたくなかったからだ。

救われた師匠に輝きを見た。夢を諦めるなと言われた。

道半ばで諦めるようなことは、しなくなかった。言葉だけで、声に出せない夢をそれでも叶えたかった。

僕が僕であるために。証明をするために。

そして、あのままでは居たくなかったし、何より寂しかったから。

思い出しても、震えがくる。世界に自分が一人だと、そしてお前は異物なのだと　　在ってはいけないと思いつまされていた時。

寒くもないのに、寂しさに震えた。一人は、本当に辛いのだ。

そして救いの手を見つけて　　その人に嫌われるのは、本当に辛いのだ。

「できないよ……………今のエリーゼは、あの頃の僕だ」

拒絶されても、それでもと手を伸ばす幼い子供。

ずっと一人で。

だから、寂しくて仕方がなくて、それでもと手を伸ばす子供。

これはきつと、独善かもしれない。

「だから、行くよ。もう許されないかもしれない、けどさ」

重なるエリーゼを。同じ境遇にある少女を、助けたいんだ。

泣かせたくないと思った。

僕は言葉を残して、アルヴィンの顔を見ないままエリーゼがいる宿へと走った。

その途中、宿に辿り着く前にエリーゼを見つけたのは、予想外だった。

エリーゼは暗い街の中、誰かを探すように歩き回っている。

あたりは暗い。エリーゼだと分かったのも、周囲にふわふわと浮いているティポが居たから。

「エリーゼ！」

「……………ジュー、ド？」

「どうしたの、こんな時間に……………危ないって」

見渡す限り、ミラの姿はない。恐らくは、一人で抜け出してきたのだろう。

僕はエリーゼに駆け寄るが、なぜか驚かれてしまう。

視線は僕の額に釘つけた、ってああ。

（……………忘れてた）

必死だったせいで、さっきの額から出る血のことを忘れていた。

それを見たエリーゼが、驚き、また涙目になる。

「…………… “あなたに安らぎを”、ピクシーサークル！」

詠唱の音が終わると同時、地面が光り、治癒の方陣に照らされた。

あの時とおなじ、緩やかに額の傷が癒されていく。

胸の奥に刃が突き刺さる。

それは嫉妬ではなく、自分に対する不甲斐なさ。なぜなら、エリーゼの行為に躊躇いがなかったからだ。

治したいと、だから治してくれた。こんな僕でさえも、心配をしてくれて。

「…………… その…………… だいじょうぶ、ですか？」

「ジュード君、なんで額から流血してたの？　もしかして敵にでも襲われた？」

エリーゼがたどたどしく。ティポが慌ただしく。二人は僕のことを心配してくれていた。

僕は何でも無いと言い返し、まずはやるべき事をやると決めて。

二人を正面に、直立不動の姿勢を取った。

「……………」めんなさい！」

そして、頭を90度前に倒した。

「ジュード……………」えっと、何で謝るの？」

「僕が変な態度をとったから。嫌だったよね、エリーゼ。怖かったよね」

「う……………」

詳しい事情など、言っても耳に入らないだろう。だから率直に告げた。否定の言葉がないということは、そういうことだ。

嫌で、怖がらせていた。僕が村人と同じようになるんじゃないかって。

だからこそ、頷いた。だけど、辿々しい声は変わらないでいる。

恐らくは、今まで見たことのない行動を取られて、その事実戸惑っているのだろう。

何かに恐怖しているかのようにも見えるが。そんな所に、ティポが言葉を挟みこんでくる。

「ジュード君こそ、怖くないの？ 僕達といるの、嫌じゃないの？」

それは率直な言葉だった。言葉を返して、本当かと問い返してくる。だからこそ、本心で語られていることが分かった。

だからこそ僕は、嘘で虚飾しない、思っているままの言葉で返した。

「びつくりした、のは確かだけど。それでもエリーゼは僕の怪我を治してくれたんだ。嫌な態度を取った後の、今でさえ。だから、怖くないよ」

あの時も今も、目の前のエリーゼから感じられるのは、焦燥だけ。僕が怪我をしたということ、それに対して焦って 心配だから、治癒術を使ってくれたのだ。

あの村で嫌われるようになった原因である、年に似合わない精霊術を。

それに対して僕は、何も返せなかった。感謝の言葉を言うべき時に、反対の感情をぶつけてしまったのだ。

まるであの時の”あいつ”のように。知っている僕が、それを“した”のだ。

だからこそ、許してもらえるかどうかは分からないが、僕の口と心から謝らなければならない。

「ごめんなさい。そして、ありがとう………傷を治してくれて」

ジャオにつけられた傷と、今の額の傷。

指で抑えて、その後に握っていた拳を開いて掌で。

「怖くない。むしろ、綺麗だっと思った　　もう痛くない。ほんとに、エリーゼはすごいな」

エリーゼの柔らかい頭に手をそえ、頭を撫でた。

「本当にありがとう……………エリーゼ？」

許してもらえるまで、感謝の言葉を告げるようとする。許してもらえなくても仕方ないと。

「えっと……………エリーゼ？」

なぜかエリーゼは顔を地面に落としている。そのまましゃがみ込んだ。

顔を見せないようにして、なにやら肩が震えている。

「って、泣いてる?!」

エリーゼは声を殺して泣いていた。

引き付けを起こしているように、時々肩が震えている。

「な、なんで泣くの!?!」

「もう、ジュード君のせいだよー! いきなり驚くこというからー!」

「ちょ、僕のせい!?! こ、こついう時はどうすればいいのかな、ティポ!?!」

「えーつと……こつ、がばつと、エリーを抱きしめてくれればいいかなー!」

「こ、こつか!?!」

必死に抱きしめる。

が、なぜか泣いているその勢いが、強くなった。

「ど、どうすれば……!?!」

傍目には深夜に少女を泣かせている不審者。

手配されてなくても捕まってしまう。

「と、取り敢えず宿に

」

そのまま、僕はエリーゼを抱えて宿へと走った。幸いにして、誰にも見つからないまま、戻ることができた。

エリーゼを抱えた瞬間、ティポが驚いたように目を丸くして黙り込んだのは、さらに驚いたけど。

その光景を眺めている者の姿が、2つ。

「そう来るのかよ、ジュード・マティスご同胞……………全く厄介な」

甘い蜜のような言葉を吐いた男は、予想外の結果に頭を抱えていた。

これは難関だ、と悩み
それでも、その顔にはわずかばかり
の喜色が混じっていた。

「……………揺らいだり、離れたり。それでもまた近づいたり……………
…人間というのは分からないな」

宿を飛び出た少女を見守っていた女は、不可思議だという顔をして
いた。

あつちにいたり、こつちにいたり。無駄が多くて、一貫性のな
い行動を理解できないと。

それでも、いつもの調子が戻った少年と、泣いて嬉しがっている少
女の姿を見ながら、自分でも知らず笑みを浮かべていた。

間話の4 「暗躍者たち」

「…………ふん、面白い。厄介な駒が揃いやがったか」

暗闇の中で、男の声が響く。対面に座る、報告書を持ってきた女性に笑いかける。

「前衛に後衛に回復薬。連携に関しても見直し始めたようだ。正面から包めば潰せるだろうが、被害の面を考えると……………」

「甚大なものになるでしょう。“楔”があるとはいえ、あの拳士の少年の力量は侮りがたいです。マクスウェルも同じく、奥の手を隠しているとも限りません」

「ああ。だが、今は組織の黒匣^{ジン}を表立って使うのはまずいか……………さて、お前ならどうする」

「内から潰します」

考えるまでもないと、問われた女は即答する。

「外は固いかもしれませんが、中にはまだ付け入る隙が。特にエリ―ゼ・ルタスの方ですね。今回の一件で、それなりの繋がりができたようですが、まだそれなりです。」

信頼関係に傷ができたのも確か。じきに癒えるでしょうが、今な

らばまだ。言葉しだいでもできるかと」

「時間をかけていない言葉だけの信頼は、か？ お前の持論だったな」

「はい。少年と少女。単純な言葉のやり取りで、どうにか和解はしたでしょうが、それには根拠がない。」

少女の方もまた。疑心を育てる“種”はありますから、あとは燃料を注ぎ込んでやればいい」

自然と綻びが生じますと、女は決定事項のように告げた。

「増幅器ブラスターの件もありますから、一石二鳥。協力の意志がなければ手間取りますし、むしろ都合がいいでしょう。ただ、閣下が表に出られる時期ではありませんので……………」

「そうだな。ナハティガルから離れられん……………が、お前は動けるか」

「御意にございます。私の方はまだ御曹司には知られておりません。変装でもすればいいでしょう。実験は……………要塞の中で行いましょうか。」

要塞内の兵士の内、牢を警備する人員を組織のもので固めておきます」

「いいだろう、任せる。ここからは切り札を持っていないと本格的にまずいことになるからな。どうしても、あの氷の大精霊は必要になる」

「必要、ですか……それは、女だからですか？」

「冗談も大概にしろ、撃ち殺すぞハイドラ。よりもよつてこのオレが、だと？」

本物の殺気に、ハイドラと呼ばれた女性は、その顔を青くする。

「下らねえ事を言うな、お前じゃなかったら問答無用で撃ち殺してるところだ。オレに“そんな”趣味はねえよ。ましてや、ただの燃料^{れい}になんぞ、誰が欲情するか」

男は、追い払うように手を振る。

「さつさに行け。例の邪魔な動きをしようとしているお坊ちゃんの始末も任せる。平和主義者の命を矢の先で否定してやれ。まあ、あの食わせ物の爺いの隙をつくのは至難の業だろうが……」

「やれます。この20年の苦労を考えれば、何てことはありません」

「当然だろう　さあ、始めるぞ。最高適合者であるあのガキのデータを。成果をぶんどれば、いよいよ仕上げに入れる」

男が立ち上がり、腰元の銃を手取る。

造形も見事な、一目見て特殊であると分かる銃。

20年前に兄から奪った、当主の証を掲げて。

「何もかもが思い通り。だが、俺は油断しねえ
　　ここまで来
　　たんだ、やってやるさ」

その声は、まるで凶兆を告げる鳥のような。

それでいて、芯のようなものがあつた。

かくして、運命は流れていく。そうして飲み込んでいくのだ。都合
などしつたことかと、大地を貫く大河のように、そこに存在するあ
りとあらゆるものを全てを。

誰も彼もが傍観者ではいられなくなる。

「邪魔なもののは全て、撃ち貫く
　　忌まわしいマクスウェルの
　　壁よ、オレの前に碎け散るがいい」

言葉は、虚空に響いてやがて天へと昇っていった。

23話 「カラハ・シャルにて (前)」「(前書き)

前後編の予定です

23話 「カラハ・シャルにて（前）」

エリーゼを宿に連れて帰って、その翌日の早朝。

僕はミラと一緒に買い出しに出ていた。エリーゼは昨日に夜更かしをしていたため、昼間では起きないだろうとのことだ。

同じ時間に寝た僕も実は眠たくて、このまま昼まで寝てしまいたいのだが、迷惑をかけたこともあるので、こうして買い出しをすることにした。

横にいるミラも少し眠たそうにしている。今はエリーゼが起きた時を考え、アルヴィンが宿に残っているのだが、あいつも眠たそうにしていた。

「ふあ……しかし、朝だというのに、人が多いな」

あくびしながら、ミラが言う。僕はそうだね、と頷くとこのカラハ・シャルという街について説明を始めた。

「ここは六家のひとつ、シャル家のお膝元。それもラ・シュガルの交易の中心となる街だからね。一般には、出会いと別れの街って言われているぐらいだから」

このカラハ・シャルはラ・シュガルにおける交易の、その大部分が集中する都市である。

物が行き交い、そして人も行き交う。物の流れは人の流れとはよく言ったものだ。故に出会いと別れもこの街に集中する。

「人生の区切りにもなるからね。新しい仕事との出会い、それが都合で別れる人……傭兵の終着点とも言われているけど」

「出会いと別れ、か」

言ったきり、ミラは周囲の人たちをじっと見回し始めた。

どうやら街の人たちを観察しているようだ。交易の仕事としてやってくる、荷物を抱えた商人。

傭兵を生業としているのだろう、腰に剣を差している男。どこかの学生だろうか、見るからに観光に來ましたと集団ではしゃいでいる女性。

まだ朝だというのに、元気なことだ。店側も稼ぎになると分かっているからか、こんな時間から営業を始めているようだ。さすがに武器防具や装飾品を扱っている店はまだ開いていないようだが、食料品屋に普通の道具屋は開店している。

「ちょうどいい、グミの補充をしておくか」

財布を取り出し、商人に話しかける。まず最初に見せるのは、ギルドのカードだ。

溜まった交易品のポイントを見せて、それを確認してもらった後、グミを割引で買っていく。

「ジュード、それは？」

「グミだよ。アップルグミにオレンジグミ、数は少ないけどレモングミにパイングミ。って、ミラってひょっとしてグミを買ったことがない？」

「魔物が落としたものは何度かな」

「ああ、それもあるね」

グミとはマナの結晶だ。魔物が死んでマナに還る際、一定確率で特定の形に変わっていく。

少ないマナならアップルグミやオレンジグミ。こちらは弱い魔物が落としていく。保有マナの総量が少ないからだろう。

反面、強い魔物はそのマナの量も多く、レモングミやパイングミを落としてくれる場合が多い。

「しかし、なぜ果物の名前に？」

「いや、色と味がね。偶然似ているから、らしい」

誰がつけたかは知らないが。まあ、果物は自然のもので、このグミもマナという自然のパウワから生み出されたものだ。
何も、おかしいことはない。

「そついうものか。そのグミの効果は？」

「一言で言えば滋養強壮薬、かな」

「栄養薬のようなものか。ん、傷が癒えたりはしないのか？」

「はっはっは。やだなあ、ミラさん グミ食べて瞬間的に身体が回復するとか、あるわけないじゃないですか」

何かを敵に回した気がするが、それは置いといて。

「アップル、レモンは体力を。オレンジ、パインはマナを回復して

くれるんだ。まあ、食べる過ぎると中毒になるから、使い所は限られてくるけど」

それに、値段も高い。商人ギルドに交易品を提出して、貢献していない者ならば特に。

「ここから先は何があるか分からないからね。ちょっと補充しておこうかと」

「用意周到なことだな」

「一人の身体じゃないからね」

前衛である僕が倒れると、なし崩し的に後衛がピンチになるだろう。

それだけは避けたい所だ。

「…………やはり、エリーゼの申し出を、受けるのだな」

「聞いてたのか、やつぱり」

昨日の夜遅くまで話していたこと、聞かれていたようだ。気配は感じていたから、そうなんだろうなとは思っていたけど。

「説得は無理そうだったから。下手に動かれてボン、ってのはまっぴらごめんだし」

「それならば指示に従え、と。確かにエリーゼは譲らなかっただろうしな」

足手まといになりたくない、役に立ちたい。

それはダメだと言った。危ないからと。

だけど、エリーゼの最後の言葉には抗えなくて。

（ 僕に、死んで欲しくない ）

面と向かってそう言われた。

その目にこめられていた意志は、とても強い光を発していた。

梃子でも動かないという、強固なものが感じられた。

（それに、実際に回復役が居ると居ないのでは、パーティの安定感が全く違う）

戦闘において、回復役がいるのといないのでは、その安定感は雲泥の差だ。

具体的にいえばアグリアとミラぐらい違う。胸的な意味で。

「うん」

「人の胸を見て何を納得している。全く………お前も分からない奴だな」

「何が？」

「エリーゼに対する接し方についてだ。守るといったり、その反対

の態度に出たり。その直後にはまた一変していたり」

「う……………」

耳に痛い言葉とはこのことだ。確かに、情けないことをしてしまったのだから。

「決めたことならば、最後までやり通すべきだろう。それとも、簡単に揺らぐような決意だったのか？」

「それは……………違う、けど」

もう決めて、これからは揺らがないと決めた。

それでもミラとアルヴィンには迷惑がかかった。何よりエリーゼを傷つけたに違いない。

そんな自分の行動を鑑みると、外からは確かにそう見えるわけでも、言い訳ができるような事でもない。

色々ある、と言っても言い訳にしかない。

こうだと決めて、最後まで揺れずブレず貫き通す、なんて強い心を持っている人間の方が少ないのだ。

そう言えればいいのだが、それでは厚顔無恥であろう。ならば、はじめから言い出さなければいいのだ。

決めた拳句に揺らいで、それを人間だからと言い訳するのは恥を知らない行為だと思う。

全面的に僕が悪い。それ以外に、解答はないだろう。

世界にはそうした一念を貫けるような、強い人間だつて存在するのだから。

そう、例えば

「そういえば、ミラは？ リーゼ・マクシアを守るために黒匣^{ジン}を壊すという使命を、自らに課しているって聞いたけど」

「ああ」

答える声と、瞳にも迷いは無かった。まるで雲ひとつない蒼天のような煌き。

純粹な意志だけが感じられる。

「でも、なんでそれだけの意志を持てたの？ 決意した、理由とかは……………」

ミラは、基本的な行動方針をブレさせない。イル・ファンの研究所の前でも感じたことだ。やると決めたのなら、自分の命を勘定にしない。

そんなミラだから、僕も助けたいと思ったんだけど。

まあ、“マクスウェルだから”と言われればそうなのかもしれないが、ミラとしてはまた別の想いがあるのかもしれない。

「理由、か。それは……………人が好きだからだよ」

「人が、好き？」

「ああ」

言っと、ミラはポケットからひとつのビー玉のようなものを取り出した。

「私にも子供の頃があつてな。これは、その時に友達からもらったものだ。日が暮れるまで一緒に遊んで………楽しかった。そうしてまたあしたと約束した後に、これをもらつたんだ」

「それで、次の日も？」

「いいや。その日だけだったよ。遊びに村の外へと抜けだしたのも、シルフと一緒に抜け出したからだ。帰った後にイフリートに見つかつて、二度とするなと怒られた。もう遊ぶことはなかったのだが………」

それでも、あの時の記憶は宝物だったと。子供のように笑うミラが一層魅力的に見える。

「旅をしながらでも感じる空気がある。ハ・ミルだって、そしてこの街でだって。守りたいと思わせる、何かがあるんだ」

「……………そう、か」

声にまた、迷いはなかった。でも　　なにか、納得しきれないものを感じる。

（それだけで、とは言えない。でも、それだけで……………自分の命を賭けて、世界中を飛び回って。眠ることも食べることもせずに、

長い間戦えるものなのか？)

僕だって、夢見がちな少年ではない。人並み外れた決意や覚悟には、相応のものがあると思っている。

例えば、悲しい過去。それを見たくないからと、そこから抜け出したいと。そう思った果てに、自分を変える決意をするのが人間だ。例えば、大切なもの。例えば血や情の縁の果てに感じたこと。絶対に失いたくないと、自分と繋がっている人たちを守りたいから、覚悟をもって苦境に挑むのが人間だ。

使命も同じだろう。ミラの決意と覚悟は、半端じゃない。その使命という炎にくべる決意や覚悟の量は、並ではダメなはずだ。

なのに、どうして。人間臭さを感じるミラから、そんな言葉を聞くと。

どうしても、違和感を覚えてしまう自分がいる。マクスウェルは特別だと、そう納得してしまえば別なのだが。

「どうした、ジュード」

「いや……ミラは、強いんだね」

「お前だって強いじゃないか」

「いや、叶わないよ。そうだね、例えば……目の前にクルスニク賢者の槍がある。意志ひとつで壊せる。

でも、ニ・アケリアの村の人達が人質に取られていて、槍を壊せばその村人を殺すという。そういう時は、どうする？」

「そうだな。出来るだけ助けたいが……方法が無いとすれば、私は槍を壊すことを選ぶだろう」

「村人は見殺しに？」

「従ったとして、その村人を殺さないという保証もない。諸共に殺される可能性もある。そうなれば、数え切れないぐらいの人間が死んでしまう……だから、見殺しにするな、私ならば」

ミラは断言した。だろう、などという逃げの言葉はなく、口調にも迷いがなかった。

「お前はどうかんだ？ 例えばエリーゼが人質に取られたとしよう。お前の譲れないものの目の前にあって、それを取ればエリーゼを殺すという……お前ならば、どうするんだ？」

「僕は……」

守ると決めた。言ったんだ。それでも、医者 of 夢を諦められるのか。エリーゼを見殺しにすれば、精霊術を使えるようになると言われたら、僕は？

「……意地の悪い質問だね」

「お前の言ったことだろうに」

呆れたようにミラが言う。だけど、確かにそうだ。あるいは、そうだった残酷な二択を迫られたときに、自分はどうするのか。

「どちらも選択しない。両方取る、つてのはダメ？」

「可能であればな。だが、それは恐らく厳しい道だと思うぞ。不可能を可能にしようとするのなら、自分の命をも捨てる覚悟が必要だ。私とて……イフリートとウンディーネを同時に使役することはできない」

両手でもってしても、救えるのは一人だけ。そうした時にどうするのか、とミラは問うているのだ。

あるいは、命を差し出さなければならなくなると。

「そう、だね。肝に命じておくよ」

言いながらも、ずっとその問いは僕の頭の中に残っていた。

そうして、昼。

昼食を済ませると、僕達はまた街へとくり出した。

「また、一段と人が増えたな」

「すげー熱気だな。ア・ジュールの街とか、イル・ファンとは違うわ」

「人が、いっぱいです……………」

「目が回る〜！」

「あ、エリーゼは僕の手を。ティポはちょっと上の方に飛んでて。低いと、人の流れに巻き込まれるから」

エリーゼの手を握って、引っ張りながら皆も連れて歩いて行く。目的地は武器屋だ。

ミラと、そしてエリーゼの武器を新調しなければならない。

ミラも剣の技量はあの頃よりは、格段に上がっている。今ならば、性能の良い武器をもっても、それに振り回されないだろう。

エリーゼは、マナの効率変換が高い武器を。戦いに挑むというのであれば、今の僕に買える、最高級のものを買うべきだ。

あとは、マナの効率変換、特に防御に関しての効率が上がる装飾品を一つ。

手持ちの金が全部なくなる勢いで買うべきだ。

「正直、嬉しいのだが……いいのか、ジュード？」

「わたしも、少しだけなら、お金もってます……」

「今のままでも、エリーは戦えるかもよジュード君ー？」

「いいよ。ミラは朝のと、昨日の……その、迷惑をかけたお礼に。エリーゼは未来のために」

「みらい、ですか？」

「うん。治癒術があるからって、深い傷なら後に残ってしまうし。ほら、傷物にさせるわけにはいかないし」

「ジャオのおっさんとの約束もある。傷つければ、あのハンマーで今度こそ叩き殺されるかもしれない。」

（考えれば、あのおっさんの力量は尋常じゃなかったよな）

「力だけじゃない、技も持っていた。戦い慣れているようだったし、あのおっさんが本気で殺しに来る光景とか、ちよっと想像したくない。」

（グミと午前中の集気法でかなり調子が戻ったとはいえ、なあ）

「怪物の影響は少なくなっていた。あれだけマナの巡りが悪くなっていたというのに。」

「昨日になぜだか大幅に調子が戻ったのも大きいが、あれはなぜなの

だろう。

（マナと心は密接な関係があるって師匠は言っていたけど）

錬なき心に意味はなし。心なき拳に威力なし。マナは自らの意志を試すものである。

どれも、師であるソニア・ロランドの言葉だ。だから、拳と一緒に心も鍛えなさいと。

その方向性が、一端の男にと、そういう事だ。自らに胸を張れるようになれば、拳の筋もまた通ると。

そんな事を考えているが、エリーゼの返事はない。
見れば、耳を真つ赤にしてうつむいている。

ティポは目を×にして飛び回っているが、何故だろう。

まあ、いいだろう。今は買い物だ。

そうして、ミラとエリーゼの装備を見繕って、買った後には入り口の所にまで来ていた。

アイスクリーム屋に興味しんしんなミラとエリーゼにソフトクリームを買って、当たりをぶらつく。

（誰も、こんなくつろいでいる僕達が手配されている人物だとは思わないだろうな）

それでも、周囲の警戒は怠らない。

360°、人の数が多くて全てのマナの気配を探るのは無理だが、それでもさり気なく視線を配っていく。

と、そこで特徴のある人物を見つけた。

入り口の正面。まるで露店のように、屋台の上やその前に出された台の上に品物を並べている、骨董品屋らしき店。

その前に、その二人はいた。

一見すれば、少女と老人にしか見えない。誰もが、そう考えることだろう。

実際、一人に関しては取り立てて警戒するような人物ではなかった。見るからにお嬢様なオーラを出している少女だ。年は、僕よりひとつ上ぐらいだが。

普通に美少女ではあるが、戦いの経験もない、いかにも箱入りのなお嬢様だろう。

いや、顔はすげー可愛いし、性格が優しくそうで、温厚な顔立ちをしているからそれはそれで注目に値するんだけど。

だが、重要なのもう一人の方である。

一見すればただの老人にしかみえないが、こいつは“違う”だろう。好々爺然としていて、その表情におかしい所はない。見る限りは、良家の執事のようにしか思えない。

だけど、マナのコントロールに関しては違う。特にマナコントロールと気配を探るのが得意な僕だけには分かる。

その老人が纏っているマナが、あまりに整いすぎているということ。そして、重心の落とし方も臭かった。ただ立っているように見えるが、この爺さんはいつでも動けるようにという体勢を保っている。

それをお嬢様の方に気づかせないのも見事だ。まるで師匠のように、無警戒を見せながらもまるで隙というものが存在しない。いや、師匠よりはレベルは落ちるんだけど。

それでも、積極的に立会いたい種類の人間ではない。エリーゼを抱えている今では特に。

と、いった結論に達するが ミラはそんな関係ないとばかりに、骨董品屋に近づく。

「骨董品屋か……………」

「いらつしゃい、見ていつてくださいよ」

ミラの言葉に、店のマスターが答える。ミラは頷き、前に屈みながら台の上に並べられている品物をまじまじと見ている。

「なんだか、街のあちこちが物騒だな」

「ええ。なんでも、首都の軍研究所にスパイが入ったらしくて。王の親衛隊が直々に出張ってきて、怪しいやつらを検問したり、街を見回っているんですよ」

アルヴィンの言葉に、店主は手早く答えた。商人は情報に詳しくなくてはいけないというが、それでもすらすら

と淀まず答えが出てくる所は流石である。

ともあれ、王の親衛隊か。

「まったく、迷惑な話で……………」

「ははは。検問止められたら、商売にならないもんなあ」

と、世間話をして注意をそらしてくれるアルヴィン。

その横では、エリーゼが美少女の背中ごしに、置かれているカップをまじまじと見つめている。

「……………キレイなカップ」

「でも、こーゆーのって高いんだよね？」

エリーゼの言葉に、ティポがすかさずツッコミを入れた。

一方で老人は全く動じていない。僕でさえ初見の時は思わず飛び上がってしまったのに。

（並の胆ではない……………って、僕が臆病とか、それはないから。ないから）

男のプライドをかけた強がりである。

「ああ、お目が高い。そいつは、『イフリート紋』が浮かぶ逸品ですからねえ」

店主が調子良さそうに喋る。その一言に、美少女が反応した。

「イフリート紋！ イフリートさんが焼いた品なのね」

また、まじまじとカップを見つめる美少女。なんか素直すぎて騙されやすそうな子だな。

見るからに素直そうでもあるが、見ていてちょっと不安になる子である。

と、そこでミラが手を伸ばした。

少女が持っていたカップを手に取り、宙に放り投げた後に手元でくるくると回して、カップの全てを観察しているようだ。

そして、うんと頷くと、はっきりと告げた。

「ふむ。それはなかるう。彼は秩序を重んじる生真面目なやつだ。こんな奔放な紋様は好まない」

「ウイ！？」

思わず変な声を上げてしまった。こんな衆目の場でなにってんすかミラさん。

そして、その言葉に爺さんが反応した。

「ほっほっほ。面白い人ですね。四大精霊をまるで知人のように………確かに、本物のイフリート紋はもつと幾何学的な法則性をもつ

ものです」

言いながら、カップの皿を手にとって観察する。

「おや……このカップが作られたのは、十八年前のようですね」

「それが……何か？」

店主がどもりながら同意すると、爺さんの目が光ったように見えた。

「おかしいですね……イフリートの召喚は20年前から不可能になっ
ていませんか？」

「う……」

店主がうめいた。その通りで、それは一般教養で、いわゆる一つの常識というやつだ。

その後の事は、言葉にするまでもない。

ただ、美少女だけはカップを手にとると、ちょっと落ち込みながら
呟いた。

「残念……イフリートさんが作ったものではないのね」

「お、お嬢様……」

ちょっと狼狽える店主。だけど、美少女は表情を一転すると、店主
に笑顔で告げた。

「でもいただくわ。このカップが素敵なのに、変わりないもの」
笑顔で告げられた店主は、ちょっと驚いていた。それはそうだろう。
僕ならば至近距離でメンチを切った後、「にーさん、話ちがうんで
すが……これはどういうことや？」と告げていただろう。
チンピラ風に。

それに比べればこの美少女の、なんで器の大きいことか。
ちょっと胸大きいし。この年齢を鑑みても、大きいし。

「はい……お値段の方は、勉強させていただきました」

店主の方も、毒気が抜かれたのか素直に対応することにしたようだ。

その後、お嬢様は5割引でカップを購入していった。

その後、大通りに僕達は集まっていた。

僕もエリーゼもミラも、ソフトクリームを食べている。

「ふふ、あなた達のお陰でいい買い物ができちゃった」

「いえ、やったのはミラですから」

「気にすることはない。こうして、ソフトクリームも買ってもらったことだ」

言っておくが、ミラは2本目である。

なんていうか、今日もミラは食に対しては絶好調であった。特に甘いものに覚醒しはじめた様子だ。

「って、ああ。クリームがほっぺたについているよミラ！」

「ああ………っと、取れにくいな」

手でクリームを拭っているが、広がるだけでクリームは残っている。上質のミルクを使っているせいか、妙に柔らかい。純粋なアイスではないのか。

で、そうして拭いている内に、逆の手に持っていたクリームがついたようだ。

気づけば、ほっぺたとか鼻とか、顔のあちこちに白いクリームがついていしまっている。

「……………ほら、ミラ」

「ありがとう、ジュード」

されるがままにするミラのクリームを、ハンカチで拭きとってやる。

ハンカチで拭うと、わりとすぐに取れた。

その後に僕は、振り返ってお嬢様の方を見るが

「って、アルヴィンどうしたの？」

かなり顔が赤い。

ていうか、なあ。

なぜかこつちを注視していた周囲の野次馬共、主に野郎共が前かがみになりながら去っていくのだろうか。

「ほっほっほ」

爺さんは笑顔のままだが、何か別のオーラを感じる。

エリーゼとお嬢様の方も見るが、二人は訳がわからないという顔をしていた。

その純粋な瞳に、心が痛む。なぜだろうか。

一方で、ミラも首をかしげていた。女には分からないものなのか？

（ま、いいか）

取り敢えず無視して、僕はお礼をいう事にした。

「ごちそうさま。ありがとう」

「うむ、おいしかった」

「ありが、とう」

続いて礼を言うミラとエリーゼ。

対する美少女は、笑顔でどういたしましてと答えた。

「それに、こちらこそです。私は……………ドロツセル・K・シャルと言います。よろしくね」

「執事のローエンと申します。どうぞお見知りおきを」

美少女の名前はドロツセル、爺さんはローエンというらしい。

「それで……………お礼に、お茶にご招待させていただけないかしら」

ドロツセルのいきなりの提案である。

見るからに貴族のお嬢様からのお誘いだ。ぶっちゃければ初めてである。

それでも、何があるかは分からない。私兵などがいても遅れをとるつもりは毛頭ないが、騒ぎになるのも困る。

なので僕はどうかを少し考えようとしたが、それより先にアルヴィンが返事をした。

「お、いいねえ。じゃあ後でお邪魔させていただきますか」

笑顔で答えるアルヴィン。止めようとするが、遅かった。

「はい。私の家は街の南西地区です。それでは、お待ちしておりますわ」

そう言うと、ドロツセルは優雅な礼を見せたあと、最後まで笑顔のまま。

礼をして去っていくローエンを後ろに連れ、街の中心部の方へと去っていった。

で、残った僕達は尋問タイムである。まずミラがアルヴィンにきつ
つい視線を飛ばした。

「アルヴィン……どういっつもりだ？ 私たちには、そんな暇などないのだが」

ミラがアルヴィンを睨む。ここは、一国も早くイル・ファンに向かうべきだと思っているのだろう。

「どうもこうも……なあ、ジュードよ。彼女の姓を聞いて気づかなかったのか？」

「姓って……K・シャルだろ？ ってあのシャル家が！」

シャル家といえば、この街の領主だ。六家のひとつで、最高位の貴族と言っても過言ではない。

「さて、どうする……？」

「……ここは乗ってみるのも手だと思う。考えてもみるよ、あの堅牢無比なガンダラ要塞を抜ける手立ても見つからないんだぜ？」

情報を収集するにも、利用するにも、これ以上の相手はない。アルヴィンは、そう言っているのだろう。

「まあ、相手は六家だし。あのお嬢様の人柄とこの街の様子を見るに、シャル家は悪い家じゃないとは思っただけど」

「ふむ、六家が……」

「うん。ファン家に、イルベルト家に、シャル家に、ズメイ家に、

バーニヤ家に トラヴィス家」

ラシュガルの貴族の中でも、特に位の高い貴族のことである。貴族という風潮からして、僕にはどれも好きにはなれないが。

特に最後の家のイメージが強すぎるのが問題か。

（ナディア L・トラヴィス）

それは、ナディアのフルネームである。本人から直接は聞いたことがないが、それでも耳には入ってくる。

裏にあった事件も、貴族だからして、そしてあのナディアの様子から見ても。どう考えても、碌なことがなかったに違いないのだから。

「あとは、現王の名前もね……………確か、ナハティガル・I・ファインだったと思う」

「近しい立場にいるか。なら、手を借りられるかもしれないな」

それとなく情報を匂わせれば、利用できるかもしれない。特に研究所で行われていた実験だ。

あれは後ろぐらいってレベルじゃない。ともすれば、六家内の騒動にまで発展しかねないほどの爆弾だ。

それでも、シャール家が承知で協力していれば家の中で消される可能性はあるが、その時は逃げればいい。

あの優しそうなお嬢様に告げるだけでも、場を引っ掻き回せそうだし。

（そうはならないと思うけど）

街を見れば領主の人となりは分かるとはよく言ったものだ。ここはイル・ファンとは違う。霊勢のせいもあるのだろうが、どう見ても良い街にしか見えないのだ。

ドロツセルにしてもそう。

あんな少女が居る家ならば、ひょっとしてという想いもある。

街の様子が示している。そういえば、昨日の夜にも出歩いたが、治安が良いように思えた。

朝も昼もだ。ここに来るまで観察していたが、地元らしき住民と、緑を帯びた装備をつけているシャール家の兵士との仲はかなり良好に見える。

無理な弾圧が行われていないのがその証拠だ。反対に、赤を帯びた装備　イル・ファンでも見た、ラ・シュガル国軍が、あるいは国王の親衛隊はそうでもないらしいが。

「どうする？」

「……………まあ、一時間程度で住むだろうしな。お茶をしてからでも情報収集は出来る」

「決まりだな」

「お茶、楽しみです！」

「ははは、エリーゼはまじで可愛いなあ」

和みまくるわー、と僕はいつまでもエリーゼの頭を撫でていた。

その様子を、遠くから監視している者があった。

大きな家が立ち並ぶ家の、その屋根の上で。

見るからに怪しい服装。黒い外套に、仮面をつけているその人物は、小さな声でつぶやく。

「く、まさか接触するとは……これは少々予想外ですね。少し、作戦を変える必要がありますか」

実に忌々しい、と。黒い人物はそう告げると、最後に見るものを見て、去っていった。

眼下に去っていく、ファン家の馬車を後にして。

24話 「カラハ・シャルにて（後）」

ドロツセルと執事のローエンからお茶会の招待を受けた後。

僕達はひと通り町の中を歩きまわると、言われた通りの場所へと赴いた。

観光名所として知られる、広場の中央に見える風車。その正面にある大きな石置の通路を踏んで、門を抜けた先にそこはある。

カラハ・シャルの南西地区。

有力な貴族か商人達が大きな家を構える、いわゆる貴族街だ。何やら落書きをしたくなる衝動に駆られるが、いらん追手も抱え込みそうなので自重する。

ミラとエリーゼはどうやら僕とは異なる感想を抱いているようだ。大きな建物や庭をしげしげと眺めている。

だが、ミラはいつもと違い、そわそわとしていて落ち着きがない。一体どうしたのだろうかと聞いてみると、ミラは真顔で頷いた。

「うむ。どうやら初めてお茶会に招待されて、少しワクワクしているようだ」

「それは、お菓子に？」

「それもある」

真顔で頷くミラ「マクスウェル。きっぱりと断言するその様は、断じて女性のそれではない。

無駄に男前すぎて、何やら今から戦いに赴くようだ。

（つーか渋ってたのに調子いいなー）

あるいは、やると決めたのなら後ろを見ないタイプなのか、どうやら本気で楽しみにしているようだ。

先ほどのソフトクリームのことと言い、マクスウェルってお菓子の大精霊だったわけと思わせてくれる程のはっちゃけぶりである。

「私も、です」

「うん、エリーゼはお菓子の精霊っぱいね」

ふわふわしているし、とエリーゼの頭を撫でる。

エリーゼの方は、意味が分からないと首をかしげているが、それでいいのだ。

「しかし、シャルル家の本宅って一体どこだろうな。説明がなかったのは、来れば分かるってことだろうが」

アルヴィンは、頭の後ろで腕を組みながら歩いている。こうしていると、普通のにーちゃんに見えるから恐ろしい。しかし、言うとおриではある。

家の正確な場所は教えられていないが、近くの人に聞けということだろうか。

そう思った時に、正面に大きな家が見えた。

周囲の家と比べても、2つ頭を抜けているぐらいに大きい、大通路の行き止まりとなる場所に建っている大きな家。

いや、これはむしろ”そびえている”といった方がいいだろう。そんな入ったことのない大邸宅の正面に、二人の姿が見える。

うむ、あの童顔と胸はドロツセルだ。間違いない、待っていてくれたようだ。

お嬢様を待たせるとは男の名折れ。すぐさま声をかけようとするが、目の前に見えた光景に声が止まってしまった。

邸宅の入り口。その大きな扉が開き、中から赤の装具を見に就けている兵士が出てきたのだ。

「ラ・シュガル兵……しかも、重軍曹か」

研究所の警備兵とは、文字通りレベルが違う兵士だ。

「どうする」

「剣は抜かないで。どうやら、帰る所のようだし」

出てきた兵士は、正面に止まっていた場所の前に立った後、邸宅の入り口の方に振り返り、戈を空に立てる。

直後、奥から二人の人物が出てきた。

距離が離れていて、わずかに輪郭が見えるぐらいなので顔つきはよく分からないが、その二人は特徴的な外見をしていた。

一人は、巨躯の武人。一言で表すと、こんな所だろうか。

ジャオとはまた違うタイプの身体つきで、歩く様もジャオとは別種の、どこか精錬されている威厳に満ちていた。

服も將軍クラスが身につけるような、上質のものに見える。

そしてこの距離からでも分かるぐらいの、威圧感というのか見えないうプレッシャーを放っていた。

もう一人は、こちらも背が高い男だ。だが、こちらは服装を見るに秘書というところだろう。

身体の線は太くなく、どこかシャープな印象を思わせる。

シャル家の客だろうか。その二人は、こちらに一瞥もくれることなく、そのまま馬車に乗って去っていった。

それをドロツセルは気にした様子もなく、僕達を歓迎してくれた。

「お待ちしておりましたわ」

明るい声に導かれ、僕達は邸宅の中へと案内された。

まるで別世界。何もかもが違う大邸宅の中、僕達はお茶を飲むサロンのような場所に案内をされた。

そこで、自己紹介をかねてひと通り話すことにした。

「ジュード・マティスです。はじめまして」

「はじめまして。ドロツセルの兄、クレイン・K・シャールです」

この家の当主で、カラハ・シャールを治める領主様だという。思っていたよりもかなり若い領主のようだ。物腰も柔らかく、貴族ということ仕草だけで分からせてくれる。

家の中の何もかもが、そうだ。ゴージャスというのか、リッチというのか。小物でさえ細工が工夫されている、高いものだと分かる。

椅子ひとつにしたって、すわり心地がまるで違う。

そんな中で自己紹介を交わし合っていく。

ドロツセルとローエン以外は、互いに名前も分らないのだ。

（というか、名前も聞かないでお茶会に招待するとか、箱入りにもほどがありませんかお嬢様）

きつと甘やかされて育ったのだろう。ローエンか、クレインさんの苦勞が偲ばれる。

兄に僕達のことを紹介しようとして、まだ名前を聞いていなかったことを思い出し、「いけない」と口を抑えたドロツセルにはかなり可愛かったが。

つかドロツセル嬢かわいい。18に見えない。あと、何気にスタイルが爆発している。

流石は六家のお嬢様。

仕草も話し方も表情も、これ以上ないくらいお嬢様過ぎる。

（でも、あの銀髪もたしか六家のお嬢様……オジヨウサマ？）

オジヨウサマという言葉に、哲学さえ感じさせてくれる。ていうか目の前のドロツセルは本物か。

ほんとにナディアと同じ種類の生き物なのだろうか。

いかん、だんだんと不安になってきた。

「あの、どうしたんですかジュードさん」

「いえ……あの、つかぬ事をお聞きますが、突然フレア・ボムとかぶついたりしてこないですよね？」

「はい？」

首を傾げるオジヨウサマ。え、ここは「何言っただ、とうとう最後の脳みそまで消えちまったか。靈力野と同じで」と返すところじやあ。

こともあるうちに、可愛く首を傾げるだけ。

「いえ、なんでもありません」

無理だと悟る。なにを話していいのか、まったくもって分からない。そういえば、僕もミラと同じで、こういった場所に呼ばれた経験が無いことを思い出す。

年上の人と話すのも。医学校にいたころは、仕事関係で話すことをしていたが、こんなお嬢様な人と会話をしたことなんてない。

（どうしたものかなあ）

あの銀髪とはちょっと話し合った後に拳と剣での語り合いになることが多かった。

でもまさか、この天然純粋箱入り培養お嬢様にそんなことはできない。ていうか、普通に外道な行いだろ。

なのでここは、ミラとエリーゼと任せることにした。

ちょうどお茶とお菓子がやってきたようだ。

ケーキは見事なもので、の外見にはどこか優美なものを感じることができる。

きっと馬鹿みたいに高いのだろう。イル・ファンでも見たが、高いケーキは本当にばか高いのだ。

一度だけだが、ハウス教授に連れられて行った事がある。娘のケーキを選んでほしいと頼まれた時である。

(……………伝えきれてない、な)

遺言でもあった。でも、この状況で迂闊に伝えればまずいことになるだろう。

(イル・ファンに戻れば、必ず)

手紙では危険だ。直接会って話さなければならぬ。その時のことは、その時で考えるしかないだろう。

僕は気持ちを切り替え、正面にいる面々の顔を見た。

ミラもエリーゼも、一口一口に驚きながらケーキを食べている。アルヴィンも素直に喜んでいるようだ。

甘党だといったが、あれはあれで間違いないことなのだろう。

お茶も美味しく、喉や口、鼻の中までも美麗な香りで潤してくれる。

そうなると口も軽くなるのか、会話が弾んでいた。

例えば、お茶会に招待をされるようになった経緯など。事情を聞いたクレインさんが、ドロツセルを見ながら言う。

「なるほど。また無駄遣いするところを、みなさんが助けてくれたんだね？」

「無駄遣いなんて！ 協力して買い物をしたのよね」

ドロツセルが、すぐ隣に座っているエリーゼに笑顔を向ける。だが、「ねー」と返事したのはティポだった。

「ははは、そうかもしれないね」

しかしクレインさん華麗にこれをスルー。

全く驚くことなく、それどころか優雅な笑顔で同意していらっしやる。

そういえば、ドロツセルもふふふと笑ったまま、全く驚いていない。

（……………あれ、初見であれだけビビったのって、僕とアルヴィンだけ？）

もしかして僕達って、割りとヘタレな部類に入るのか。アイコンタクトでアルヴィンに確認をしようとする。

だが、胡散臭男も華麗にこれをスルー。

ケーキに夢中で、僕のことなど全く見ていない。甘党にもほどがあ

るだろうよ。

女性3人の方も、なんだかんだで話が弾んでいる様子だ。

と、そこでローエンが背後から現れた。

クレインさんは耳打ちをして何かを伝えられると、少し表情を変えて「分かった」と頷き、席を立つ。

「すみません。僕は少し、用ができましたので……ローエン、みなさんのお相手を頼むよ」

「かしこまりました」

クレインさんは礼をすると、おなじく頭を下げるローエン、そしてドロツセルの方を見て、そのまま館の奥へと去っていった。

（……………急用か。交易の中心となる都市だし、さつきも客が来ていたようだし）

物騒な噂もある。

その一因を担っている僕に言えたことではないだろうが、町を治めるモノとしては忙しいに違いない。

領主の仕事も、まだ18のドロツセルには頼めないだろうから、一人でまとめているのだろう。

そのドロツセルの方と言えば、目を輝かせながらミラとエリーゼの話をしている。

内容は、僕達のこれまでの旅の話についてだ。

ドロツセルはカラハ・シャルから出たことがないらしいので、例えば船に乗ったというなんでもない話でさえ、未知の領域。

ちよつとした冒険譚に。聞くだけで、見たことのない新しい世界を旅しているように思えるのだろう。

ミラが語る直線的かつ端的な説明も、エリーゼがたどたどしく話す抽象的な言葉も、どちらも興味津々で、聞く度に大きな反応を返している。

ミラとエリーゼにしても、ドロツセルの素直な反応に嬉しく思ったのか、あるいは気持ちに乗ってきたのか。

まるで、明日の朝まで語り明かしそうな勢いである。

アルヴィンとは言えば、席を立ち上がるとトイレに行った。

声には出さず唇の動きだけで伝えてきたので確信はできないが、まあそれ以外にないだろう。

ローエンは残っている。

というか、さりげにお菓子やお茶を補充している気遣いがすごい。

主にドロツセルに気を使っているのだろう。話を中断させないようにと、気配を消しながら粛々と執事の仕事をこなしていた。

と、その視線がこちらを向く。

そしてローエンはどこか申し訳なさそうに、視線だけで何事かを告げている。

(…………ん、席を？ ああ、そういうことか)

ミラ達の話を中断させたくないということだろう。

すつと気付かれないように席を立ち、離れていく。
僕も、それについていった。

「すみませんね」

「いやいや、そろそろ居心地が悪くなってたし」

ガールズトークに混ざるものじゃない。そう痛感した僕である。
こうした、遠くで見ている この距離にも、懐かしさと虚しさを感じるものだが。

いや、今は思い出さない。

「ローエンさん、だったっけ。クレインさんは？」

「ローエンで結構でございます。クレイン様は、その急なお仕事で……………申し訳ありません。私のようなただの爺いが相手では、退屈なさるでしょう」

「いやいや、とてもとても」

少なくとも油断ができないってことは確かだ。というか、さりげに

こちらの間合いを外しているくせに何を言う。というか、お前みたいな”ただの爺い”がいるもんかよ。ともあれ、余計な詮索はすまい。

あの空間を壊すのも無粋だし、普通の会話だけ。

「あまりに見事な執事っぷりに感動したぐらい。で、ローエンはクレインさんに仕えて、ずいぶんと長いように見えるけど？」

信頼っぷりが半端じゃないような。でもローエンは、笑って首を横に振った。

「いえいえ、二年ほど前からですよ。ですが、あの方に仕えられたのは幸運であると思っています。クレイン様はまだお若いですが、民の自由と平等を重んじる立派なお方ですから」

「ああ、それは町を見れば分かる」

造りもそうだけど、何より町の人の表情だ。落ち込んでいる人も極稀にはいたが、それでも大抵の人達の顔には、笑顔が浮かんでいた。ミラも印象を受けていたのか、僕と同じ顔をしていたように見える。行き交う人々を見ながら、何やら満足そうに頷いていたし。

（単純に楽しかったのか………それとも、守れたもの、その価値を確かめていたのか）

あるいは、守っているものの価値か。どちらかは分からないが、その表情は明るいものだった。

ドロツセルもそうだ。連れはローエンだけで、周りに気にせず安心して笑顔で買い物ができる、というのを見れば、何となくだが治安の程度も分かるというもの。

もつと警備兵を連れたほうがいいと思うが。

「はは、以前はそうでした。ですが、その……………クレイン様は、妹のドロツセル様には甘いですから」

「もつと軽い気持ちで買い物を楽しみたい、とか？」

「おっしゃる通りで」

そして、それが許されるほどの治安なのだろう。警備兵を連れてがちゃがちゃするのが嫌だというのは何となく分かるが。

僕はそんな調子で、ローエンと取り留めのない会話を続けていた。

ただの爺いと言ってはいたが、ローエンの知識は深く、普通に話しているだけで面白い。

そうして10分ほど経過しただろうか。

気づけば、ミラは席を立っていて、家の奥にある、皿を飾っている棚の前にいた。

ドロツセルといえば、エリーゼとまるで年の近い友達のように、楽しそうに会話をしている。

「…………悪いけど」

「はい、いつてらっしゃいませ」

ローエンの洒落の聞いたを背中に。

僕は話に夢中になっているエリーゼとドロツセルの横を通り、ミラへと近づいてた。

ミラは、熱心に家宝みたいな皿のようなものを見ている。表面には、美事としかいいようのない細工が施されていた。

製造年月はかなり昔のもので、どうやら骨董品のようだ。

「ミラ、ずいぶんと熱心だね。もしかして骨董好き、とか？」

「ジュードか。いや、私が興味深いと感じているものとは少し違うな」

ミラは自分の綺麗な形をしているあごに指をあてた。

「興味があるのは……………美という抽象概念を実用品にまで適用したがる、人間の不合理性についてだ」

「……………難しいことを考えてるなあ」

てつきり、この皿に料理を盛り付けたら美味しそうに見えるとか、あるいは単純に食べ物を出しているのかと。

ともあれ、その話にはおかしい部分がある。不合理ではないだろう。

「ふむ、それはどういう意味でだ？」

「僕は合理的な思考だと思う。美しく、好ましいものならばいつも一緒に居たいってな。そう思うのは、別におかしいことじゃないだろう？」

欲望に正直ともいう。

「そついう、考え方もあるか」

「別の捉え方もあるけどね。好きだけど形になれば、壊れて失う恐怖もついてくるものだし。そう考えれば、不合理とも言えるのかもしれないけど。」

それでも、いつそ最初から手元になければなんて。考える前に諦める人間なんかいない」

例えば 明確な絶望を付きつけられてさえも、諦めを受け入れない人間だって存在するんだから。

それでも、欲しいものがある。叶えたい夢がある人ならば。

正しさを捨ててしまう程に、願う道もある。

それは否定できないものだって思う。

それに誰だって、誰からも。何かを憧れる気持ちを奪うことなんてできない。

例えば夢のはなし。夢が叶うなんて夢を、最初から持たなければ

なんて思う奴はいないだろう。

「…………夢、か」

「ああ、夢さ。ミラにだってあるだろ？」

あるいは、夢というほどに大仰なものではなくても、欲しいものがあるって。

そう思い聞いたのだが、返事は予想していたものではなかった。

「考えたこともないな。そもそも、聞かれたことがない」

使命のほかには何も。直接は言葉にしていなが、そう言っているように見える。

「考えれば、お前もおかしな奴だな。私が何であるかを忘れたわけじゃないだろう」

「忘れるには強烈過ぎたからね。でも……………」

見ていたら、思うんだよ。

「夢をみる大精霊がいたっていいじゃないか」

精霊としての在り方には反するものかもしれないけれど。

僕だって医者　　両親の姓であり生業である“マティス”の名前通りには、生きてない。

シャルが、トラヴィスが貴族という家と、その義務を示すものな

らば、僕の姓は医者を示すものなのだ。

そして僕は医者失格の烙印を押されている。押したのは、自分ではあるが。

言うまでもないことだが、精霊術を使えない医者など有り得ない。薬学の知識を持っていたって、この世界では認められないのだ。

患者は医者に身体を預ける。病気を治すために。だから医者は信用が第一なのだ。

知識の多寡か腕の上下はあって、その信用度も変動するが治療術を扱えない医者など、ありえないものなのである。

言及するまでもない、持っているのが当たり前である、最低限も最低限の条件だ。

それが無いということが、どういった事になってしまうのか。僕はこの5年で、嫌というほどに思い知らされた。

このリーゼ・マクシアでは、精霊術を扱えるということは、文字の読み書きと同等の、持っているのが当たり前前の教養である。

それを持っていない医者を信用することができるのか。問われ、躊躇いなく応と返せるものはいない。

それが正しい反応である。資格がないと指さされても、反論できないことで。

「ミラはすごいよ。精霊術は言うに及ばず、剣術の才能だってある。ミラなら、望めば何だって叶えられるさ」

「お前は違うというのか？」

「違う、とは言いたくないけど……今はそんな所かな」

それも、精霊術を使えるようになれば解決する。それまでは、医者には成り得ないだろう。

誰だって、そんな最低限のものを備えていない人間に、自分の大切な身体を預ける気にはなれないだろうから。

だから僕の方は“マティス”にはなれなかった、と言うのが正しい言になるか。

「難しい言い回しだな。しかし……夢、か」

「うん、考えたことがないのなら、今回がいい機会だよ。少し考えてみたら？ ていうか、どうしたの急に難しいこと考えて。」

確かに色々とゴージャスな屋敷だから、そういう事を考えるのも分かるけど」

「……………そういう日もあるということだ。もちろんシンプルな思考もしているさ。例えば、我々の現在の状況だが」

と、ミラは入り口に立っているカラハ・シャルル兵の方に視線を向

ける。

「ばれてはいないようだな。そして領主の人柄を見るに、もしかすれば協力を仰げるかもしれない」

「そう、だね」

良い人過ぎてちょっと本題の方を忘れかけていたのは内緒だ。

しかし、どうやって話を切りだそうか。ミラと二人で悩んでいると、入り口の扉が開かれた。

鉄のきしむ音。それが止んだ後、入り口には3人の姿があった。

クレインさんと 緑の装具をつけた兵士。カラハ・シャル
の兵だ。

手には戈を、そして視線には戦意を携わせている。そして、その目の方向は僕とミラに向けられていた。

「ふむ、どうやらバレてしまったか。どうするジュード。強行突破
してしまうのも手だが？」

「………… やめとこう。扉で見えないけど、外にはかなりの数の兵士
が配置されているだろうし 」

座っているエリーゼとドロツセルを見る。

「この場所を血で汚したくない。それに、いい機会といえばいい機

会だし」

話してみても遅くはない。

僕が言つと、ミラは分かったと頷いた。

「もしも場合はどうする」

「庭側の窓のガラスを蹴り破つて、ダイナミックに脱出。エリーゼは僕が抱えるから」

「ふむ、アルヴィンは？」

「自称プロの傭兵だし、あの抜け目ない男なら何とかするだろうし」

放置とも言つ。

僕はミラに向けて頷くと、クレインさんの方へ歩いて行く。

警戒しているのだろう、兵士が戈を構えようとするが、クレインさんが手でそれを制す。

やはり、ここで早々にドンパチするつもりはないようだ。しかし、その表情は緩いものではない。

「……………要件をお伺いしても？」

「イル・ファンのラフォート研究所について……………アルヴィンさ

んから、全てお聞きしました」

あの野郎。僕は心の中でアルヴィンに悪態をつき、表向きはため息をついた。

「アルヴィンが騙っているという可能性は？」

「考えました。なので、ひとつだけ確認したい」

クレインさんの視線が、ミラの方を向く。

「アルヴィンさんから聞きました。アナタの名前は、ミラ＝マクスウェルだと……相違ない、ですか？」

「その通りだ」

ミラは間髪入れずに頷いた。ここまで来て隠すことに意味はないと悟ったのか。

あるいは、自らの名前を誤魔化すつもりはないのか。何にせよ、クレインさんの顔が確信に満ちたものになる。

「ならば、間違いないでしょう。研究所での件、四大精霊を役とするものが暴れていたということは、確認が取れていることです」

あとは、ひょっとしてローエンか。ドロツセルの買い物の話で、疑いは抱いていたということだろう。

ならば、なおさらに分らないことがある。怪しいのであれば、ドロツセルをここに留まらせている理由が分らない。

なんらかの理由を持ちだして、連れだしたほうが安全なのだ。

聞けばクレインさんはドロツセルには甘いというし、まさか人質に取られるという可能性を考えなかったわけでもないだろう。

つまりは

「僕達の情報……いや、研究所内の情報が欲しいってところ？」

捕まえようとはしていない。だけど、兵士を連れてやってくる。

目的は威圧か。こちらの面子の力量は分かっているようにだけど、良い威圧にはなる。エリーゼもいることだし、後ろにはいつの間にかローエンがいるし。

“見せ”ている。荒事になる空気を漂わせている。その上で本気で捕まえるつもりはないとなれば、話はひとつしかない。

「ええ……話が早くて助かります。あなたがラフォート研究所で見たことを、教えて欲しい」

「それは……なぜ？」

「ラ・シュガルは、ナハティガルが王位に就いてからすっかり変わってしまった。何がなされているのか、六家の人間ですら多くは知らされていない」

「つまりは、独裁か」

ミラの直球の言葉に、クレインさんは頷いた。

「研究所でのよからぬ噂も聞きました。しかし兵を動かすわけには
いかない」

下手をすれば内乱にまで発展する。そして僕達に聞くということは、
派遣したであろう諜報員も帰って来なかったのか、あるいは情報を
得られなかったのか。

ドロツセルやエリーゼに聞かせる話でもないので、その辺りは言外
に納得する。

「分かった、説明する。だけど、条件がひとつだけある。僕達がガ
ンダラ要塞を抜けられるよう、工作をして欲しい」

「……………目的はなんですか？」

「イル・ファンに。あの研究所の中にある、物騒なものを破壊した
い」

「要領を得ません。それほどまでに危険なものだと？」

「それは、これから説明する……………良いよね、ミラ」

「ああ。協力を得られるのなら、これ以上の事はないだろう」

ミラの了承を得て、僕は研究所であつたことを全て話した。

軍が、民間人からマナを強制的に吸い出していたこと。

そして、大きな黒匣^{ジン}の兵器、賢者の槍^{クルスニク}についても。

「人体実験を……………まさか、とは思いましたが、ナハティガル王は
そこまで……………」

クレインさんは沈痛な面持ちで頭を抑えている。驚いている様子はないので、どうやら予想の範疇であったようだ。

「最近、イル・ファンでの行方不明者数が増加していましたね」

最悪としての予想ですが、あたって欲しくはなかった。

「首謀者は、ナハティガル王だ？」

「間違いありません。つい先刻帰りましたが……王が私に告げられた内容を考えるに、それ以外は有り得ないかと」

王命として、告げられたらしい。カラハ・シャルの民の一部を強制徴用すると。

「本人が動いているなら、疑いようがないな……でも、あれがナハティガル王だったのか」

「ええ」

「一発殴つときゃよかった」

「……………は？」

クレインさんが驚いているようだけど、なんでだろう。

見れば、ドロツセルやローエン、エリーゼまで驚いている。

「って、僕の目的の方を言っただけだったか。えーと……………つまり僕は、研究所の首謀者を殴りたいんですよ」

「それは……………どうして？」

「恩師を殺されたから。ハウス教授はあの研究所に捕らえれて……
…僕の前でマナを吸いつくされて……………」

そして、マナが枯渴した人間の末路は言うまでもないことだ。

「敵討ち、あるいは復讐ですか？」

「それもある。けど、知りたいことがある。ハウス教授はあの研究に協力していたようで……………その内容を知りたい。
僕はハウス教授の助手だったし、もしかすればあの考えるのもおぞましい研究に協力してしまっていた、という可能性もあるから」

「ミラ殿は？」

「私は一度目の侵入と変わらないさ。あの黒匣^{ジン}を壊す。あれは、人と精霊に害為すものだからな。あれほどの規模のものと、どれだけの歪みが出るか分からない」

「歪み、ですか」

「ああ。人のマナを吸い尽くす、というのも凶悪ではあるがな。目に見えない部分での被害は、それ以上になる」

「エリーゼは……………」

「理由は分からないけど、ラ・シュガル軍に追われていてね。だから僕達が匿っているというか、安住の地を探しているというか」

これ以上は僕の口からは言えないのだけど。それでも、苦勞をして
いるというか、悲しい思いをしたのが分かったのだらう。

ドロツセルがエリーゼの手を握っていた。

クレインさんやローエンも似たような面持ちだ。ナハティガル王の
話もあつてか、信じたくないことを突きつけられたからだらう。

「それで、受けてくれるのか、どうか」

「……………時間を下さい。何より、確認したいことがある」

「ラ・シュガル軍には売らない、と受け取っていいのかな？」

「国に仇なすものならば、捕縛もそれ以上の事もしましょう。だけ
ど、あなた達はそんなことをする人物には見えない」

甘いとも言える考えかもしれませんが。

クレインさんは言いながら、こちらを見た。

「それに、ドロツセルの友達を捕まえるつもりはありません」

「……………了解した」

妹の名前を出した。つまりは、妹の名前に誓ったのだ。

しかも本人の目の前で、だから疑うことはしない。

恐らくは最愛の家族であろう妹の名前を出したからには、裏切りは
有り得ないだらう。

僕とミラは頷くと、取り敢えず邸宅を出ることにした。僕達は指名手配されている身だし、一般人でもある。

そんな僕達がこの家にとどまると、否が応でも目立ってしまう。それは色々とまずい事態を引き起こすのだ。

あくまで秘密裏に。ばれても切れる関係を、あるいはしらばっくれることが出来る関係がお互いにベストなのだから。

エリーゼは少し違うが。

クレインさんも同じことを考えているのだろう。だが目の届かない所には行つて欲しくないらしく、宿を手配してくれた。

了解することで、互いの意見の確認を取る。

そうして頷き合い、僕達は別れた。

大きな家を出て、大きな扉をくぐる。合図があつたのか、そこに配置されていただろう兵士の姿もない。

そのまま出口へと歩いて行く。

だが、その最後に、僕だけがローエンに呼び止められた。

「えっと、何か用事が？」

今からミラと一緒に、殴りにいく所なんだけど。あいつを。具体的にはケーキ食ってとんずらこいたあいつを。

「用事というほどのことでは。少しお話がしたくて……………あなたはナハティガル王を殴ると言いました。それは、彼の恐ろしさを知った上でのことですか？」

「いえ、まったく。でも、知っていたとしても殴らずにはいられないというか」

研究所のこと。主導した人物は、間違いなく殴られるべき存在なのだ。

殺して、殺して、殺した。人をまるで道具のように。ハウス教授と同じく、家族がある人達を一方的に、理不尽に。

だから殴る。その上で研究所の真実を暴いて、国に叩きつける。

殺すなんてできない。最後までその責任を全うしてもらわなければ困るし、何よりこんな外道の行いをする輩の命なんて背負いたくはない。

「だから痛みを知れ、って殴る。あれは人の痛みを知らない人間にしかできないことですよ。だから、殴って思い出させるんだ。

それに……………人道に反した人、外道な行いをする人間もしようとする人間も。あるいは間違えたことをしたら、殴られるべきなんです」

僕があの時、師匠にされたように。そうして、めを覚まさせてもらったように。

そう告げると、ローエンは何とも表現できない表情になった。そして、僕の顔を見て、問いかけてくる。

「だから、ですか……それが、例え心を許せる友だとしても？」

「だとすればなおのことですよ。逃げたって何にもならないじゃないですか」

目を逸らしているだけで何もかもが解決するなら、人は部屋に引きこもっていればいいのだ。

そうでないから、人は外に出ることを求められる。人と交わり、苦勞しながらでも接することを求められる。

膝を抱えて部屋の隅にうずくまっていたも、誰も助けはくれないのだから。

「そうですか……ジュードさんはお強いんですね」

「ぜんぜん強くない。簡単なことで揺らいでしまっ、まだ若造の未熟者ですよ」

一人で居た時は、あまり考えなかったことだ。あるいは、思うがままに行動していた、ナディアと一緒にいた頃とは違う。

いざ守りたい者ができて、ようやく分かった。自分の弱さと、情けない部分が。

「いえいえ。こうして年を重ねても、自分の弱さすら認められない爺いもいます。向き合っているだけ、あなたは立派ですよ」

「……………ありがとう。それじゃあ、また」

別れを告げて歩き出す。

そして遠ざかった後に、誰にも声が届かないようにと、言葉を紡いだ。

「嫌われるのが怖いから、隠す……………そんなことをしている僕が、立派な人間なわけじゃないじゃないか」

ナディアのことも。情けない声は、だからこそ弱々しく響き。

弊社物のない大きな広場へと、響きわたっていった。

24話 「カラハ・シャルにて (後)」 (後書き)

なぜかクレインにはさん付けしてしまう自分がいる。

声か。あの声のせいかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5202x/>

Word of “X”

2012年1月14日16時58分発行